

# 奥田道下遺跡(稲城)

(主) 渋川吾妻線単独特別道路改良事業  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

群馬県中之条土木事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 奥田道下遺跡(稲城)

(主)渋川吾妻線単独特別道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

群馬県中之条土木事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





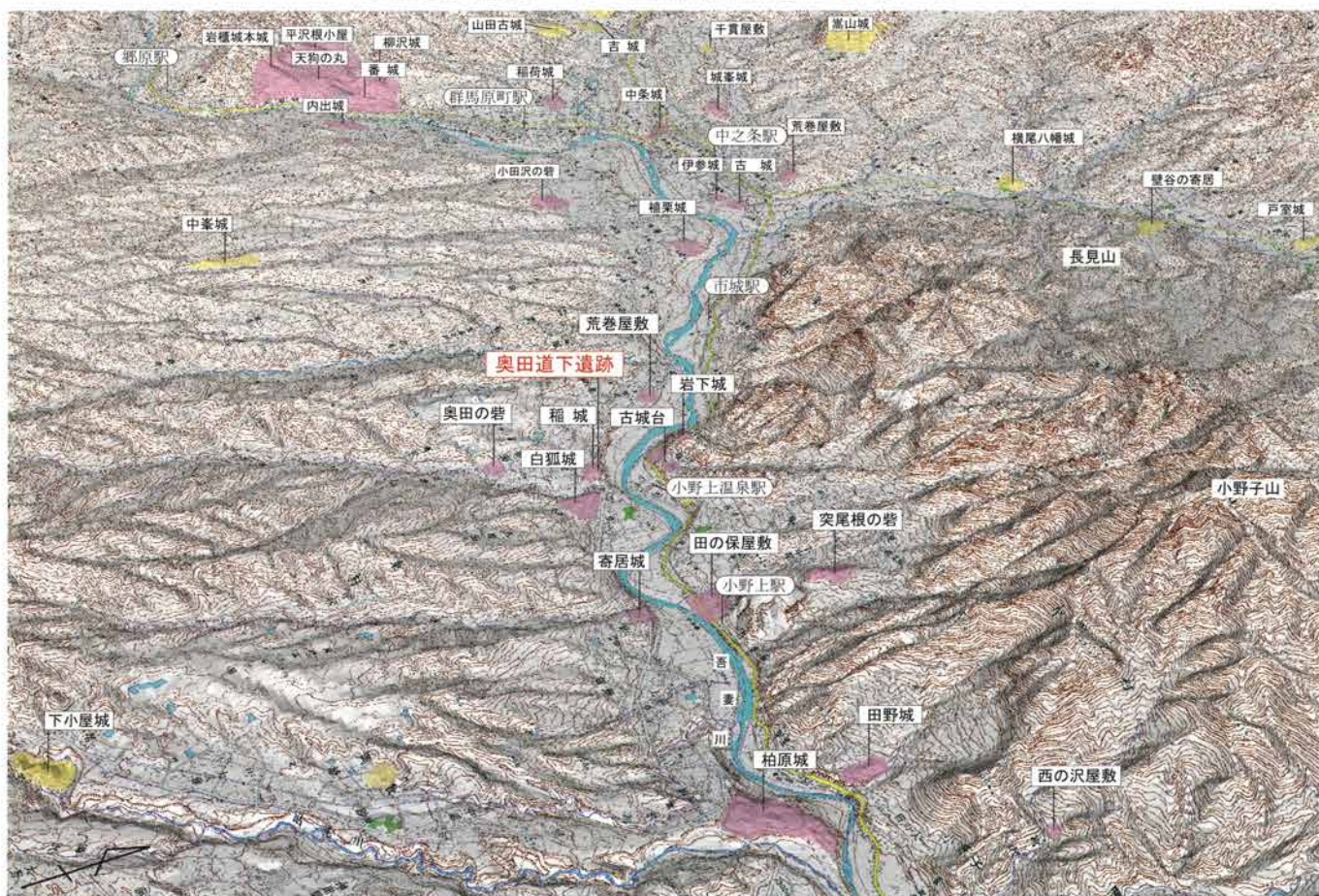
遺跡遠景（南西上方より）



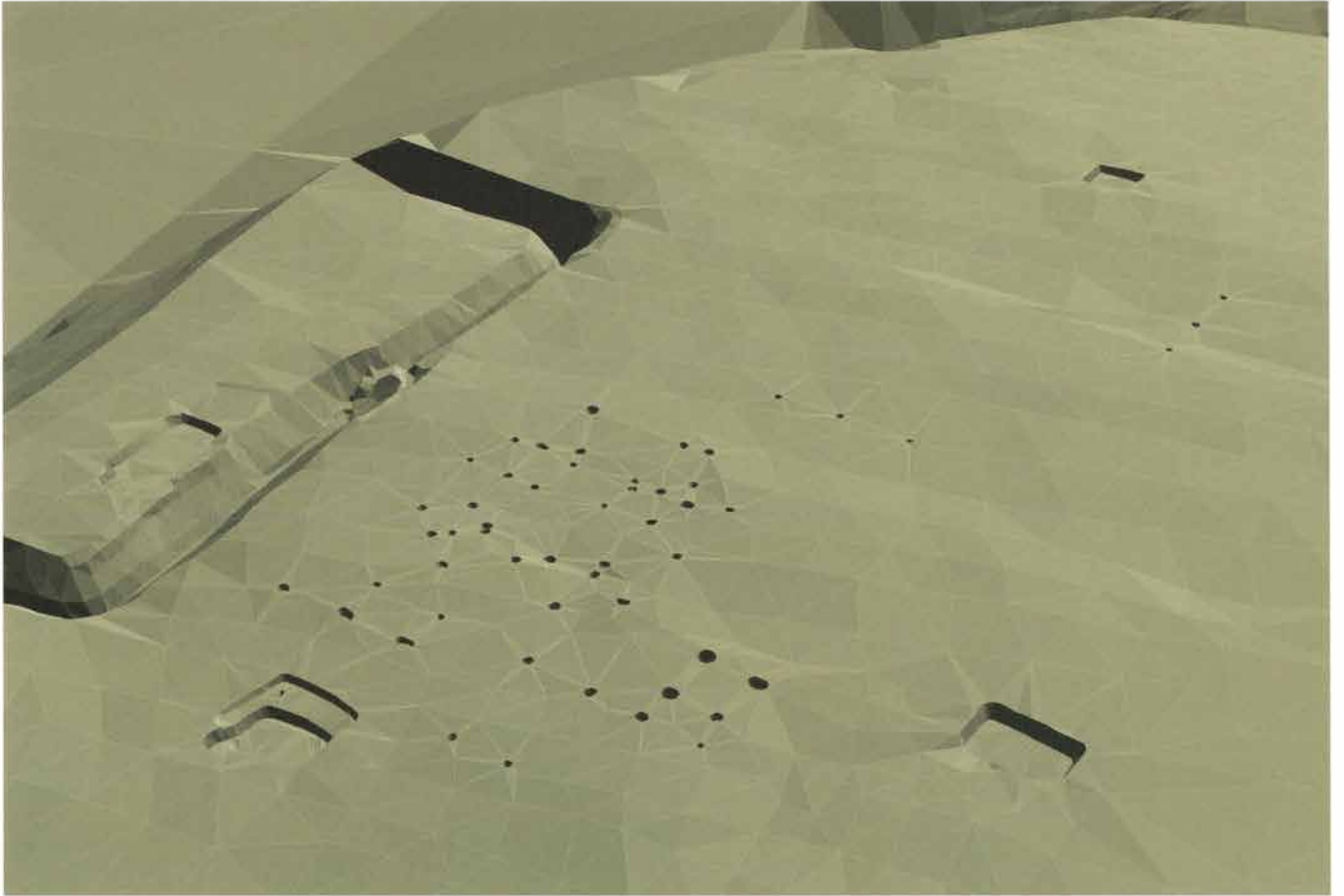
遺跡遠景（上が北）



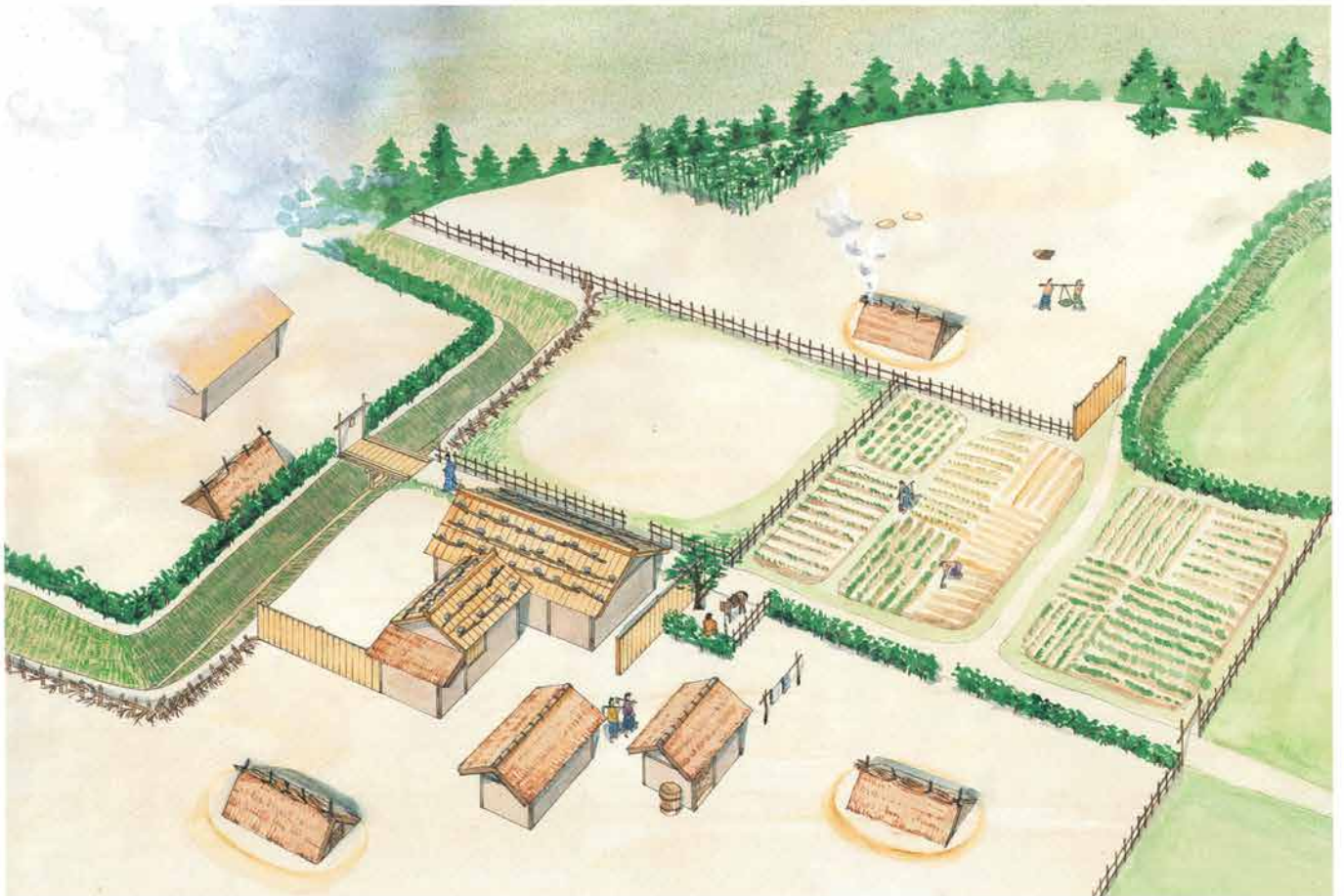
遺跡遠景（南上方より）（上毛新聞社刊「空から群馬」より）



中世山城分布図（西斜め上方より俯瞰）



中世遺構群俯瞰図（南東斜め上方より・下に復元図）



中世遺構群復元俯瞰図（南東斜め上方より）（原案 飯森康広・作画 新井加寿恵）



縄文期遺構完掘状況（上が北）



弥生～中世期遺構完掘状況（上が北）



## 序

奥田道下遺跡は、主要地方道渋川吾妻線単独道路改良事業に先立ち発掘調査されました。平成14年度及び15年度にあわせて5ヶ月間の調査で、本書はその整理結果に関する調査報告書です。

調査では、縄文時代前期から中世までの遺構が確認されました。縄文時代では前期の竪穴式住居が7軒、古墳時代の榛名山の火山爆発にともない火砕流で埋もれた掘りかけの土坑群、中世の「稲城」と思われる、堀及び掘立柱建物群などが検出されました。吾妻郡東村でこれだけの継続した遺構群が確認されたのははじめてです。東村の地域の歴史を解明するのに貴重な資料を提供できました。本書が、この地域に住まわれている人々をはじめとし、多くの方々に活用されることを希望いたします。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、中之条土木事務所、群馬県教育委員会、吾妻郡東村教育委員会、地元関係者の皆様にはいろいろとご指導やご援助をいただきました。ここに銘記しまして、心から感謝申し上げます。

平成16年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎



# 例 言

1. 本書は、主要地方道洪川吾妻線単独道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した奥田道下遺跡（稲城）の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 遺跡所在地 群馬県吾妻郡東村大字奥田地内
3. 事業主体 中之条土木事務所
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 平成14年7月1日～9月30日、平成15年6月1日～7月31日
6. 調査組織 事務担当 小野宇三郎・吉田豊・住谷永市・神保侑史・水田稔・萩原利通・巾隆之・右島和夫・津金澤吉茂・植原恒夫・野口富太郎・国定均・竹内宏・下城正・関晴彦・須田朋子・田中賢一・高橋房雄・吉田有光・阿久澤玄洋・矢嶋知恵子  
調査担当 平成14年度 杉山秀宏・岡部 豊・齊田智彦  
平成15年度 平方篤行・森田真一
7. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 平成16年4月1日～平成16年9月30日
9. 整理組織 事務担当 小野宇三郎・住谷永市・神保侑史・矢崎俊夫・右島和夫・丸岡道雄・国定均・相京建史  
竹内宏・須田朋子・栗原幸代・高橋房雄・吉田有光・佐藤聖行・阿久澤玄洋・狩野真子  
整理担当 杉山秀宏  
新井悦子・武永いち・掛川智子・渡部あい子・湯浅美枝子  
遺物写真 佐藤元彦  
保存処理 関 邦一・土橋まり子・小材浩一・高橋初美
10. 報告書作成関係者 編集 杉山秀宏 レイアウト 杉山秀宏・新井悦子  
本文執筆 第1章第1節 文化課 内木真琴・杉山 縄文土器・分類観察 関根慎二 石器分類 岩崎泰一 掘立柱建物群の認定 第5章第4節 飯森康広 中近世土器分類鑑定 大西雅広 テフラ分析 古環境研究所 上記以外杉山  
縄文石器実測・トレース 技研 遺構トレース（土坑を除く）測研 削器の分析 株式会社アルカ（山田しょう） 石材鑑定 飯島静男  
遺構写真撮影 調査担当者 航空写真撮影 測研 技研
11. 発掘調査に際しては、中之条土木事務所・吾妻郡東村教育委員会・地権者・地元関係者の方々及び旧石器時代については岩崎泰一、縄文時代については藤巻幸男、中世については津金澤吉茂、飯森康広、石守晃に現地指導も含めてお世話になった。  
また、調査に従事された発掘請負業者歴史の杜及び発掘補助員の方々には酷暑の中、大変ご苦勞いただいた。ここに記して感謝申し上げます。  
また、報告書作成に関しては、縄文時代石器では岩崎泰一、石坂茂、松村和男、縄文土器では関根慎二、山口逸弘、弥生～古墳時代では友廣哲也、古代では綿貫邦男、中世関係では飯森康広、石守晃、近世関係では大西雅広にお世話になった。

# 凡 例

1. 本文中に使用した方位は、すべて国家座標（2002.4改正前の日本測地系）の北を使用している。
2. 遺構図については、下記の縮尺で掲載したが、一部縮尺の異なるものがあるので各挿図中にスケールを貼付してある。

縄文時代	住居跡	1 : 60	土坑	1 : 40		
古墳時代	畠	1 : 40	土坑	1 : 40	道	1 : 80
古 代	溝	1 : 40				
中 世	堀	1 : 100	切岸	1 : 150	円弧くずれ	1 : 100
	掘立柱建物	1 : 60	柱穴列	1 : 60	竪穴状遺構	1 : 60
	土坑・溝	1 : 40				

3. 遺構図中のスクリーンパターンは下記のとおりである。



焼土・炉跡



灰・炭化物

4. 遺物図の縮尺は下記のとおりである。

縄文土器 1 : 3 縄文石器 石鏃 1 : 1 石匙 1 : 2 削器 1 : 2 打斧 1 : 3  
磨斧 1 : 3 磨石 1 : 3 凹石 1 : 3 敲石 1 : 3 石皿 1 : 6 石核 1 : 3  
耳飾 1 : 1 環状石斧 1 : 3

5. 遺物図中のスクリーンパターンは下記のとおりである。



研磨痕・使用痕



煤痕跡

6. 遺物写真は、遺物実測図とほぼ同縮尺でのせた。
7. 遺物観察表の法量の単位はcmとgである。一部重さがkgのときはそのたびにkgの単位を入れた。
8. 遺物観察表（土器）の色調は、農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帳」に準拠している。

# 目次

口絵	
序	
例言	
凡例	
本文目次・挿図目次・	
表目次・写真図版目次	
報告書抄録	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経過	2
第2節 調査の経過	2
第2章 地理的環境と歴史的環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法	
第1節 調査区・グリッドの設定	14
第2節 基本土層	15
第3節 旧石器時代の試掘	16
第4章 調査の成果	
第1節 縄文時代	
1. 検出された遺構と遺物の概要	21
2. 竪穴式住居	23
a 1号住居	23
b 2号住居	32
c 3号住居	38
d 4号住居	45
e 5号住居	47
f 6号住居	51
g 7号住居	52
3. 土坑	55
4. グリッド出土の遺物	68
第2節 弥生時代	
1. 検出された遺構と遺物の概要	73
第3節 古墳時代	
1. 検出された遺構と遺物の概要	75
2. 土坑	75
3. 畠・道	75
第4節 平安時代	
1. 検出された遺構と遺物の概要	79
第5節 中世	
1. 検出された遺構と遺物の概要	81
2. 堀	81
a 1号堀	81
b 2号堀	86
3. 切岸	91
4. 円弧くずれ	93
5. 掘立柱建物	94
a 1号掘立柱建物	95
b 2号掘立柱建物	96
c 3号掘立柱建物	97
d 4号掘立柱建物	97
e 5号掘立柱建物	98
f 6号掘立柱建物	98
6. 柱穴列	99
a 1号柱穴列	99
b 2号柱穴列	99
7. 竪穴状遺構	100
a 1号竪穴状遺構	100
b 2号竪穴状遺構	100
c 3号竪穴状遺構	100
d 4号竪穴状遺構	101
e 5号竪穴状遺構	101
f 6号竪穴状遺構	102
g 7号竪穴状遺構	102
h 8号竪穴状遺構	102
i 9号竪穴状遺構	102
8. 土坑	103
9. グリッド出土の遺物	116
第6節 近世以降	119
第5章 まとめと考察	
第1節 縄文時代のまとめ	120
第2節 弥生～平安時代のまとめ	121
第3節 中世のまとめ	121
第4節 奥田道下遺跡（稲城）調査の建物を 中心として	123
第6章 自然科学的分析	
第1節 奥田道下遺跡の火山灰分析	128
第2節 奥田道下遺跡出土の削器の摩耗・ 光沢面の分析について	135
出土遺物観察表	141

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(国土地理院 1/20万 長野・宇都宮) …	1	第32図 第3号住居出土土器(4) ……………	43
第2図 遺跡位置図(国土地理院 1/5万 中之条) ……………	4	第33図 第3号住居出土土器(1) ……………	43
第3図 遺跡周辺地形図 ……………	5	第34図 第3号住居出土土器(2) ……………	44
3-1 遺跡周辺地形図(国土地理院 1/2.5万 金井)		第35図 第4号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図 …	45
3-2 遺跡周辺地形図(東村全図 1/1万)		第36図 第4号住居出土土器 ……………	46
3-3 遺跡周辺地形図(現地測量図に中之条土木事務所 有の1/2千 道路図を追加)		第37図 第4号住居出土土器 ……………	46
第4図 遺跡周辺遺跡分布図 ……………	9・10	第38図 第5号竪穴式住居平面図・断面図 ……………	47
第5図 遺跡調査区・グリッド設定図 ……………	14	第39図 第5号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図 …	48
第6図 基本土層断面図及び位置図 ……………	15	第40図 第5号住居出土土器(1) ……………	48
第7図 旧石器時代試掘トレンチ位置図及び断面図 ……………	16	第41図 第5号住居出土土器(2) ……………	49
第8図 遺構確認面までの遺跡の土層断面図(1) ……………	17・18	第42図 第5号住居出土土器(3) ……………	50
第9図 遺構確認面までの遺跡の土層断面図(2) ……………	19・20	第43図 第5号住居出土土器 ……………	50
第10図 縄文時代遺構分布図 ……………	21	第44図 第6号竪穴式住居平面図・断面図、出土土器 ……………	51
第11図 縄文時代竪穴式住居分布図 ……………	22	第45図 第6号住居出土土器 ……………	51
第12図 第1号竪穴式住居平面図 ……………	23	第46図 第7号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図 …	52
第13図 第1号竪穴式住居遺物出土状況図 ……………	24	第47図 第7号住居出土土器(1) ……………	53
第14図 第1号住居出土土器(1) ……………	25	第48図 第7号住居出土土器(2) ……………	54
第15図 第1号住居出土土器(2) ……………	26	第49図 第7号住居出土土器 ……………	54
第16図 第1号住居出土土器(3) ……………	27	第50図 縄文時代土坑全体平面分布図 ……………	55
第17図 第1号住居出土土器(4) ……………	28	第51図 縄文時代土坑平面図・断面図(1~19号土坑) ……………	56
第18図 第1号住居出土土器(5) ……………	29	第52図 縄文時代土坑平面図・断面図(20~33, 55, 63号土坑) …	57
第19図 第1号住居出土土器(1) ……………	30	第53図 縄文時代土坑平面図・断面図(34~44, 46号土坑) ……………	58
第20図 第1号住居出土土器(2) ……………	31	第54図 縄文時代土坑平面図・断面図(45, 47~54, 56, 57号土坑) …	59
第21図 第2号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図 …	32	第55図 縄文時代土坑平面図・断面図(58~62, 64~70, 80号土坑) …	60
第22図 第2号住居出土土器(1) ……………	33	第56図 縄文時代土坑平面図・断面図(71~79, 81~88号土坑) …	61
第23図 第2号住居出土土器(2) ……………	34	第57図 縄文時代土坑平面図・断面図(89~102号土坑) ……………	62
第24図 第2号住居出土土器(3) ……………	35	第58図 縄文時代土坑平面図・断面図(103~120号土坑) …	63
第25図 第2号住居出土土器(1) ……………	35	第59図 縄文時代土坑出土土器(1) ……………	65
第26図 第2号住居出土土器(2) ……………	36	第60図 縄文時代土坑出土土器(2) ……………	66
第27図 第2号住居出土土器(3) ……………	37	第61図 縄文時代土坑・ピット出土土器(3) ……………	67
第28図 第3号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図 …	39	第62図 縄文時代土坑出土土器(1) ……………	67
第29図 第3号住居出土土器(1) ……………	40	第63図 縄文時代土坑出土土器(2) ……………	68
第30図 第3号住居出土土器(2) ……………	41	第64図 縄文時代グリッド出土土器(1) ……………	69
第31図 第3号住居出土土器(3) ……………	42	第65図 縄文時代グリッド出土土器(2) ……………	70
		第66図 縄文時代グリッド出土土器(1) ……………	71

第67図	縄文時代グリッド出土石器 (2) ……………	72
第68図	弥生時代土器集中遺物出土状況図・断面図 ………	73
第69図	弥生時代出土遺物 ……………	74
第70図	古墳時代遺構分布図 ……………	75
第71図	古墳時代土坑平面図・断面図 (1) ……………	76
第72図	古墳時代土坑平面図・断面図 (2) ……………	77
第73図	古墳時代畠・道全体平面図 ……………	77
第74図	古墳時代畠・道平面図・断面図 ……………	78
第75図	古墳時代出土遺物 ……………	78
第76図	平安時代1号溝出土遺物 ……………	79
第77図	平安時代1号溝遺物出土状況図 ……………	80
第78図	平安時代1号溝平面図・断面図 ……………	80
第79図	中世1号堀出土遺物 (1) ……………	81
第80図	遺跡調査前現況図・中世遺構全体平面図 ………	82
第81図	中世1号堀平面図・断面図・遺物出土状況図 ……	83・84
第82図	中世1号堀出土遺物 (2) ……………	85
第83図	中世2号堀出土遺物 (1) ……………	86
第84図	中世2号堀遺物出土状況図 ……………	87・88
第85図	中世2号堀平面図・断面図 ……………	89・90
第86図	中世2号堀出土遺物 (2) ……………	91
第87図	中世1号切岸平面図・断面図・出土遺物 ………	92
第88図	円弧くずれ平面図・断面図 ……………	93
第89図	中世掘立柱建物群全体平面図 ……………	94
第90図	中世1号掘立柱建物平面図・断面図 ……………	95
第91図	中世2号掘立柱建物平面図・断面図 ……………	96
第92図	中世3号掘立柱建物平面図・断面図 ……………	97
第93図	中世4号掘立柱建物平面図・断面図 ……………	97
第94図	中世5号掘立柱建物平面図・断面図 ……………	98
第95図	中世6号掘立柱建物平面図・断面図 ……………	99
第96図	中世1・2号柱穴列平面図・断面図 ……………	99
第97図	中世1～3号竪穴状遺構平面図・断面図・出土遺物…	100
第98図	中世4・5号竪穴状遺構平面図・断面図・出土遺物…	101
第99図	中世6～9号竪穴状遺構平面図・断面図 ………	102
第100図	中世土坑全体平面分布図 ……………	103
第101図	中世土坑平面図・断面図 (4～12, 16, 19～21) ……	104
第102図	中世土坑平面図・断面図 (22～32, 46) ……………	105
第103図	中世土坑平面図・断面図 (33～45, 60) ……………	106
第104図	中世土坑平面図・断面図 (47～56) ……………	107

第105図	中世土坑平面図・断面図 (57～59, 61～67) ………	108
第106図	中世土坑平面図・断面図 (68～71, 73～82) ………	109
第107図	中世土坑平面図・断面図 (83～87, 89・90, 92・93) ……	110
第108図	中世土坑・溝平面図・断面図 (95, 97, 101・102, 105・106, 111・112, 115・116, 1号溝) ………	111
第109図	中世土坑出土遺物 (1) ……………	113
第110図	中世土坑出土遺物 (2) ……………	114
第111図	中世土坑出土遺物 (3) ……………	115
第112図	中世土坑出土遺物 (4) ……………	116
第113図	中世グリッド他出土石器 ……………	117
第114図	中世グリッド他出土石器製品 (1) ……………	117
第115図	中世グリッド他出土石器製品 (2) ……………	118
第116図	中世グリッド他出土鉄製品 ……………	118
第117図	近世グリッド他出土石器 ……………	119
第118図	近世グリッド他出土金属製品 ……………	119
第119図	縄文土器出土密度平面分布図 ……………	120
第120図	縄文石器形態変異図 ……………	121
第121図	縄文石器出土密度平面分布図 ……………	121

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表 ……………	11・12・13
第2表	縄文時代土坑一覧表 ……………	64
第3表	中世土坑一覧表 ……………	118
第4表	奥田道下遺跡・下鎌田遺跡建物計測表 ………	127

## 写真図版目次

### 口絵目次

遺跡遠景 (南西上方より)
遺跡遠景 (上が北)
遺跡遠景 (南上方より)
中世山城分布図 (西斜め上方より俯瞰)
中世遺構群俯瞰図 (南東斜め上方より・下に復元図)
中世遺構群復元俯瞰図 (南東斜め上方より)
縄文期遺構完掘状況 (上が北)
弥生～中世期遺構完掘状況 (上が北)

# 図版目次

## PL 1

- ①奥田道下遺跡遠景（南より）
- ②奥田道下遺跡中景（南西より）

## PL 2

- ①調査前状況（東より）
- ②調査前状況（南より）
- ③調査前状況（西より）
- ④調査前稲荷様（調査に伴い移転）（南より）
- ⑤遺跡地より北を望む（中世遺構完掘時）
- ⑥遺跡地より北東を望む（中世遺構完掘時）
- ⑦遺跡地より東北を望む（中世遺構完掘時）
- ⑧遺跡地より東を望む（中世遺構完掘時）

## PL 3

- ①遺跡地より南東を望む（中世遺構完掘時）
- ②遺跡地より南を望む（中世遺構完掘時）
- ③遺跡地より南西を望む（中世遺構完掘時）
- ④遺跡地より西南を望む（中世遺構完掘時）
- ⑤遺跡地より西を望む（中世遺構完掘時）
- ⑥基本土層A断面（南より）
- ⑦基本土層A断面（南より）
- ⑧基本土層B断面（北より）

## PL 4

- ①旧石器試掘1トレンチ完掘（北より）
- ②旧石器試掘1トレンチ断面（南より）
- ③旧石器試掘2トレンチ完掘（北より）
- ④旧石器試掘2トレンチ断面（南より）
- ⑤縄文時代完掘状況（真上より）

## PL 5

- ①縄文時代1号竪穴式住居完掘
- ②1号住遺物出土状況（南西より）
- ③1号住遺物出土状況（西より）
- ④1号住遺物出土状況（西より）
- ⑤1号住遺物出土状況（西より）

## PL 6

- ①縄文時代2号竪穴式住居完掘
- ②2号住遺物出土状況（西より）
- ③2号住遺物出土状況（西より）
- ④2号住遺物出土状況（西より）
- ⑤2号住遺物出土状況（西より）

## PL 7

- ①縄文時代3号竪穴式住居完掘
- ②3号住完掘状況（南より）
- ③3号住遺物出土状況（西より）
- ④3号住内10～12ピット（西より）
- ⑤3号住西側礫出土状況

## PL 8

- ①縄文時代4号竪穴式住居完掘
- ②4号住1号ピット完掘状況（北より）
- ③4号住2号ピット完掘状況（南より）
- ④4号住4号ピット完掘状況（南より）
- ⑤4号住3号ピット完掘状況（東より）

## PL 9

- ①縄文時代5号竪穴式住居完掘
- ②5号住遺物出土状況（西より）
- ③5号住遺物出土状況（西より）
- ④5号住ピット群完掘状況（北東より）
- ⑤5号住1号土坑完掘状況（西より）

## PL 10

- ①縄文時代6号竪穴式住居完掘
- ②6号住南北断面状況（西より）
- ③6号住遺物出土状況（北より）
- ④6号住炉完掘状況（南より）
- ⑤6号住2号ピット半裁状況（南より）

## PL 11

- ①縄文時代7号竪穴式住居完掘
- ②7号住南北断面状況（東より）
- ③7号住東西断面状況（南より）
- ④遺跡調査風景（東より）
- ⑤遺跡調査風景（南東より）

## PL 12

- ①縄文14号土坑全景（南より）
- ②縄文15号土坑全景（南より）
- ③縄文17号土坑全景（東より）
- ④縄文18号土坑全景（東より）
- ⑤縄文19号土坑全景（東より）
- ⑥縄文20号土坑全景（北より）
- ⑦縄文21号土坑全景（東より）
- ⑧縄文22号土坑全景（東より）
- ⑨縄文23号土坑全景（東より）
- ⑩縄文24号土坑全景（東より）

## ⑪縄文25号土坑全景（北より）

## ⑫縄文27号土坑全景（西より）

## ⑬縄文29号土坑全景（北より）

## ⑭縄文33号土坑全景

## ⑮縄文34号土坑全景（東より）

## ⑯縄文36号土坑全景（東より）

## ⑰縄文37号土坑全景（南より）

## ⑱縄文38号土坑全景（南より）

## ⑲縄文39・45号土坑全景（東より）

## ⑳縄文40号土坑全景（東より）

## ㉑縄文41号土坑全景（東より）

## ㉒縄文42号土坑全景（西より）

## ㉓縄文43号土坑全景（東より）

## ㉔縄文44号土坑全景（東より）

## ㉕縄文47・48・49号土坑全景

## ㉖縄文50・51号土坑全景（北より）

## ㉗縄文52号土坑全景（東より）

## ㉘縄文53号土坑全景（東より）

## ㉙縄文53号土坑全景（西より）

## ㉚縄文54号土坑全景（西より）

## ㉛縄文55号土坑全景（北西より）

## ㉜縄文56号土坑遺物出土状況（西より）

## ㉝縄文56号土坑遺物出土状況全景（西より）

## ㉞縄文57号土坑遺物出土状況全景（東より）

## ㉟縄文57号土坑全景（東より）

## ㊱縄文58号土坑全景（北より）

## ㊲縄文60号土坑全景（北より）

## ㊳縄文61号土坑全景（東より）

## ㊴縄文62号土坑全景

## ㊵縄文63号土坑全景

## PL 13

## ①縄文64号土坑全景（東より）

## ②縄文65号土坑全景（東より）

## ③縄文66号土坑全景（東より）

## ④縄文67号土坑全景（西より）

## ⑤縄文68号土坑全景（東より）

## ⑥縄文69号土坑全景

## ⑦縄文70号土坑全景（東北より）

## ⑧縄文71号土坑全景（北より）

## ⑨縄文71・72号土坑全景（東より）

## ⑩縄文73号土坑全景（西より）



- ⑪縄文期74号土坑全景（北西より）
- ⑫縄文期75号土坑全景（北西より）
- ⑬縄文期76号土坑全景（北より）
- ⑭縄文期77号土坑全景（西より）
- ⑮縄文期78号土坑全景（北西より）
- ⑯縄文期79号土坑全景（西より）
- ⑰縄文期80号土坑全景（東より）
- ⑱縄文期81号土坑全景（東より）
- ⑲縄文期82号土坑全景（東より）
- ⑳縄文期83号土坑全景（東より）
- ㉑縄文期84号土坑全景（東より）
- ㉒縄文期85号土坑全景（東より）
- ㉓縄文期86号土坑断面（東より）
- ㉔縄文期87号土坑断面（南より）
- ㉕縄文期88号土坑断面（南より）
- ㉖縄文期89号土坑断面（東より）
- ㉗縄文期100号土坑全景（東より）
- ㉘縄文期103号土坑全景（東南より）
- ㉙縄文期109号土坑全景（東より）
- ㉚縄文期110号土坑全景（西より）
- ㉛縄文期114号土坑全景（東より）
- ㉜縄文期115号土坑全景（北より）
- ㉝縄文期116号土坑全景（北より）
- ㉞縄文期117号土坑全景（北より）
- ㉟縄文期118・119号土坑全景（西より）

P L 14

- ①弥生時代土器集中遺物出土状況近接（北より）
- ②弥生時代土器集中遺物出土状況全体（北より）
- ③古墳時代1号土坑断面（西より）
- ④古墳時代3号土坑断面（南より）
- ⑤古墳時代3号土坑完掘（南より）
- ⑥古墳時代5号土坑完掘（南より）
- ⑦古墳時代6号土坑完掘（南より）
- ⑧古墳時代7号土坑完掘（南より）

P L 15

- ①古墳時代4号土坑完掘（南より）
- ②古墳時代4号土坑他検出状況（南より）
- ③古墳時代4号土坑完掘近接（南西より）
- ④古墳時代4号土坑断面（南より）
- ⑤古墳時代4号土坑断面近接（南より）

P L 16

- ①古墳時代8号土坑完掘（南より）
- ②古墳時代3号土坑断面（南より）
- ③古墳時代畠・道全体（南東より）
- ④古墳時代1号サク完掘（南より）
- ⑤古墳時代2号サク完掘（南より）
- ⑥古墳時代3号サク完掘（南より）
- ⑦古墳時代4号サク完掘（南より）
- ⑧古墳時代6号サク完掘（南より）
- ⑨古墳時代7号サク完掘（南より）
- ⑩古墳時代8号サク完掘（南より）
- ⑪古墳時代9号サク完掘（南より）
- ⑫古墳時代10号サク完掘（南より）
- ⑬古墳時代4号土坑調査風景（東より）

P L 17

- ①平安時代1号溝完掘（西より）
- ②平安時代1号溝A断面（西より）
- ③平安時代1号溝遺物出土状況（北より）
- ④平安時代1号溝遺物出土状況近接（北より）
- ⑤中世遺構群完掘（主要遺構群部分）（南より）

P L 18

- ①中世1号堀完掘（南西より）
- ②中世1号堀完掘（西南より）
- ③中世1号堀土層断面（東より）
- ④中世1号堀断面（南より）
- ⑤中世1号堀遺物出土状況（西南より）

P L 19

- ①中世1号堀完掘（西より）
- ②中世1号堀B断面（東より）
- ③中世1号堀B断面近接（東より）
- ④中世1号堀遺物出土状況（南より）
- ⑤中世1号堀遺物出土状況（東より）
- ⑥中世1号堀遺物出土状況近接（東より）
- ⑦中世1号堀遺物出土状況（西より）
- ⑧中世1号堀遺物出土状況（南より）
- ⑨中世1号堀遺物出土状況（北より）
- ⑩中世1号堀遺物出土状況（南より）
- ⑪中世1号堀遺物出土状況（北より）
- ⑫中世1号堀遺物出土状況（南より）
- ⑬中世1号堀遺物出土状況（南より）
- ⑭中世1号堀遺物出土状況（南より）

- ⑮中世1号堀遺物出土状況（南より）

- ⑯中世1号堀遺物出土状況（北より）

- ⑰中世1号堀遺物出土状況（南より）

- ⑱中世1号堀遺物出土状況（南より）

P L 20

- ①中世2号堀完掘（南より）

- ②中世2号堀完掘（西より）

- ③中世2号堀完掘（東より）

P L 21

- ①中世2号堀南東コーナー完掘（南より）

- ②中世2号堀南西コーナー完掘（南より）

- ③中世2号堀陸橋西側完掘（東より）

- ④中世2号堀陸橋西側完掘（東より）

- ⑤中世2号堀陸橋東側完掘（東より）

- ⑥中世2号堀陸橋西側完掘（西より）

P L 22

- ①中世2号堀陸橋西側完掘（東より）

- ②中世2号堀陸橋西側完掘（西より）

- ③中世2号堀東南部コーナー完掘（東より）

- ④中世2号堀東南部コーナー完掘近接（東より）

- ⑤中世2号堀陸橋西側完掘（東より）

- ⑥中世2号堀陸橋部完掘（北より）

P L 23

- ①中世2号堀西南部コーナー完掘（東より）

- ②中世2号堀東南部コーナー完掘（東より）

- ③中世2号堀A断面（南より）

- ④中世2号堀C断面（南より）

- ⑤中世2号堀P断面（東より）

- ⑥中世2号堀E断面（東より）

P L 24

- ①中世2号堀西部遺物出土状況（南より）

- ②中世2号堀北東部遺物出土状況（南より）

- ③中世2号堀南部遺物出土状況完掘（西より）

- ④中世2号堀石臼出土状況近接（東より）

- ⑤中世2号堀北部石臼・礫出土状況

P L 25

- ①中世2号堀陸橋部西部遺物出土（西より）

- ②中世2号堀陸橋部西部遺物近接出土状況

- ③中世1号切岸完掘（北より）

- ④中世1号切岸断面（北より）

- ⑤中世1号切岸断面（南より）

⑥円弧崩れ完掘（北より）

⑦円弧崩れ、中世1号堀断面（西より）

⑧円弧崩れ（東より）

P L 26

①中世1～4号掘立柱建物群完掘状況（南東）

②中世3・4号掘立柱建物完掘状況（東より）

P L 27

①中世1・2号掘立柱建物群完掘状況（南より）

②中世1・2号掘立柱建物完掘状況（南より）

③中世3・4号掘立柱建物群完掘状況

④中世1・2・5・6号掘立柱建物完掘状況  
（南より）

⑤2号柱穴（南より）

P L 28

①中世竪穴状遺構群（1～6号）完掘状況

②中世竪穴状遺構群（2・3・4・6号）完掘

③中世5号竪穴状遺構完掘状況（東より）

④中世1号竪穴状遺構完掘状況（南より）

⑤中世1号竪穴状遺構完掘状況

⑥中世1号竪穴状遺構刀子出土状況

⑦中世2・3号竪穴状遺構完掘状況（北より）

P L 29

①中世4号竪穴状遺構完掘（北より）

②中世5号竪穴状遺構完掘（南より）

③中世6号竪穴状遺構完掘（西より）

④中世7号竪穴状遺構完掘（西より）

⑤中世8号竪穴状遺構完掘（北より）

⑥中世9号竪穴状遺構完掘（南より）

⑦中世4号土坑完掘（南より）

⑧中世9号土坑完掘（南より）

⑨中世10号土坑完掘（南より）

⑩中世11号土坑完掘（南より）

⑪中世12号土坑完掘（南より）

⑫中世16号土坑完掘（南より）

⑬中世20号土坑完掘（東より）

⑭中世21号土坑完掘（東より）

P L 30

①中世22号土坑断面（東より）

②中世23号土坑完掘（東より）

③中世25号土坑完掘（北より）

④中世26号土坑完掘（東より）

⑤中世27号土坑遺物出土状況（東より）

⑥中世28号土坑遺物出土状況（東より）

⑦中世29号土坑完掘（北より）

⑧中世30号土坑完掘（東より）

⑨中世31号土坑完掘（北より）

⑩中世32号土坑完掘（北より）

⑪中世32号土坑焼土炭化物出土状況（東より）

⑫中世33号土坑完掘（南より）

⑬中世34号土坑完掘（南より）

⑭中世35号土坑完掘（北より）

⑮中世36号土坑完掘（南より）

⑯中世37号土坑完掘（南より）

⑰中世38号土坑完掘（東より）

⑱中世38号土坑遺物出土状況（南より）

⑲中世39号土坑遺物出土状況（北より）

⑳中世40号土坑完掘（北より）

㉑中世41号土坑完掘（北より）

㉒中世42号土坑完掘（西より）

㉓中世43号土坑完掘（北より）

㉔中世44号土坑完掘（東より）

㉕中世45号土坑完掘（東より）

㉖中世46号土坑完掘（西より）

㉗中世47号土坑完掘（北より）

㉘中世48号土坑完掘（北より）

㉙中世49号土坑完掘（南より）

㉚中世50号土坑完掘（南より）

㉛中世51号土坑完掘（東より）

㉜中世52号土坑完掘（東より）

㉝中世53号土坑完掘（南より）

㉞中世54号土坑完掘（北より）

㉟中世55号土坑断面（南より）

㊱中世56号土坑完掘（西より）

㊲中世57号土坑完掘（南より）

㊳中世58号土坑完掘（南より）

㊴中世59号土坑断面（南より）

㊵中世60号土坑完掘（北より）

P L 31

①中世61号土坑完掘（西より）

②中世62号土坑完掘（東より）

③中世63号土坑完掘（東より）

④中世64号土坑完掘（東より）

⑤中世65号土坑完掘（東より）

⑥中世66号土坑完掘（南より）

⑦中世67号土坑完掘（東より）

⑧中世68号土坑完掘（西より）

⑨中世69号土坑完掘（東より）

⑩中世70号土坑完掘（北より）

⑪中世71号土坑完掘（北より）

⑫中世73号土坑完掘（南より）

⑬中世74号土坑完掘（北より）

⑭中世75号土坑完掘（北より）

⑮中世76号土坑完掘（西より）

⑯中世77号土坑完掘（南より）

⑰中世78号土坑完掘（南より）

⑱中世80号土坑完掘（南より）

⑲中世81・82号土坑完掘（南より）

㉑中世83号土坑完掘（西より）

㉒中世84号土坑完掘（西より）

㉓中世85号土坑完掘（南より）

㉔中世86号土坑完掘（東より）

㉕中世87号土坑完掘（南より）

㉖中世89・90号土坑完掘（北より）

㉖中世89・90号土坑焼土炭化物出土状況

㉗中世94号土坑完掘（南より）

㉘中世95号土坑完掘（南より）

㉙中世96号土坑完掘（南より）

㉚中世97号土坑完掘（南より）

㉛中世101（右）・102号土坑（北より）

㉜中世98号土坑完掘（南より）

㉝中世105号土坑完掘（北より）

㉞中世106号土坑完掘（南より）

㉟中世107号土坑完掘（東より）

㊱中世111・112号土坑完掘（北より）

㊲中世115号土坑完掘（北より）

㊳中世117号土坑完掘（南より）

㊴中世118号土坑完掘（南より）

P L 32 1号住居の出土遺物

P L 33 1号住居の出土遺物

P L 34 1号住居の出土遺物

P L 35 1号住居の出土遺物

P L 36 1・2号住居の出土遺物

P L 37 2号住居の出土遺物

- P L 38 2号住居の出土遺物
- P L 39 2・3号住居の出土遺物
- P L 40 3号住居の出土遺物
- P L 41 3号住居の出土遺物
- P L 42 3～5号住居の出土遺物
- P L 43 5号住居の出土遺物
- P L 44 5～7号住居の出土遺物
- P L 45 7号住居、5・9・19・21・33・36・  
38・42・43・47・48・50・53・56号土  
坑の出土遺物
- P L 46 57・59～61・63～66・69・73・74号土  
坑の出土遺物
- P L 47 2・5～7・9・22・28・31・35・36・  
38・39・41・47・52・59・65・66・69・  
74・76・77・84・101・102号土坑、11・  
30ピット、グリッド他の出土遺物
- P L 48 グリッドの他出土遺物
- P L 49 グリッドの他出土遺物
- P L 50 グリッドの他出土遺物
- P L 51 弥生・古墳時代、1号溝の出土遺物
- P L 52 1・2号堀の出土遺物
- P L 53 1号切岸、1～4号竪穴、25・28・33・  
34・37・38・40・44・81・82号土坑の  
出土遺物
- P L 54 38・47・52・85・89・90・115号土坑、  
中・近世グリッド他の出土遺物

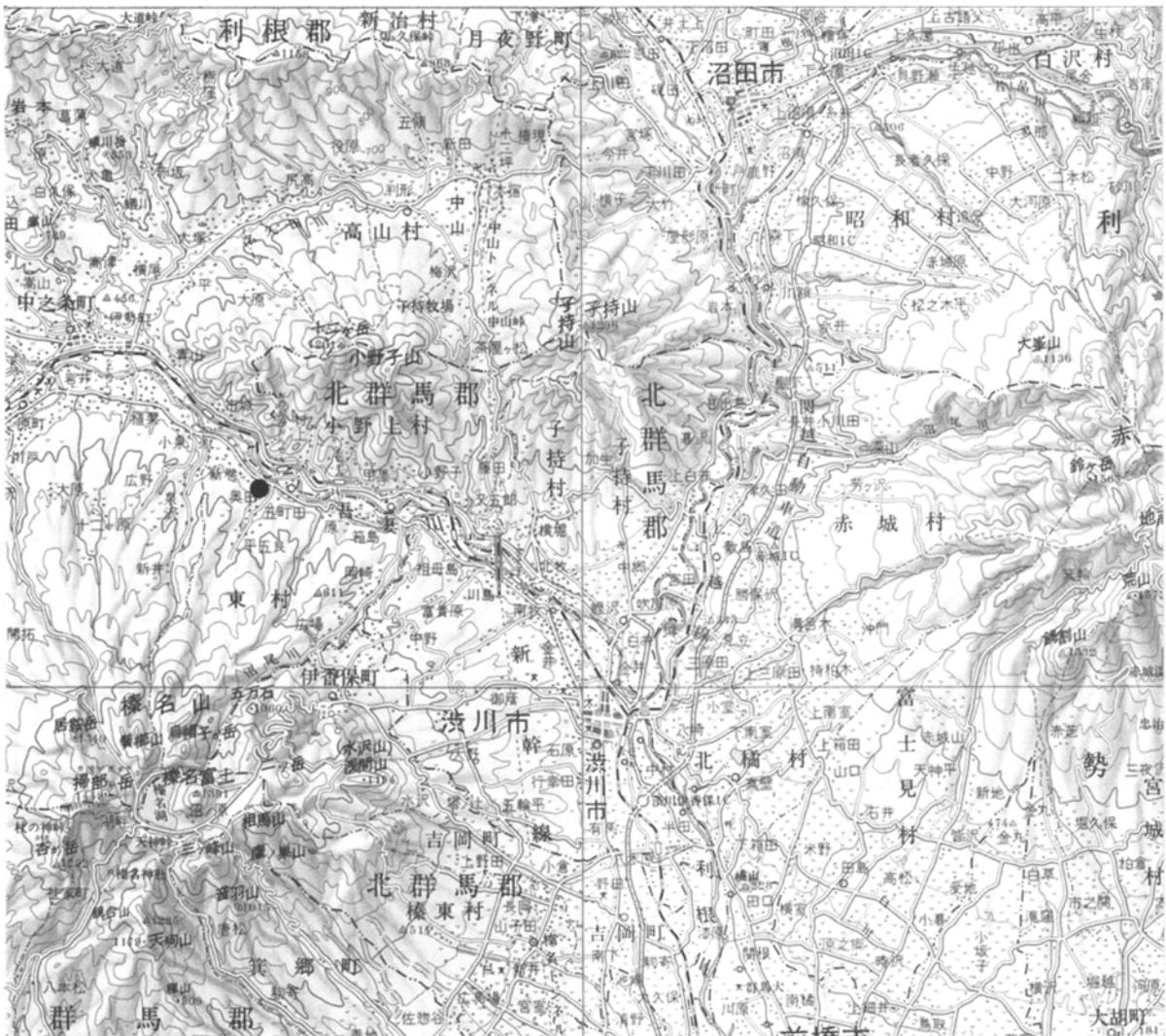
# 報告書抄録

フリガナ	オクダミチシタイセキ (イナリジョウ)
書名	奥田道下遺跡 (稲城)
副書名	(主) 渋川吾妻線単独特別道路改良事業埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第341集
編著者名	杉山秀宏・関根慎二・大西雅広・飯森康広・内木真琴
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦2004年12月27日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オクダミチシタイセキ 奥田道下 (稲城)	アガツマダシナイゾマムラ 吾妻郡東村 オキアザオクダミチシタイセキ 大字奥田道下	10422	00879	36°33'01"	138°54'10"	2002.7.1~9.30 2003.6.1~8.30	4,565.7m <sup>2</sup>	道路建設

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
奥田道下	集落	縄文時代	竪穴式住居	7軒	土器	「稲城」の遺構群
			土坑	120基	石器	
			弥生時代	土器集中	土器	
		古墳時代	土坑	8基	土器	
			畠サク	10条		
			道	1本		
			平安時代	溝	1本	
		中世	堀	2本	石製品	
			溝	1本	土器	
			切岸	1基	陶磁器	
			掘立柱建物	6棟	鉄器	
			柱穴列	2本		
			竪穴状遺構	9基		
		土坑	93基			

# 奥田道下遺跡



第1図 遺跡位置図 (国土地理院 1/20万 長野・宇都宮)

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

当調査は、主要地方道渋川吾妻線単独特別道路改良事業に伴う発掘調査である。

渋川吾妻線の大字奥田地内の当該箇所は、線形不良なうえ幅員狭小なため、大型車の交互交通に支障をきたしており、また冬季には積雪や路面凍結によりスリップ事故も多発していることから、線形改良・拡幅を行い、安全かつ快適な交通環境の整備を目的として事業が計画された。

この事業に対する埋蔵文化財の照会が平成13年度に中之条土木事務所より県教育委員会文化財保護課（現文化課）にあった。これを受けて遺構の存在が予想された計画地内の大字奥田の丘陵の平坦面頂部に平成14年1月31日、文化財保護課が試掘を行った。試掘トレンチは、巾2m、長さ15～30mのトレンチを適当な間隔をあけて4本南北方向に入れた。トレンチ内より榛名山二ツ岳火山灰（FA）を確認するとともに古墳時代の土器が出土、また縄文時代の遺物が出土する土坑が検出された。調査所見として、広い範囲で縄文時代の遺物包含層が検出され、本格的な発掘調査の必要性が判断され、関係機関の協議の結果、工事実施前に同地点での記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は財源の問題から平成14年7月1日より9月30日の3ヶ月間で、調査面積4,565.7㎡のうち、3,500㎡分の調査を行い、残りは次年度に調査実施ということになった。

調査は中之条土木事務所の委託を受け、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当することになった。また、当初の遺跡名は文化財保護法57条の6により「奥田道下遺跡」として遺跡台帳登録をしたが、群馬県教育委員会編『群馬県の中世城館跡』（平成元年3月）により「稲城」の推定地と記載されていることから、東村教育委員会との協議で「奥田道下遺跡」から「奥田道下遺跡（稲城）」と変更した。

### 第2節 調査の経過

発掘調査は、第1年次は平成14年7月1日から9月30日の3ヶ月間、及び第2年次は平成15年6月1日から7月31日までの2ヶ月間、計5ヶ月間で行った。

調査区は後に詳述するが、畑の区画及び地形により西からⅠ～Ⅷの8区画に分け、西側から調査を開始した。東村の土地改良事業で残土が必要との話があり、土木事務所の了解を得て遺跡調査の排土は当初すべて箱田の土地改良区へ運んだ。その結果、調査区全面を一挙に調査することが可能となり、調査の効率化がはかられた。

調査開始前より中世の山城である「稲城」の存在が想定されたため、表土剥ぎも上面から慎重に行った結果、現表土下50cmほどで中世の遺構の確認がなされた。調査は中世の山城に伴う堀が2基、切岸が1基、掘立柱建物が6棟、竪穴状遺構が9基、及び多数のピットや土坑群（93基）が検出され予想以上の遺構量となった。また、平安時代の溝1本、古墳時代の榛名山二ツ岳火山灰（FA）の火砕流により急速に埋められた掘りかけの土坑群や畠・道などが検出された。当初の予定より遺構数の多さなどから手間取り、期間的にさらに下位の縄文時代の遺構を調査予定面積全面まで調査することが無理であることが想定された。

そこで、関係当局と協議の上、工事が調査地西側から開始されるとのことから、調査も西側部分から可能な限りの範囲を引き渡す形で第1年次を終了することにした。西側よりⅠ・Ⅱ区の縄文時代の調査を行い数基の土坑を調査し、旧石器試掘トレンチを設け旧石器の遺構が無いことを確認し引き渡した。

第2年次は、調査期間が2ヶ月間で、残りのⅢ～Ⅷ区の古代以前の縄文時代を中心とした調査及び旧石器の試掘調査を行い、縄文時代の7軒の竪穴式住居及び120基の土坑他を検出するとともに、旧石器の遺構が無いことを試掘調査で確認し調査を終了した。

## 調査日誌抄録

平成14年度

- 1.31 試掘調査4本のトレンチ調査必要と判断。
- 7.1 入札、調査事務所設定準備。
- 7.2 現場周辺挨拶廻り、請負業者と打ち合わせ。
- 7.3 事務所造成工事。
- 7.4 発掘調査区の下草刈り、発掘区確定。
- 7.5 現況測量開始。
- 7.12 表土剥ぎ開始、遺構確認。
- 7.17 作業員30名動員。ジョレンによる遺構確認精査開始。
- 7.22 中之条土木事務所との協議。文化課田口係長、内木専門員、事業団下城課長、杉山。
- 7.24 藤巻主幹来跡、縄文遺構について指導を受ける。八ツ場ダム調査事務所水田所長、津金沢部長来跡、城郭調査についての指導を受ける。
- 7.25 I～V区遺構確認精査終了。1・2号堀掘削及び遺構精査開始。
- 7.26 八ツ場ダム調査事務所会議・事業団職員会議。
- 7.29 1・2号堀掘削継続、土坑、ピット群精査。
- 7.30 古環境研究所早田氏来跡。テフラ分析。
- 7.31 下城課長来跡、飯森主任調査研究員来跡、中世城郭の指導を受ける。
- 8.1 石守主幹兼専門員来跡、中世城郭についての指導を受ける。
- 8.6 下城課長来跡。
- 8.7 関主任調査研究員来跡、火山灰の指導を受ける。
- 8.9 I・II区中世面調査終了。
- 8.14 藤巻・原・神谷・桜岡主幹兼専門員来跡、縄文遺跡調査の指導を受ける。
- 8.22 水田所長・津金沢部長来跡、中世城郭の指導を受ける。
- 8.29 石守主幹兼専門員来跡、中世城郭の指導を受ける。
- 8.30 下城課長、飯森主任調査研究員来跡、中世城郭についての指導を受ける。航空写真測量、ハイライザーによる撮影、Ⅲ～Ⅷ区、中世面ほぼ終了。

- 9.2 I・II区旧石器試掘開始。
- 9.3 II区FA下遺構確認調査開始。
- 9.9 Ⅷ区平安時代の1号溝調査開始。
- 9.10 II区FA下古墳時代遺構調査終了。
- 9.12 縄文期遺構調査試掘トレンチ調査開始。
- 9.17 Ⅷ区、平安時代1号溝調査終了。岩崎主幹兼専門員、関口博幸、関口美枝主任調査研究員来跡、旧石器試掘指導を受ける。
- 9.18 飯島静男氏（地質研究会会員）来跡。出土石材鑑定。文化課 矢口専門員来跡。
- 9.19 縄文試掘調査終了。古環境研究所早田氏来跡。テフラ鑑定。
- 9.20 旧石器試掘調査終了。文化課 内木専門員来跡、調査終了時期についての協議。関主任調査研究員、石田調査研究員来跡。
- 9.30 調査終了。

平成15年度

- 7.1 表土除去開始。
- 7.8 東村村長他2名来跡、文化課西田GL、内木専門員来跡、廣津専門員、齋田主任調査研究員来跡。東村教育委員会職員来跡。
- 7.9 神保事業局長来跡。
- 7.16 縄文時代竪穴住居2基検出。
- 7.17 住居の調査継続。東村広報課来跡。
- 7.18 東村教育委員会職員来跡。
- 7.19 右島部長来跡。
- 7.21 右島部長、関第2課長来跡。
- 7.22 東村文化財調査委員15名来跡。
- 7.25 東村婦人会14名来跡。
- 7.26 右島部長、関第2課長来跡。駒沢大学大学院生一場氏来跡。吉見町遺跡調査会永井氏来跡。
- 7.29 航空写真測量。縄文時代調査終了。吾妻町教育委員会 高橋氏来跡。東村建設課浅見氏来跡。右島研究部長、桜岡主幹兼専門員来跡。
- 7.31 旧石器試掘調査。調査終了。

## 第2章 地理的環境と歴史的環境

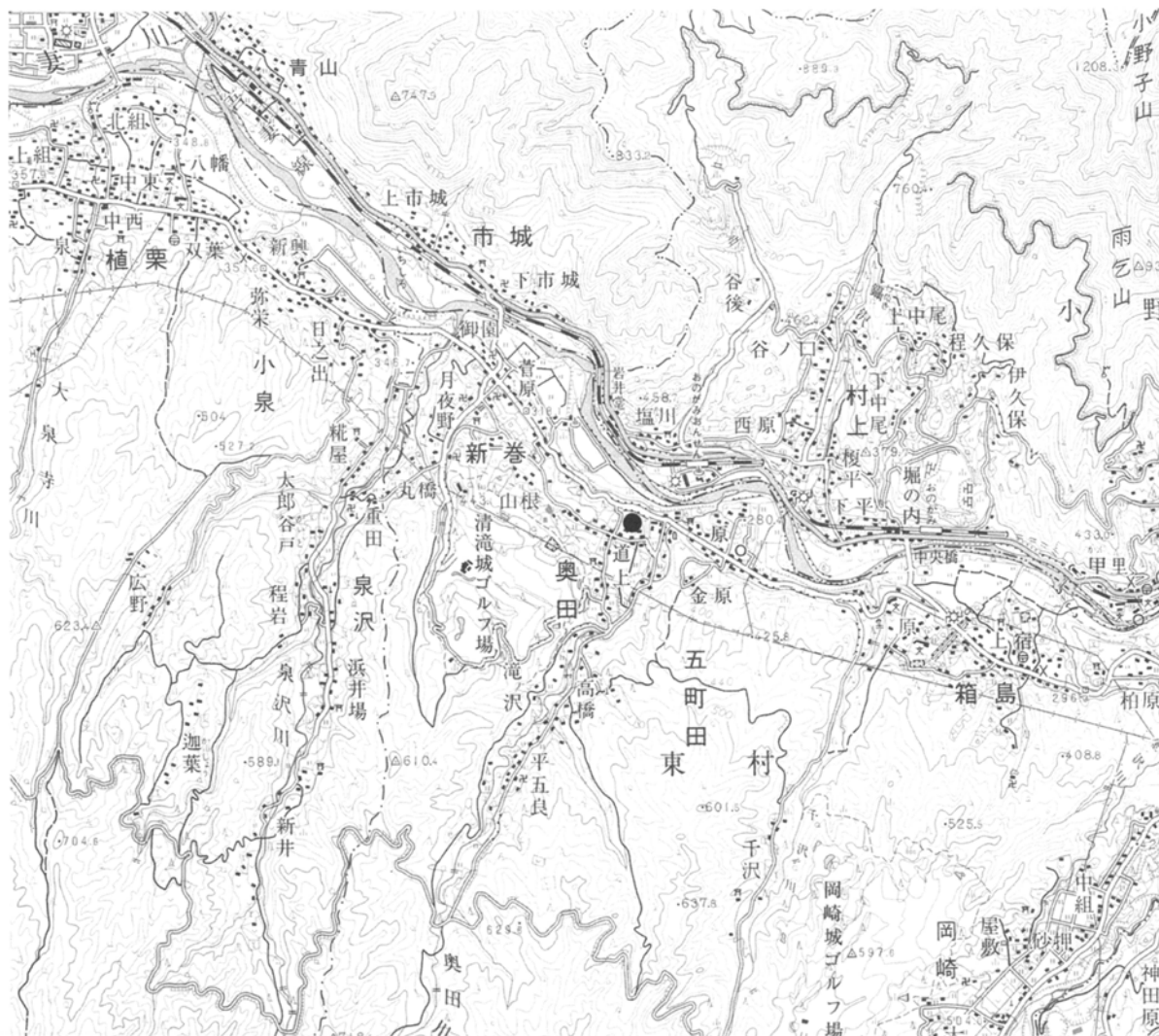
### 第1節 地理的環境

奥田道下遺跡は、遺跡地北側を東流する利根川支流の大規模河川である吾妻川と、東側を流れる小規模河川の奥田川、及び西側を流れる泉沢川にはさまれた吾妻川によって形成された河岸段丘上にある。(図2)

河岸段丘は、吾妻川によって形成されたものだが、榛名山麓からの湧水を水源としている泉沢川、奥田川などの小規模河川が、東西方向に伸びる河岸段丘を南北に断ち切るように流れており、奥田道下遺跡はこの奥田川と泉沢川によって分断された段丘の平坦面東端に位置する。遺跡地の標高は約325mほど

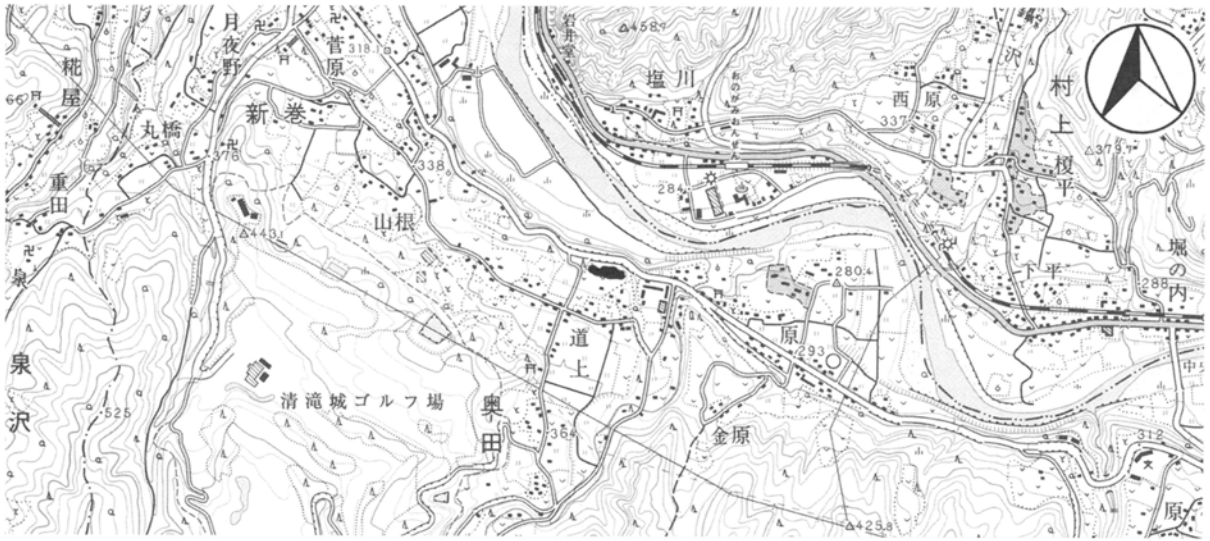
である。吾妻川をはさんだ対岸には北群馬郡小野上村村上の岩井洞がある。(図3-1参照)

遺跡は、遺跡地やや離れた東側を北流して吾妻川に流れ込む奥田川の水を堰で止めて引き揚げた東西の堀にはさまれていて、前面(北側)は吾妻川、東西は堀により区画されている。前は断崖で、左右が堀というように典型的な山城の立地となって居る。当地点は堀之内という地名であるがその地名の語源となっている。(図3-2・3)



第2図 遺跡位置図(国土地理院 1/5万 中之条)





3-1 遺跡周辺地形図 (国土地理院 1/2.5万 金井)



3-2 遺跡周辺地形図 (東村全図 1/1万)



3-3 遺跡周辺地形図 (現地測量図に中之条土木事務所所有の1/2千 道路図を追加)

第3図 遺跡周辺地形図

## 第2節 歴史的環境

奥田道下遺跡は、吾妻郡の東端にあたり、吾妻川が利根川に合流する手前の、平野へ開けるすぐ手前の地点にあり、渋川地区や子持地区に代表される平野部に向かう北群馬郡の地域と吾妻郡の中間地域である。以下、時代順に概要を記す。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺跡は非常に少ない。

利根川右岸では、吹屋犬子塚遺跡(216)・吹屋中原遺跡(217)では、それぞれAs-SP・As-BP、As-YP下の石器群が出土し、渋川市行幸田山遺跡でAs-BP下の石器群が出土している。吾妻川流域では、吾妻町の二子山遺跡でナイフ形石器と石刃が見つかっている。利根川右岸及び利根川をはさんだ左岸の赤城山西麓には多くの旧石器時代遺跡が見つかっているが、吾妻川流域ではいまだ遺跡・遺物ともに少ない。

**縄文時代** 草創期の遺構が小野上村小野子八木沢清水遺跡(181)から出ていて草創期後半の稲荷台土器を使用した竪穴式住居などが検出されている。また、微隆起線文土器が子持村白井北中道遺跡(218)より出土している。早期の遺構は吾妻川対岸に中之条町細尾岩陰遺跡、小野上村八木沢清水遺跡(181)などにある。

前期になると、吾妻町藤田・萩久保遺跡、東上野遺跡(4)、念仏塚遺跡、中之条町下平遺跡、子持村黒井峯遺跡(194)、渋川市空沢遺跡、柳手遺跡、中筋遺跡、半田南原遺跡、行幸田山遺跡などがある。

中期は東村新巻膝附遺跡(27)、吾妻町小泉宮戸遺跡(49)、対岸の吾妻町郷原遺跡がある。

後期になると、吾妻町泉沢内出遺跡、新井遺跡、対岸の中之条町清水遺跡、棚見戸遺跡で敷石住居、中之条町久森遺跡は環状列石がある。渋川市には空沢遺跡、半田中原遺跡などがある。

晩期は、吾妻町唐堀遺跡、渋川市空沢遺跡、半田南原遺跡などがある。

**弥生時代** 中期の遺跡として、吾妻町岩櫃鷹の巣遺跡(1)、前畑遺跡、中之条町宿割遺跡、渋川市

南大塚遺跡などの再葬墓遺跡が認められる。中期後半になると渋川市中村遺跡、有馬条里遺跡などがある。

後期になると、吾妻町小泉宮戸遺跡(49)、植栗舞台遺跡(39)、対岸の吾妻町諏訪前遺跡(3)、善導寺前遺跡(2)、中之条町伊勢町川端遺跡(164)、伊勢町天神遺跡(163)、元沖遺跡、川之面遺跡、渋川市有馬遺跡、有馬条里遺跡などがある。

**古墳時代** 前期～中期の遺跡として、吾妻町東上野遺跡、中之条伊勢町川端遺跡(164)、伊勢町天神遺跡(163)子持村八幡神社遺跡(245)、渋川市有馬遺跡では集落・住居が検出されている。同じく前期～中期の古墳は、子持村田尻遺跡群(244)、渋川市行幸田山遺跡の古墳がある。

後期の六世紀初頭に榛名山の火山爆発により大量の火山灰が降下、火砕流の発生をみたが、この火山噴出物をHr-FA(Hr-S)と呼んでいる。

この時期の住居・集落遺跡としては、渋川市中筋遺跡が有名で、生産跡としての水田等が渋川市有馬遺跡、有馬条里遺跡、中村遺跡などから出土している。同じくHr-FA(Hr-S)下の古墳は、渋川市空沢遺跡、金井前原古墳、石原東古墳群、坂下町古墳群(110)、東町古墳(113)、大峰古墳群、子持村古墳群などがある。

六世紀中葉の榛名山二ツ岳の爆発により、大量の軽石が降下し、このときの火山噴出物をHr-FP(Hr-I)と呼ぶ。Hr-FP(Hr-I)下の集落として有名なのが子持村黒井峯遺跡(194)、西組遺跡(193)などがある。生産跡としては子持村相ノ田遺跡(242)、渋川市有馬条里遺跡、中村遺跡、石原東遺跡、八木原計田遺跡で水田が、子持村館野遺跡(195)、白井北中道Ⅱ遺跡(215)では水田が、子持村館野遺跡(195)、白井北中道遺跡(218)、吹屋中原遺跡(217)では畠が検出されている。他に馬の蹄跡が子持村白井北中道遺跡(218)、吹屋犬子塚遺跡(216)、田尻遺跡等で検出され放牧地の推定がなされている。

当該期の古墳としては、子持村中ノ峯古墳(186)、

有瀬Ⅰ・Ⅱ号墳(204・205)、伊熊古墳(203)等がある。Hr-FP(Hr-I)以降の古墳としては東村では、上毛古墳総覧には新巻で5基、奥田に遺跡内のすぐ南に堀の内塚1基のみ、五町田に3基、箱島に6基、岡崎1基の計16基がある。西に接する吾妻町では植栗・岩井・下郷・川戸・四宮古墳群、吾妻川対岸では小川・市城・下之町古墳群があり総計176基あった。東に接する渋川市では総計164基の古墳がある。吾妻川対岸の小野上村には計6基の古墳があり、東に向かって子持村では約50基、西に向かって中之条町では40基ある。

**奈良・平安時代** 奈良時代には、吾妻町金井廃寺(35)の創建期にあたり、他にも四面庇の掘立柱建物や大型竪穴式住居が調査された東村新巻膝附遺跡(27)や吾妻町小泉宮戸遺跡(49)では有力者層の居宅の可能性が指摘されている。

平安時代では、東村新巻膝附遺跡(27)、吾妻町小泉宮戸遺跡(49)、植栗舞台遺跡(39)、渋川市有馬条里遺跡、中村遺跡、半田南原遺跡、対岸の吾妻町諏訪前遺跡(3)、中之条町伊勢町元町遺跡、子持村白井二位屋遺跡(231)、白井北中道遺跡(218)で確認されている。

製鉄関連の遺跡も多く、吾妻町小泉宮戸遺跡(49)、諏訪前遺跡(3)、渋川市金井製鉄遺跡(101)などがある。上野九牧の一つの官牧の「市代牧」が吾妻郡内及び渋川市の半田南原遺跡で想定されており馬生産が古墳時代後期からこの地で連綿と続いていたことが分かる。

**中世以降** 中世の遺跡は特に山城砦跡が多い。東村で6基ある。稲城の周辺に荒巻屋敷遺跡(64)・奥田の砦(69)・白狐城(70)・寄居城(71)・柏原城(72)が点在する。吾妻川右岸から見ていく。稲城西側の吾妻町では計26基あり、岩櫃城(1)、稲荷城(7)、川戸の内出城(20)、山の固屋城(18)、先陣峠の砦(36)、植栗城(43)、柳沢城など数多くの城がある。稲城東側の渋川市には13基ある。祖母島地利の城対岸の小野上村にはすぐ対岸に岩井堂の砦(169)、古城台の城(170)、田の保屋敷(174)、

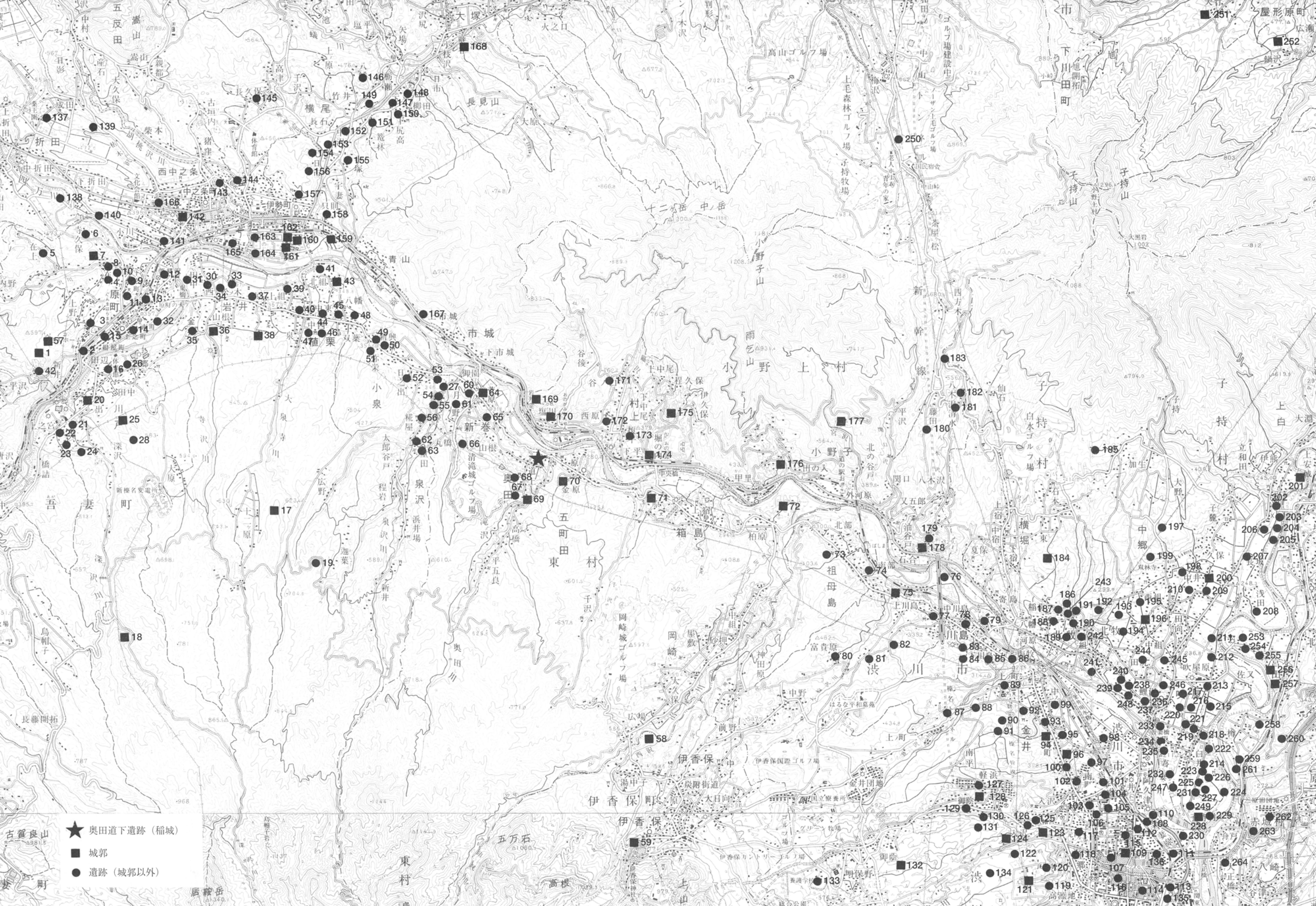
突尾根の砦(175)、小野子の砦(176)、西の沢屋敷(177)、金比羅山の砦(178)など8基ある。対岸西側の中之条町には17基ある。中之城(142)、小城(古城)(159)、伊参城(162)、壁谷の寄居(168)などがある。同じく対岸東側の子持村には6基あり、戸隠山烽火台(184)、白井遠堀(196)、白井上城跡(200)、伊熊の砦(201)などがある。吾妻氏の台頭に伴い、岩櫃城を中心とする斉藤姓吾妻氏から戦国時代の武田・上杉氏の衝突があった所である。

#### 主要参考文献

- 『群馬県の遺跡』群馬県教育委員会・群馬県遺跡台帳作成委員会 1963.3
- 『群馬県遺跡地図』群馬県教育委員会 1973.3
- 『全国遺跡地図群馬県』文化庁 1977.3
- 『群馬県文化財情報システムHP』群馬県教育委員会 2002.3
- 『あがつまあづま』あづま村誌編纂委員会 1965.6
- 『岩島村誌』岩島村誌編纂委員会 1971.3
- 『あがつま坂上村誌』坂上村誌編纂委員会 1971.3
- 『原町誌』原町誌編纂委員会 1960.12
- 『あがつま太田村誌』太田村誌編纂委員会 1965.9
- 『小野上村誌』小野上村誌編纂委員会 1978.3
- 『子持村誌』上巻 1987.3
- 『渋川市誌』第二巻通史編・上原始～近世 1993.3
- 『群馬県古城壘址の研究』下巻 1972.3
- 『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会 1989.3
- 『村内遺跡・新巻膝附遺跡』吾妻群東村教委 2004.3
- 『藤田荻久保遺跡発掘調査報告書』藤田荻久保遺跡調査会、小野上村教委 1994.12
- 『町内遺跡・小泉宮戸遺跡』吾妻町教委 2003.3
- 『町内遺跡・小泉天神遺跡』吾妻町教委 2004.3
- 『諏訪前遺跡』吾妻町教委 2004.3
- 『八木沢清水遺跡』小野上村教委

## 奥田道下遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在市町村	種類	時代	文献	番号	遺跡名	所在市町村	種類	時代	文献
1	岩櫃城	吾妻町	城郭	中世	①	46	山根遺跡	吾妻町	集落	縄文中期・弥生後期・古墳	⑦
2	善導寺前遺跡	吾妻町	散布地、墓地他	弥生・古墳・中世	②	47	鹿嶋峯遺跡	吾妻町	集落	縄文中期	⑦
3	諏訪前	吾妻町	集落・墳墓	弥生後期～中世	③	48	植栗古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	⑦
4	東上野	吾妻町	集落	縄文前期・古墳後期～平安		49	小泉宮戸遺跡	吾妻町	集落・墳墓	縄文中期・弥生後期～中世	⑨
5	上須郷遺跡	吾妻町	集落	古墳		50	宮戸古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④
6	寺久保古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④	51	小泉古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④
7	稲荷城	吾妻町	城郭	中世	⑤	52	小泉中沢遺跡	吾妻町	散布地	古墳・平安	
8	在家古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④	53	小泉天神遺跡	吾妻町	集落・墳墓	古墳～近世	⑩
9	中学校裏遺跡	吾妻町	散布地	弥生		54	小泉天神古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④
10	大宮遺跡	吾妻町	散布地	古墳		55	滝の水牢	吾妻町		中世	
11	原町中学校	吾妻町	集落	弥生後期・奈良・平安		56	靴屋遺跡	吾妻町	包蔵地	縄文	⑦
12	昆布皆戸遺跡	吾妻町	散布地			57	柳沢城	吾妻町	城館	中世	⑤
13	吾妻高校	吾妻町	集落	弥生後期・奈良・平安		58	下小屋城	伊香保町	城館	中世	⑤
14	下之町古墓	吾妻町	墳墓	奈良・平安	⑥	59	伊香保の寄居	伊香保町	城館	中世	⑤
15	原町駅遺跡	吾妻町	散布地	平安		60	判形公民館遺跡	東村	集落	弥生後期	
16	下郷A遺跡	吾妻町	散布地	縄文・古墳		61	柳沢遺跡	東村	散布地	縄文	
17	中峯城	吾妻町	城郭	中世	⑦	62	丸橋遺跡	東村	散布地	縄文	
18	山の固屋城	吾妻町	城館	中世	⑤	63	石槌遺跡	東村	散布地	縄文	
19	新浜遺跡	吾妻町	集落			64	荒巻屋敷	東村	散布地		
20	内出城	吾妻町	集落・城館	中世	⑤	65	オツカ場遺跡	東村	集落	弥生中期	
21	川戸古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④	66	水廻薬師の水牢	東村		中世	
22	上ノ宮遺跡	吾妻町	散布地	古墳		67	内出A遺跡	東村	散布地	古墳	
23	玉科遺跡	吾妻町	散布地	縄文・弥生		68	内出B遺跡	東村	散布地	古墳	
24	深沢遺跡	吾妻町	集落			69	奥田の砦	東村	城館	中世	⑤
25	城峰城	吾妻町	城郭	中世	⑤	70	白狐城	東村	城館	中世	⑤
26	下郷古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④	71	寄居城	東村	城館	中世	⑤
27	新巻膝附遺跡	東村	集落	縄文中期・古墳～近世	⑧	72	柏原城	東村	城館	中世	⑤
28	水上遺跡	吾妻町	集落	縄文・古墳		73	堀込遺跡	渋川市	集落	縄文	
30	岩井古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④	74	福島城跡	渋川市	城郭	中世	⑤
31	岩井田中遺跡	吾妻町	集落	弥生後期・古墳		75	祖母島地利の城跡	渋川市	城郭	中世	⑤
32	下之町古墳群	吾妻町	墳墓	古墳	④	76	川島久保内馬場遺跡	渋川市	散布地・社寺	平安・近世	
33	白山神社遺跡	吾妻町	集落・墳墓	縄文晩期・弥生後期・古墳	⑦	77	南大塚遺跡	渋川市	墳墓	弥生再葬墓	
34	せんねん寺遺跡	吾妻町	集落	弥生後期・古墳	⑦	78	大塚古墳	渋川市	墳墓	古墳	④
35	金井廃寺	吾妻町	集落・寺院	奈良・平安	⑧	79	天神原古墳群	渋川市	墳墓	古墳	④
36	先陣峠の砦	吾妻町	城郭	中世	⑤	80	富貴原遺跡	渋川市	製鉄	奈良	
37	岩井松の木遺跡	吾妻町	集落・墳墓	縄文晩期・弥生後期・古墳	⑦	81	川島の馬場跡	渋川市	墓・その他	近世・近代	
38	小田沢の砦	吾妻町	城館	中世	⑤	82	川島中祖遺跡	渋川市	馬場	中世	
39	植栗舞台遺跡	吾妻町	集落	弥生後期・古墳・奈良・平安		83	金島村2号墳	渋川市	墳墓	古墳	④
40	諏訪塚古墳	吾妻町	墳墓	古墳	④	84	金島村3号墳	渋川市	墳墓	古墳	④
41	龍ヶ鼻遺跡	吾妻町	集落	弥生後期・古墳	⑦	85	金島村4号墳	渋川市	墳墓	古墳	④
42	道心穴遺跡	吾妻町	包蔵地	弥生		86	金島村5号墳	渋川市	墳墓	古墳	④
43	植栗城	吾妻町	城館	中世	⑦	87	二本樋遺跡	渋川市	包蔵地、製鉄	縄文、奈良	
44	植栗中原遺跡	吾妻町	散布地・集落・古墳	古墳～平安		88	西原遺跡	渋川市	包蔵地	縄文	
45	銅印出土地	吾妻町	集落	奈良・平安		89	金島中学校敷地内遺跡	渋川市	包蔵地	縄文～歴史	



第4図 遺跡周辺遺跡分布図



## 第2節 歴史的環境

番号	遺跡名	所在町村	種類	時代	文献	番号	遺跡名	所在町村	種類	時代	文献
90	吾妻山古墳	洪川市	墳墓	古墳	④	134	塚山古墳	洪川市	墳墓	古墳	④
91	金井古墳	洪川市	墳墓	古墳	⑪	135	大崎古墳群	洪川市	墳墓	古墳	④
92	吾妻山遺跡	洪川市	包蔵地	縄文～歴史		136	下郷遺跡	洪川市	墓、その他	古墳	
93	西裏遺跡	洪川市	集落	古墳		137	成田遺跡	中之条町	集落	弥生	
94	金井城跡遺跡	洪川市	集落・城郭	古墳・中世		138	無名古墳	中之条町	墳墓	古墳	④
95	東裏遺跡	洪川市	包蔵地	古墳		139	成田原千貫	中之条町	散布地	縄文・弥生	
96	金井の寄居	洪川市	城館	中世	⑤	140	小川古墳群	中之条町	墳墓	古墳	④
97	金井下新田遺跡	洪川市	集落	古墳		141	石之塔古墳	中之条町	墳墓	古墳	⑭
98	金井諏訪古墳	洪川市	墳墓	古墳	④	142	中之城	中之条町	城館	中世	⑤
99	金井丸山古墳	洪川市	墳墓	F P 下古墳	⑫	143	法満寺遺跡	中之条町	散布地	弥生	
100	金井前原古墳	洪川市	墳墓	F A 下古墳		144	法満寺土師遺跡	中之条町	散布地・集落	古墳	
101	金井製鉄遺跡	洪川市	製鉄	平安	⑬	145	長久保遺跡	中之条町	集落	古墳	
102	金井前原遺跡	洪川市	散布地	縄文、古墳～平安		146	名久田中学校遺跡	中之条町	集落	古墳	
103	金鳥村14号墳	洪川市	墳墓	古墳	④	147	平古墳群	中之条町	墳墓	古墳	
104	発京遺跡	洪川市	集落	平安・中世		148	平遺跡	中之条町	散布地		
105	金鳥村12・13号墳	洪川市	墳墓	古墳	④	149	樋塚古墳	中之条町	墳墓	古墳	④
106	金井原遺跡	洪川市	墳墓	F P 上古墳		150	下尻高遺跡	中之条町	集落	弥生～平安	
107	虚空蔵塚古墳	洪川市	墳墓	F P 上古墳	⑪	151	菅田遺跡	中之条町	集落	平安	
108	坂之下遺跡	洪川市	水田	F A 下水田	⑭	152	中沢遺跡	中之条町	集落、その他	古墳～平安	⑮⑯
109	洪川の寄居	洪川市	城館	中世		153	七日市遺跡	中之条町	集落、その他	弥生～平安	⑮⑯
110	坂下町古墳群	洪川市	墳墓	F A 下古墳群	⑪	154	桃瀬遺跡	中之条町	集落	古墳～平安	⑮⑯
111	東町関下遺跡	洪川市	水田	中近世		155	小塚古墳群	中之条町	墳墓	古墳	④
112	石坂家古墳	洪川市	墳墓	古墳	④	156	真田水牢	中之条町	監獄	近世	
113	東町古墳	洪川市	墳墓	F A 下古墳	⑪	157	天代瓦窯	中之条町	生産跡	奈良	⑰
114	関口病院敷地遺跡	洪川市	散布地	縄文・弥生・奈良		158	只則古墳群	中之条町	墳墓	古墳	④
115	並木町古墳	洪川市	墳墓	古墳	④	159	小城（古城）	中之条町	城郭	中世	⑤
116	中之町遺跡	洪川市	散布地	弥生		160	伊勢町上原遺跡	中之条町	集落・城館	古墳～中世	
117	矢ノ頭遺跡	洪川市	散布地	奈良・平安		161	伊勢町中原遺跡	中之条町	集落・城館	古墳～中世	
118	延暦塚古墳	洪川市	墳墓	F P 上古墳	④	162	伊参城	中之条町	城郭	中世	⑤
119	石原高原地遺跡	洪川市	包蔵地	縄文		163	伊勢町天神遺跡	中之条町	集落・水田	弥生後期～平安	
120	上の原遺跡	洪川市	包蔵地	縄文～歴史		164	伊勢町川端遺跡	中之条町	集落・居館	弥生後期～平安	
121	鎧山砦跡	洪川市	城郭	中世	⑤	165	長岡遺跡	中之条町	散布地	弥生～平安	⑱
122	中ツ沢製鉄遺跡	洪川市	製鉄	平安		166	永田原遺跡	中之条町	散布地	古墳	
123	引越山砦跡	洪川市	城郭	中世	⑤	167	市城古墳群	中之条町	墳墓	古墳	④
124	入沢城跡	洪川市	包蔵地、城館	縄文、中世		168	壁谷の寄居	中之条町	城館	中世	⑤
125	入沢2号古墳	洪川市	墳墓	古墳	④	169	岩井堂の砦	小野上村	城館	中世	⑤
126	かね塚古墳	洪川市	墳墓	古墳	④	170	古城台の城	小野上村	城館	中世	⑤
127	軽浜団地遺跡	洪川市	散布地	縄文		171	御塚	小野上村	墳墓	古墳？	④
128	袋山館跡	洪川市	城郭	中世	⑤	172	西原遺跡	小野上村	散布地	縄文	
129	洪川西高校遺跡	洪川市	散布地	縄文		173	榎平遺跡	小野上村	散布地	縄文	
130	中砂居沢遺跡	洪川市	製鉄	平安		174	田の保屋敷	小野上村	城館	中世	⑤
131	金井前原古墳	洪川市	墳墓	古墳	④	175	突尾根の砦	小野上村	城館	中世	⑤
132	高館山の砦	洪川市	城館	中世	⑤	176	小野子の砦	小野上村	城館	中世	⑤
133	六本松遺跡	洪川市	散布地	縄文		177	西の沢屋敷	小野上村	城館	中世	⑤

第2章 地理的環境と歴史的環境

番号	遺跡名	所在市町村	種類	時代	文献	番号	遺跡名	所在市町村	種類	時代	文献
178	金比羅山の砦	小野上村	城館	中世	⑤	222	白井大宮遺跡	子持村	牧	F P 下馬跡	⑳
179	後久保遺跡	小野上村	散布地	縄文		223	加藤塚古墳	子持村	墳墓	F P 上古墳	④
180	藤田荻久保遺跡	小野上村	集落	縄文	㉑	224	渡屋遺跡	子持村	集落	F A 下集落	④⑨
181	八木沢清水遺跡	小野上村	集落	縄文	⑳	225	白井南中道遺跡	子持村	牧	F P 下馬跡	㉑
182	桜塚	小野上村	墳墓	古墳	⑪	226	金比羅塚	子持村	墳墓	F P 上古墳、長尾村16号	④
183	三国街道	小野上村	道	中～近世		227	白井古墳群	子持村	墳墓	F P 上古墳群	㉒
184	戸隠山烽火台	子持村	城館	中世	⑤	228	二位屋城跡	子持村	城館	中世	⑤
185	將軍塚古墳	子持村	墳墓	古墳	④	229	白井尖野遺跡	子持村	墳墓	F P 上古墳	㉓
186	中ノ峯古墳	子持村	墳墓	F P 下古墳	㉔	230	落合1号墳	子持村	墳墓	F P 上古墳	④
187	大日塚	子持村	墳墓	古墳?長尾村1号	④	231	白井二位屋遺跡	子持村	畠	F P 下馬跡	㉔
188	デン塚	子持村	墳墓	F P 上?古墳		232	白井城南郭遺跡	子持村	集落	平安	㉕
189	後田遺跡	子持村	水田	F P 下水田	㉖	233	不動塚	子持村	墳墓	古墳?	④
190	畑中遺跡	子持村	水田	F P 下水田	④⑨	234	金比羅山	子持村	墳墓	古墳?	④
191	丸子山	子持村	墳墓	F P 上古墳、長尾村4号	㉕	235	白井城跡	子持村	城館	中近世	⑤
192	押手遺跡	子持村	集落・畠	F P 下集落、畠	㉖	236	庚申塚	子持村	墳墓	古墳?、長尾村11号	④
193	西組遺跡	子持村	集落・水田・畠	F P 下集落、水田、畠	㉖	237	吹屋瓜田遺跡	子持村	水田	F A 下水田、F P 下水田	㉖
194	黒井峯遺跡	子持村	集落・墳墓・水田	F P 下集落、古墳、水田他	㉗	238	吹屋Ⅰ号墳	子持村	墳墓	F P 上古墳、長尾村6号	㉖㉗
195	館野遺跡	子持村	畠	F P 下畠	⑪	239	吹屋Ⅱ号墳	子持村	墳墓	F P 上古墳、長尾村7号	㉖
196	白井遠堀	子持村	城跡	中世	⑤	240	吹屋Ⅲ号墳	子持村	墳墓	F P 上古墳	㉖
197	鳥酔翁塚	子持村	墳墓	古墳	④	241	長尾小学校南遺跡	子持村	墳墓	F P 下古墳	㉗
198	池田沢東遺跡	子持村	畠	F P 下道、畠、境界	㉘	242	相ノ田遺跡	子持村	水田	F P 下水田	㉗
199	中組遺跡	子持村	畠	F P 下道、畠	④⑨	243	丸子山遺跡	子持村	墳墓、生産跡	F P 上下古墳、生産跡	㉕
200	白井上城跡	子持村	城館	中世	⑤	244	田尻遺跡	子持村	集落・墳墓・畠	F P 下集落、古墳、畠	㉘
201	伊熊の砦	子持村	城館	中世	⑤	245	八幡神社遺跡	子持村	集落、畠	F P 下集落、畠	㉘
202	伊熊・有瀬古墳群	子持村	墳墓	F P 下古墳群	⑪	246	恵久保遺跡	子持村	包蔵地	古墳	
203	伊熊古墳	子持村	墳墓	F P 下古墳、白郷井村3号	⑪	247	白井城北廊中世墳墓群	子持村	墳墓	中世	
204	有瀬Ⅰ号墳	子持村	墳墓	F P 下古墳	⑪	248	三夜塚	子持村	墳墓?	古墳?、長尾村5号	④
205	有瀬Ⅱ号墳	子持村	墳墓	F P 下古墳	⑪	249	白井宿	子持村	町	近世	㉕
206	白郷井中学校校庭遺跡	子持村	集落	古墳		250	与惣平塚遺跡	高山村	集落	縄文	㉘
207	長坂の翁塚(桜塚)	子持村	墳墓	古墳	④	251	大竹の砦跡	沼田市	城館	中世	⑤
208	浅田遺跡	子持村	墳墓	F P 下古墳	④⑨	252	高瀬戸館跡	沼田市	城館	中世	⑤
209	行人塚	子持村	墳墓	F P 下古墳、白郷井村8号	④	253	河岸古墳群	赤城村	墳墓	F P 上古墳群	④
210	中井遺跡	子持村	散布地	縄文		254	宮田畦畔遺跡	赤城村	水田	F P 下水田	㉙
211	塚	子持村	墳墓	古墳?、長尾村15号	④	255	中島遺跡	赤城村	包蔵地	古墳	㉙
212	大塚(稲荷塚)	子持村	墳墓	F P 上古墳?、長尾村14号	④	256	見立城	赤城村	城館	中世	⑤
213	八溝塚	子持村	墳墓	古墳?、長尾村13号	㉘	257	宮田の寄居跡	赤城村	城館	中世	⑤
214	白井丸岩遺跡	子持村	牧	F P 下馬跡	㉙	258	弁天塚古墳	赤城村	墳墓	F P 上古墳	④
215	白井北中道Ⅱ遺跡	子持村	畠	F P 下馬跡	㉙	259	稲荷塚古墳	赤城村	墳墓	F P 上古墳	④
216	吹屋犬子塚遺跡	子持村	水田他	F A 下水田、F P 下馬跡	㉙	260	戸浪坂遺跡	赤城村	包蔵地	古墳	㉙
217	吹屋中原遺跡	子持村	畠他	F P 下畠、F P 下馬跡	㉙	261	樽田中遺跡	赤城村	包蔵地	古墳	㉙
218	白井北中道遺跡	子持村	畠	F P 下馬跡	㉙	262	三原田遺跡	赤城村	集落	縄文	㉙㉚
219	白井上宿遺跡	子持村	牧	F P 下馬跡	㉙	263	樽遺跡	赤城村	集落	弥生	㉙
220	犬子塚	子持村	墳墓	古墳?、長尾村12号	④	264	田尻遺跡	赤城村	集落	弥生	㉙
221	源空寺裏遺跡	子持村	牧	F P 下馬跡、境界	㉙						



- ①『岩櫃城跡保存整備計画策定報告書』1992
- ②『善導寺前遺』吾妻町教委 1996
- ③『諏訪前遺跡Ⅰ』吾妻町教委 2004.3
- ④『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査第5輯 群馬県 1938
- ⑤『群馬県古城墓址の研究』山崎一 1977.3
- ⑥津金沢吉茂「群馬県吾妻町下之町古墓」
- ⑦『あがつま太田村誌』東村誌編纂委員会 1965.9  
『群馬県古城墓址の研究』山崎一 1977.3
- ⑧ 村内遺跡Ⅰ『新巻膝附遺跡』東村教委 2004.3
- ⑧『金井廃寺遺跡』吾妻町教委 1999
- ⑨『町内遺跡Ⅰ 小泉宮戸遺跡』吾妻町教委 2003.3
- ⑩『町内遺跡Ⅱ 小泉天神遺跡』吾妻町教委 2004.3
- ⑪『北群馬・渋川の歴史』北群馬渋川の歴史編纂委員会 1971.8
- ⑫『丸山古墳発掘調査報告書』渋川市教委 1978
- ⑬『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』渋川市教委 1975
- ⑭『昭和39・40年の調査』群馬大学史学研究室 1965
- ⑮『横尾地区遺跡群Ⅱ』中之条町教委 1995
- ⑯『横尾地区遺跡群Ⅲ』中之条町教委 1996
- ⑰『天代瓦窯遺跡』中之条町教委 1982
- ⑱『長岡Ⅰ遺跡』中之条町教委 1996
- ⑲『長岡Ⅱ遺跡』中之条町教委 1996
- ⑳『藤田荻久保遺跡』藤田荻久保遺跡調査会・小野上村教委 1994
- ㉑『八木沢清水遺跡』小野上村教委 1997
- ㉒『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子守村教委 1980
- ㉓『年報8』(財)群馬県埋文事業団 1989
- ㉔『子持村誌』上巻 子持村 1987
- ㉕『押手遺跡発掘調査概報』子持村文化財調査報告 第5集 子持村教委 1987
- ㉖『西組遺跡発掘調査報告書』子持村教委 1985
- ㉗『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教委 1990
- ㉘『池田沢東遺跡発掘調査報告書』子持村教委 1989
- ㉙『白井大宮遺跡』(財)群馬県埋文事業団 1993
- ㉚『白井遺跡群』(財)群馬県埋文事業団—集落編Ⅰ—1994—古墳時代編—1997—中世・近世編—1998
- ㉛『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群馬県埋文事業団 第1冊1997 第2冊 1998
- ㉜『年報12』(財)群馬県埋文事業団 1993
- ㉝『年報11』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- ㉞『吹屋瓜田遺跡』(財)群馬県埋文事業団 1991
- ㉟『鯉沢瓜田遺跡』子持村教委 2000
- ㊱『北群馬郡子持村吹屋字糝屋古墳群』群馬用土地利用改良埋蔵文化財発掘調査報告書 群馬県教委 1970
- ㊲『北牧相ノ田遺跡』子持村教委 2000
- ㊳『群馬県遺跡大辞典』(財)群馬県埋文事業団・上毛新聞社 1999
- ㊴『中山与惣平塚遺跡』(財)群馬県埋文事業団 1994
- ㊵『宮田畦畔遺構調査概報』『時報』第25号 群馬大学史学会 1961
- ㊶『群馬県勢多郡横野村誌』横野村誌編纂委員会 1956
- ㊷『文化財関係資料集第3集』赤城村教委 1996
- ㊸㊹㊺『三原田遺跡』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群馬県企業局 1980～1992
- ㊻ 杉原荘介「上野樽遺跡調査概報」『考古学』第10巻 10号 1939
- ㊼『群馬発掘最前線』群馬県立歴史博物館 1996
- ㊽『坂之下遺跡』渋川市教委 1988
- ㊾ 子持村教委 石井克巳氏ご教示

なお、文献番号の無い遺跡の情報は、『群馬の遺跡』群馬県遺跡台帳作成委員会1963、『群馬県遺跡台帳 東毛編』群馬県教委 1971、『群馬県文化財情報システムHP』群馬県教委2002による

## 第3章 調査の方法

### 第1節 調査区・グリッドの設定

表土剥ぎに伴う遺物を便宜的に位置づけ、おおまかな遺跡の状況を把握するために8大区32小区分を行った。(図5) また、実際に遺構の精査する際には4m方眼のグリッドの設定を行った。以下、調査区及びグリッドの設定の順に概要を記述する。

調査区の設定は、下記により行った。

(1) 遺跡地は「稲城」の推定地のため、城の痕跡が現状の地形にも反映している可能性があるために現況測量を行い、現地の微地形を把握し、その結果を参考にしながら調査区の設定に入った。

(2) 現実には、細かな微地形の変化は読みとれず、畑の開墾により区画された状況になっている区画線を活かしながら西端では明瞭に地形の段差がつくのでそこで分割し、結果的に西から東にⅠ～Ⅷの8大区画に区分した。さらに、それぞれの大区を時計回りに北東～南東～南西～北西の順に1～4区に小区分した。結果、全体は32区の小区に区分できた。

グリッドの設定は、下記により行った。

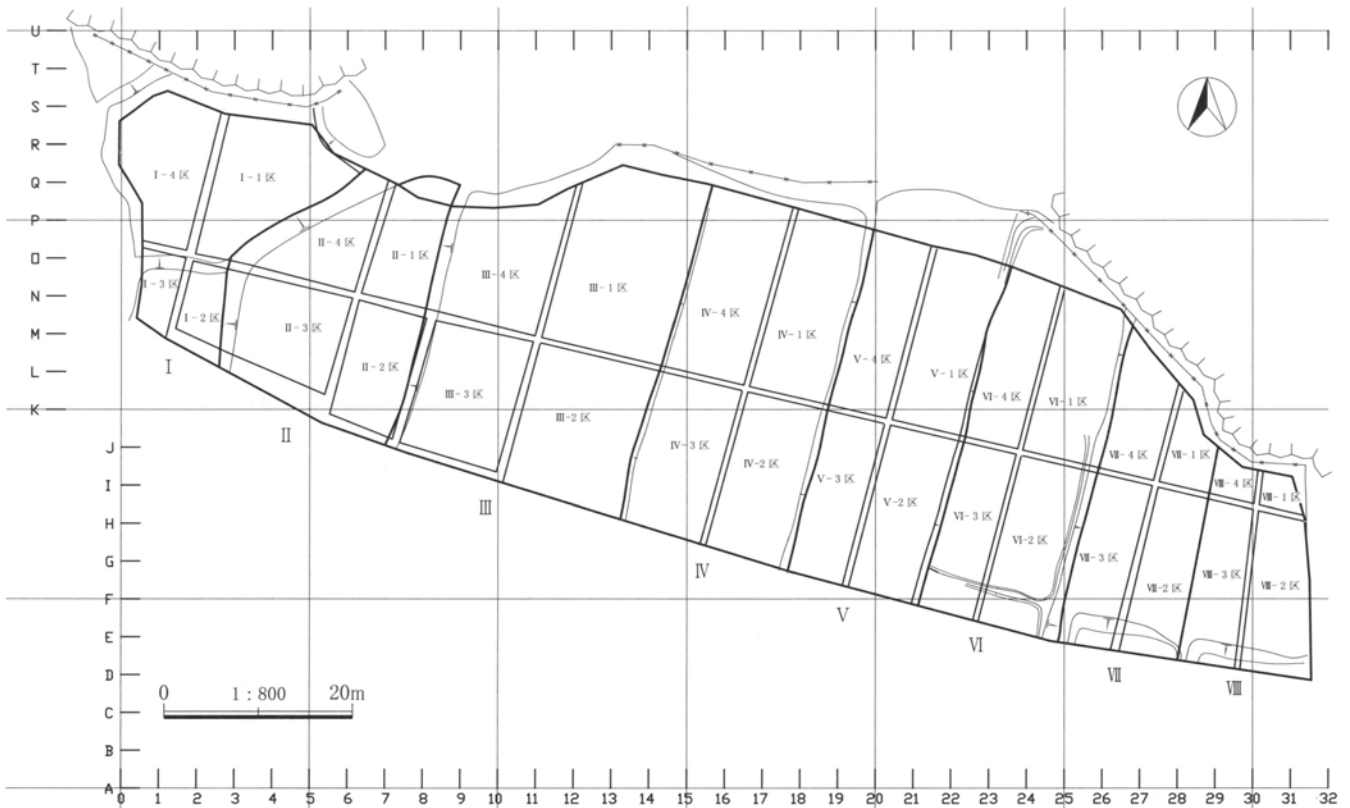
(1) グリッドは遺跡調査範囲の西南を基点として設定した。国家座標軸に基づき一つのグリッドは4m方眼とした。各グリッドを示すのは西南のポイントとした。

(2) 国家座標軸が遺跡地の西端ぎりぎりではY = -83360で、遺跡地の南のラインはX = 61460があうことがわかり、X = 61460、Y = -83360をA0の基点として、南北方向は北にいくに従いB、Cとアルファベットをすすめて、東西方向は東にいくに従い1、2と加数していった。グリッドは西南のポイント(杭)を示す、南北方向・東西方向の順にアルファベット・数字の順に表現した。

調査方法の基準

(1) 調査は、中世の城が想定されるため、表土下すぐの遺構の可能性が高く上面から丁寧に精査した。

(2) 現耕土による攪乱が激しいので、遺構確認面までのセクションを全体にわたりとって中世の遺構確認の面をとらえるようにした。

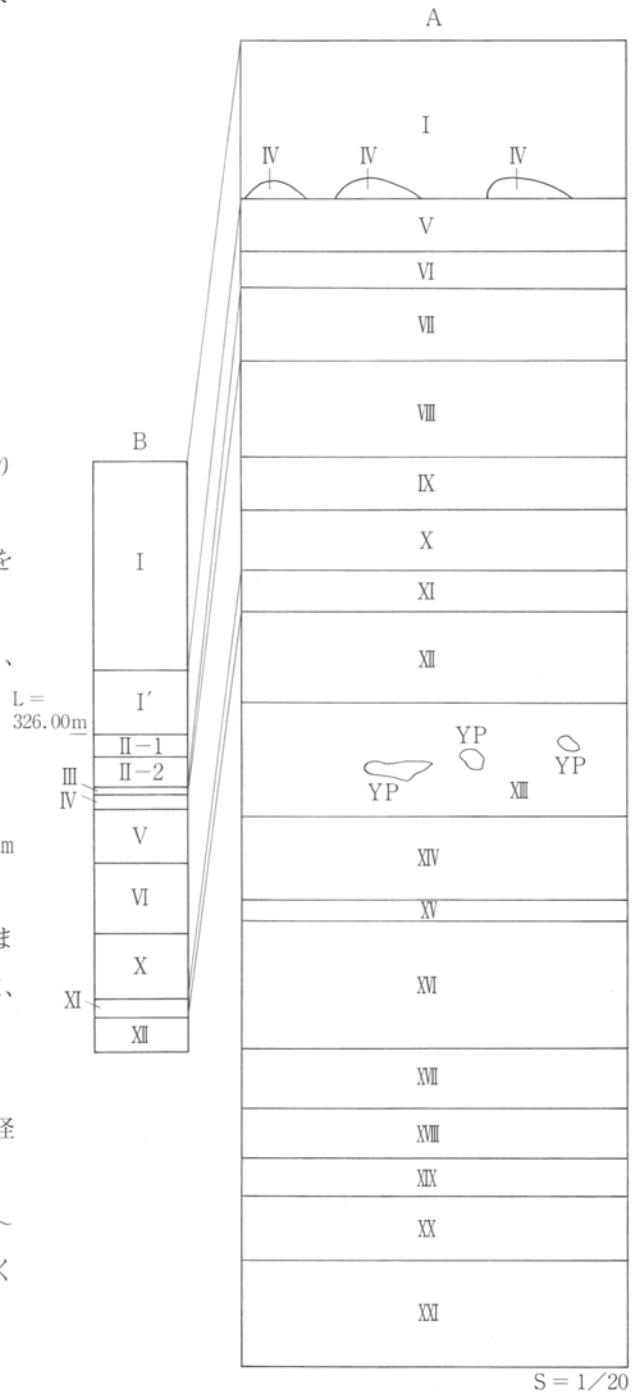
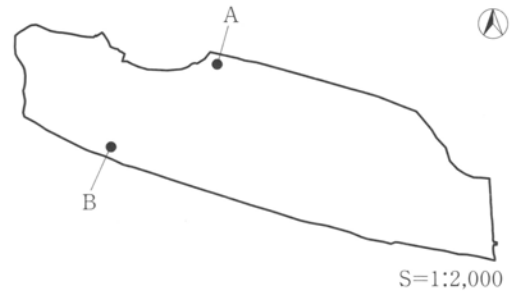


第5図 遺跡調査区・グリッド設定図

第2節 基本土層

当遺跡の基本土層は以下のとおりである。(図6)  
表土から最下層の前橋泥流層まで計21層ある。

- I層…耕土層
- I'層…耕作土層, 粕川テフラ20%混じり
- II-1層…粕川テフラ灰白色 (10YR7/1) Ash状
- II-2層…粕川テフラ (々) 軽石粒径0.1~0.5cm大
- III層…粕川テフラとAs-B層との間層
- IV層…As-B層
- V層…黒色土層 (10YR2/1)
- VI層…黒褐色土層 (10YR3/2)
- VII層…FA土層
- VIII層…黒色土層 (10YR2/1)
- IX層…黒褐色土層 (10YR3/2) (縄文包含層)
- X層…暗褐色土層 (10YR3/2.5) (縄文包含層)
- XI層…ローム漸移層
- XII層…ローム土層 (10YR7/6) 明黄褐色、しまり良
- XIII層…ローム土層、(10YR7/6) 明黄褐色、(YPを一部ブロック状に含む)
- XIV層…ローム土層、(10YR6/6.5) 明黄褐色、YP一部混じる。
- XV層…ローム土層、(10YR6/6) 明黄褐色
- XVI層…白糸軽石層
- XVII層…雲場軽石層、灰白色~黄褐色粒径0.1~3cm大20%まじり。
- XVIII層…ローム土層、明黄褐色層 (2.5Y6/6) しまりやや弱い。粒径0.1~0.5cm大の灰白色粒、2%ほど混じる。
- XIX層…BP群
- XX層…前橋泥流層 (5YP6/3) オリーブ黄色、粒径1~20cm大の礫10%はいる。
- XXI層…前橋泥流層 (2.5Y5/4) 黄褐色、粒径0.1~70cm大の礫50%はいる。非常にしまりが良く固い。



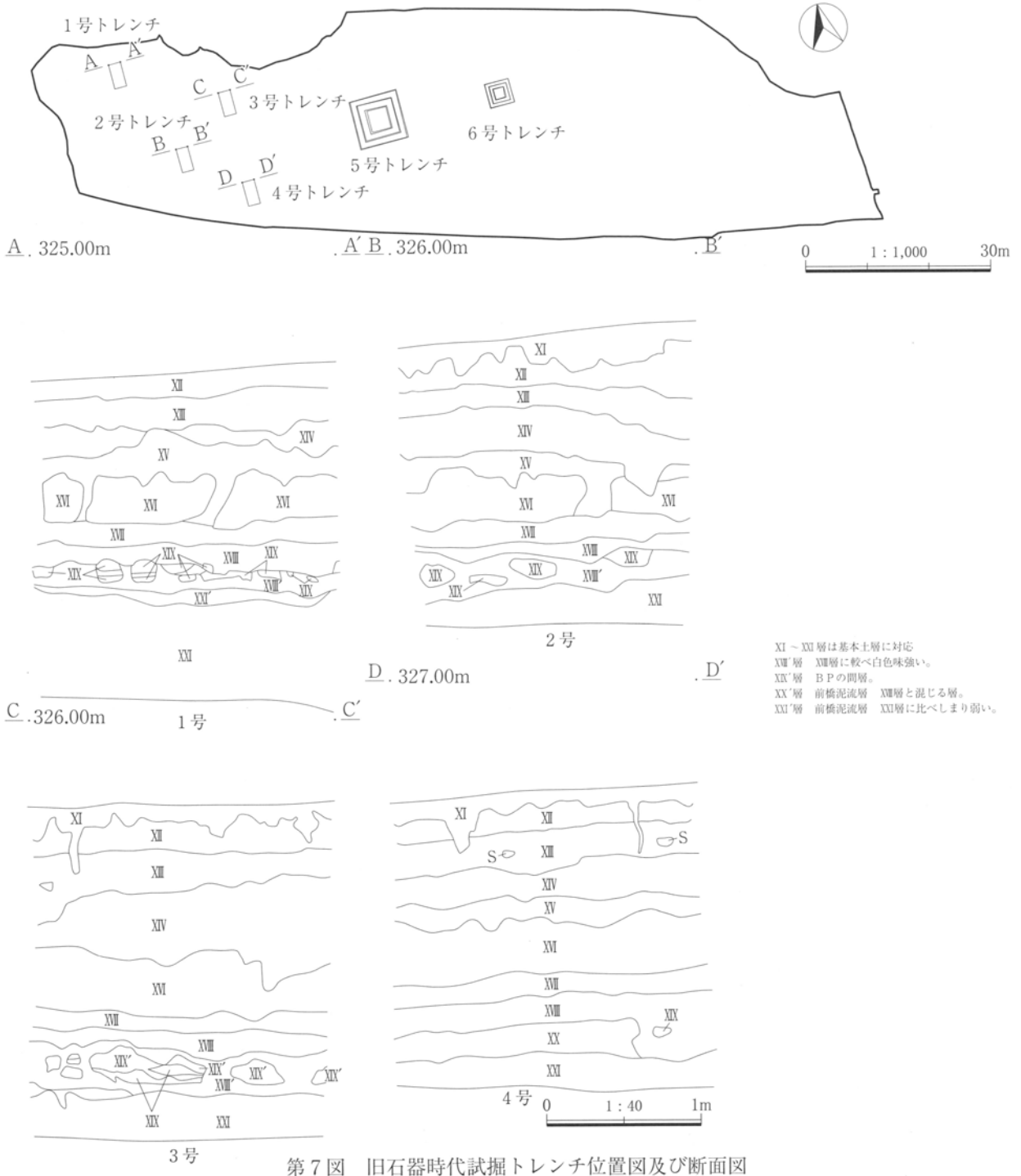
第6図 基本土層断面図及び位置図

第3節 旧石器時代の試掘

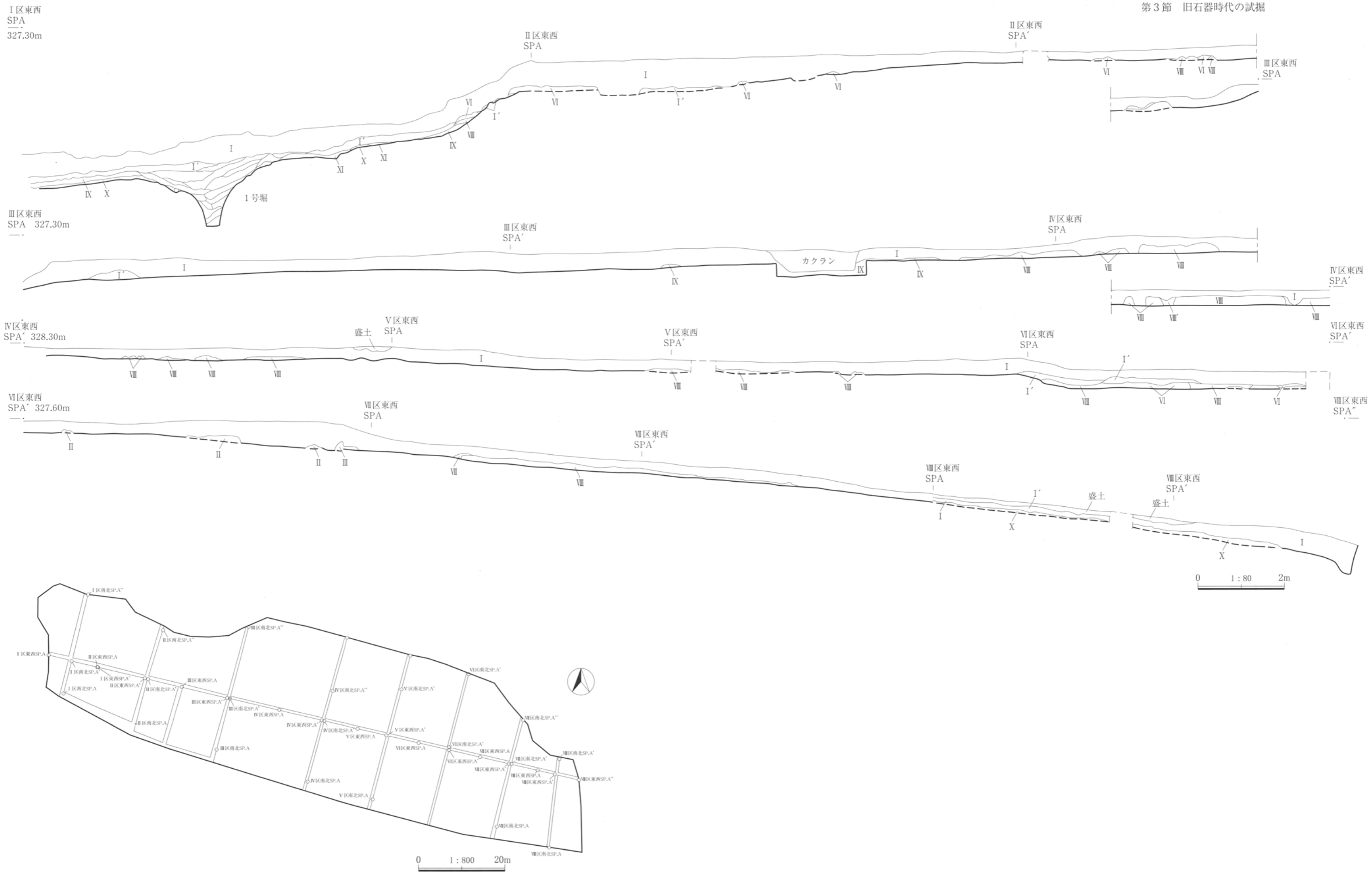
北向きではあるが河岸段丘の平坦面でもあり、旧石器の試掘を計5ヶ所行った。

平成14年度には、引き渡す必要のあったI・II区にあたる箇所のうち計4ヶ所に設定した。試掘の結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。

平成15年度は、縄文時代の調査に時間がかかり、調査期間が限定されたので、III～VIII区の中に2ヶ所試掘トレンチを設け、遺物・遺構ともに無いことを確認した。

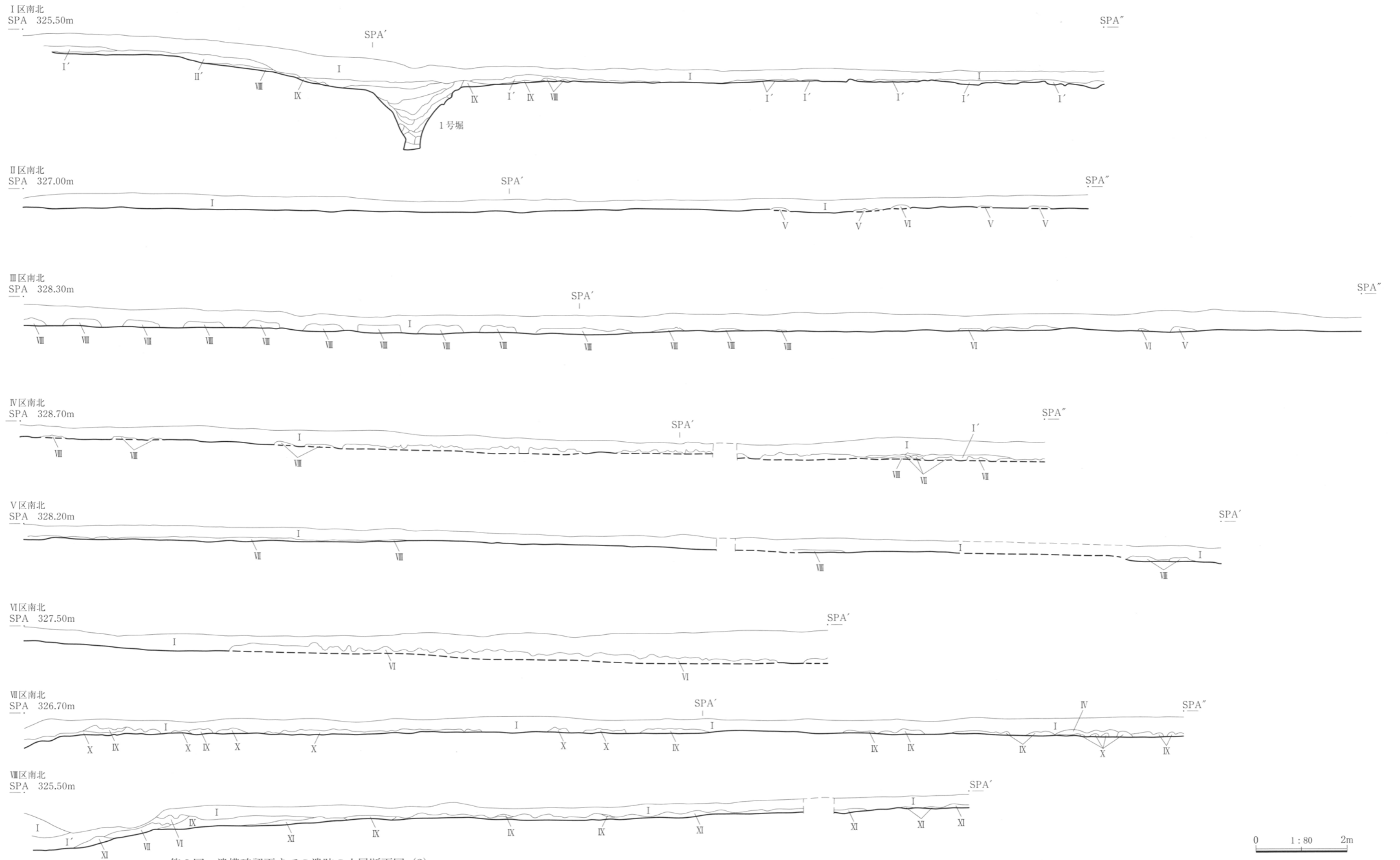


第7図 旧石器時代試掘トレンチ位置図及び断面図

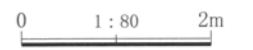


第8図 遺構確認面までの遺跡の土層断面図(1)





第9図 遺構確認面までの遺跡の土層断面図(2)







## 第4章 調査の成果

## 第1節 縄文時代

## 1. 検出された遺構と遺物の概要

旧石器時代の遺物・遺構ともに一切確認されなかったためこの遺跡における人間の存在は縄文時代から確認された。

縄文時代は、早期鶴ヶ島台式・前期黒浜式・有尾式・諸磯b式、後期堀之内式が出土している。

遺物として最も遡るものは、早期鶴ヶ島台式土器片が2点出土している。沈線による区画文と区画文同士の交点には円形の刺突を施し、区画された内部には刺突具による長方形の刺突文が施されている。内面には条痕が観察される。残念ながら、この土器は遺構外出土である。

前期中葉後半に属する黒浜式と有尾式の2型式が混在して出土している。又、前期後葉前半に属する諸磯c式も出土しており、前期中葉から後葉にかけて遺物・遺構ともに多い。特に特徴的なのが有尾式土器が豊富に出土する点で、住居跡も有尾式期に比定されるものが多い。

住居は7軒出土し、時期的な構成は、有尾黒浜式期の住居が6軒、有尾黒浜～諸磯式期の移行期の住居が1軒である。

有尾黒浜式期の住居は1・2・4・5・6・7住である。1・4・5・7住は平面方形から長形状を呈し、内1軒（1住）は拡張した跡が認められる。2・6住は平面が多角形から円形のもので、柱穴ははっきりしない。

有尾黒浜～諸磯式の住居は1軒（3住）で平面隅丸方形で柱穴が四辺に一辺3～4個有する。なお、3住は拡張した痕跡がある。

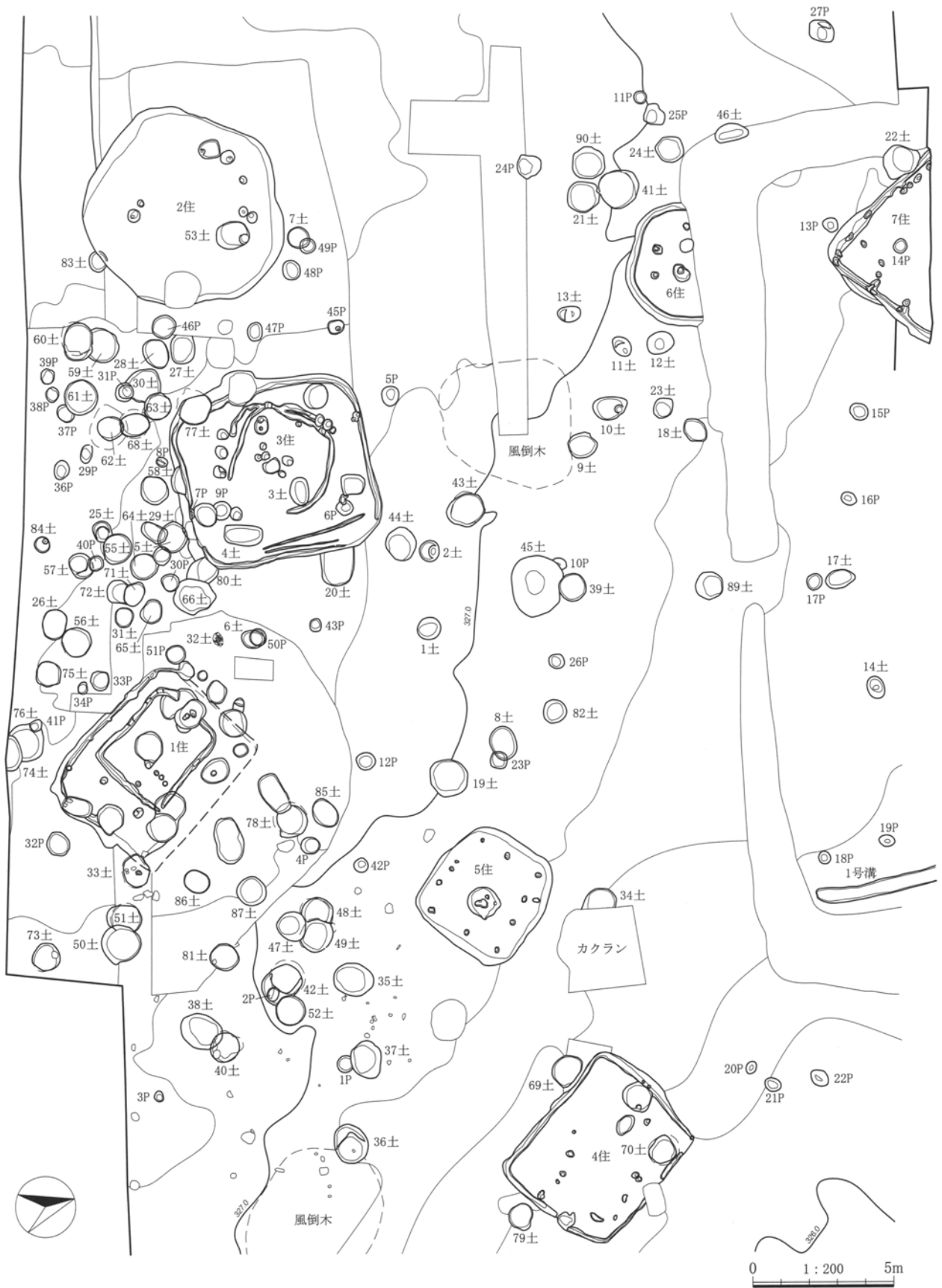
土坑は全部で120基あり、大きく4類に分類出来る。

後期堀之内式土器が遺構に伴わず出土しており、縄文時代は後期前半までこの地点で確認できる。



第10図 縄文時代遺構分布図

第4章 調査の成果



第11図 縄文時代竪穴式住居分布図

2. 竪穴式住居

a 1号住居

1号住居は小型の住居を1 a号住居とし、大型の住居を1 b号住居とする。1 a号住居のほうが古く、拡張住居と考えられる。

1 a号住居

**位置** 調査区のほぼ中央、3住の東南、5号住居の西南にある。周りに土坑群も集中して検出しており、本調査地の中心地に位置する。

**形状** 長辺3.6m、短辺3.1mの平面隅丸長方形を呈

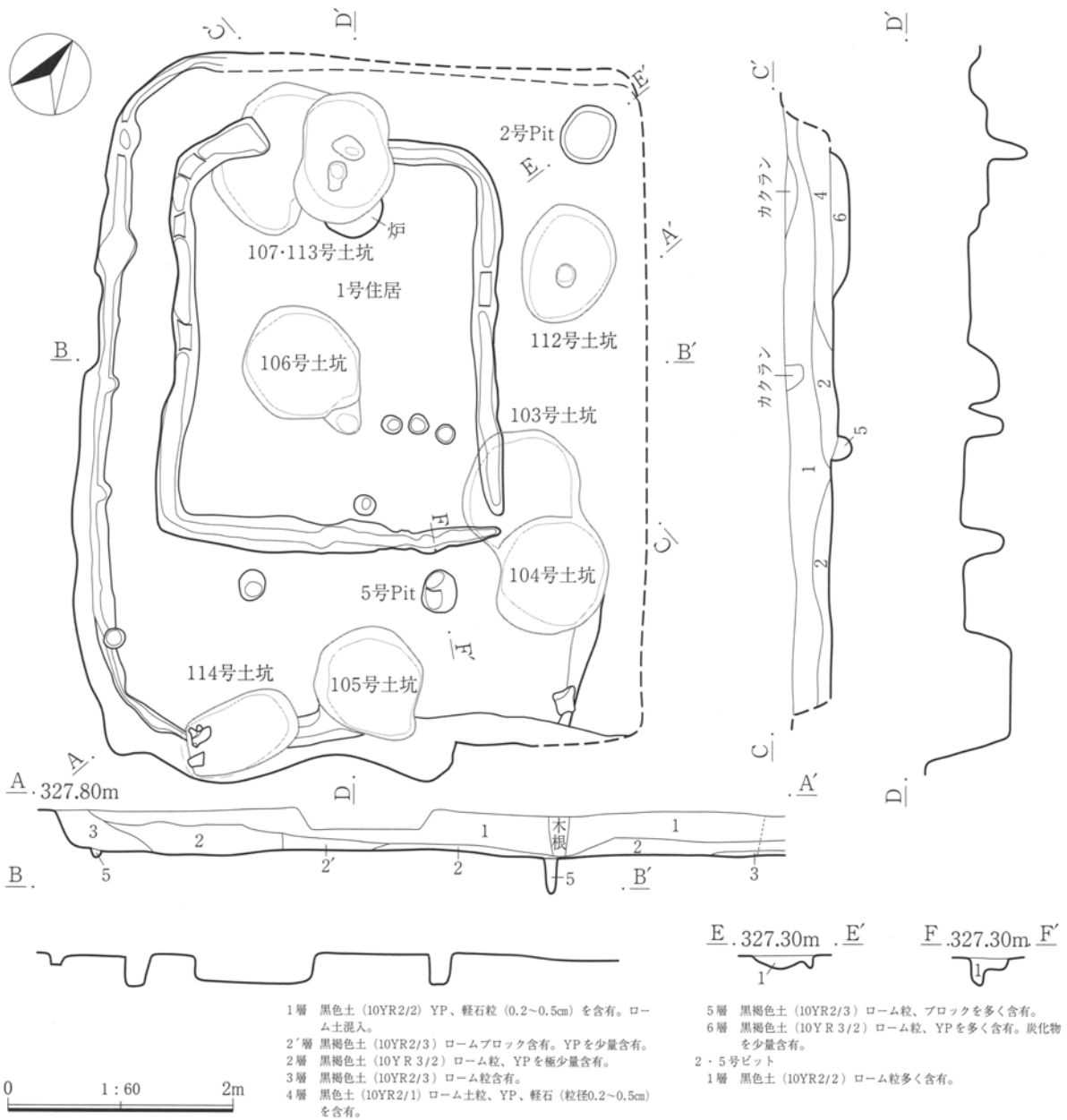
する。壁は1 b号住居により切られて残っていないが、壁周溝の存在により住居の存在と法量が確認できた。

**周溝** ほぼ全周するが、短辺北西部中央と長辺南東部隅が切れる。巾18~30cm、深さ26~33cmを有し、かなり深い。

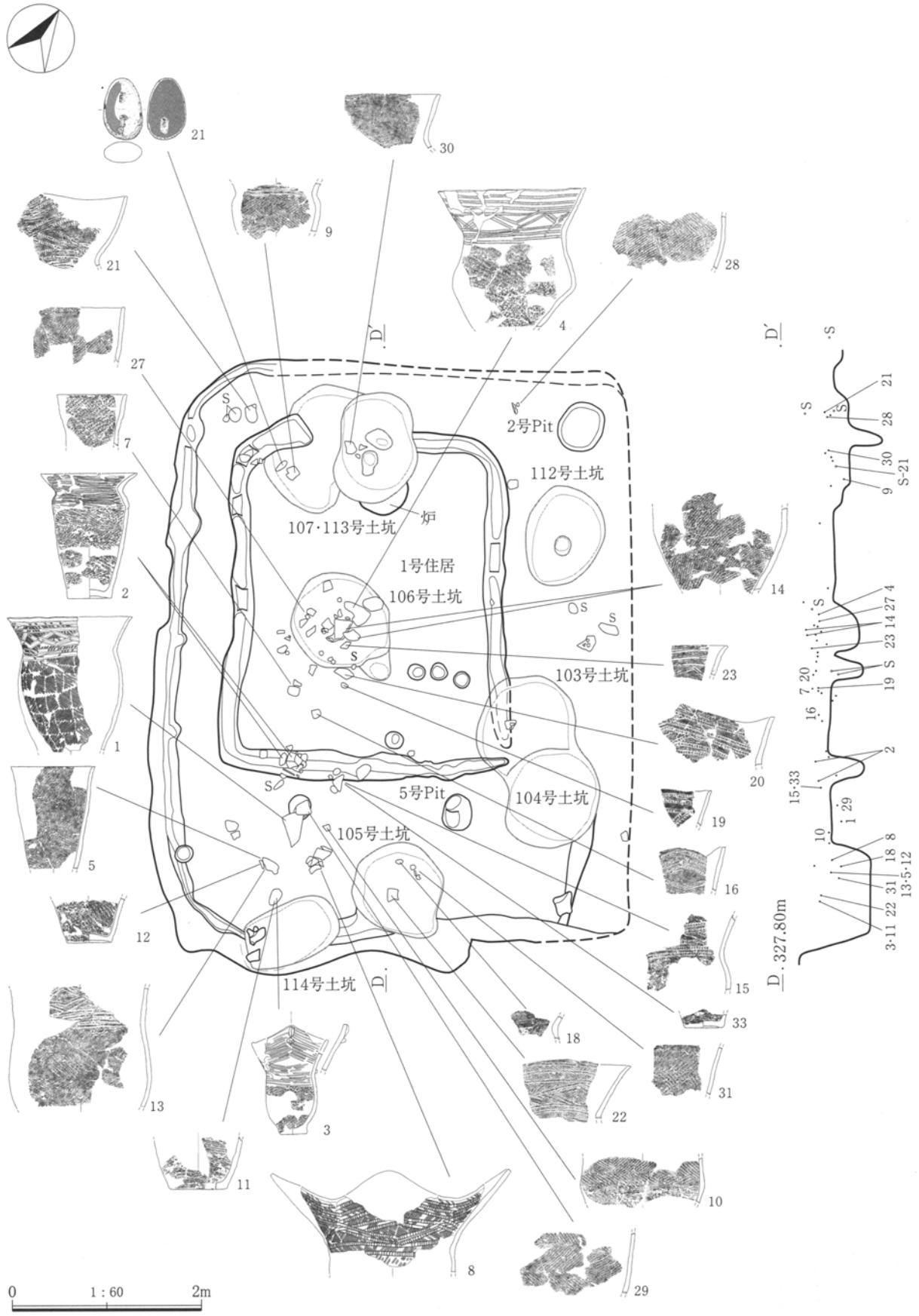
**覆土** 拡張した1 b号住居の覆土となる。

**床面** ローム土を床面としている。

**柱穴** ピットは6つ確認できたが、位置・深さから柱穴と認定できない。



第12図 第1号竪穴式住居平面図



第13図 第1号竖穴式住居遺物出土状況図

**土坑（貯蔵穴）** 土坑が3基、住居内より確認されたが、住居に伴うものではない。

**遺物** 次に述べる1b号住居と重複して1a号住居のもののみを抽出出来ない。1b号住居の項で全体の1号住居の遺物として記述する。

1b号住居

**位置** 1a号住居と相似形をなす住居で、南東の短辺に貯蔵穴がある。

**形状** 復元長辺5.1m、短辺6.2mの隅丸長方形。土坑による攪乱激しく、東長辺・北短辺ははっきりと確認出来なかった。

**壁** 西・南側に明瞭に壁が残り、約30cmほど残存している。

**周溝** 長辺西側及び短辺北西隅と南東隅に残る。巾18～22cm、深さ8cmほどで1a号住居の周溝に較べると狭くて浅い。

**覆土** 黒褐色土を中心とした緻密な土質で、極少量のYPを含む。

**床面** ローム土を床面としている。

**柱穴** 1a号住居内にあるピットで計9ヶ所ある。ただ、位置や深さからみて明瞭に柱穴と認定できるものは無い。

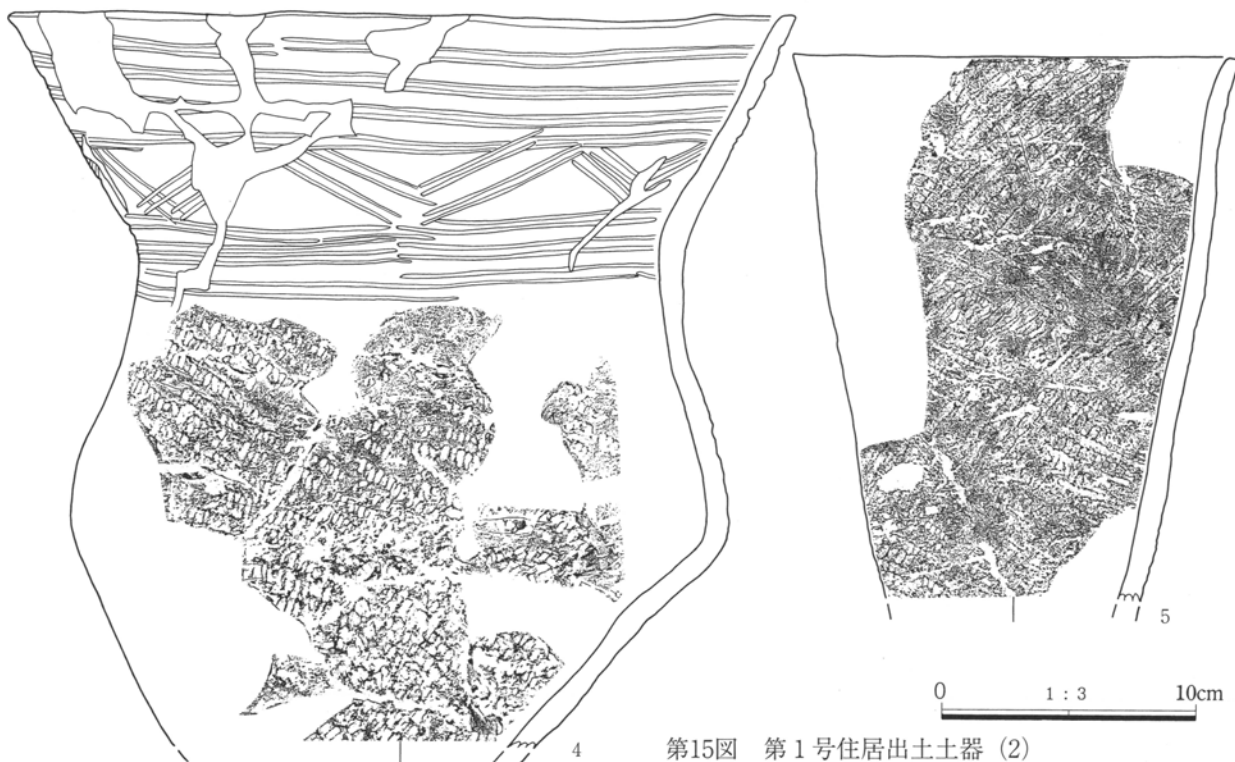
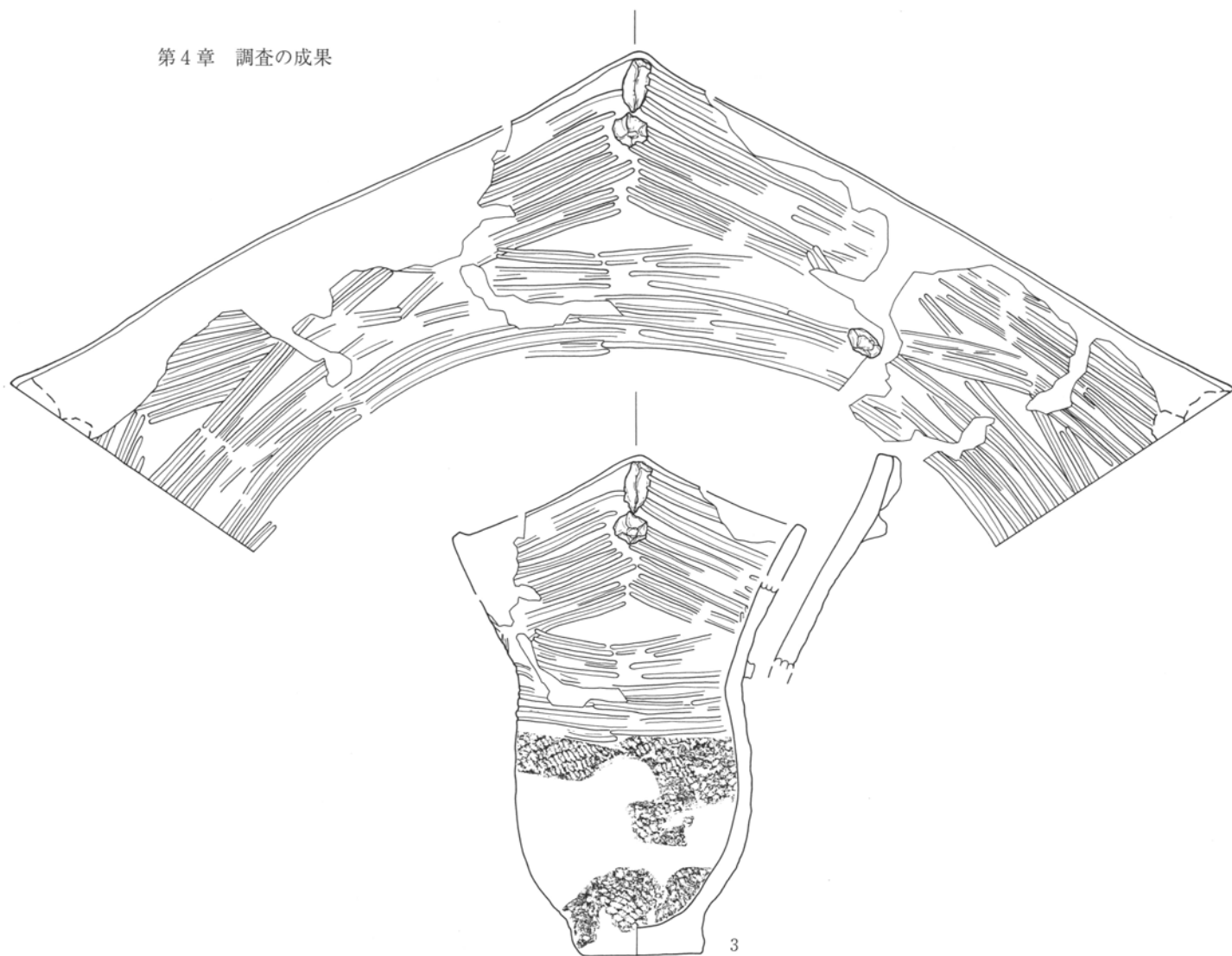
**炉** 住居の北端に113号土坑に切られる形で出土した。3cmほどの深さの平面小判形と想定される。

**土坑** 1a号住居内土坑も含めて8基あるが、住居に伴うものではないと考える。

**遺物** 1a号と1b号住居の遺物の区別がつかないので併せて1号住居という形で報告する。有馬黒浜式土器を中心とするもので、総数2212点、33.53kg出土した。石器は、組成は無茎石鏃が3点（5%）、石匙5点（8%）、削器18点（31%）、削器（使用痕）4点（7%）、石核1点（2%）、石皿3点（5%）、打斧3点（5%）、凹石8点（13%）、磨石13点（22%）、敲石2点（3%）、総数60個、総重量27.18kgである。石器剥片は総数131点、総重量912gである。



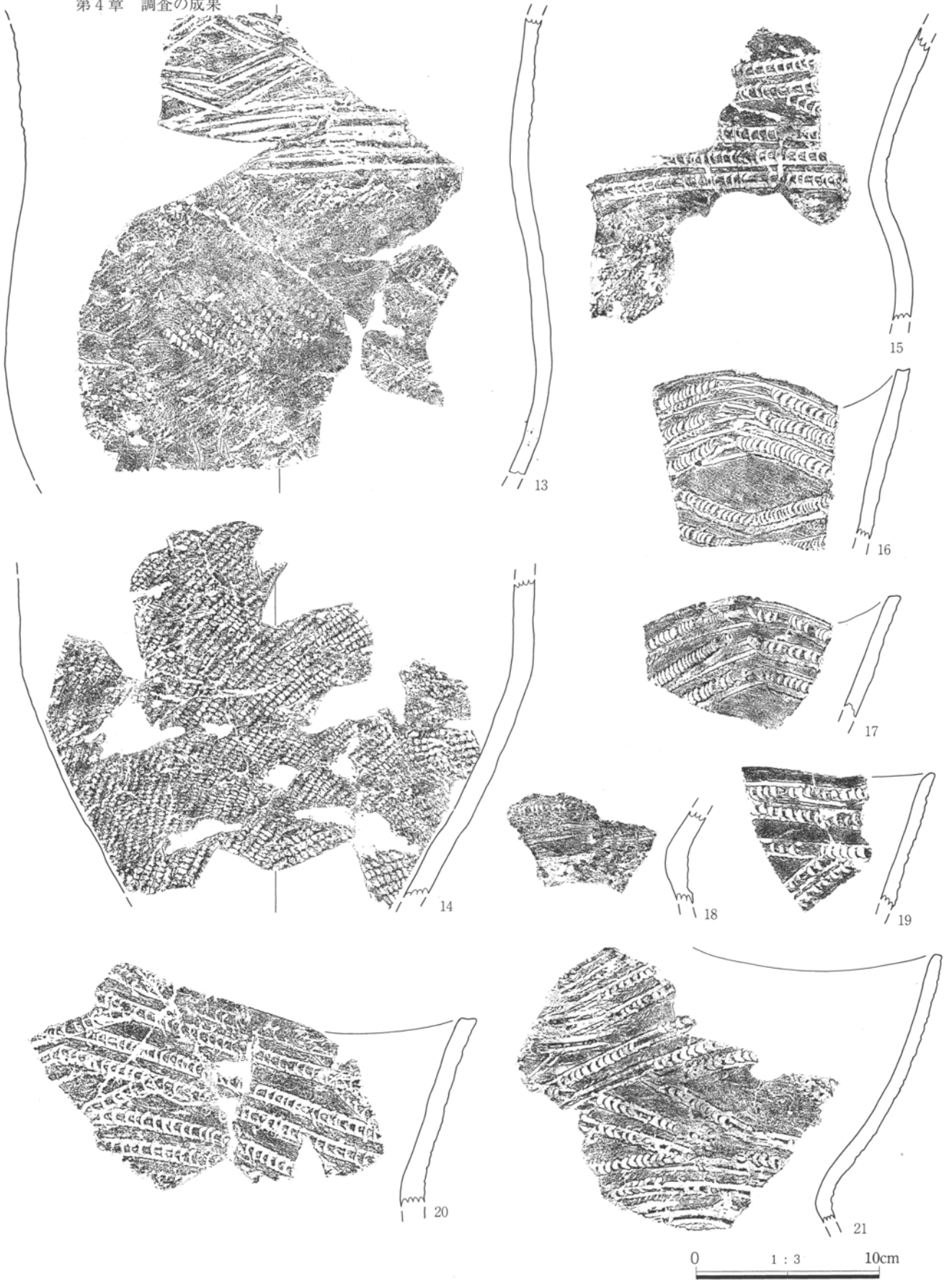
第14図 第1号住居出土土器（1）



第15図 第1号住居出土土器(2)



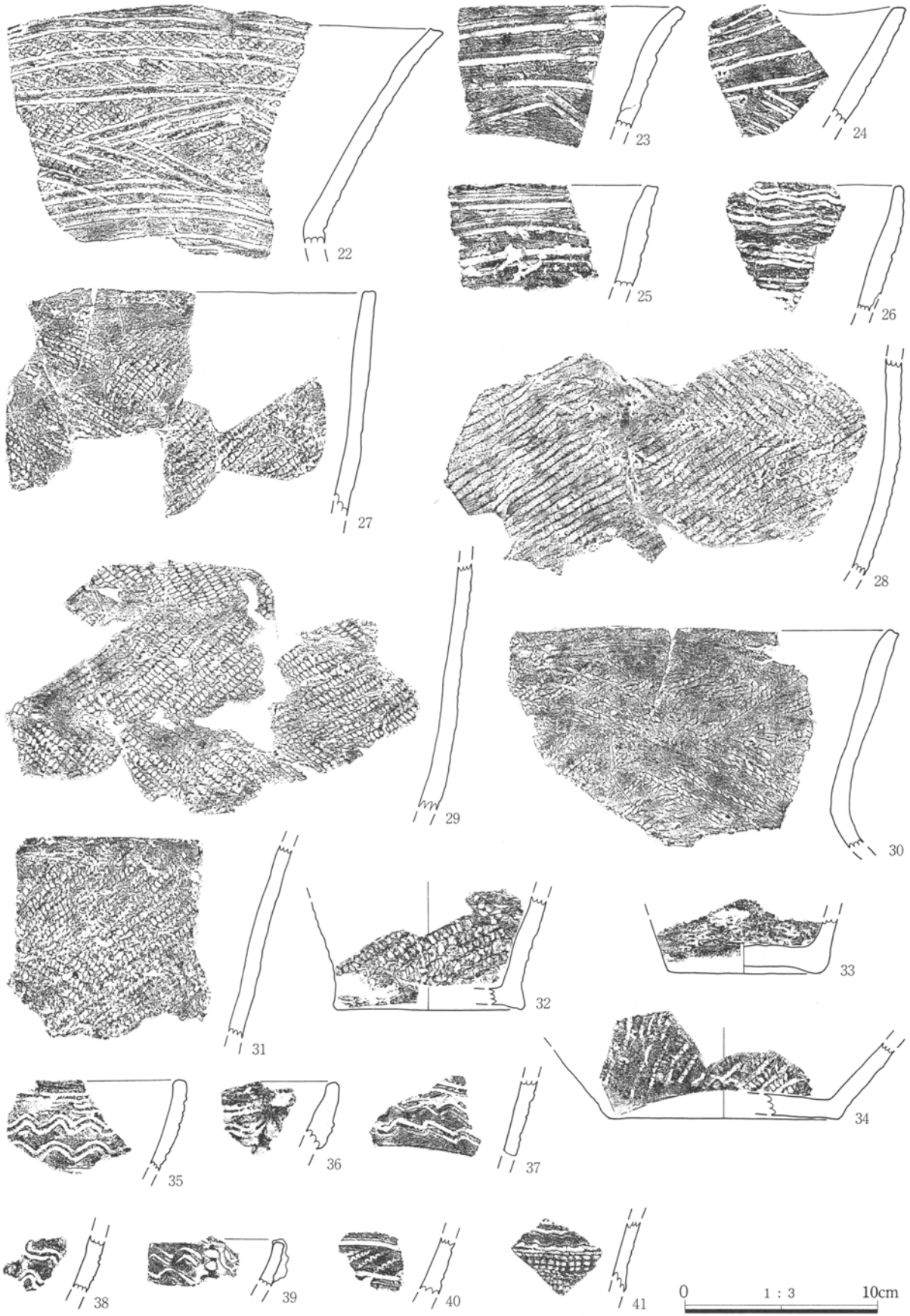
第16図 第1号住居出土土器(3)



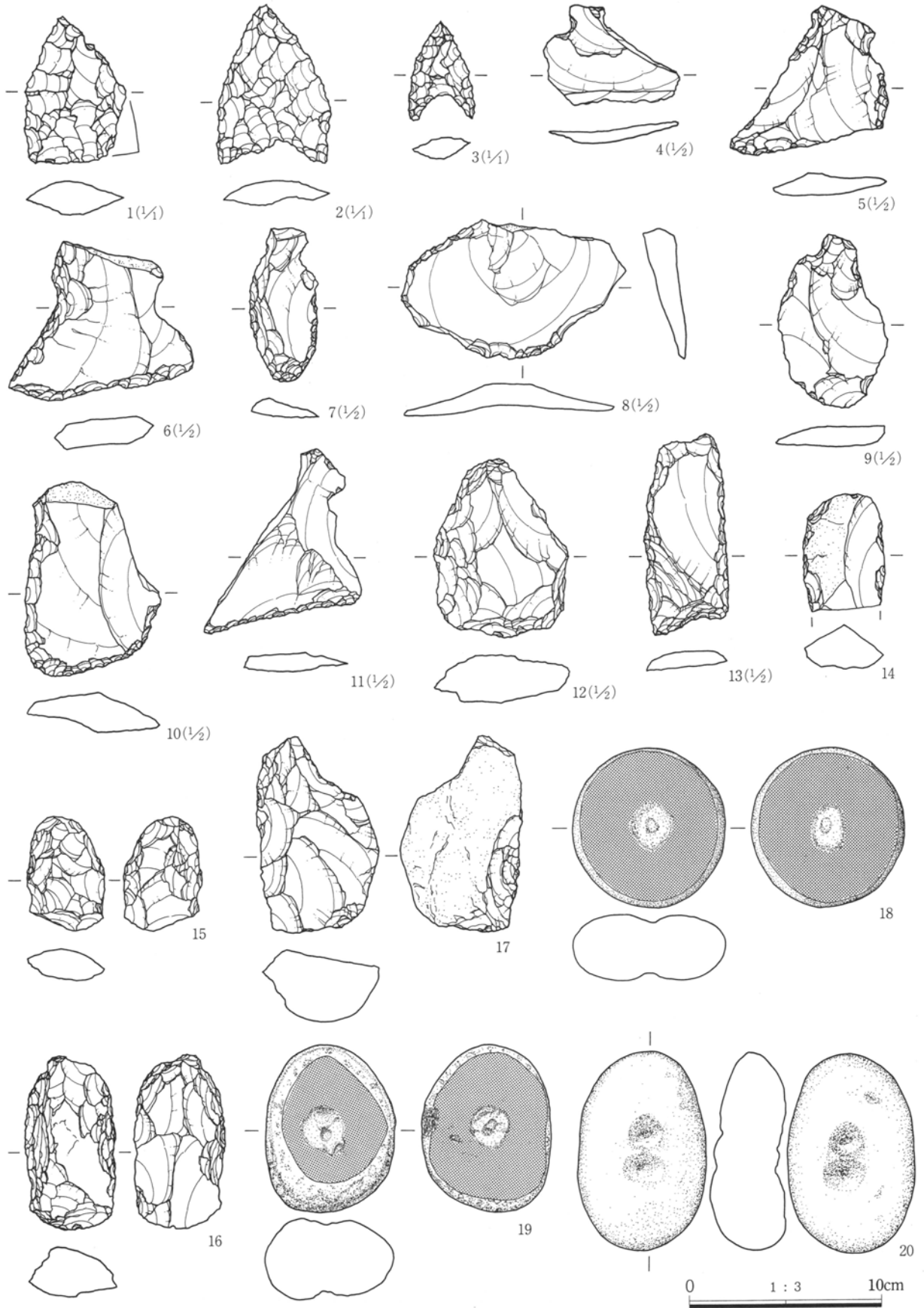
第17図 第1号住居出土土器(4)



第1節 縄文時代



第18図 第1号住居出土土器 (5)



第19図 第1号住居出土石器(1)



第20図 第1号住居出土石器(2)

第4章 調査の成果

b 2号住居

**位置** 遺跡地中心部の西端に位置する。この2号住居より東には多くの土坑群が認められるが、西にはほとんど土坑が認められない。

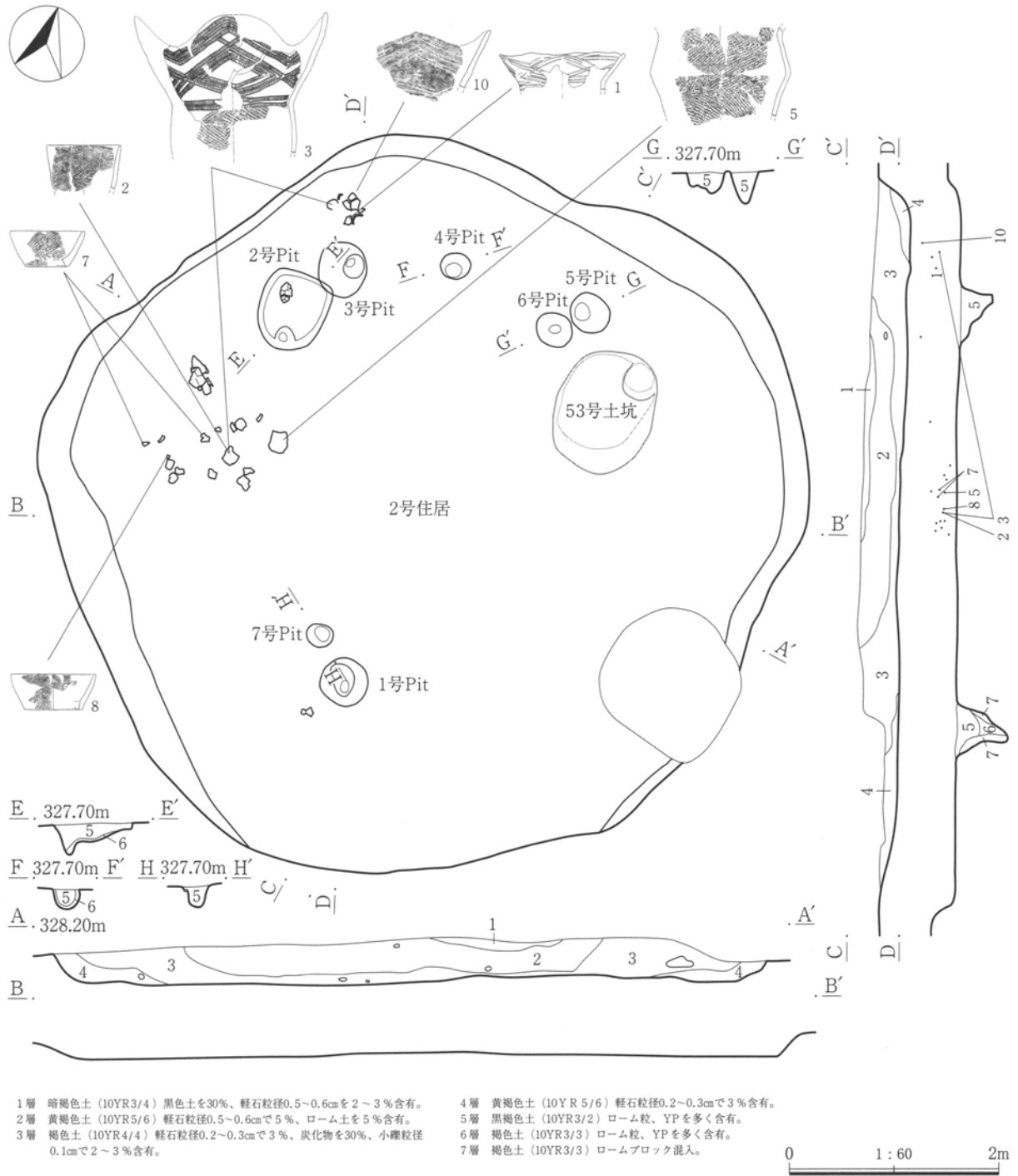
**形状** 平面六角形を呈し、径は7.0~7.1mある。

**壁** 北及び西側の壁の残りは良く、壁高は25から

30cmある。

**覆土** 黄褐色土を中心としたもので、一部YPを含んでいる。縄文土器・石器の出土は中層からの出土が多い。

**床面** ローム面を床面としている。



第21図 第2号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図

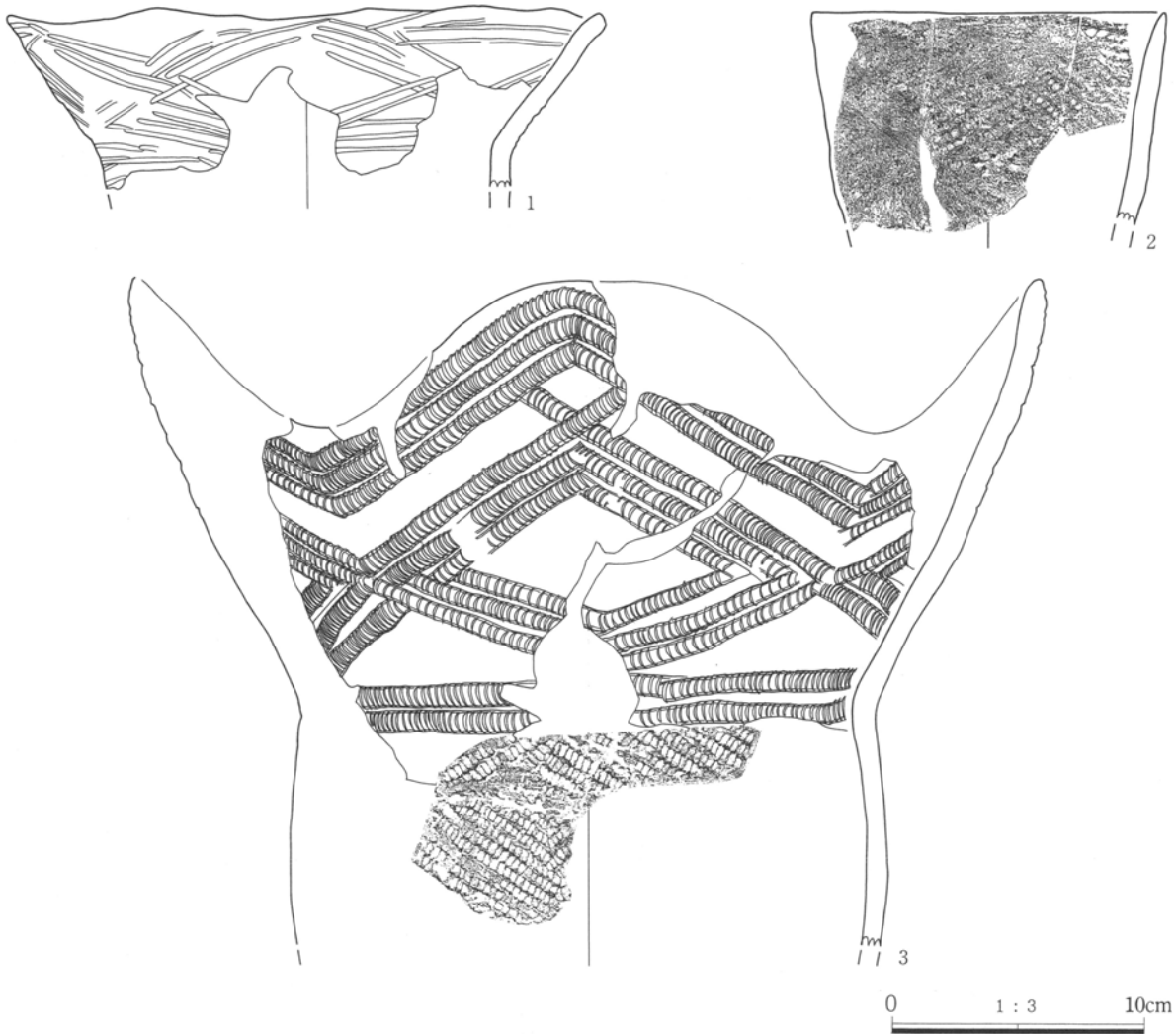
**柱穴** 2号住居内にあるピットは計8基あり、このうちのほとんどが位置や深さ等からみて柱穴としてよいだろう。ただどのような上部構造になっていたかは、不明である。

**炉** 確認できなかった。

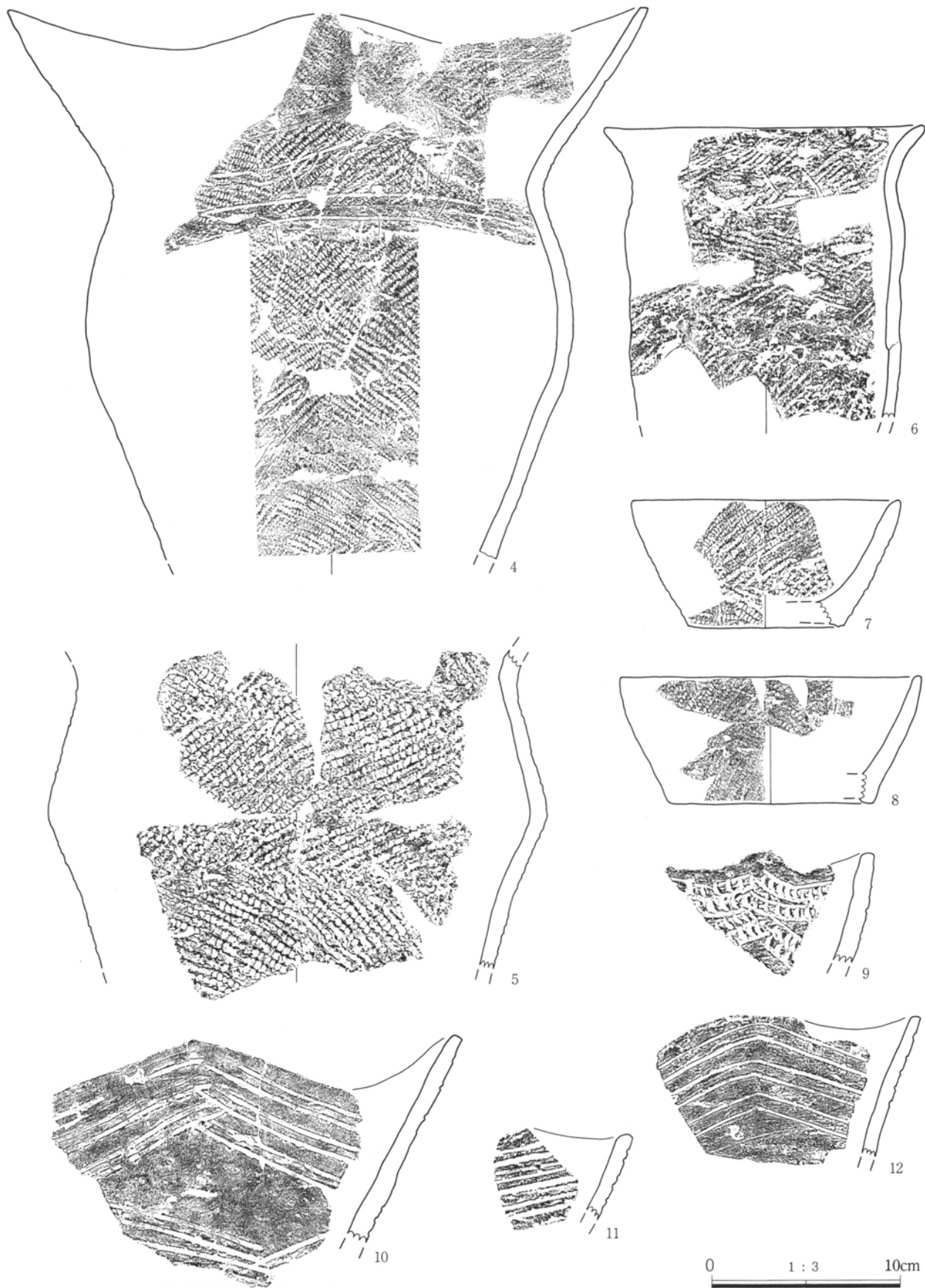
**土坑** 住居内に1基確認されているが、位置や深さから見て住居に伴うものではない。

**遺物** 有尾黒浜式土器を中心とするもので、土器は総数1360点、17.85kg出土した。石器は、組成は石鏃が4点（8%）、石匙1点（2%）、削器（加工痕）14点（28%）、削器（使用痕）5点（10%）、石核1点（2%）、打斧2点（4%）、スタンプ形1点（2%）、凹石7点（14%）、磨石15点（30%）で、

総計50点、総重量計10.82kgである。石器剥片は総数75点、総重量279.4gである。

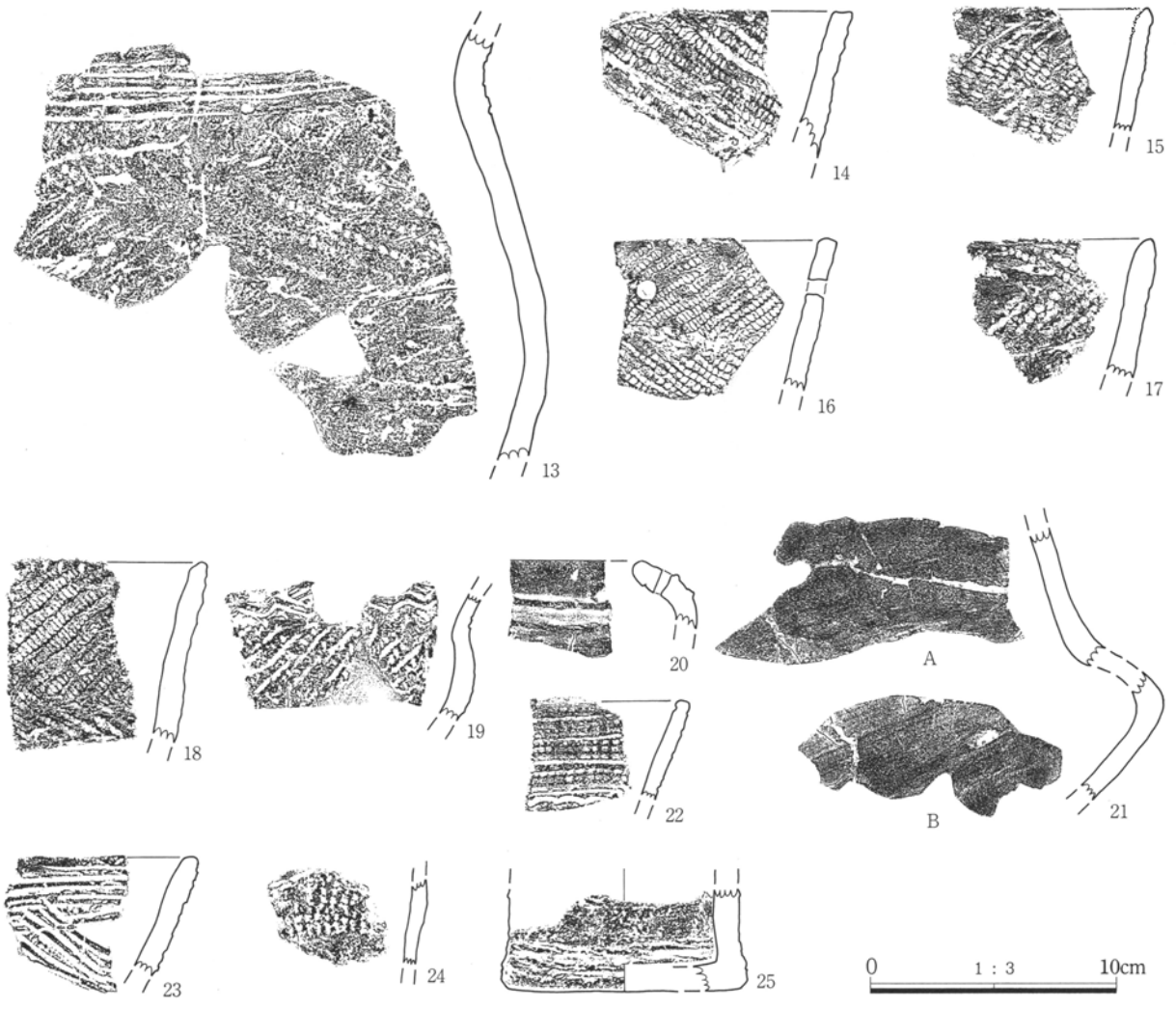


第22図 第2号住居出土土器（1）

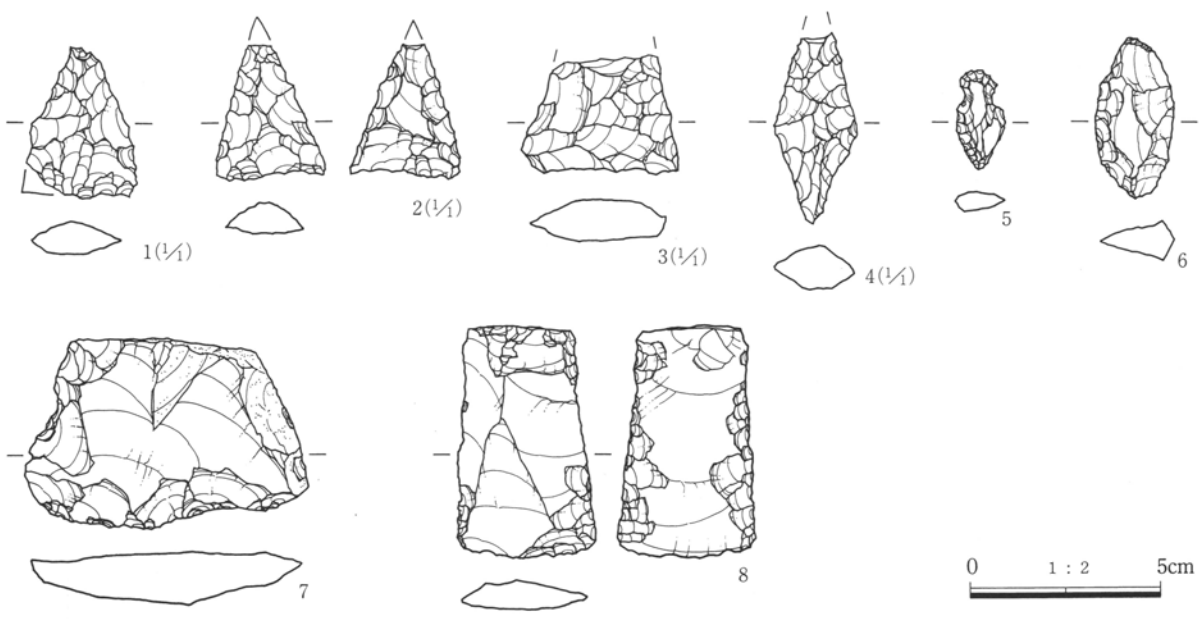


第23図 第2号住居出土土器(2)

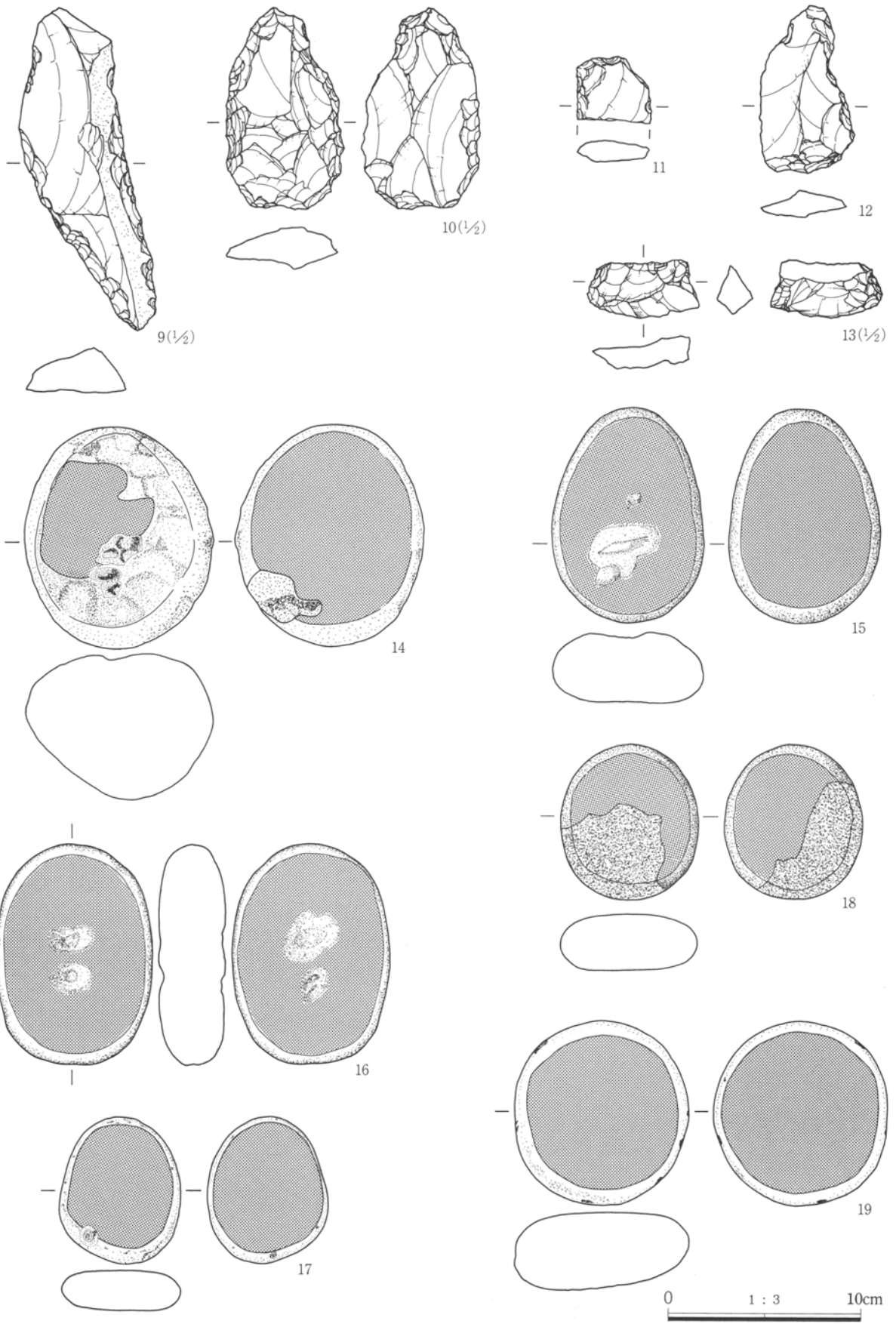
第1節 縄文時代



第24図 第2号住居出土土器 (3)

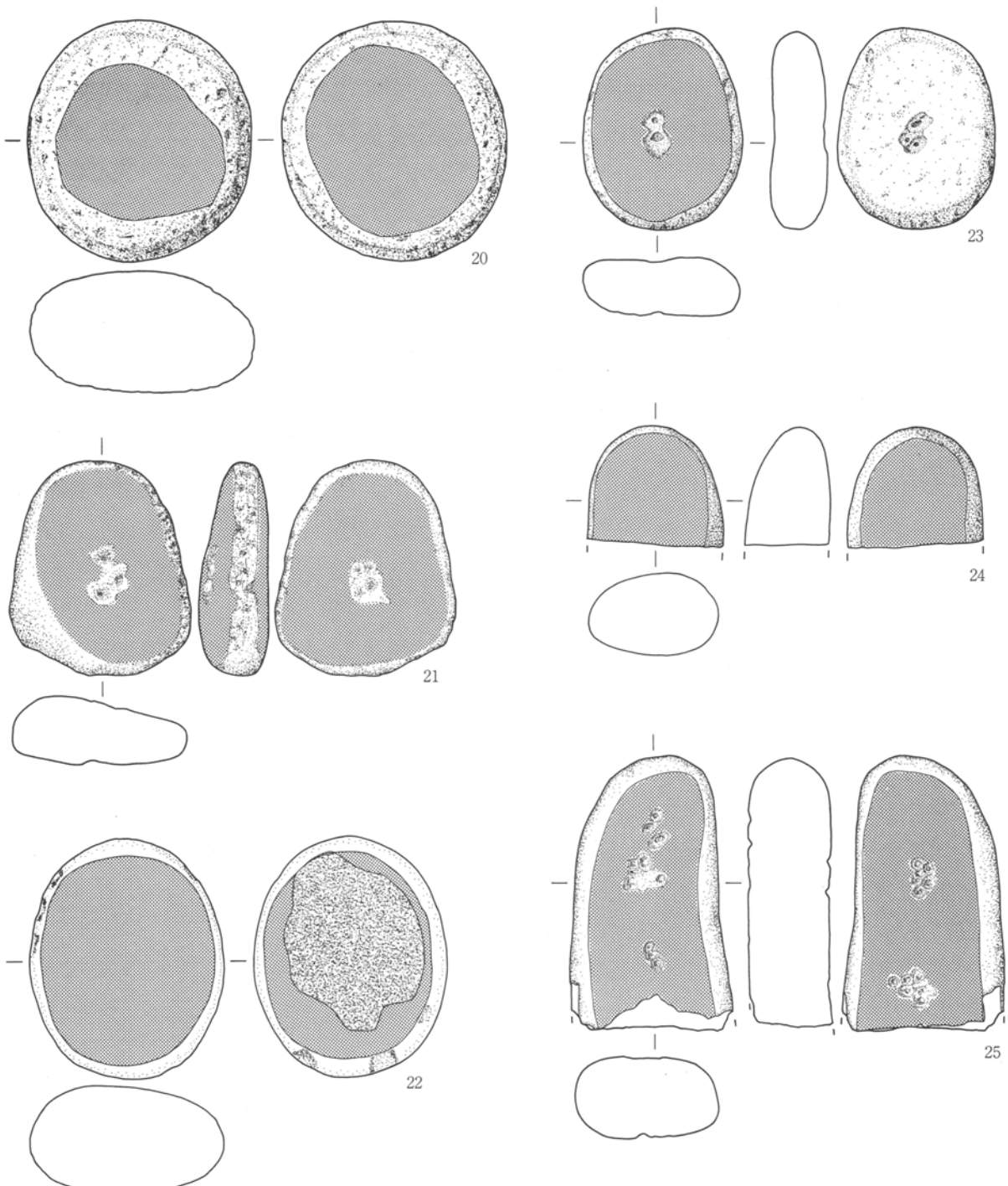


第25図 第2号住居出土石器 (1)



第26図 第2号住居出土石器 (2)





第27図 第2号住居出土石器(3)

0 1:3 10cm

#### 第4章 調査の成果

##### c 3号住居

**位置** 遺跡地中心部のほぼ中央に位置する。3号住居の南側に数多くの土坑群が検出された。北側には土坑群の検出は限られており、この住居が一つの境界的な役割を果たしていた可能性がある。3a号・3b号住居に分かれ、3a号住居から3b号住居に拡張したものと考えられる。

##### 3a号住居

**形状** 隅丸方形を呈し、一辺3.4m～3.6mある。壁は、3b号住居の拡張に伴い削平されているので残っていないが、壁周溝の存在により住居のプランが推定できた。

**周溝** 壁周溝は、全周せず、東南部の辺には、周溝の底面のレベルが高かったのか、あるいは本来無かったのか不明だが、痕跡は確認できなかった。周溝の法量は巾12～22cm、深さ6～8cmである。

又、北西部及び南西部の辺には壁周溝のさらに外側に一部重複しながらもう一本の周溝が途中まで残っており、何回かの拡張をしたものと考えて良いだろう。

**覆土** 3b号住居の覆土と同じである。

**床面** ローム土を床面としている。

**柱穴** 住居内に7基のピットがあるが、明瞭に柱穴と推定できるものは無い。

**炉** 確認できなかった。

**土坑** 住居内に3基あるが、いずれも住居に伴うものではないと考えられる。

**遺物** 3b号住居の遺物と混じり合い不明。

##### 3b号住居

**形状** 平面隅丸方形を呈し長辺6.9m、短辺が6.3mある。

**周溝** 壁際に沿ってほぼ全周する溝が廻る。巾10～25cm、深さ6～10cmほどである。南東部隅と北東部隅に一部切れ目があり、さらに東辺の壁周溝の内側に同じ南北方向を示す、細めの溝（巾6～12cm、深さ6cm）が2条あり、拡張の過程を示すものと考えられる。

**覆土** 暗褐色土でYPを含み、緻密な堆積の土であ

る。遺物は2層から多く出土している。

**床面** ローム土を床面としている。

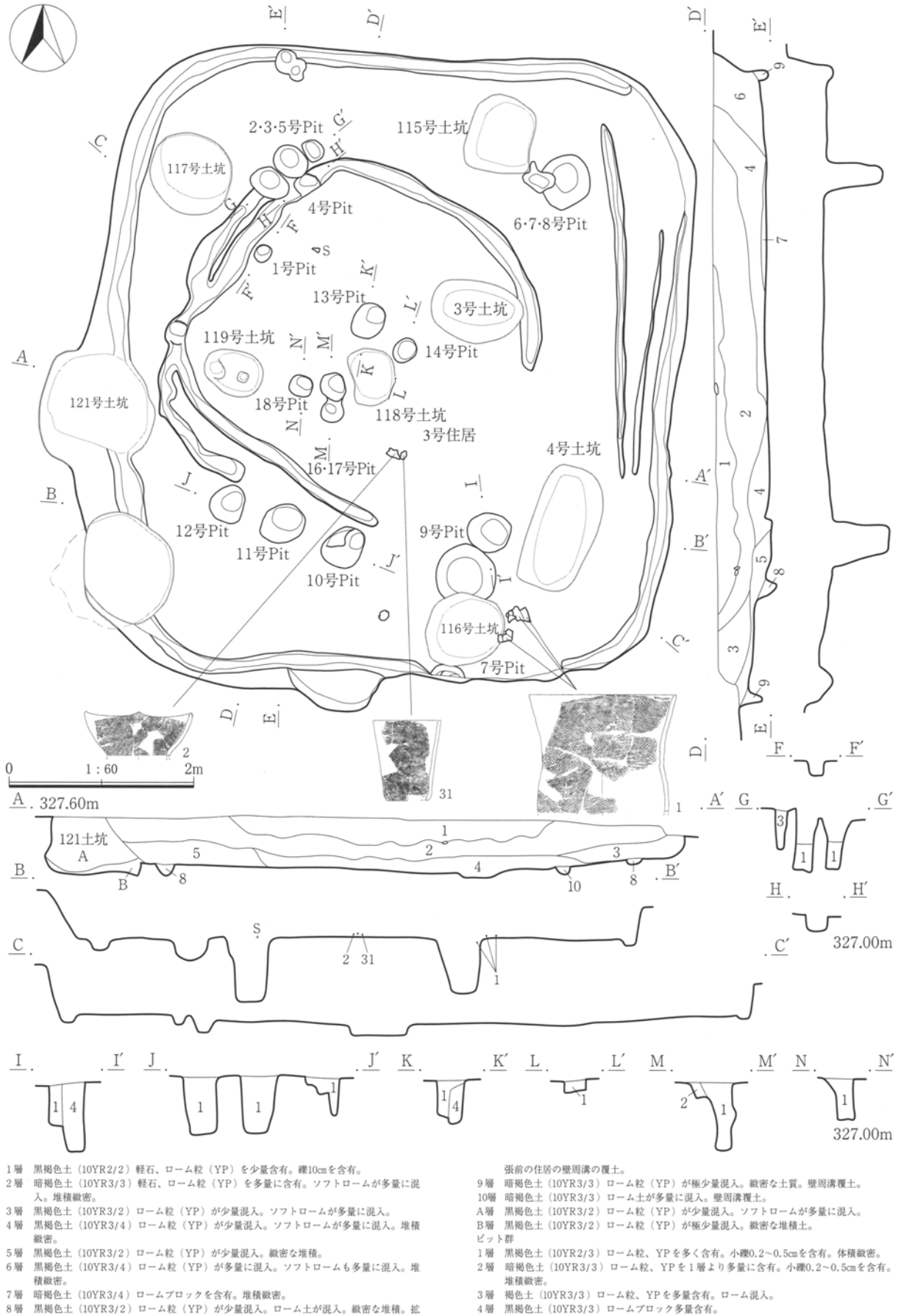
**柱穴** 3b号住居内に3a号住居内に含まれるピットも含めると計18基ある。うち、3・8・12・18号ピットの4基が位置・深さから柱穴に比定される。4本柱穴と考えられる。

**炉** 確認できなかった。

**土坑** 3b号住居内に3a号住居内にある土坑も含めると7基あるが、いずれも住居に伴うものとは思われない。

**遺物** 有尾黒浜式土器を中心に一部諸磯が入るもので3a、3b号住居の遺物の区別ができないため3号住居ということで併せて記述する。土器の総数2472点、総重量35.6kg出土した。

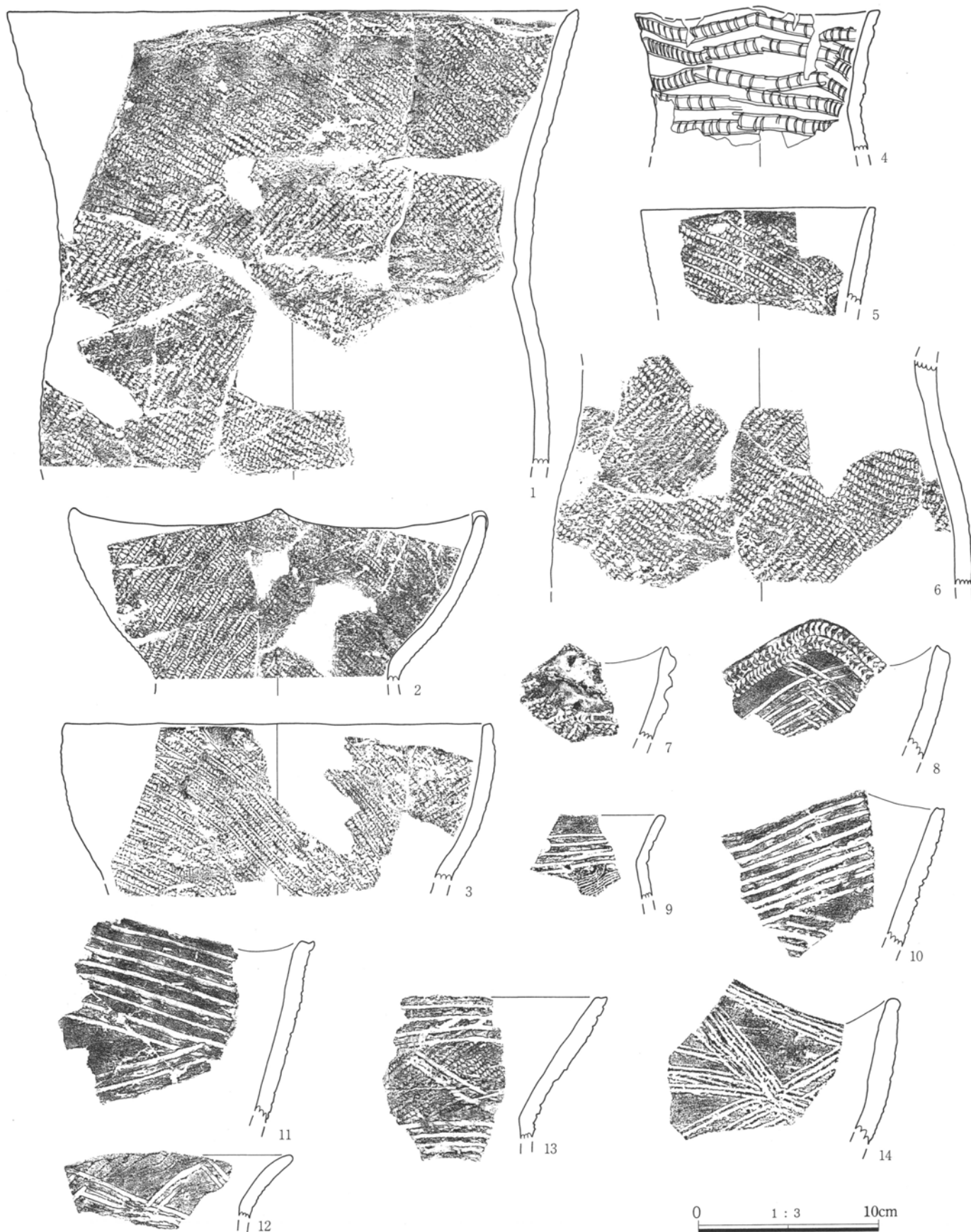
石器は、組成は無茎石鏃が2点（5%）、石匙3点（8%）、削器（加工痕）17点（45%）、削器（使用痕）3点（8%）、磨斧1点（3%）、凹石5点（13%）、磨石4点（10%）、敲石（3%）、石製品2点（5%）の総計38点で、計6.27kgである。石器剥片は総数81点、総重量605.2gである。



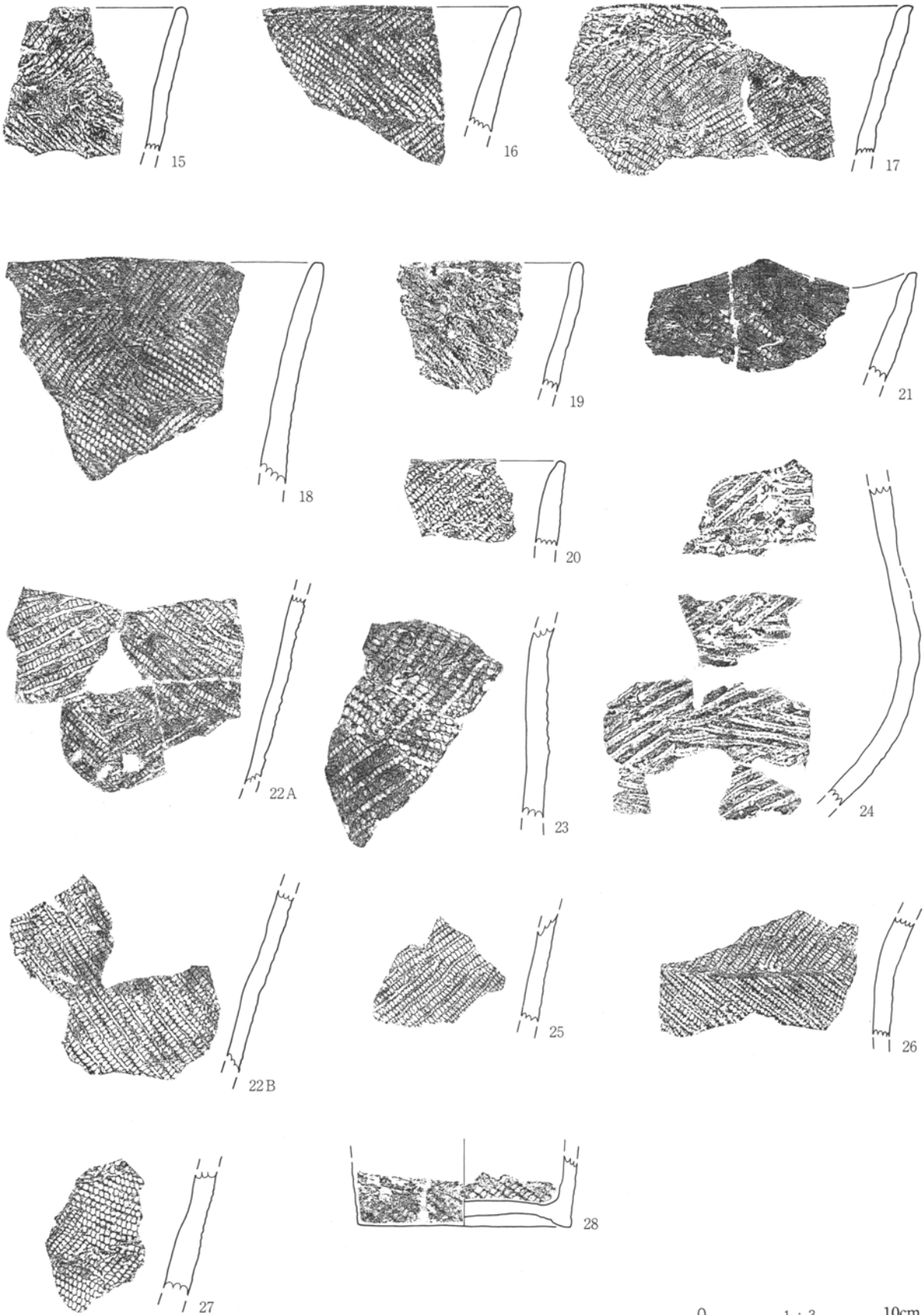
第28図 第3号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 軽石、ローム粒 (YP) を少量含有。礫10cmを含有。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 軽石、ローム粒 (YP) を多量に含有。ソフトロームが多量に混入。堆積緻密。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (YP) が少量混入。ソフトロームが多量に混入。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/4) ローム粒 (YP) が少量混入。ソフトロームが多量に混入。堆積緻密。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (YP) が少量混入。緻密な堆積。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/4) ローム粒 (YP) が多量に混入。ソフトロームも多量に混入。堆積緻密。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/4) ロームブロックを含有。堆積緻密。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (YP) が少量混入。ローム土が混入。緻密な堆積。掘

- 張前の住居の壁周溝の覆土。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒 (YP) が極少量混入。緻密な土質。壁周溝覆土。
- 10層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム土が多量に混入。壁周溝覆土。
- A層 暗褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (YP) が少量混入。ソフトロームが多量に混入。
- B層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (YP) が極少量混入。緻密な堆積土。
- ピット群
- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒、YP を多く含有。小礫0.2~0.5cmを含有。体積緻密。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒、YP を1層より多量に含有。小礫0.2~0.5cmを含有。堆積緻密。
- 3層 褐色土 (10YR3/3) ローム粒、YP を多量含有。ローム混入。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/3) ロームブロック多量含有。



第29図 第3号住居出土土器 (1)

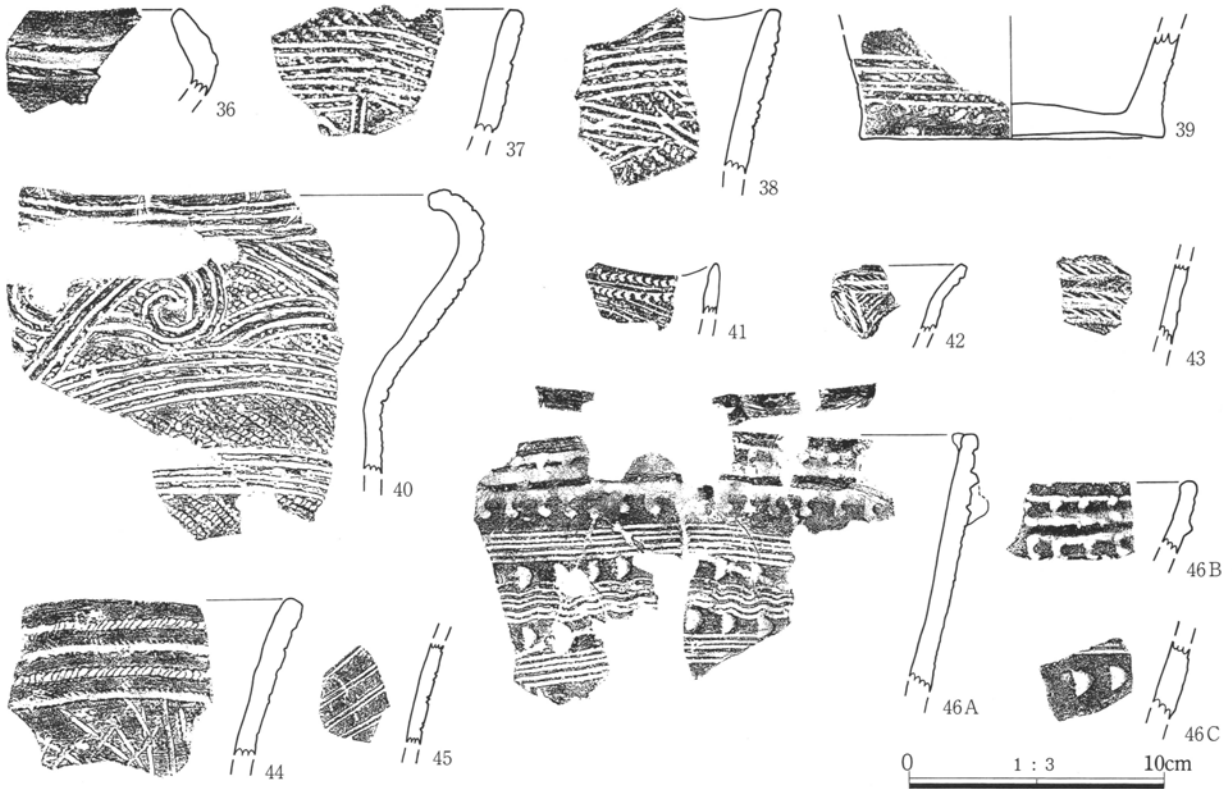


0 1 : 3 10cm

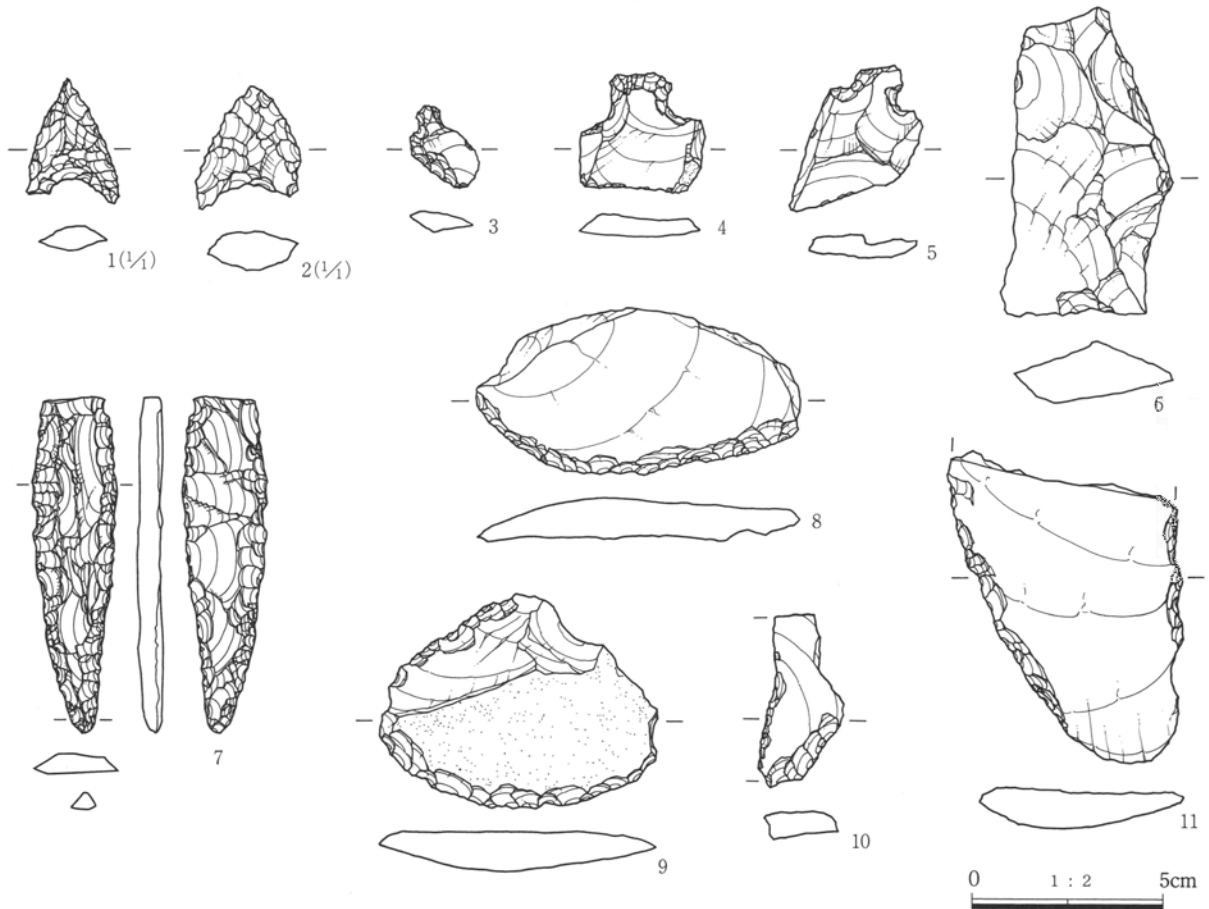
第30図 第3号住居出土土器 (2)



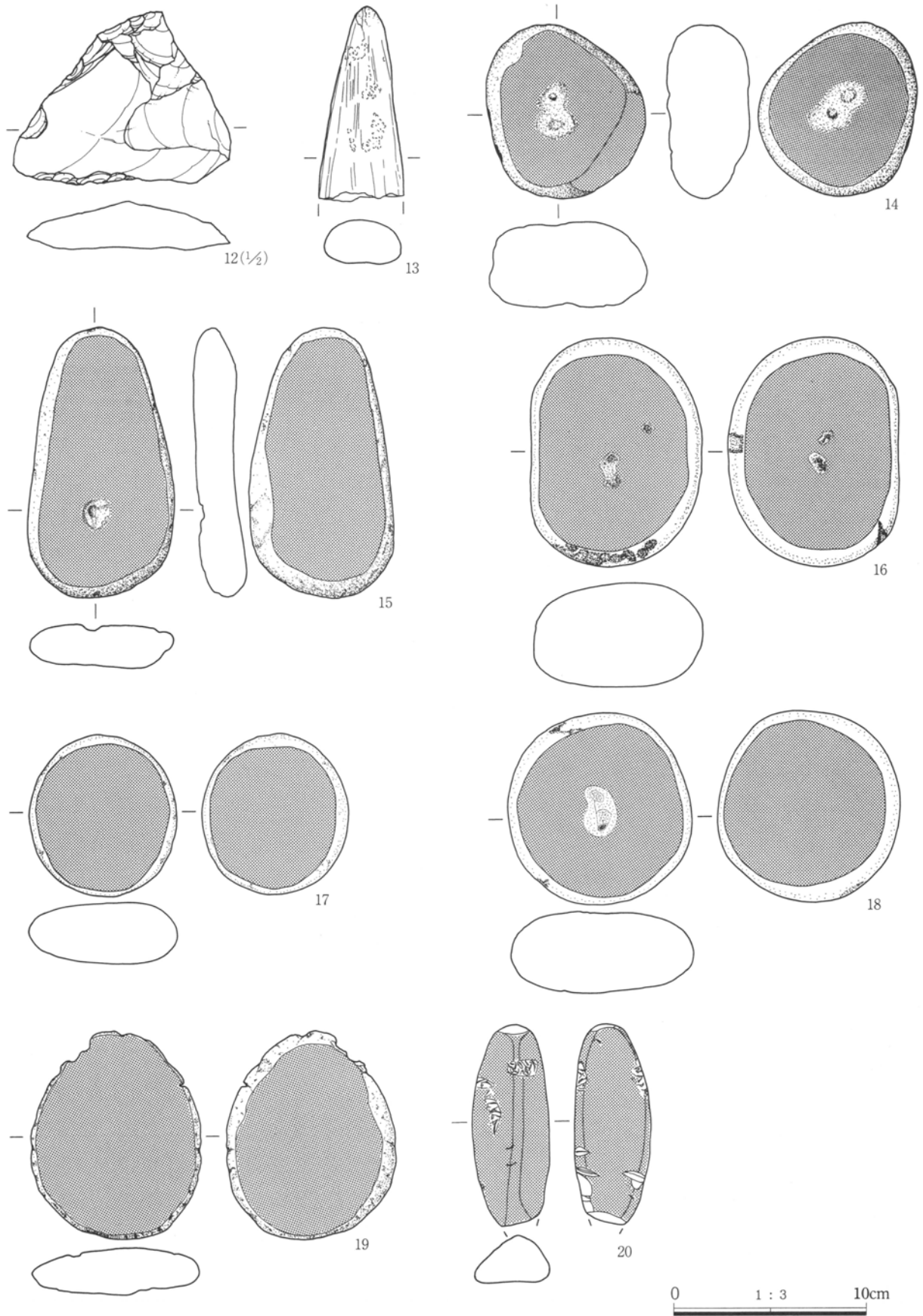
第31図 第3号住居出土土器(3)



第32図 第3号住居出土土器 (4)



第33図 第3号住居出土石器 (1)



0 1 : 3 10cm

第34図 第3号住居出土石器 (2)



d 4号住居

**位置** 遺跡地の東端にあり、周りにも土坑は非常に少ない。

**形状** 平面隅丸長方形で、長辺6.1m、短辺4.6mを有する。

**周溝** ほぼ全周するが、北東部の一部は切れる箇所がある。巾20~24cm、深さ10~12cmである。

**覆土** 黒褐色~暗褐色土でYPを一部含む。土器は2層から主に出土している。

**壁** 壁は、土坑により攪乱を受けた部分は別にして残りは良く、壁高は12~14cmほど残る。

**床面** ローム土を床面としている。

**柱穴** ピットは15基ほど出ているが、明瞭に柱穴と

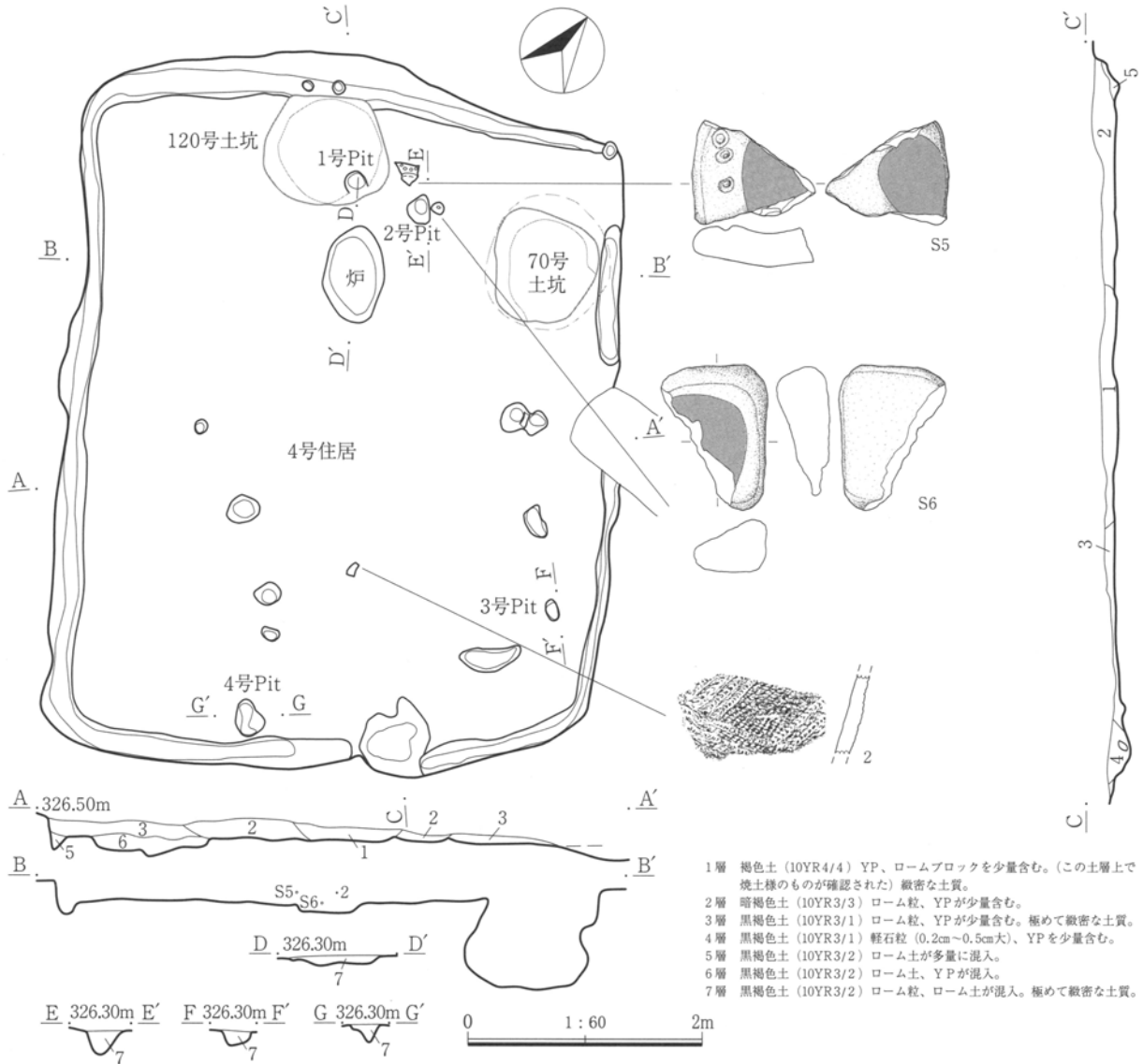
認定できるものは無い。

**炉** 長径82cm、短径51cm、深さが3cmの炉が確認された。

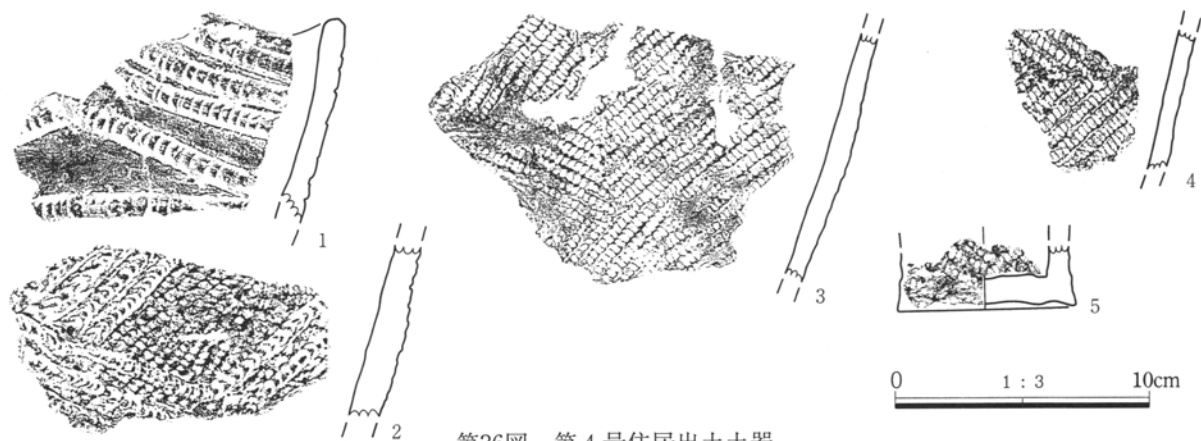
**土坑** 3基が住居内から確認されたが、住居と重複するもので住居に伴うものではない。

**遺物** 有尾黒浜式土器が62点、996g出土している。他の時期の土器の重複が無く、有尾黒浜期単独期の住居と考えられる。

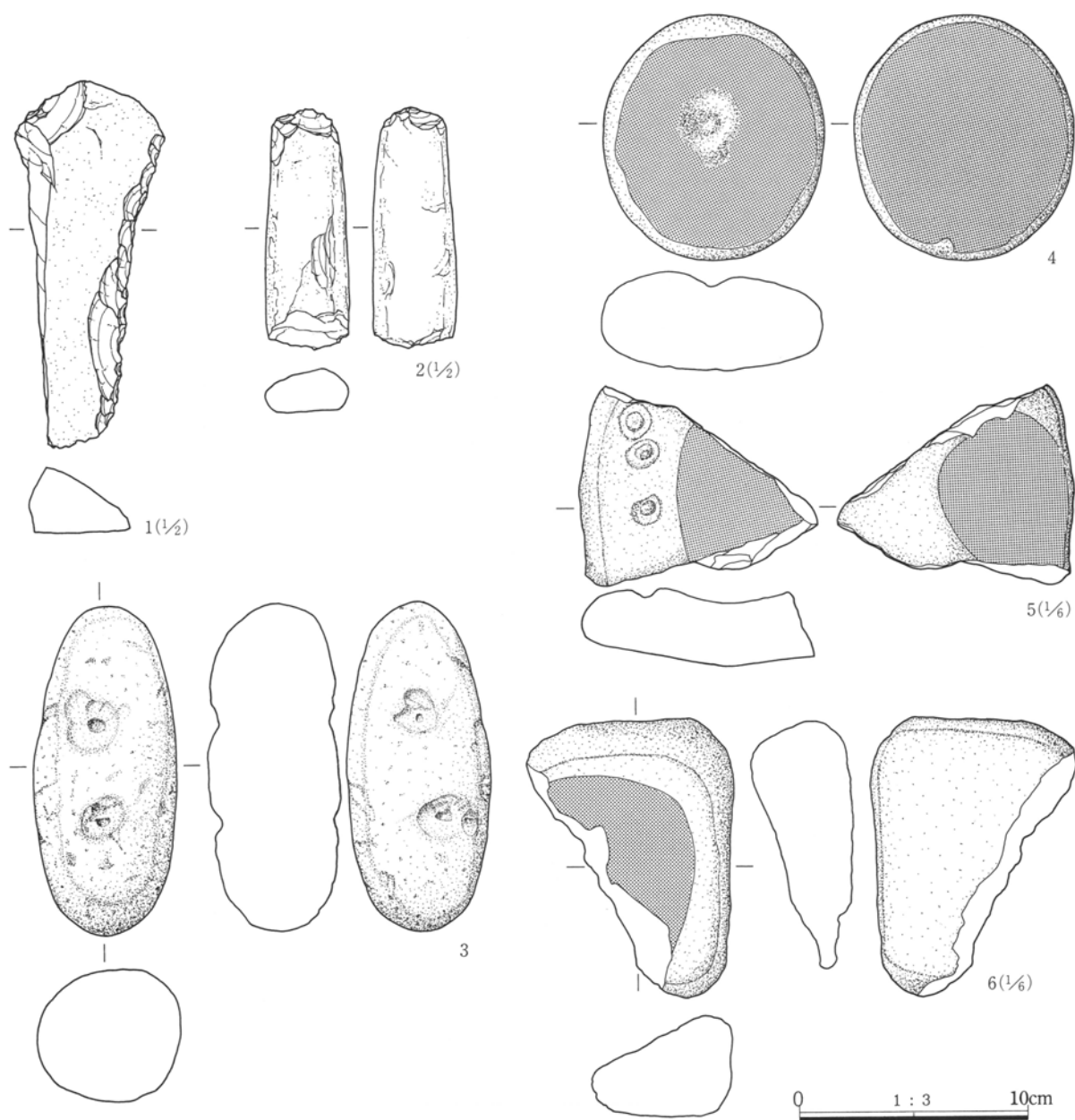
石器は、組成は削器（加工痕）が1点（11%）、削器（使用痕）3点（33%）、凹石2点（22%）、石皿2点（22%）、石製品1点（11%）で総数9点、総重量6.80kgである。石器剥片は総数7点、総重量41.1gである。



第35図 第4号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図



第36図 第4号住居出土土器



第37図 第4号住居出土石器

e 5号住居

**位置** 5号住居は、遺跡地の東側、1号住と4号住の中間にあり、周りにはあまり土坑も認められない。

**形状** 平面隅丸長方台形で、長辺4.3m、短辺4.1mをはかる。

**壁** 残りは良く、壁高14~30cmをはかる。

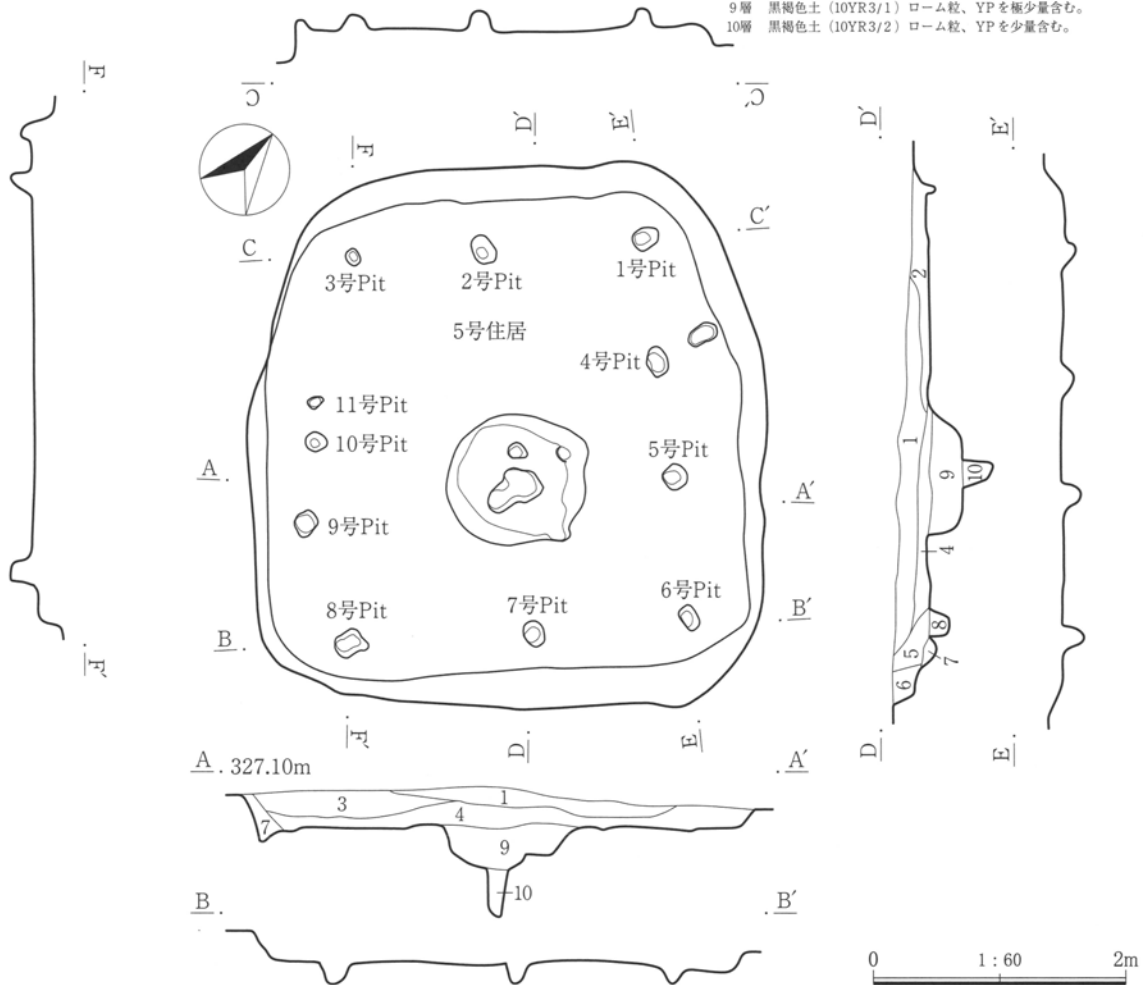
**覆土** 黒褐色土でYPを少量含む。土器は4層を中心に出土する。

**床面** ローム土を床面とする。

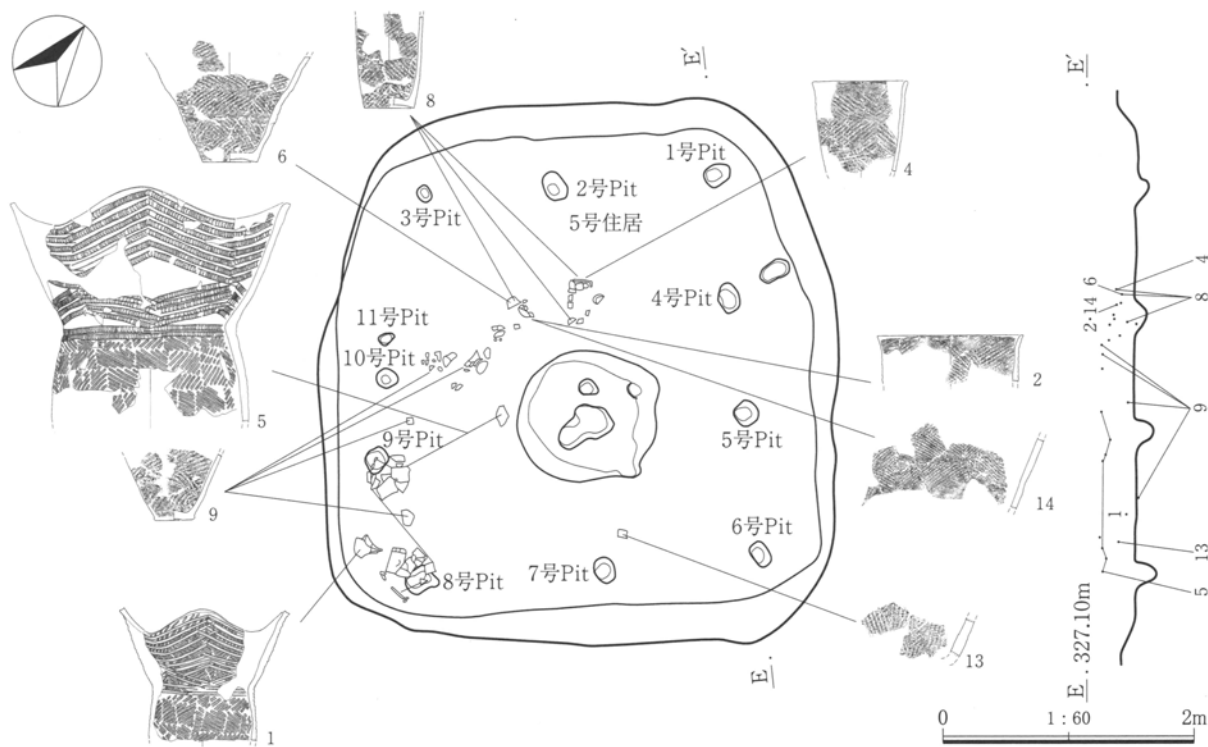
**柱穴** ピットが計14基検出されたが、位置や深さから見て、うち計11基が柱穴と考えられる。長辺方向に4、短辺方向に3あり、中央にやや大きめの掘り込みのあるピットが、住居の中央にある支柱穴と考えられる。

**炉** 確認できなかった。

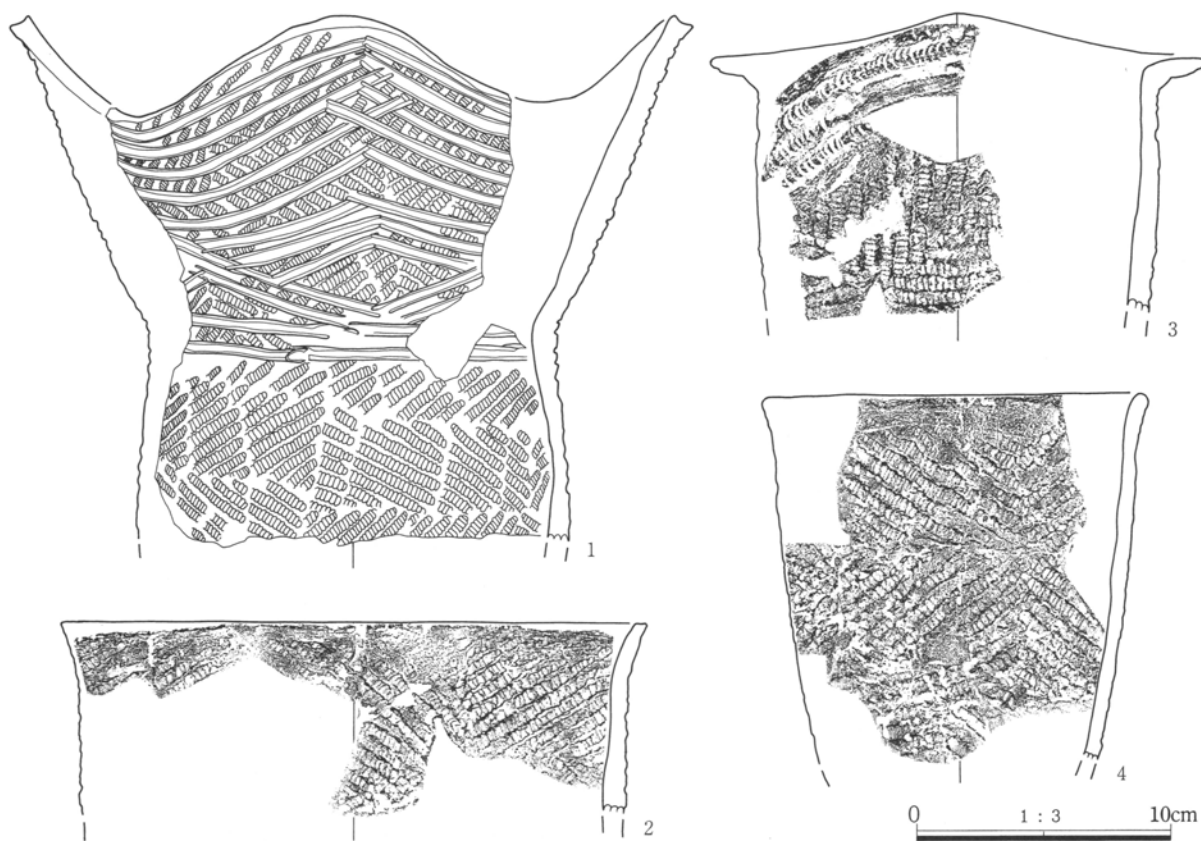
**遺物** 有尾黒浜式土器及び諸磯式土器が出土している。土器は総数447点、総重量10.71kg出土した。石器は、組成は石鏃3点(19%)、石匙1点(6%)、削器(加工痕)3点(19%)、削器(使用痕)5点(31%)、打斧1点(6%)、磨石2点(12%)、石製品1点(6%)で、総数16点、総重量計1.03kgである。石器剥片は総数59点、総重量401.4gである。



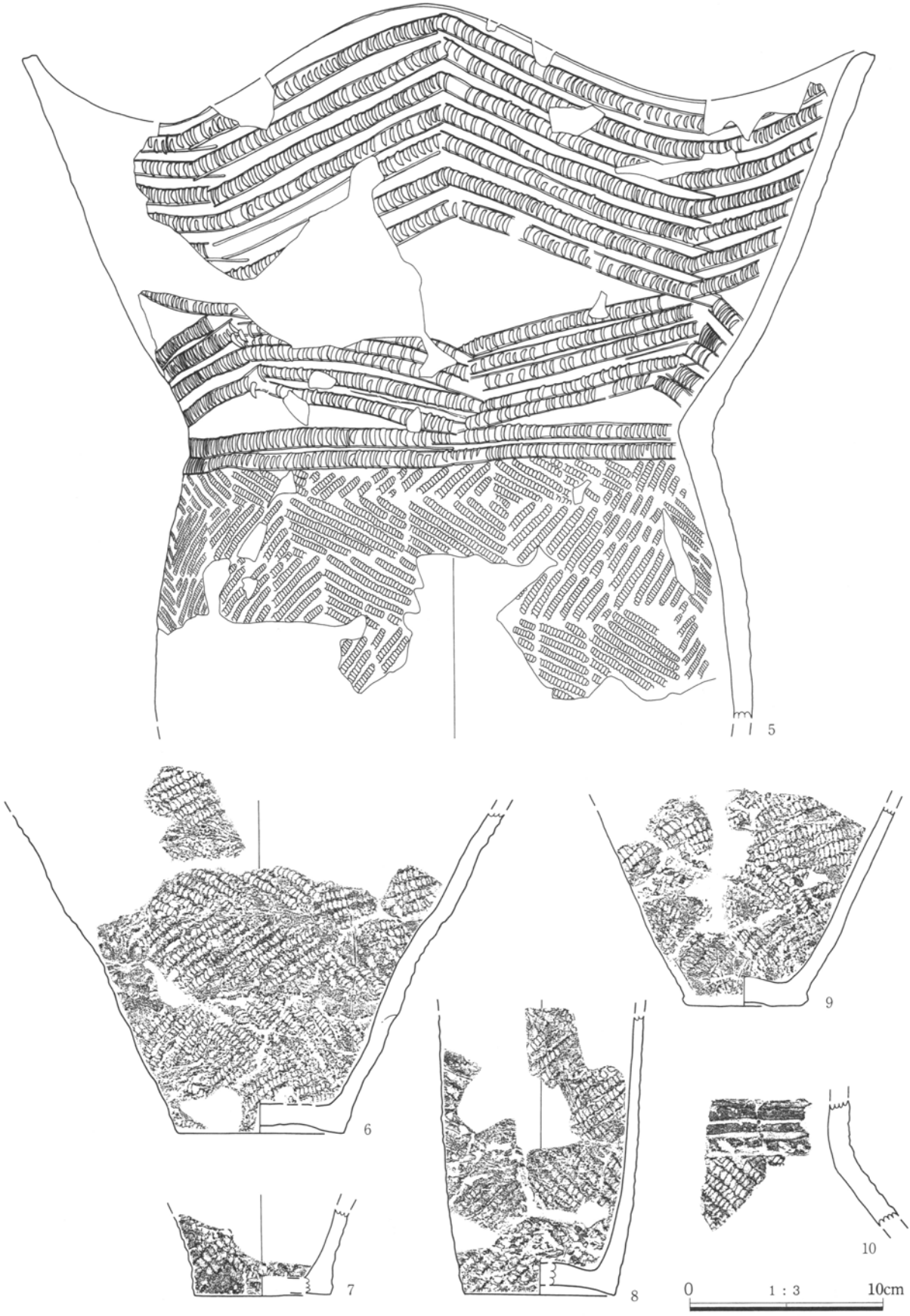
第38図 第5号竪穴式住居平面図・断面図



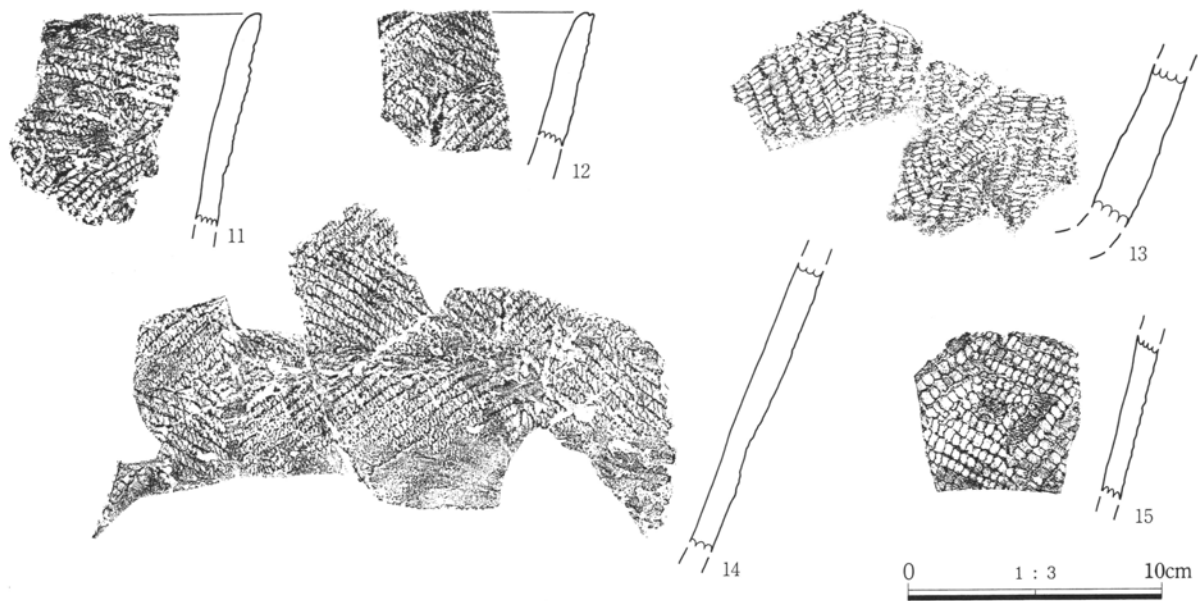
第39図 第5号竖穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図



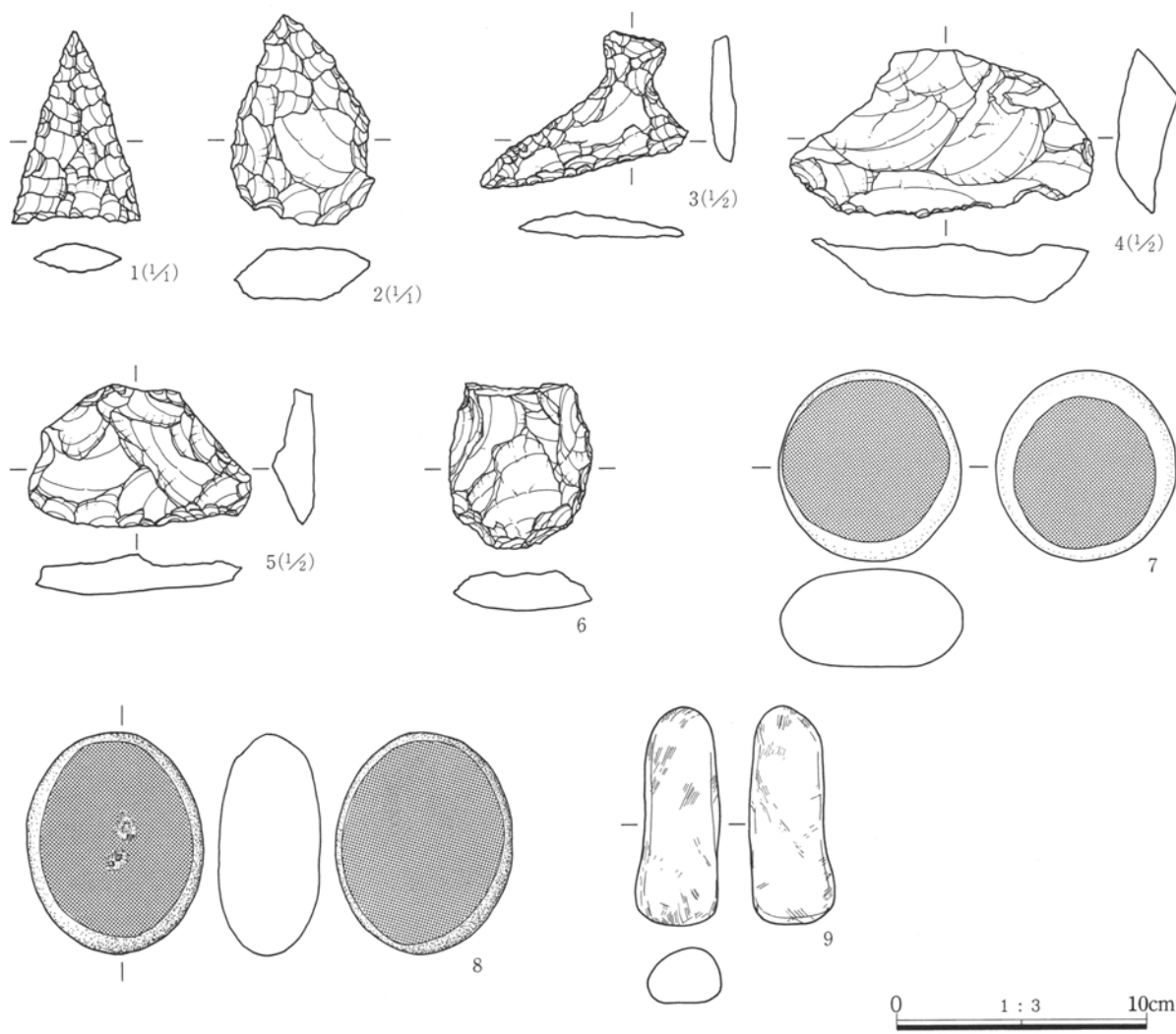
第40図 第5号住居出土土器(1)



第41図 第5号住居出土土器(2)



第42図 第5号住居出土土器 (3)



第43図 第5号住居出土石器

f 6号住居

**位置** 遺跡地の北側にあり、7号住のすぐ南に位置する。周囲に土坑群が展開する。

**形状** 平面多角形状で、復元径4.3mほどの大きさである。北部が、中世の2号堀により削られてしまい本来の形状及び法量は不明である。残存部分の角からみると六角形状を呈した可能性が高い。

**壁** 残りの良いところで壁高16~19cmほどである。

**周溝** 巾10~12cm、深さ6cmほどで残存部分には全周する。

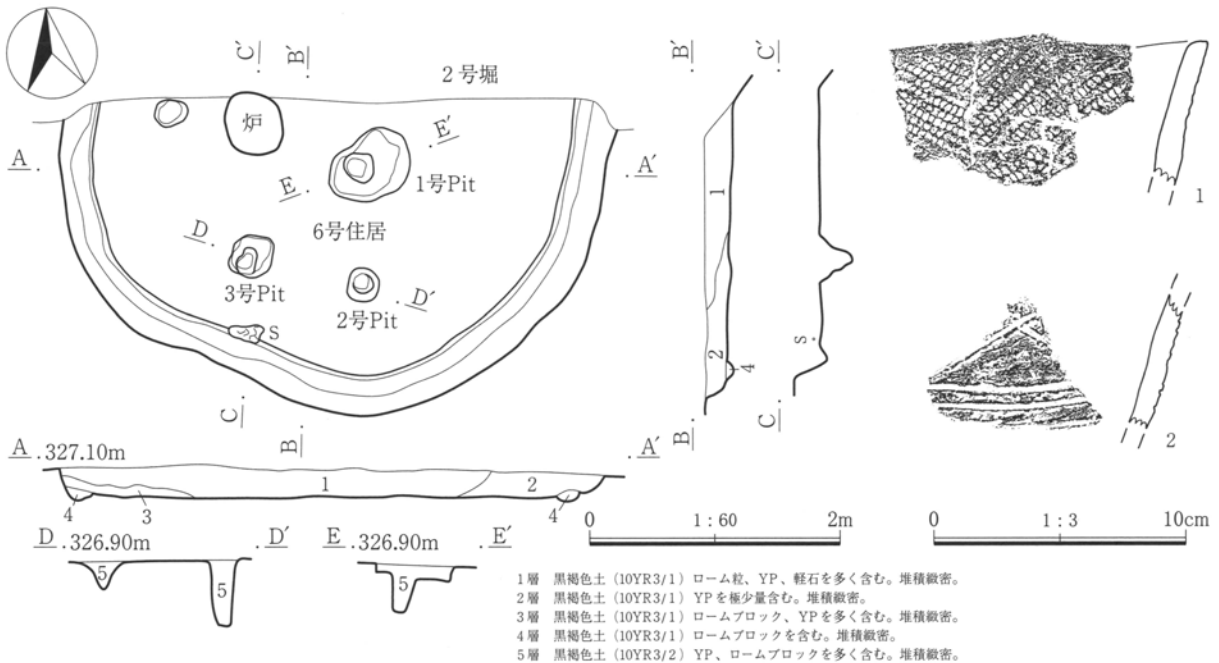
**覆土** 黒褐色土が中心で、YPを少量含む。

**床面** ローム土を床面としている。

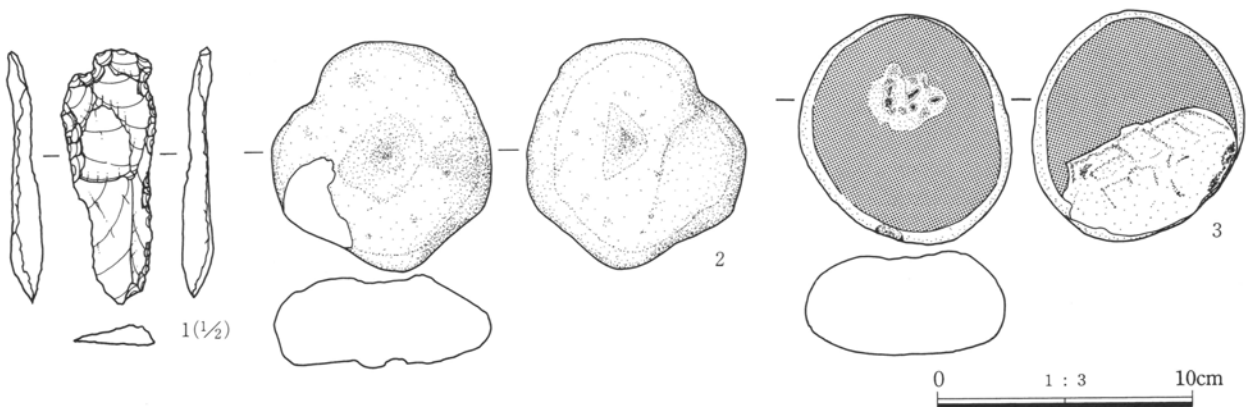
**柱穴** 残存住居内に4基のピットがあるが、うち1・2号ピットが柱穴となる可能性がある。

**炉** 平面楕円形で長径52cm、短径44cmで、深さはほとんど平坦であり、一部焼土が残っている。

**遺物** 有尾黒浜式土器を中心とするもので、土器総数50点、総重量580g出土した。石器は、組成は石匙1点(33%)、凹石1点(33%)、磨石1点(33%)、総数3点で、総重量計732gである。石器剥片は総数12点、総重量44.0gである。



第44図 第6号竪穴式住居平面図・断面図、出土土器



第45図 第6号住居出土石器

第4章 調査の成果

g 7号住居

**位置** 遺跡地の北端で周りに土坑もほとんど認められない。6号住のすぐ北にあたる。

**形状** 平面隅丸方形（長方形）状を呈する。北東部が対角線状に発掘地外のため掘ることができず、状況不明。

**壁** 壁の残りは良く壁高36~48cmを有する。

**周溝** 巾24~34cm、深さ28~42cmほどで、残存部分に全周する。

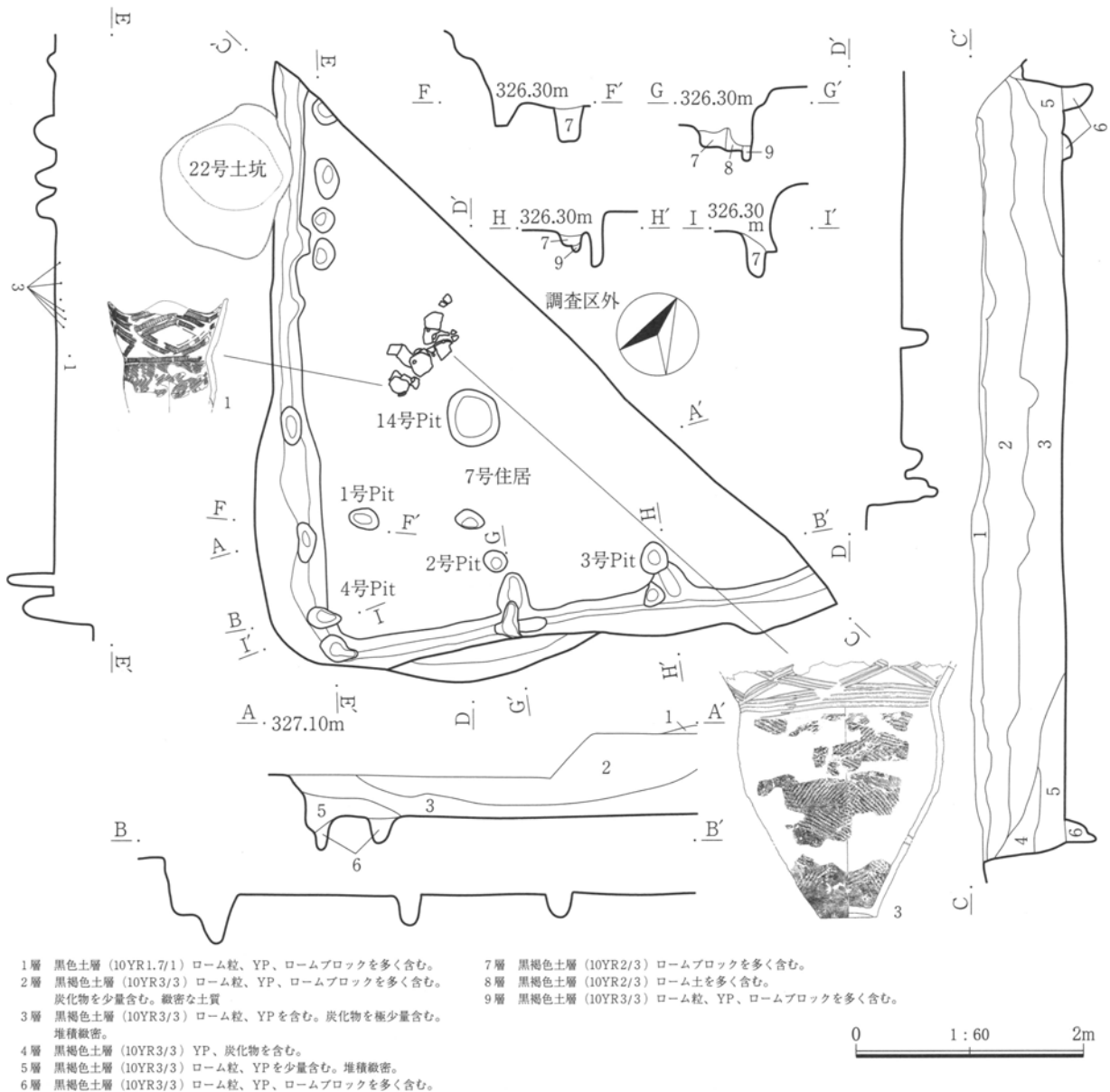
**覆土** 黒褐色土を中心にYPを少量含む層。遺物は、3層を中心に出土した。

**床面** ローム土を床面としている。

**柱穴** 住居内に10基のピットがあり、壁周溝内に6基のピットがある。何らかの上部構造を支える柱穴と考えられるが具体的な構造は不明である。

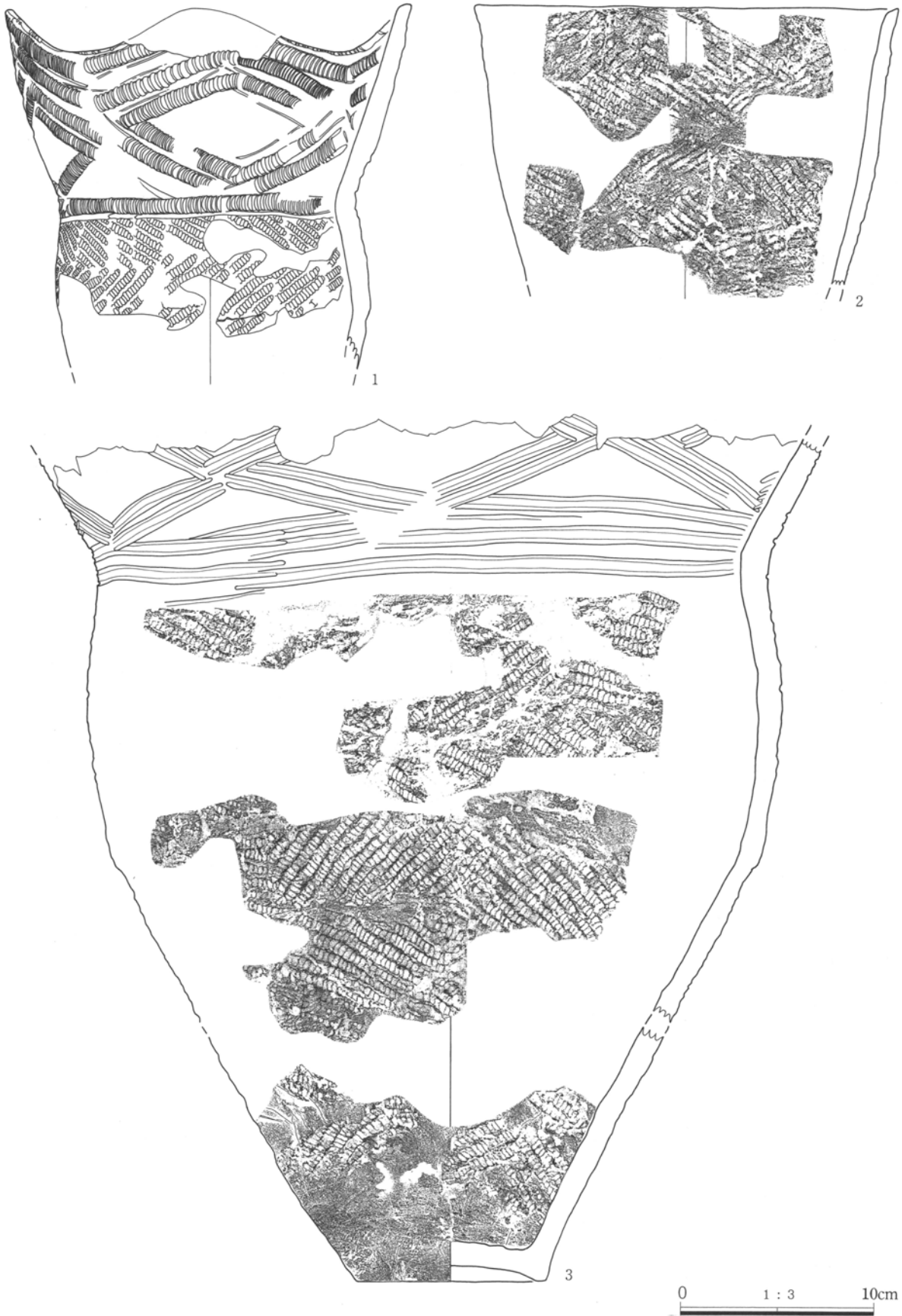
**炉** 確認できなかった。

**遺物** 有尾黒浜式土器を中心とするもので、土器総数127点、総重量7.63kg出土した。石器は、組成は石匙が1点（20%）、削器（加工痕）1点（20%）、磨石1点（20%）、凹石2点（40%）で、総数5点、計2.5kgである。石器剥片は9点、87.8gある。

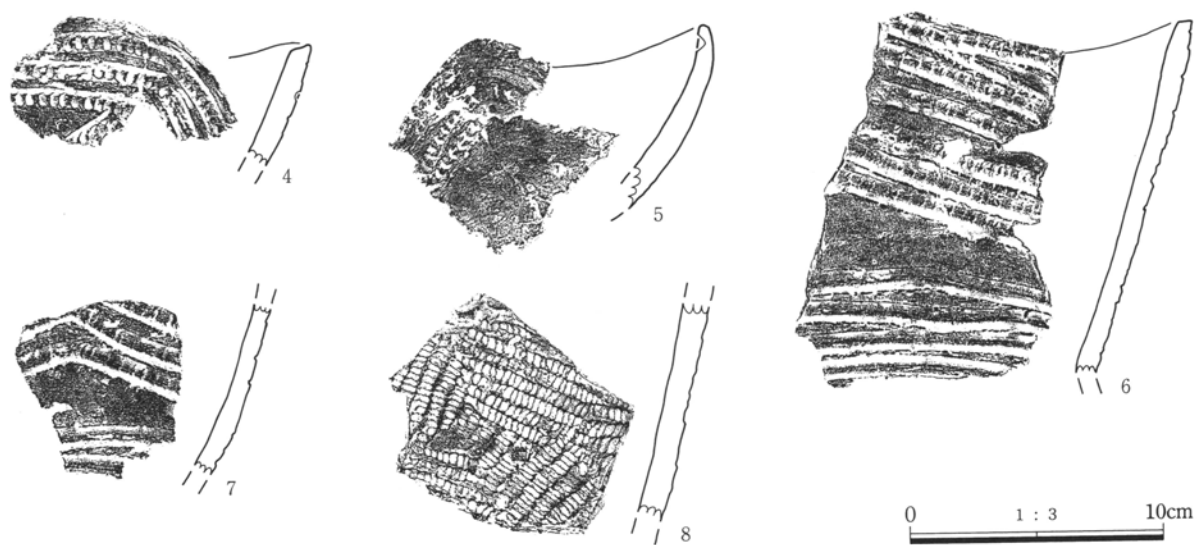


第46図 第7号竪穴式住居平面図・遺物出土状況図・断面図

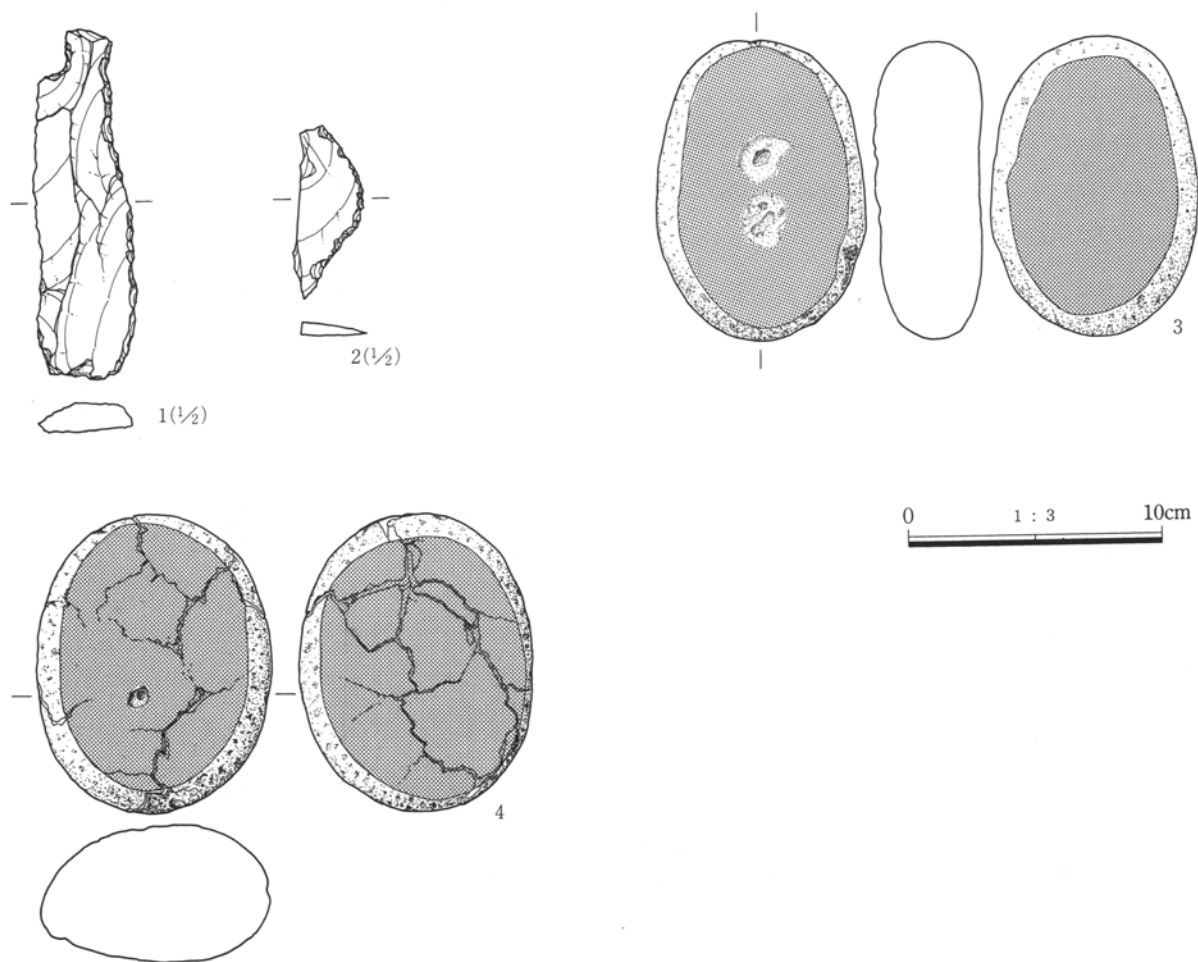




第47図 第7号住居出土土器 (1)



第48図 第7号住居出土土器 (2)



第49図 第7号住居出土石器

## 3. 土 坑

縄文時代の土坑は120基ある。平面形で4分類できる。円形は65基、楕円形は46基、隅円長方形が2基、不定形が17基である。

土坑の分布は、竪穴式住居の周辺に集中して分布する。特に1・3号竪穴式住居の南側を中心とする周辺には数十基の土坑が存在する。

土坑を平面形の長径・長辺で分類し、その分布について比較してみる。

円形の土坑は長径が80cm代から220cm代までであり、そのうち、100～109cm代が一番多く19基ある。その周辺の80cm～90cm代、110cm～120cm代まではそれぞれ7、8基あり、他の大きさのものに較べて多く、100cm代を中心にした大きさのものが分布の中心をなしていることが分かる。楕円形の土坑も100cm代を中心分布する。

円形の土坑の断面形は箱形のものと同レンズ状のものがあるが、一部袋状土坑様の断面形態を呈するもの(62号土坑)がある。

楕円形の土坑の断面形態は浅い箱状の断面形を呈するものが多く、一部袋状の断面形態を呈するもの(42号土坑)がある。

不定形状の土坑の断面形態は浅い箱状の断面形と逆台形状の断面を呈するものがある。一部やはり袋状の断面形を呈するものがある。

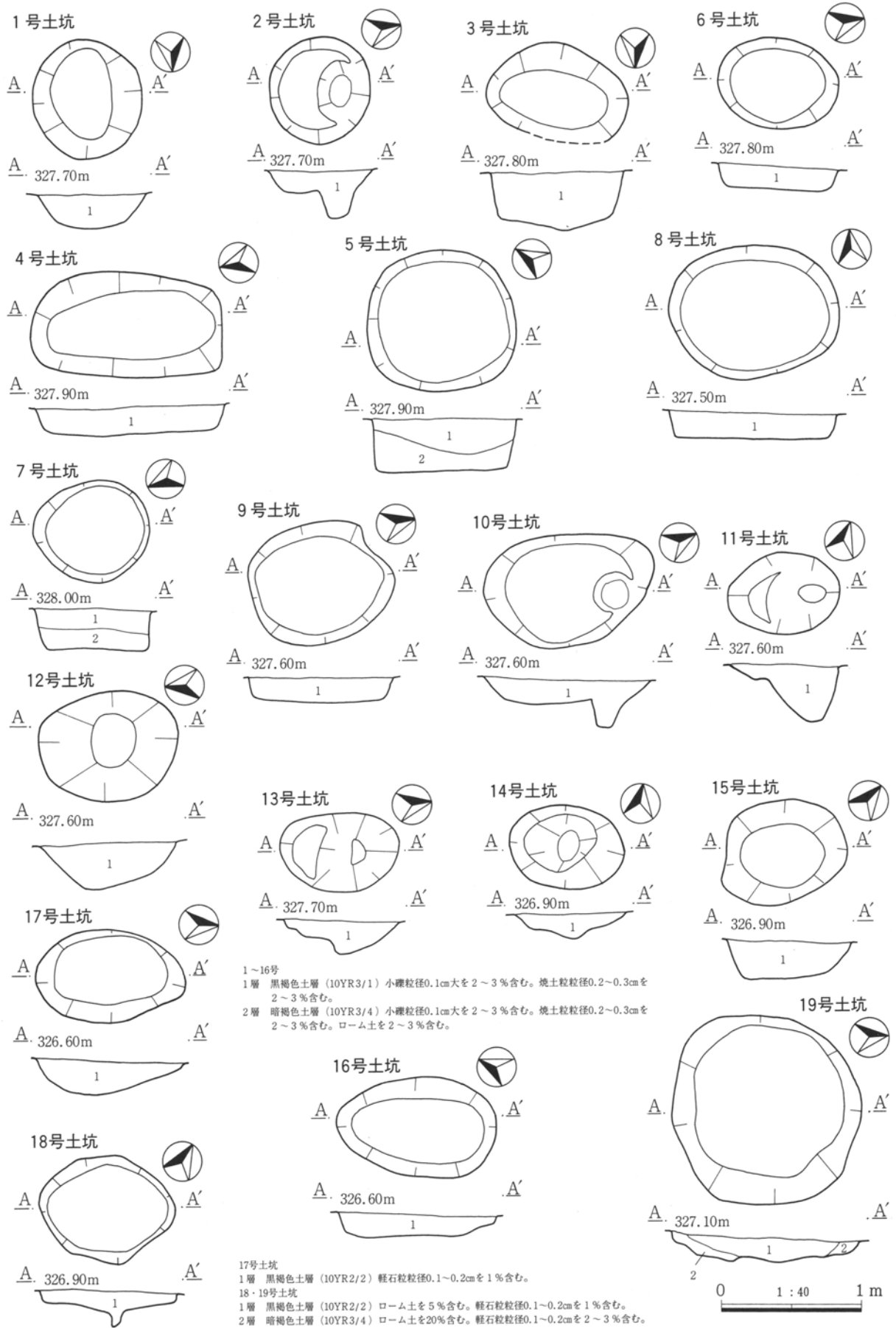
隅円長方形の土坑は2基のみでともに断面浅めの逆台形状のものである。

平面形ごとの分布の偏在性は、各平面形の分布を見ても限り認められない。ただ円形の土坑は全体に万遍なくあるのに対し、楕円形の土坑は中央の住居跡群の近くに集中する。

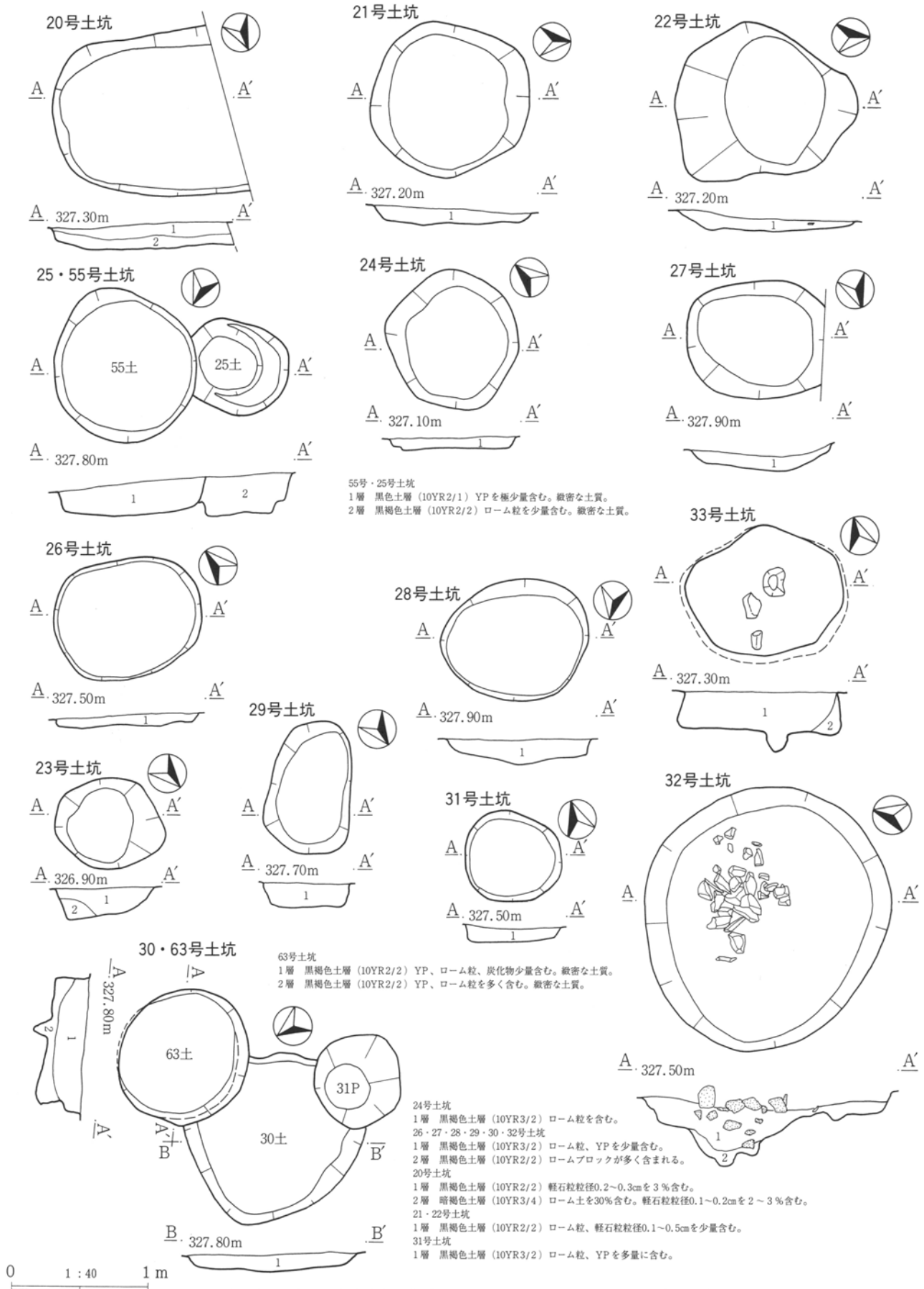
土坑から出土する遺物は土器・石器ともかなり多い。ただし、出土土器は住居跡からのものも含めて圧倒的に有尾式が多くて、他に、田戸上層式・諸磯b・早期末・中期後半の土器がいくつか混じる。出土土坑の時期については出土した土器の時期と断定するには、出土層位等の問題で困難である。基本的には、有尾式が中心の土坑群と考えられる。また



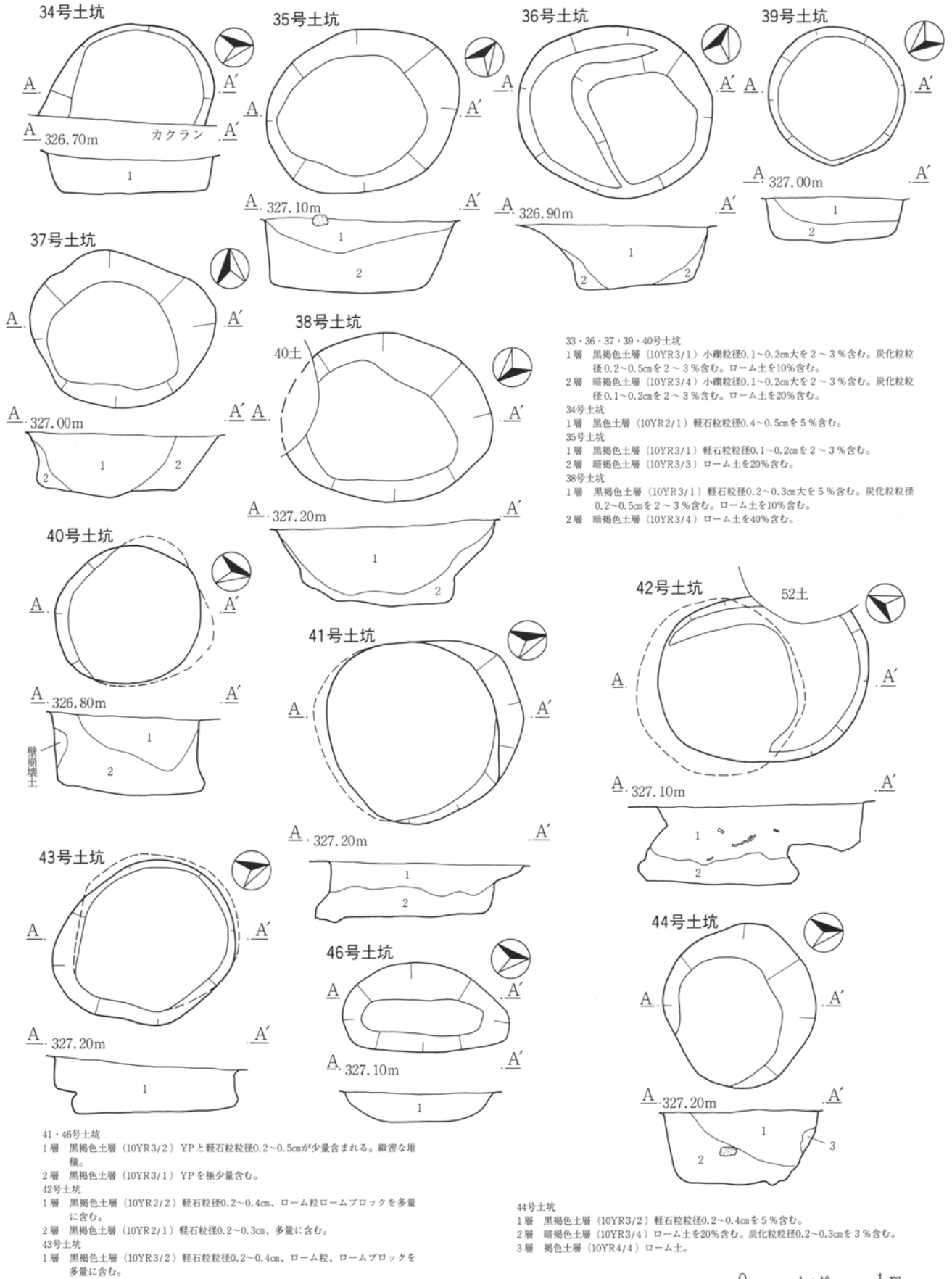
第50図 縄文時代土坑全体平面分布図



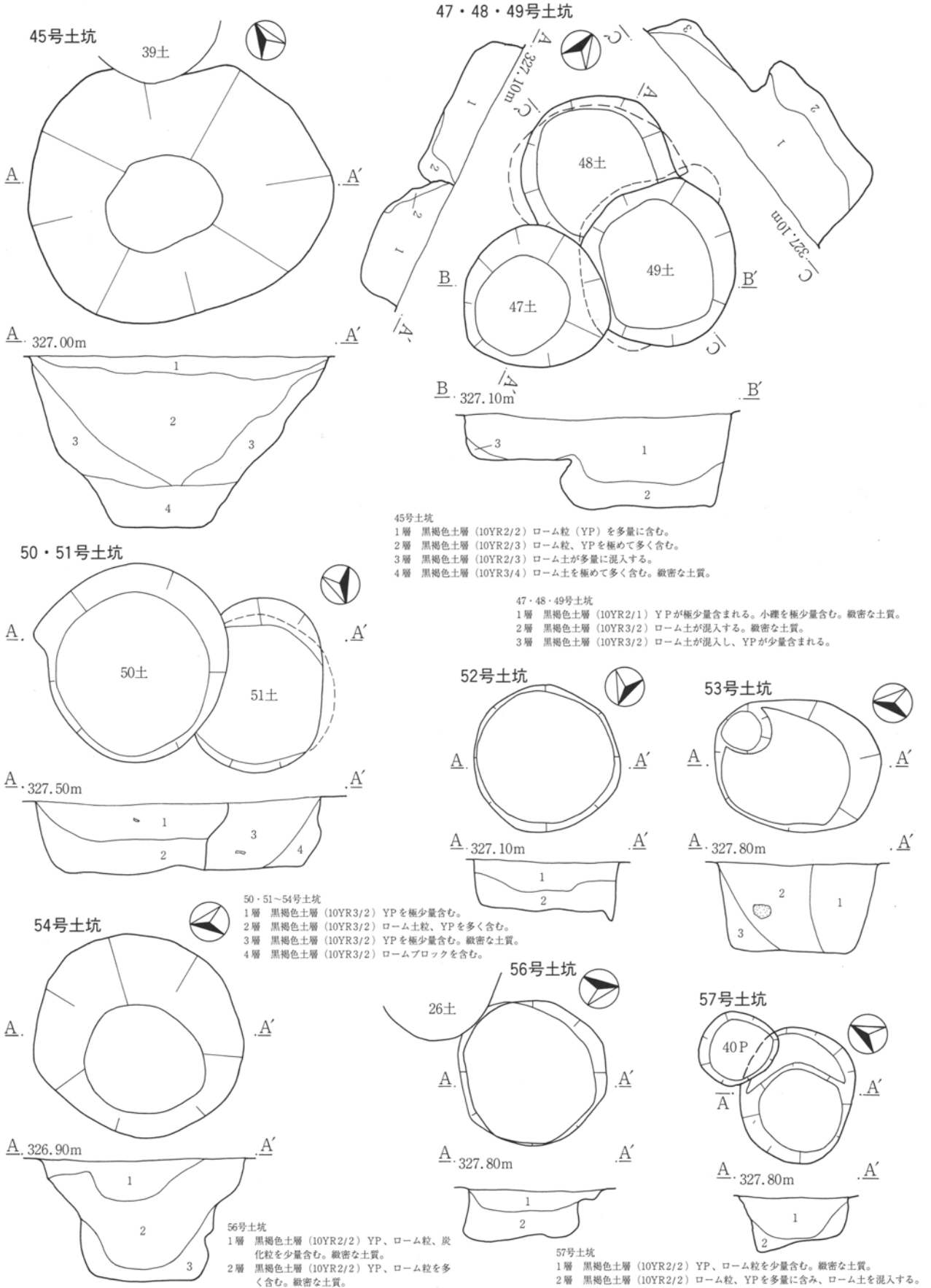
第51図 縄文時代土坑平面図・断面図 (1~19号土坑)



第52図 縄文時代土坑平面図・断面図 (20~33, 55, 63号土坑)



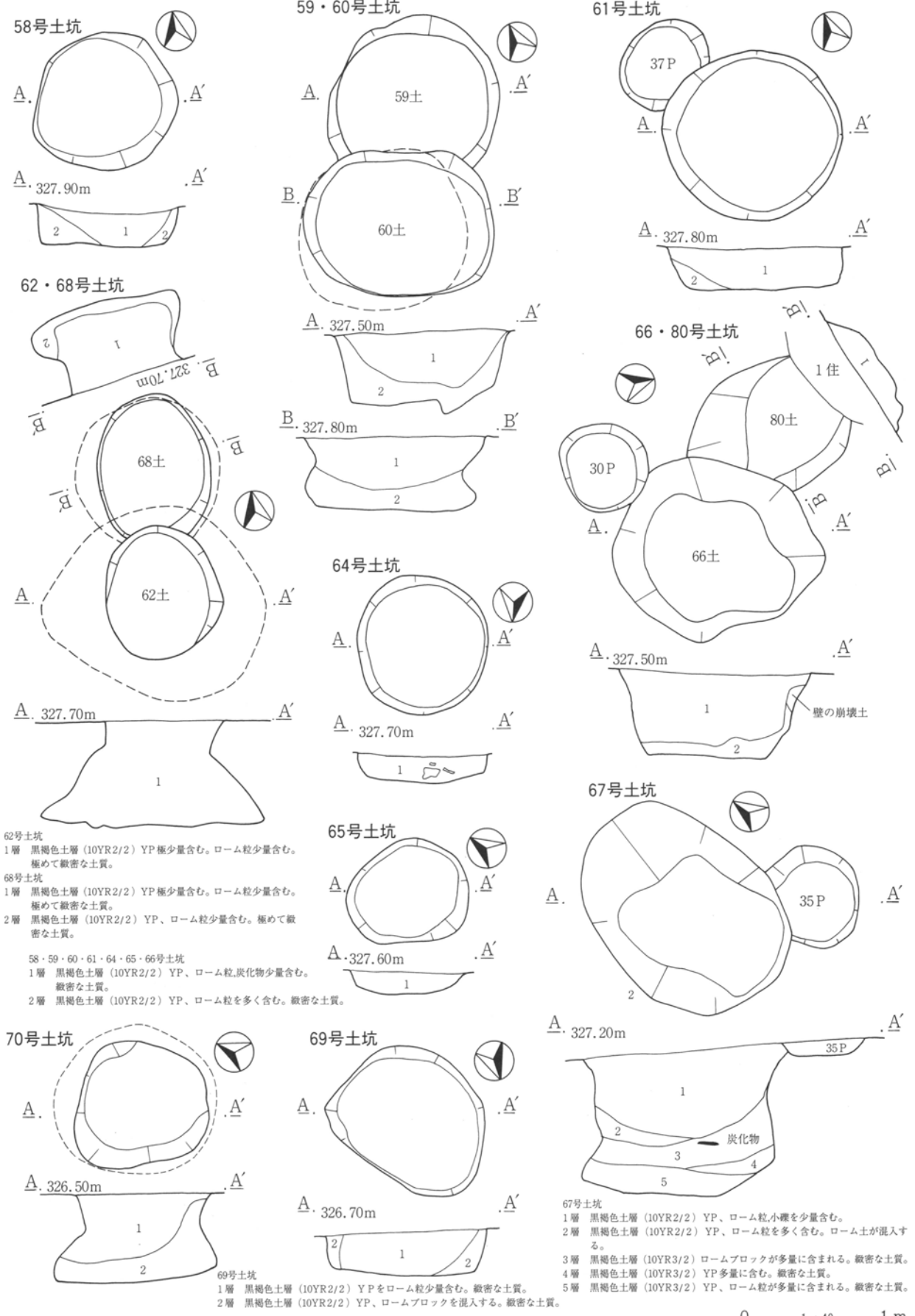
第53図 縄文時代土坑平面図・断面図 (34~44, 46号土坑)



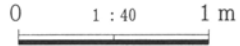
第54図 縄文時代土坑平面図・断面図 (45, 47~54, 56, 57号土坑)

0 1:40 1m

第4章 調査の成果

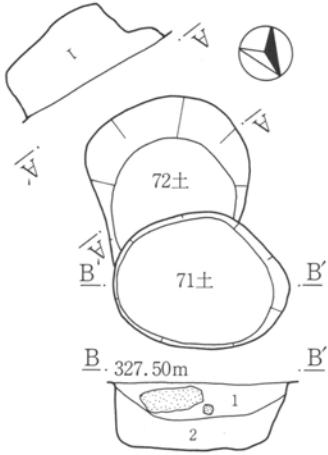


第55図 縄文時代土坑平面図・断面図 (58~62, 64~70, 80号土坑)

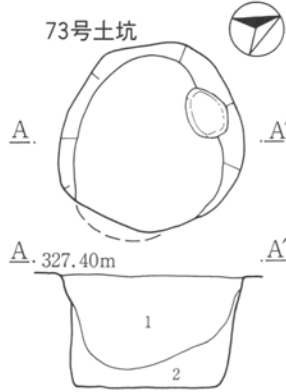




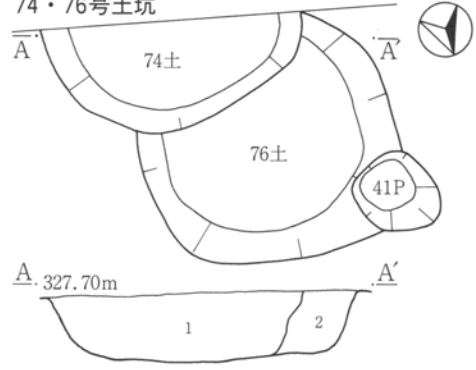
71・72号土坑



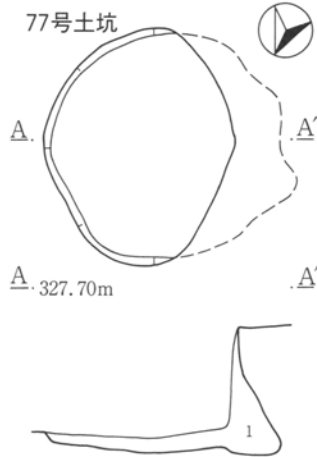
73号土坑



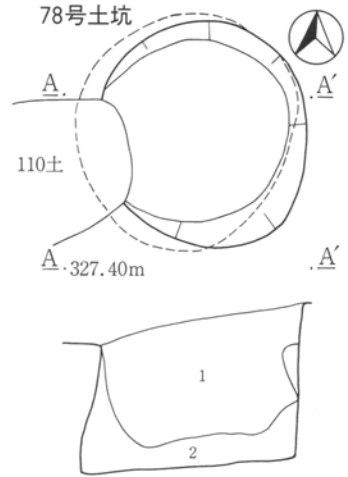
74・76号土坑



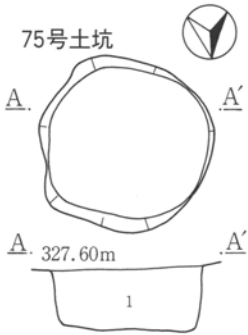
77号土坑



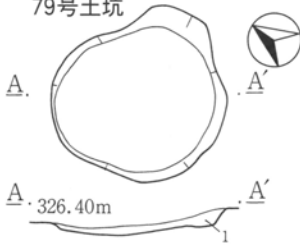
78号土坑



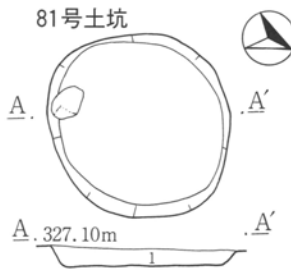
75号土坑



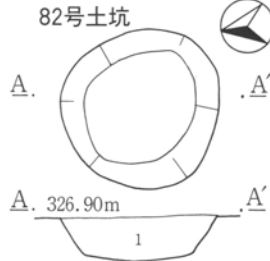
79号土坑



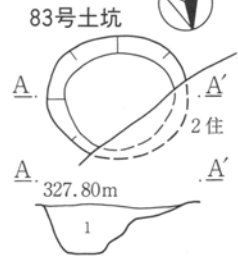
81号土坑



82号土坑



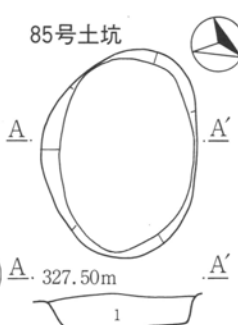
83号土坑



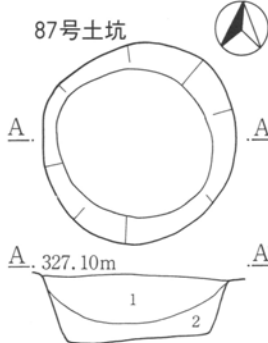
84号土坑



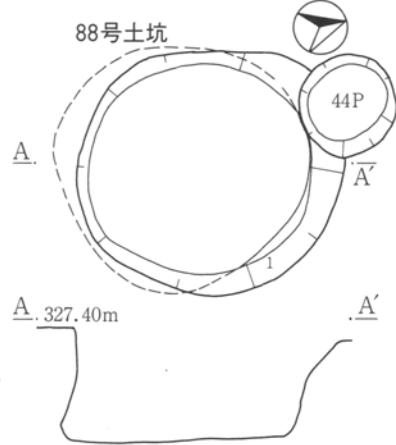
85号土坑



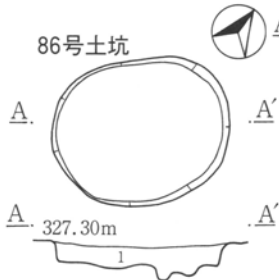
87号土坑



88号土坑



86号土坑



70~80号土坑

1層 黒褐色土層 (10YR3/2) YP、ローム粒を含む。ローム土が混入する。緻密な土質。

2層 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム土を混入する。緻密な土質。

81~86号土坑

1層 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒、YPを多く含む。

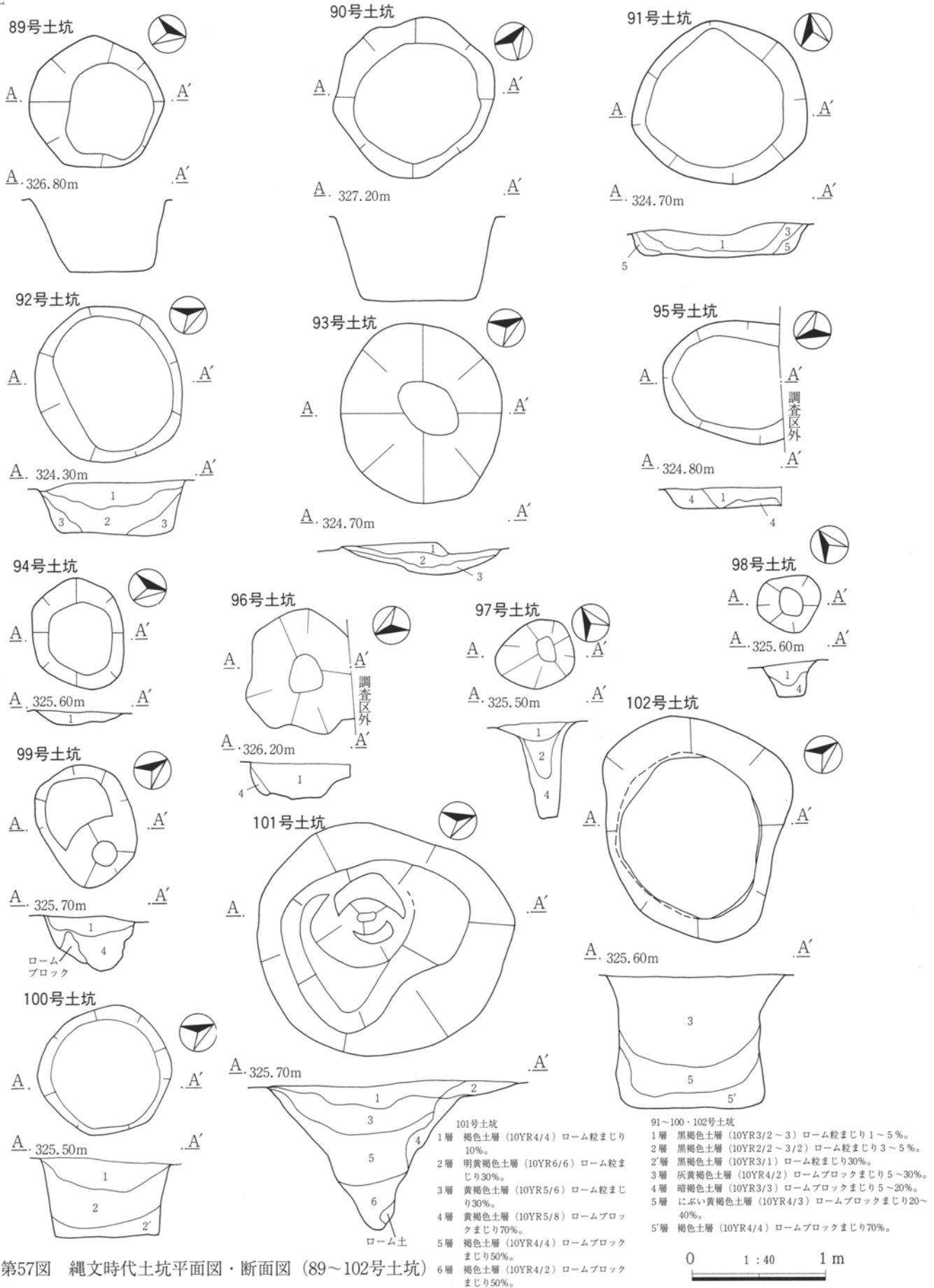
87号土坑

1層 黒褐色土層 (10YR2/2) YP、ローム粒を少し含む。

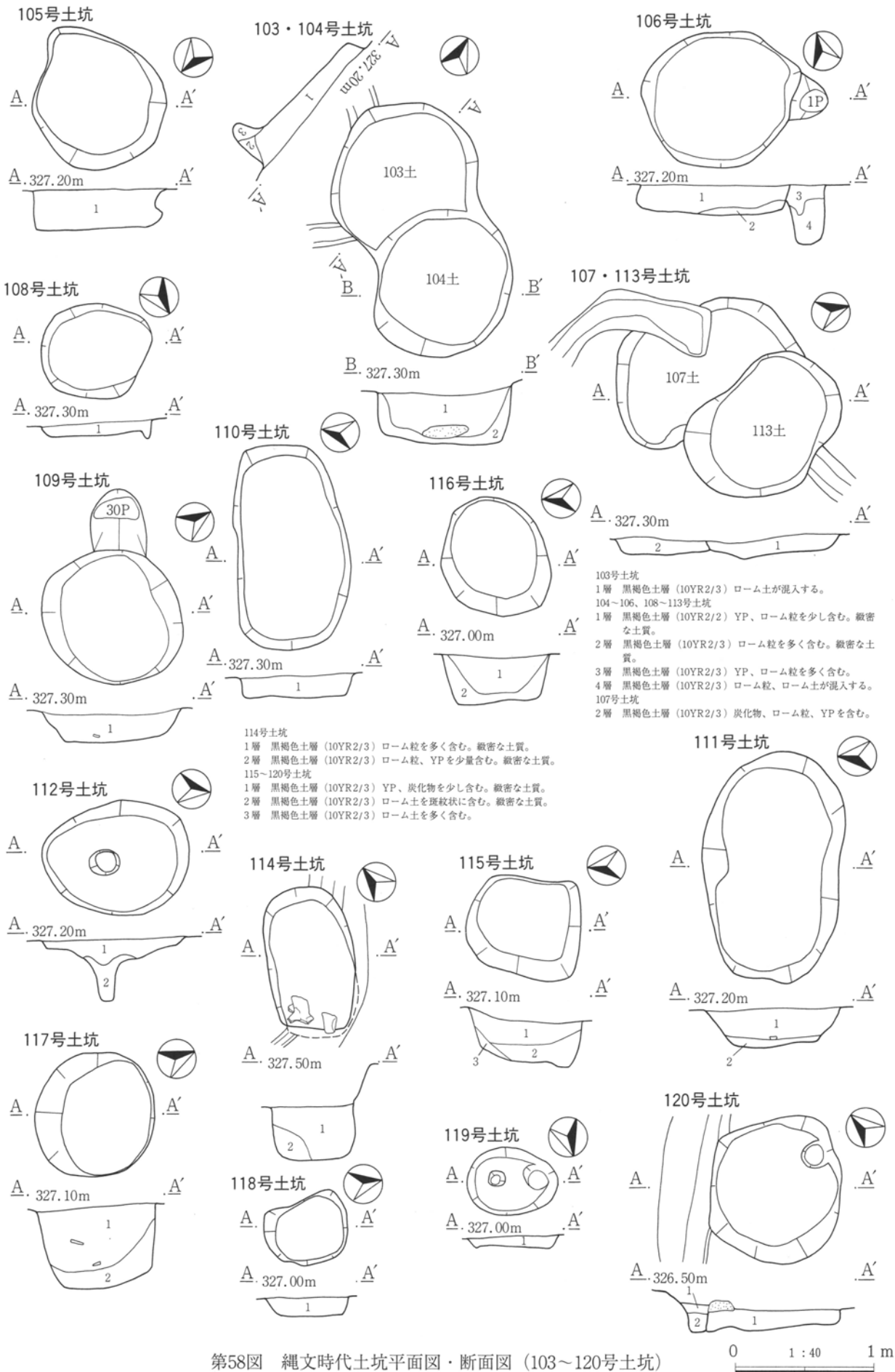
2層 黒褐色土層 (10YR2/3) YP、ローム粒、ロームブロックを多く含む。



第56図 縄文時代土坑平面図・断面図 (71~79, 81~88号土坑)



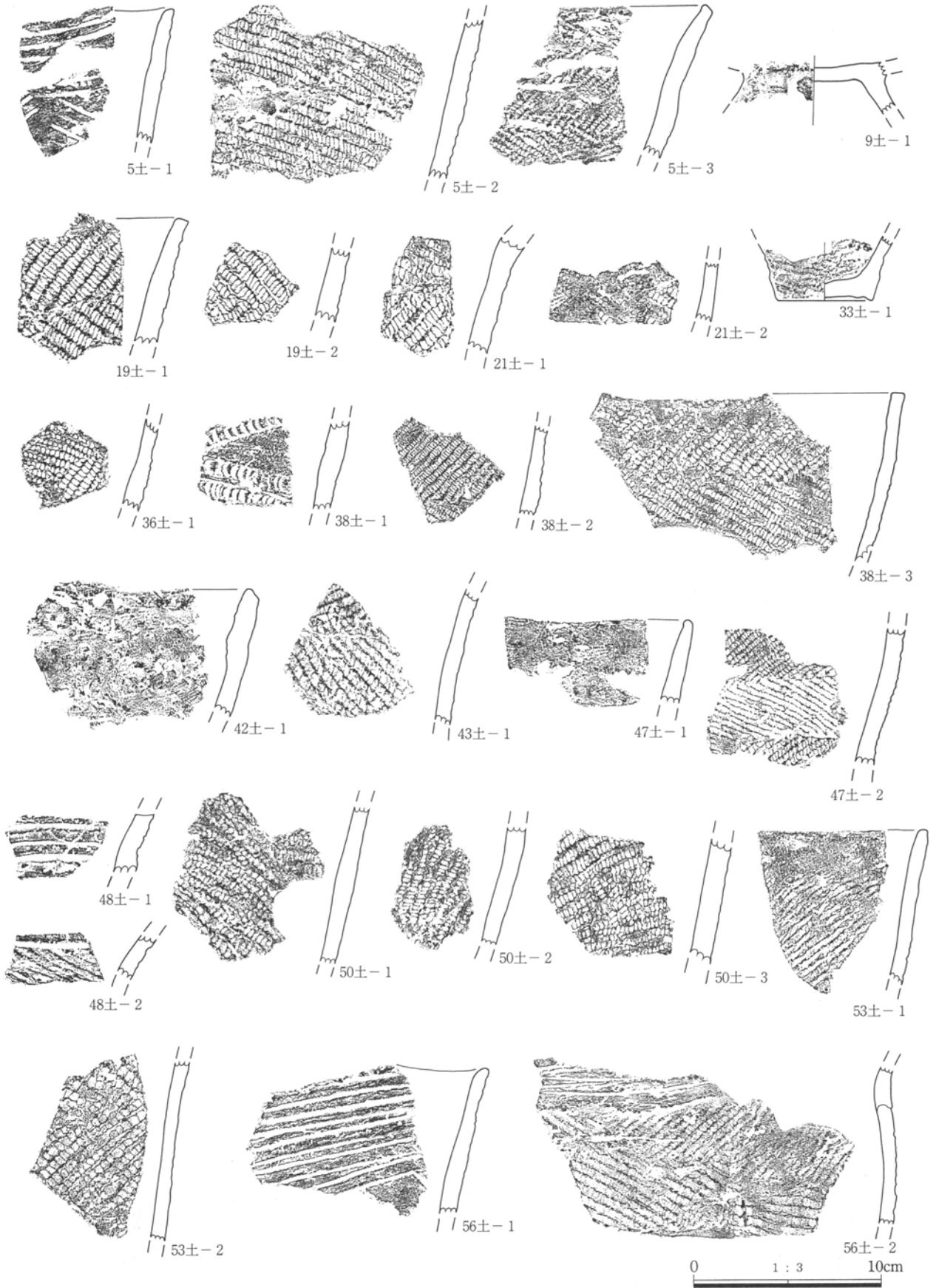
第57図 縄文時代土坑平面図・断面図 (89~102号土坑)



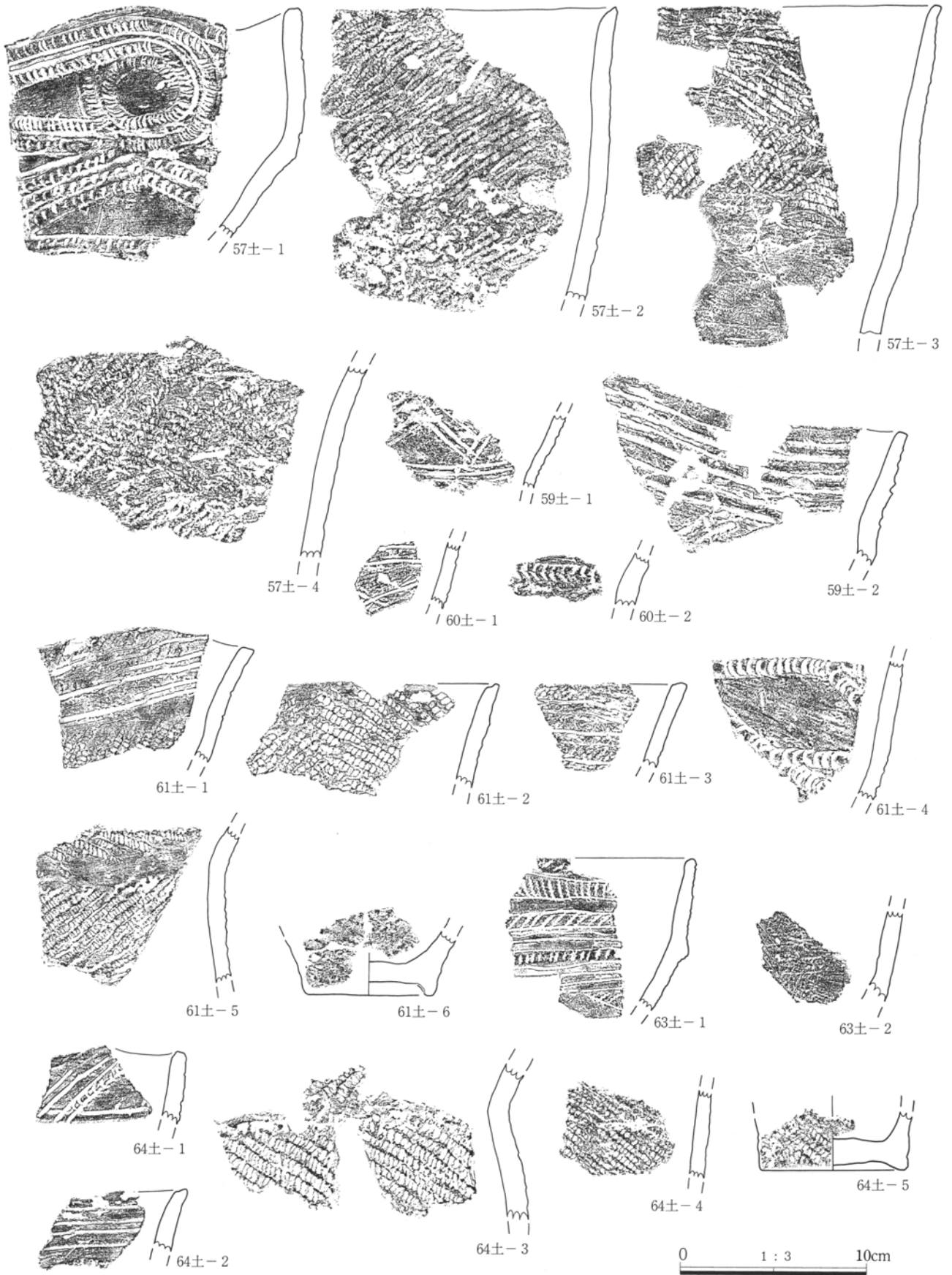
### 縄文期土坑一覧表

遺構No	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	備考
1	K18	円	84	78	25	
2	K18	円	80	80	15	
3	J17	楕円	100	67	42	
4	J17	楕円	137	72	19	
5	J18	円	107	105	37	遺物有
6	I18	隅円長方形	74	66	16	遺物有
7	I18	円	80	76	29	
8	K19	楕円	120	90	19	
9	M17	楕円	164	97	19	遺物有
10	M17	楕円	109	80	18	
11	L16	楕円	70	58	37	
12	N16	楕円	98	76	32	
13	M16	楕円	82	56	23	
14	O20	円	82	60	18	
15	J24	楕円	87	73	28	
16	L25	楕円	114	65	17	
17	O19	円	108	68	23	
18	N17	円	95	76	26	
19	L19	円	132	132	18	遺物有
20	J17	楕円	(126)	118	18	
21	M15	円	124	110	12	遺物有
22	P16	不定	124	120	12	
23	M17	楕円	80	65	23	
24	N15	円	94	90	7	
25	H17	円	(68)	66	28	
26	H17	楕円	104	85	8	
27	J15	楕円	102	86	12	
28	I15	楕円	105	86	18	
29	I17	楕円	98	58	19	
30	I15	不定	114	(102)	13	
31	H17	円	70	62	8	
32	I18	不定			46	
33	H20	楕円	108	96	28	遺物有
34	L21	円?	120	(70)	25	
35	I21	楕円	146	115	53	遺物有
36	I22	不定	112	(68)	46	遺物有
37	I22	不定	136	114	47	
38	H21	円?	120	(54)	58	遺物有
39	L18	円	100	97	34	
40	H21	円	108	100	56	
41	N15	円	144	134	39	遺物有
42	I21	楕円	149	120	57	遺物有
43	L17	楕円	138	118	35	遺物有
44	K17	円	114	108	54	
45	L18	円	220	180	123	
46	O15	楕円	122	62	20	
47	I20	円	110	100	32	遺物有
48	I20	円	114	(80)	37	遺物有
49	I20	円	112	(98)	65	
50	H21	円	(144)	144	50	遺物有
51	H20	円?	127	(70)	48	
52	H20	円	108	106	37	
53	J14	楕円	118	97	63	遺物有
54	M12	円	152	147	88	
55	H17	円	110	100	25	
56	H17	円	102	100	35	遺物有
57	H17	円	100	84	38	遺物有
58	I16	円	106	98	25	
59	I15	円	120	(98)	60	遺物有
60	I15	楕円	134	100	56	遺物有

遺構No	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	備考
61	I15	円	126	118	32	遺物有
62	I16	円	95	80	75	
63	I16	円	100	94	28	遺物有
64	I17	円	102	90	18	遺物有
65	I17	不定	84	72	16	遺物有
66	I17	不定	150	120	58	遺物有
67	L11	楕円	164	118	106	
68	I16	楕円	104	80	58	
69	K22	不定	116	90	30	遺物有
70	L23	不定	90	86	64	遺物有
71	H17	楕円	96	64	36	遺物有
72	H17	円	110	100	37	
73	G20	円	98	96	57	遺物有
74	N18	円?	125	(50)	37	
75	H18	円	94	94	33	
76	N18	円	135	(93)	35	
77	I16	不定	120	100	68	
78	I19	円	100	(95)	66	
79	J23	不定	90	90	9	
80	I17	不定	94	(74)	18	
81	H20	円	100	97	8	
82	L19	円	88	80	23	
83	I14	円?	76	(64)	27	
84	I17	円	52	52	11	
85	J20	楕円	78	78	23	
86	H20	楕円	76	76	16	
87	I20	円	100	100	37	
88	J11	円	126	126	58	
89	M18	円	96	96	56	
90	M15	円	116	116	25	
91	R4	円	133	121	38	
92	R3	円	114	108	40	
93	P3	円	138	122	23	
94	P3	円	85	68	11	
95	L2	楕円	(90)	87	13	
96	K5	不定	95	80	25	
97	M4	円	58	48	73	
98	N5	円	48	39	28	
99	O6	楕円	90	70	40	
100	O6	円	108	92	60	
101	M5	円	193	176	110	
102	N5	楕円	173	133	103	
103	H19	円	108	(86)	13	
104	H19	円	102	97	35	
105	H19	不定	112	100	32	
106	H18	円	104	98	22	
107	I18	不定	136	(88)	12	
108	I18	円	83	70	8	
109	I18	円	102	100	19	
110	I19	楕円	148	78	13	
111	I19	楕円	165	100	27	
112	I19	楕円	106	80	42	
113	I18	不定	119	73	10	
114	H19	楕円	106	66	38	
115	K17	隅円長方形	88	70	30	
116	J17	円	88	76	30	
117	K16	円	90	83	60	
118	J16	不定	62	48	14	
119	J16	楕円	64	48	8	
120	L23	円	103	92	17	

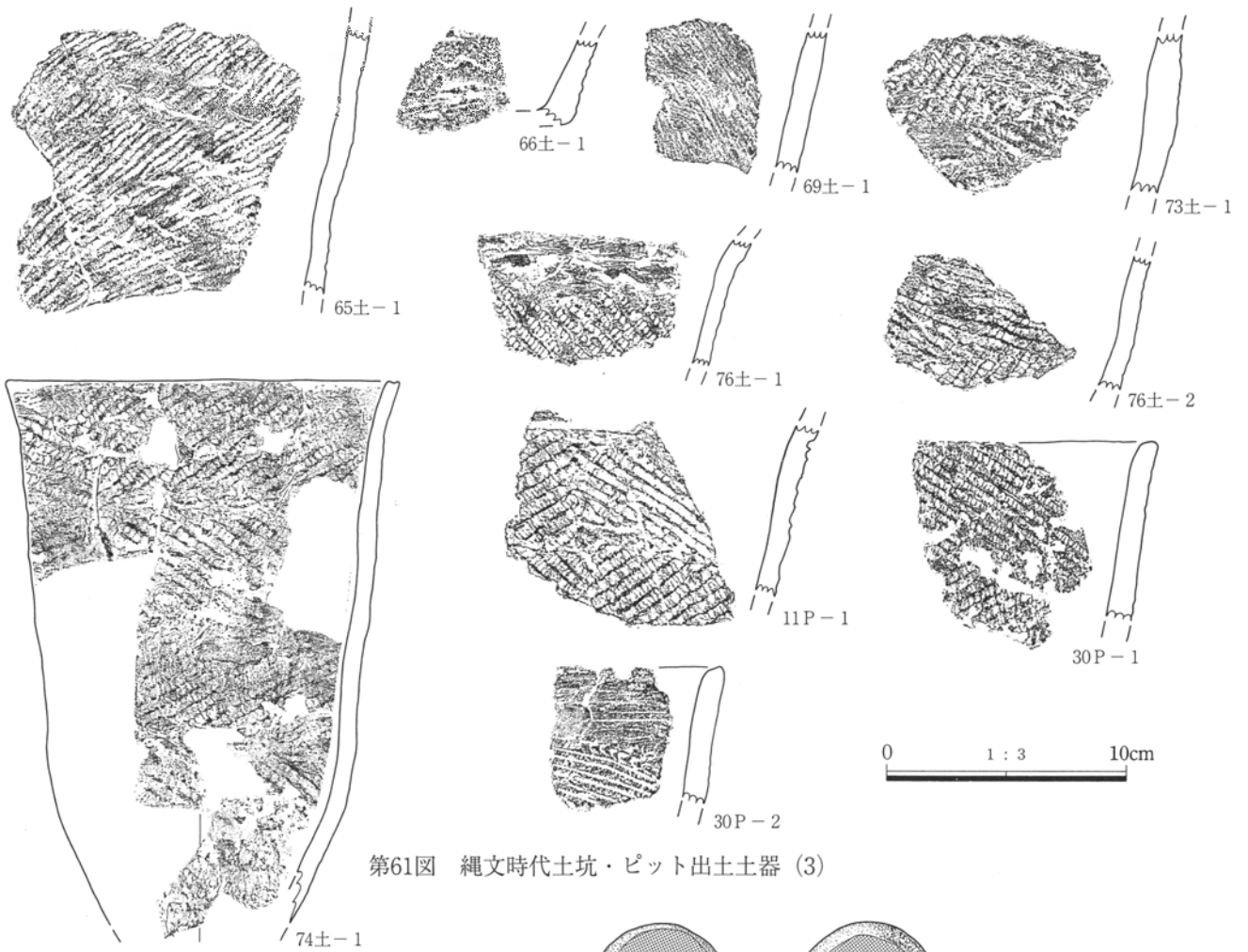


第59図 縄文時代土坑出土土器 (1)

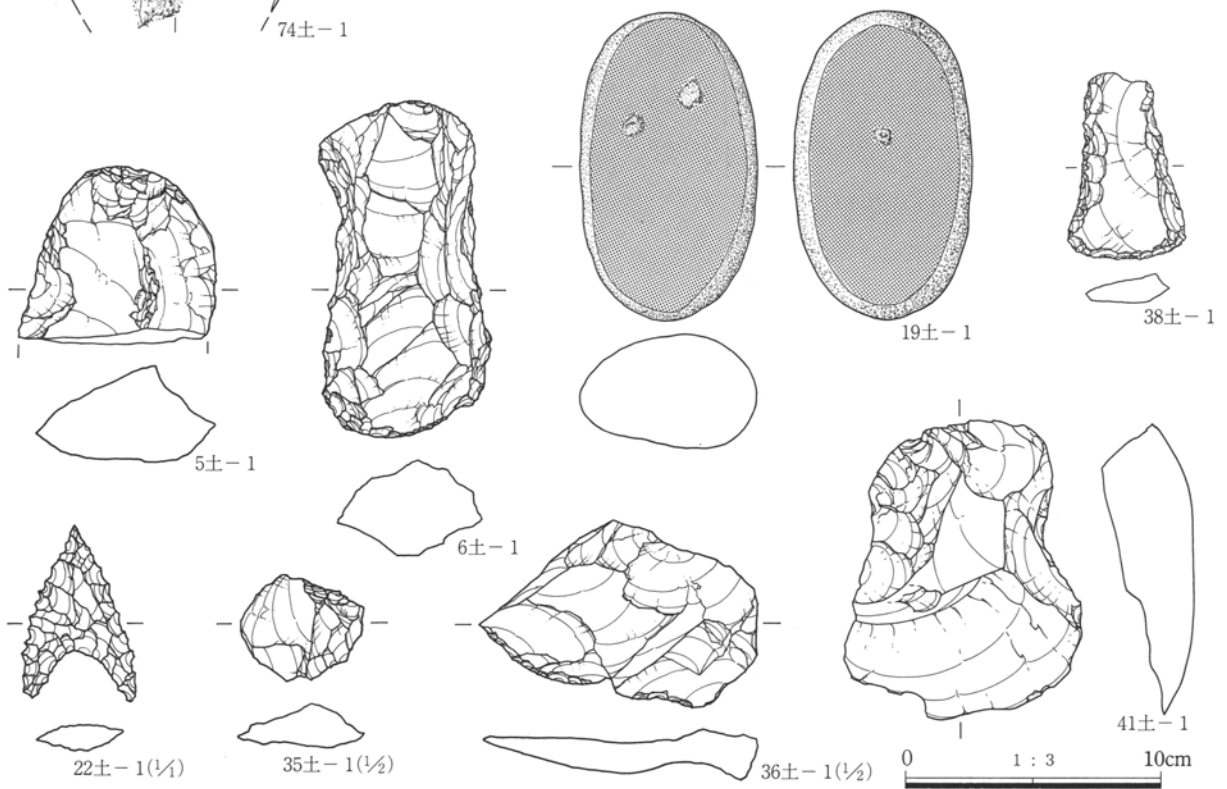


第60図 縄文時代土坑出土土器 (2)

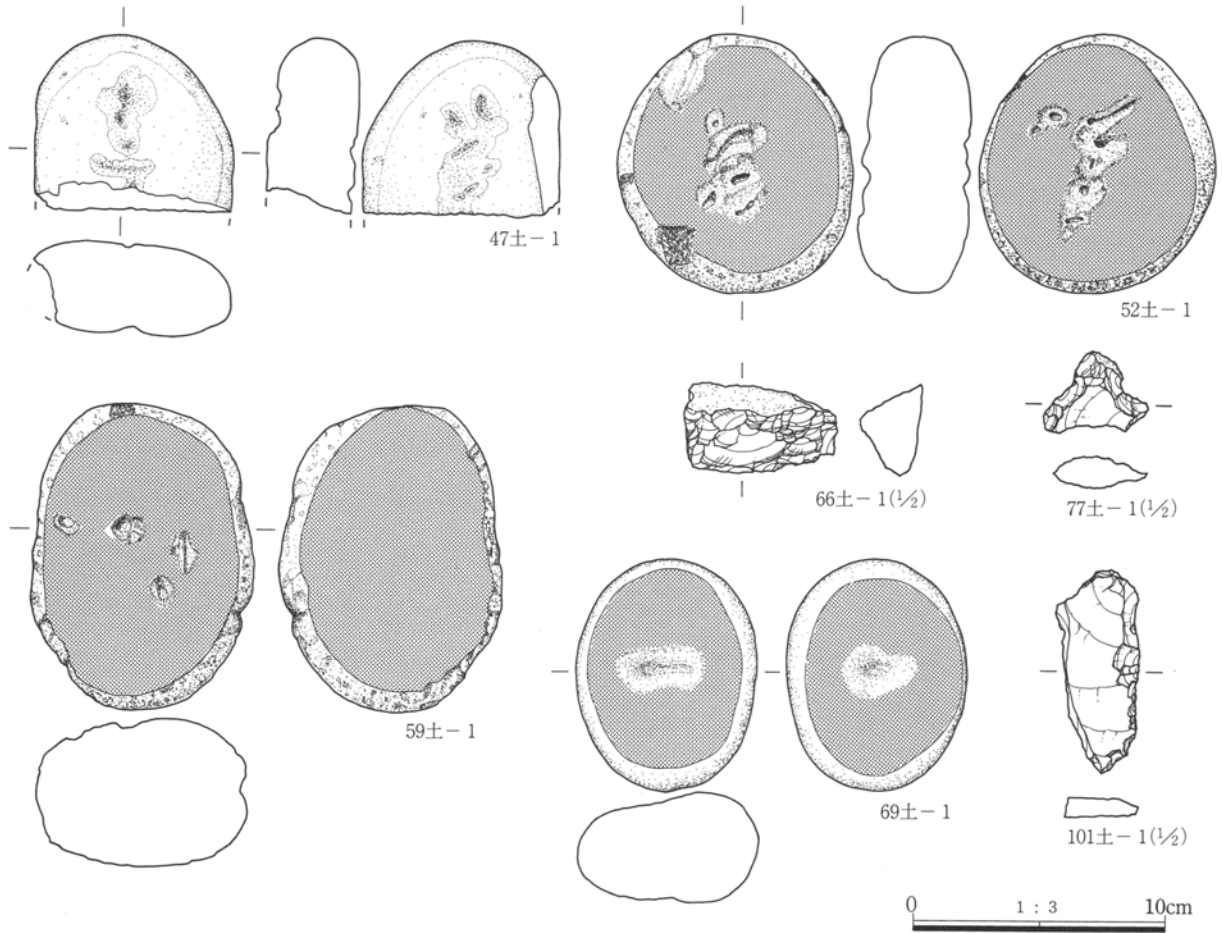
第1節 縄文時代



第61図 縄文時代土坑・ピット出土土器 (3)



第62図 縄文時代土坑出土石器 (1)



第63図 縄文時代土坑出土石器 (2)

時期と形の相関関係は時期比定が先述したように出土土器からすぐに比定できないため確認することができない。

石器もかなり多くのものが出土している。総数でいうと、石鏃1点、削器14点、打製石斧3点、ヘラ状石器1点、石核3点、磨石3点、敲石2点が出土している。

#### 4. グリッド出土の遺物について

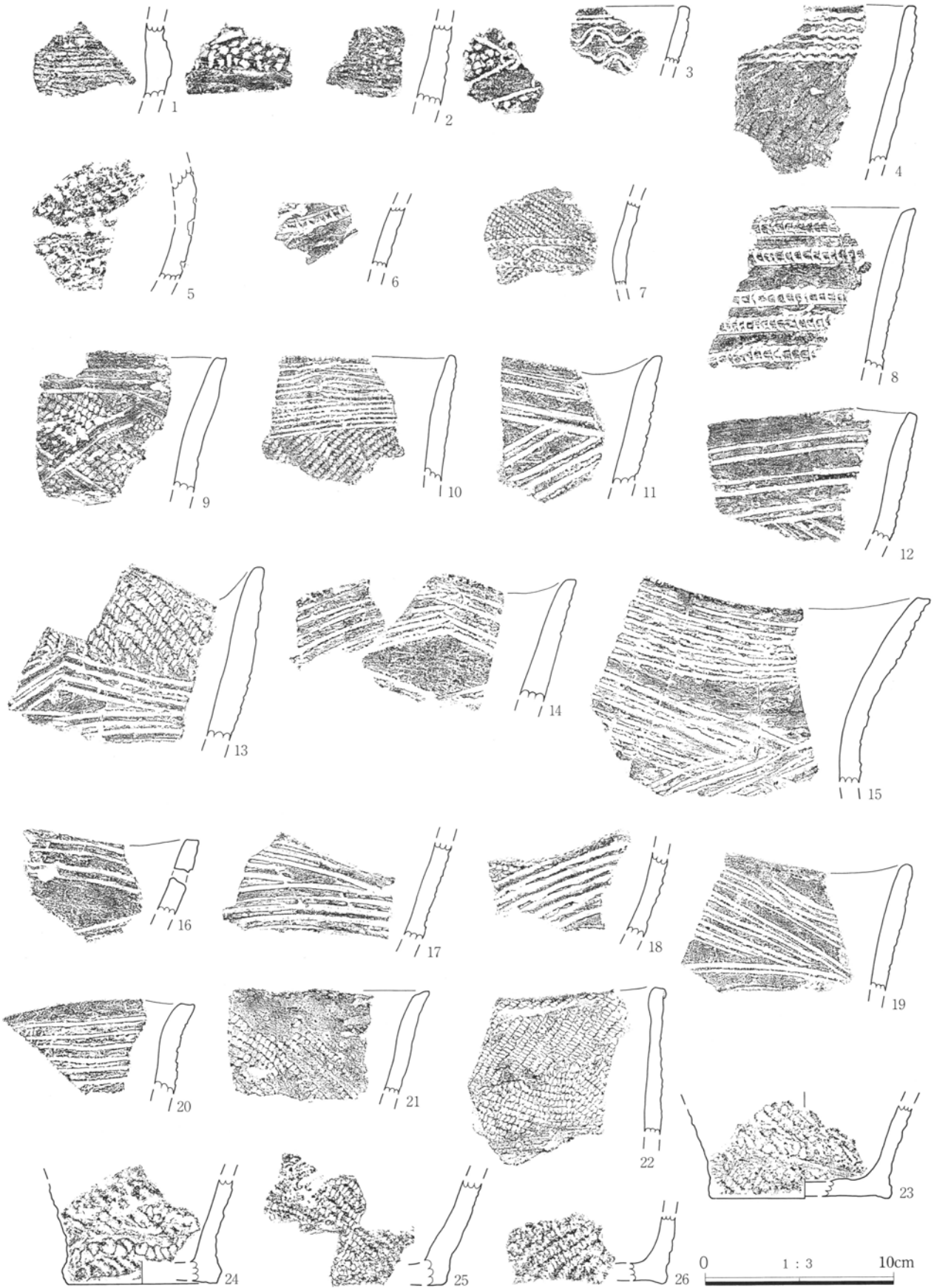
当遺跡の縄文時代のグリッド出土遺物は、石器と土器がある。土器は鶴ヶ島台式・黒浜式・有尾式・関山Ⅱ・諸磯a・諸磯b・堀之内Ⅰ・後期（型式不明）がある。比率的には住居跡・土坑と同様に圧倒的に有尾式土器が多い。この遺跡全体で縄文土器は15,736点、199.73kg出ているがその9割以上は有尾式所属の時期であることが言える。

石器は、グリッドから無茎鏃17点、石鏃未製品

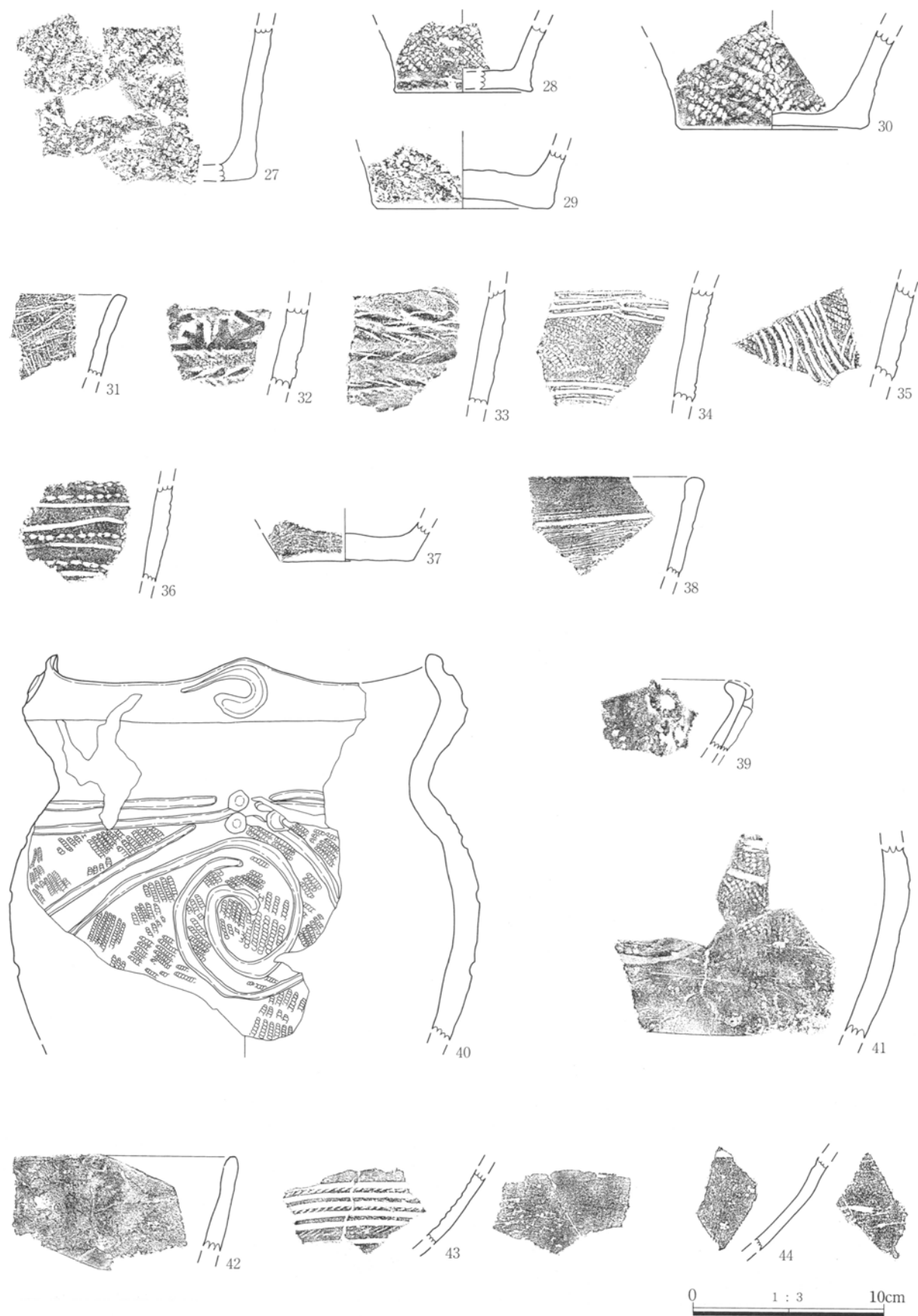
9点、石鏃？4点、石匙9点、削器114点、ピエスエスキュー？1点、打製石斧15点、石核16点、磨製石斧3点、スタンプ形石器2点、環状石斧1点、スタンプ形石器2点、凹石17点、磨石35点、敲石3点、砥石1点、石皿1点、台石1点、ヘラ状石器7点、けつ状耳飾り1点、その他2点が出土した。

グリッドでの分布状況等についてはまとめの項目で略述する。





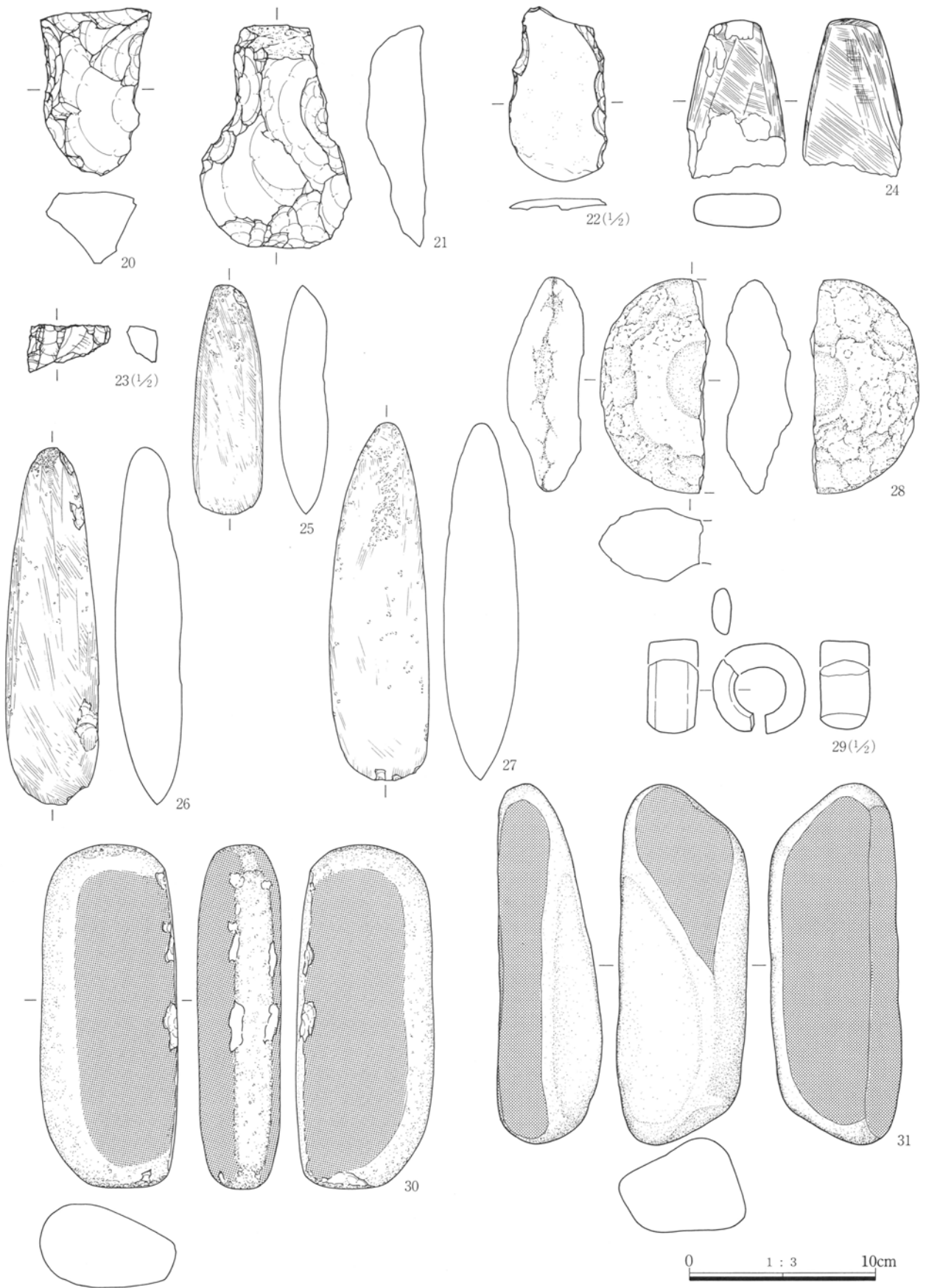
第64図 縄文時代グリッド出土土器 (1)



第65図 縄文時代グリッド出土土器 (2)



第66図 縄文時代グリッド出土石器 (1)



第67図 縄文時代グリッド出土石器 (2)

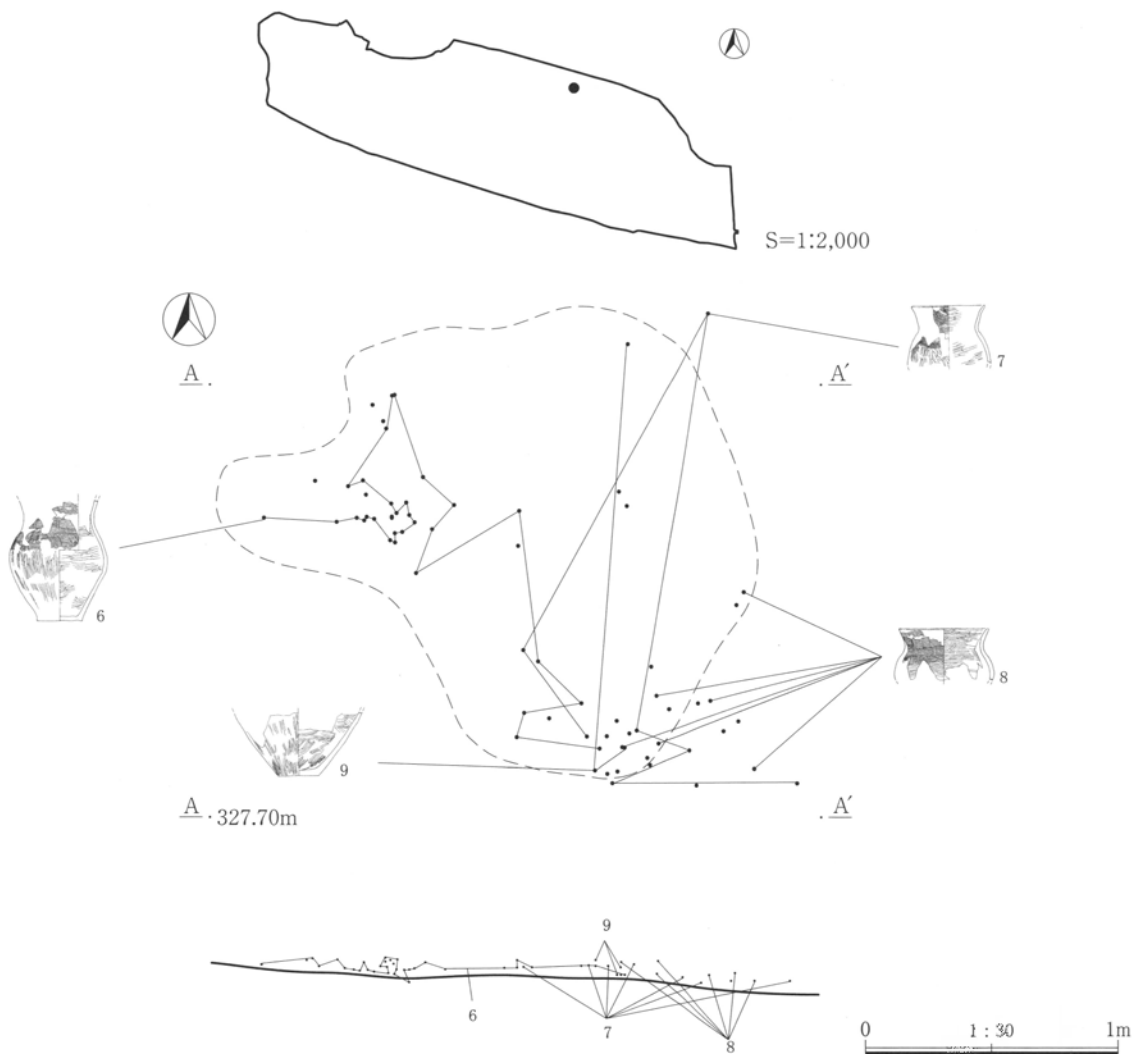
## 第2節 弥生時代

### 1. 検出された遺構と遺物の概要

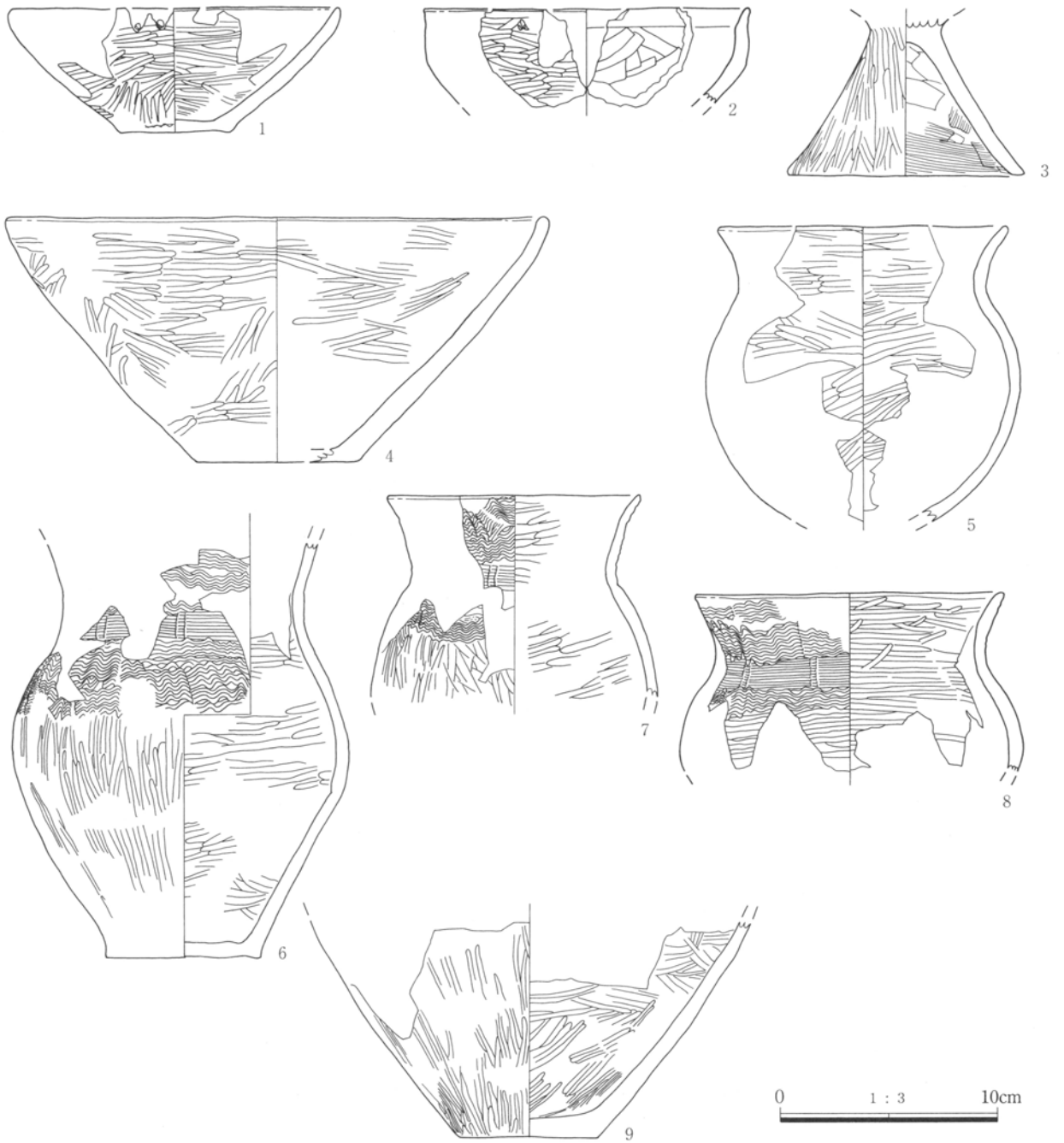
弥生時代の遺物が遺構を伴わずに中世2号堀の中央内側（北側）から集中して出土した。何らかの遺構の存在を想定して精査したが遺構は確認できなかった。遺物は細片となっていたが、全体にまとまって集中して出土している。甕が3点、壺底部が1点の計4点が出土している。甕にはいずれも上から口辺部に波状文、頸部に簾状文が、胴上半に波状文が施されている。胴下半から内面には丁寧なミガキが施されている。大型の壺の胴下半より底部が出土しており、丁寧なミガキが内外面ともに施されている。

何らかの祭祀的な意味合いを持った土器集中と捉えられるものかと思われる。

他に、グリッド出土が殆どであるが、深鉢、小型甕などが出土している。いずれも弥生時代後期でも終末期に近い土器で、一部古墳時代の石田川土器と共伴する可能性のあるものもある。



第68図 弥生時代土器集中遺物出土状況図・断面図



第69図 弥生時代出土遺物

## 第3節 古墳時代

### 1. 検出された遺構と遺物の概要

古墳時代は、S字状口縁台付甕に代表される石田川式土器が少量出土しており、弥生時代後期から引き続き、古墳時代前期に人が住んでいたことは明瞭である。S字甕、器台、埴、小型壺などが出土している。なお、該期の時期の遺構は確認出来なかった。

遺構は土坑が8基、道1本、畠のサクが検出された。いずれも、FAの火砕流に覆われた遺構である。

### 2. 土坑

土坑の中で特に重要と思われるのが4号土坑で、長径4.2m、短径3.5mの平面不整楕円形で、深さは最深部で約1.2mである。壁面及び底部には穴を掘っている途中らしく、凹凸が激しく、一部鋤先の掘削痕跡かとおもわれるような跡も残っている。また、覆土の下層に、壁及び下面を掘削したときの排土である黒色土やローム土がブロック状に入っている。

この上からFAの火砕流にともなう灰色で粒径0.1～2cm大で下層にいくにつれて粒径の大きくなる軽石が土坑内に充満している。最上層は黄灰色のFA ashが積もっている。同じような覆土の堆積を示す土坑が他に7基あり同時期に比定される。この4号土坑はその規模の大きさ等からみてあるいは堅穴住居をつくるために掘った穴の可能性が考えられる。これ以外の土坑は、1・2号土坑を除くと、径も1m未満の小さなものが多く、性格不明である。土坑からはいずれも遺物は出土していない。

### 3. 畠・道

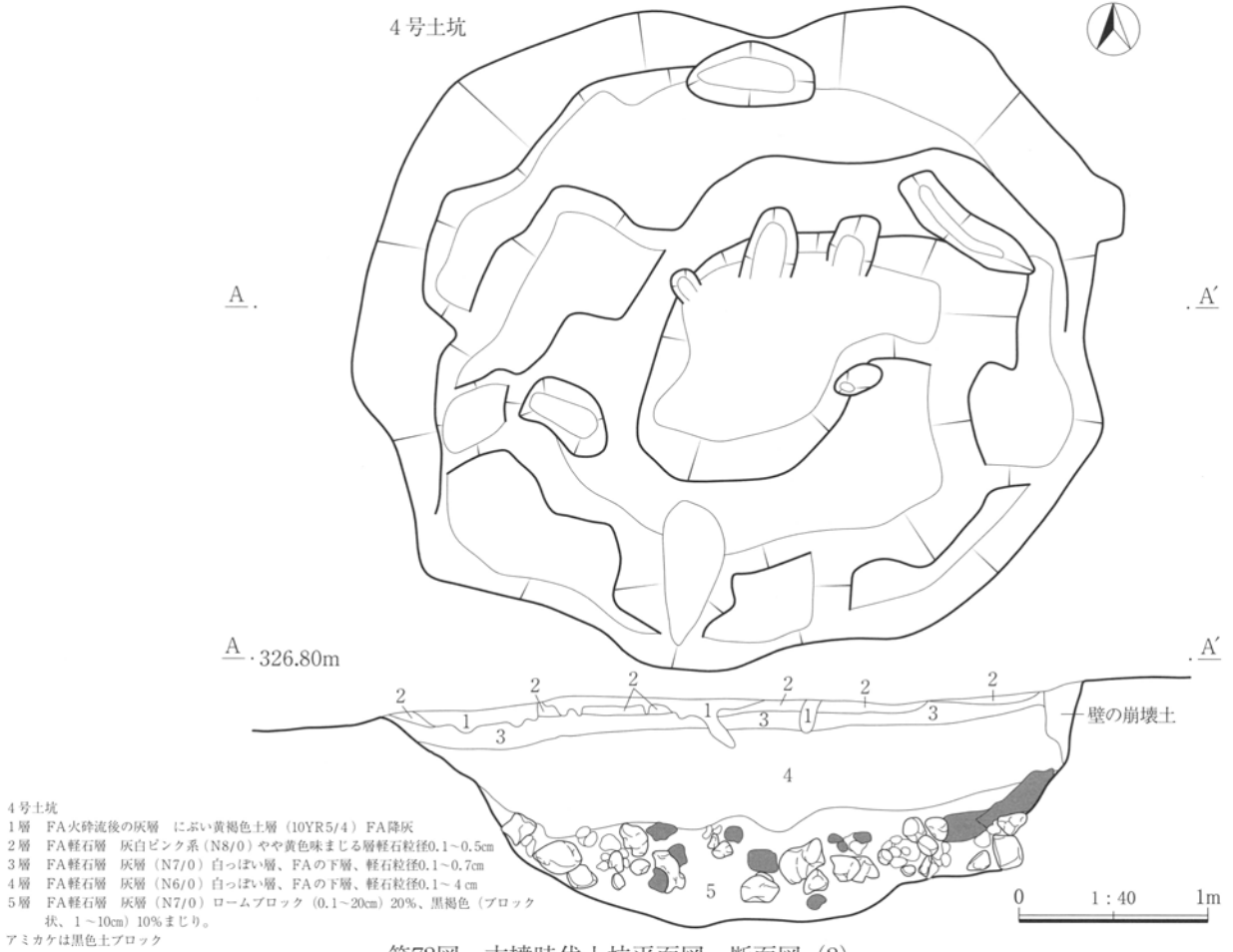
畠に伴う道状遺構とサクが検出されている。道状遺構は、巾40～60cm、深さ8cmほどで、断面はゆるやかなU字状を呈し、サクの方向である北向きとはず



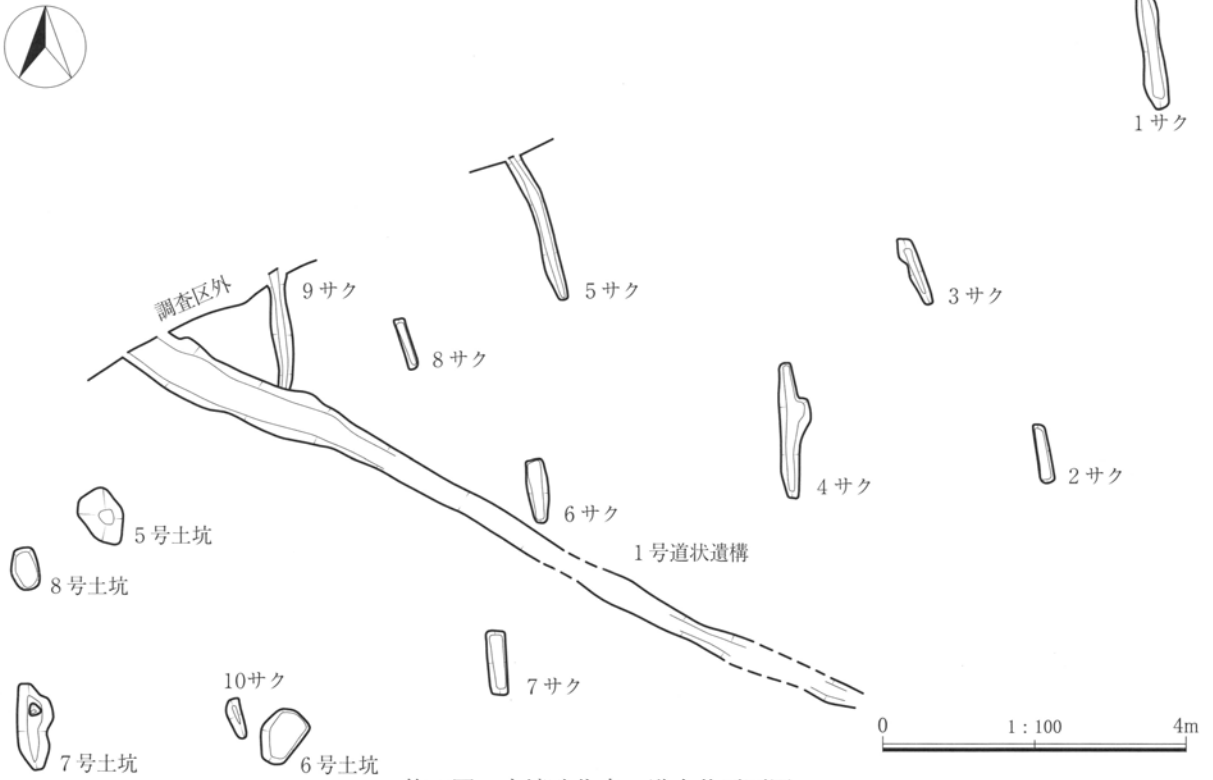
第70図 古墳時代遺構分布図





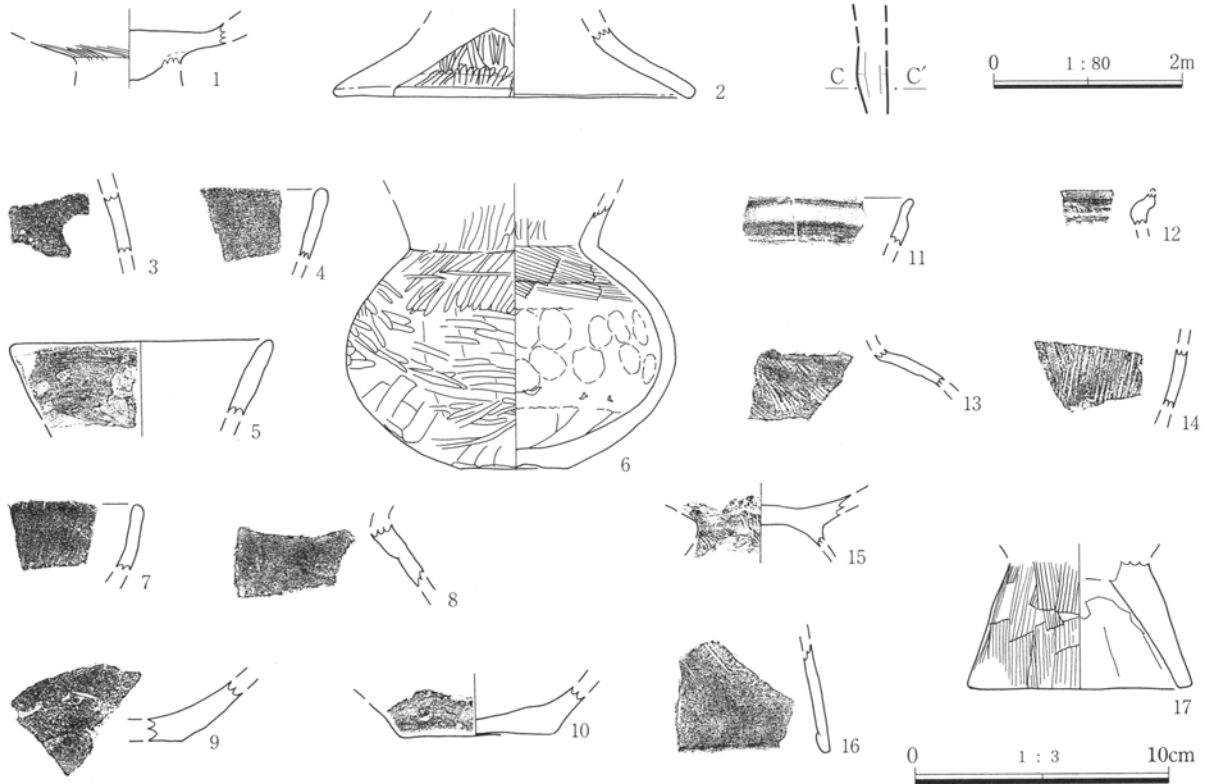
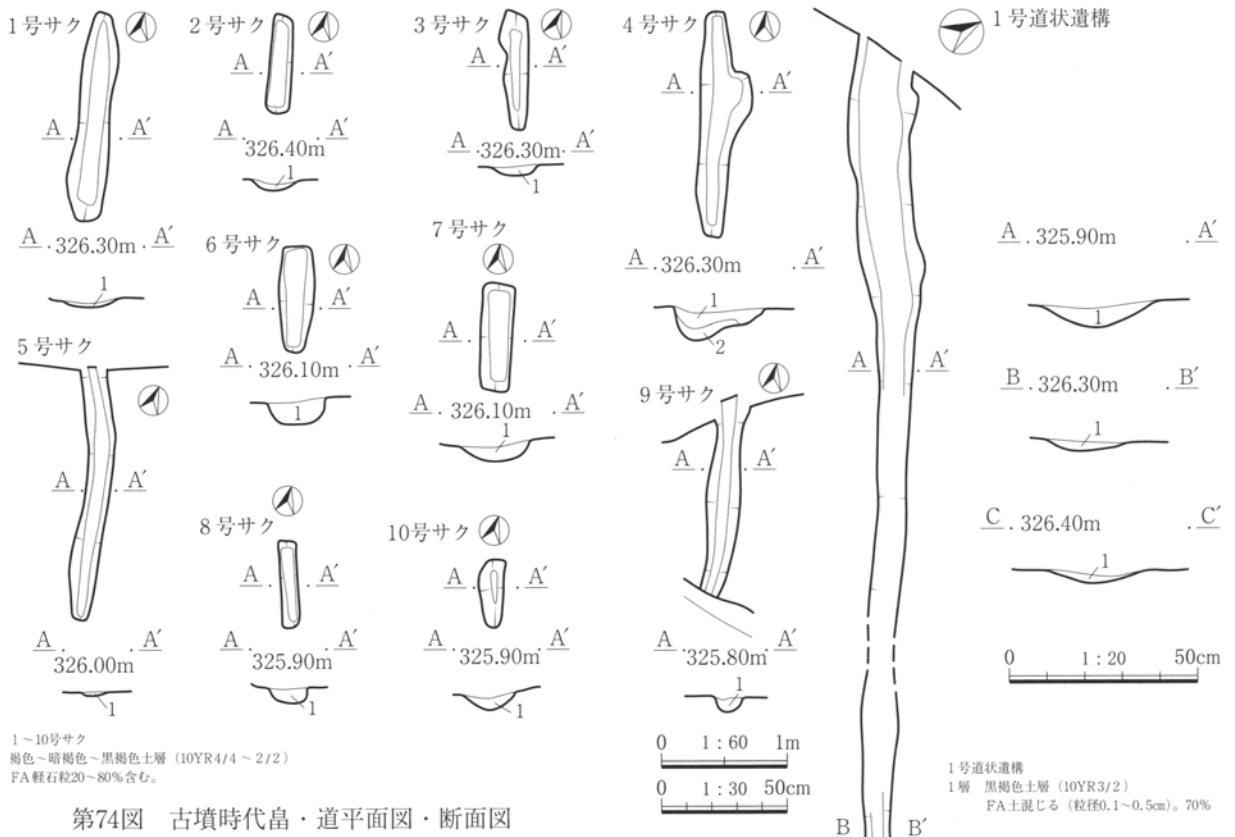


第72図 古墳時代土坑平面図・断面図 (2)



第73図 古墳時代島・道全体平面図

第4章 調査の成果



## 第4節 平安時代

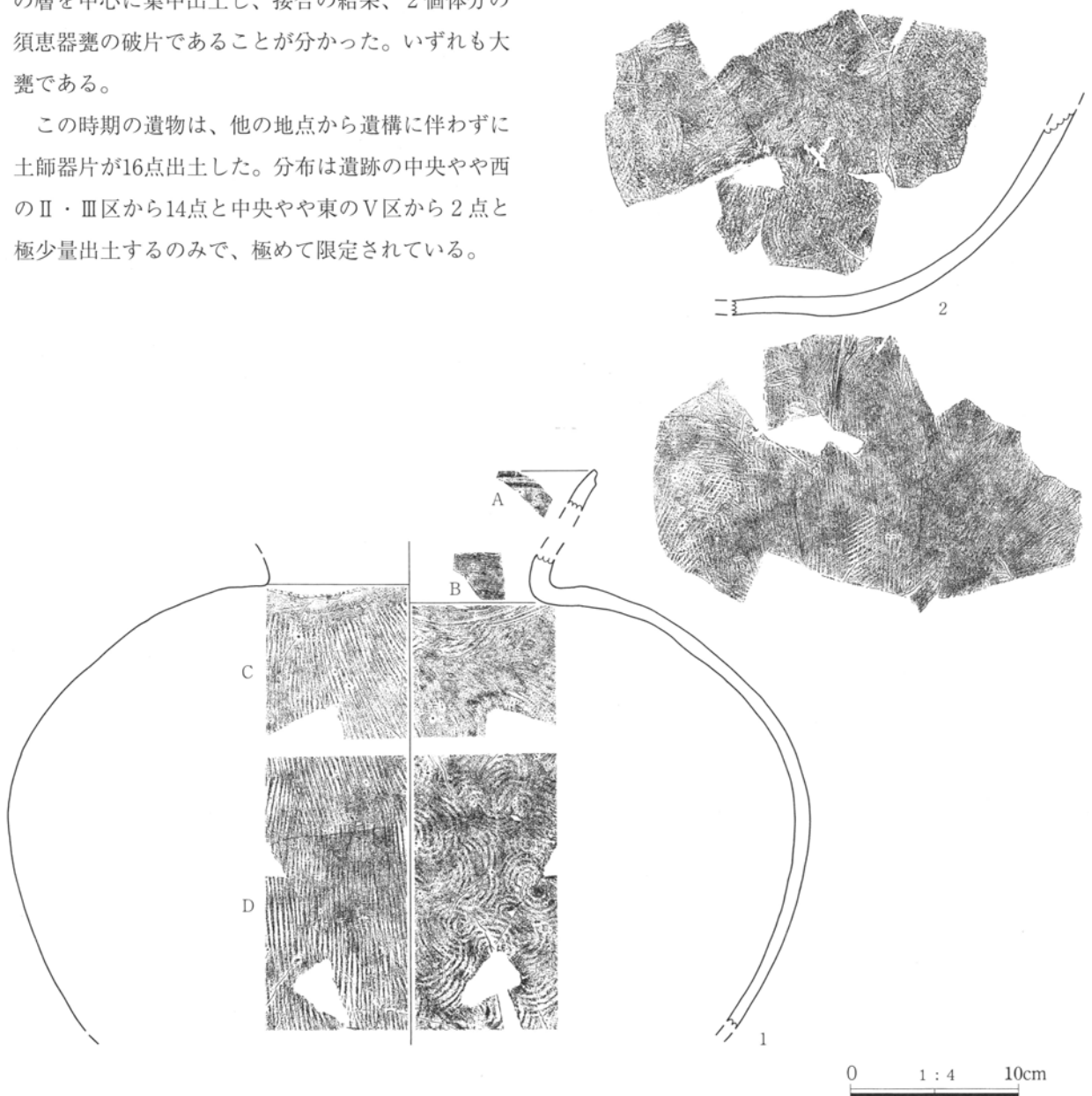
### 1. 検出された遺構と遺物の概要

該期の遺構は、遺跡地東端にある1号溝のみである。溝は東向きで巾2.2~3.9mで、深さは深いところで1.2mをはかる。東に向けて大きく傾斜している。又、溝の覆土中のやや上位の部分でAs-B層の上に間層を挟んで明瞭に粕川テフラが確認された。

須恵器片が、覆土の下層、粕川テフラよりも下位の層を中心に集中出土し、接合の結果、2個体分の須恵器甕の破片であることが分かった。いずれも大甕である。

この時期の遺物は、他の地点から遺構に伴わずに土師器片が16点出土した。分布は遺跡の中央やや西のⅡ・Ⅲ区から14点と中央やや東のⅤ区から2点と極少量出土するのみで、極めて限定されている。

遺構の存在は1号溝以外は明瞭に確認できるものは一切無い。遺物の総点数から見ても当遺跡では1号溝のみの遺構で、この地点には極めて限られた遺構・遺物しか無いと言える。



第76図 平安時代1号溝出土遺物



## 第5節 中世

### 1. 検出された遺構と遺物の概要

この土地は「稲城」と呼ばれ、かつて山城があったと想定されている地点である。今回の調査で、中世の遺構は、堀2本、溝1本、切岸1基、掘立柱建物6軒、柱穴列2本、竪穴状遺構9基、土坑が93基出土している。

遺跡地の中央にある北に向けてコ字形に広がる堀が主郭を構成する堀と思われるが、道路建設及び土砂崩れにより北側半分以上が崩壊しており、内郭と思われる地区には竪穴状遺構が1基のみで、主郭の建物群は検出されなかった。

しかし、堀の外南側より時期が重複する6軒の掘立柱建物群が出土し、主郭の前面に建物群があったことがわかった。更に、東西端に区画溝的な役割を持つと思われる堀と切岸が検出されている。

また、半地下式の住居遺構と考えられる竪穴状遺構8基が主郭の前面（コ字形堀の南側）を中心に検出されており、その他土坑が93基検出された。

#### 1. 堀

堀は遺跡地西側に遺跡地を区画するように北東から南西方向に向けて斜走する1号堀と遺跡地中央で

主郭を囲むように北に向けてコ字形に開く2号堀がある。

#### a 1号堀

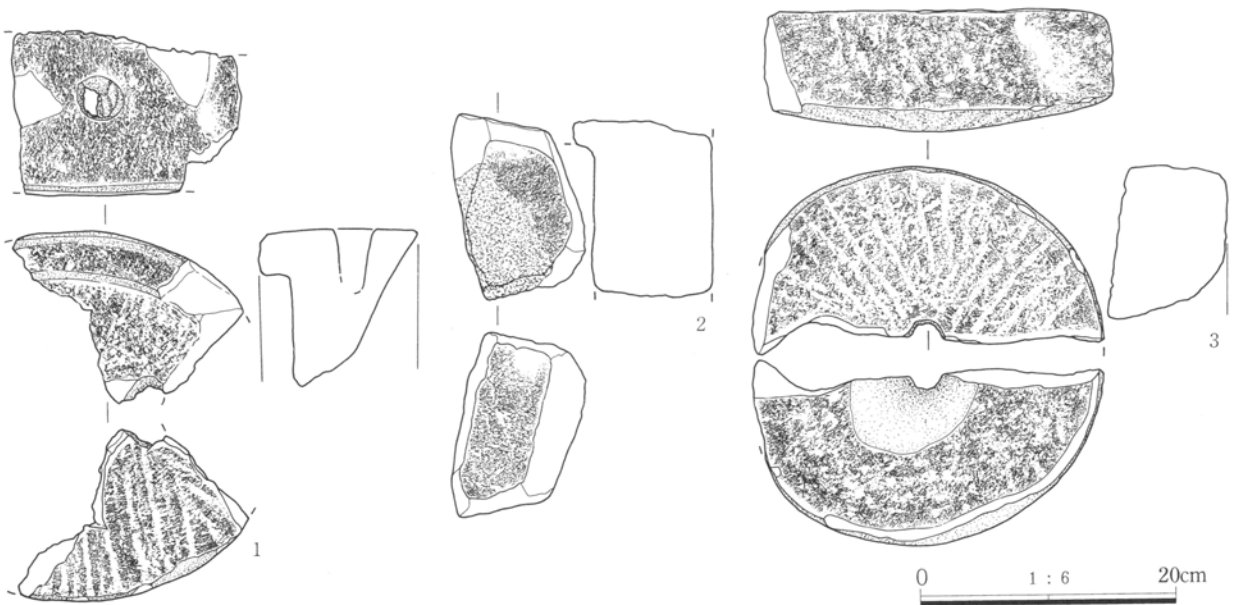
**位置** 遺跡地の西端を区画するように位置する。

**走行方向** N-65°E

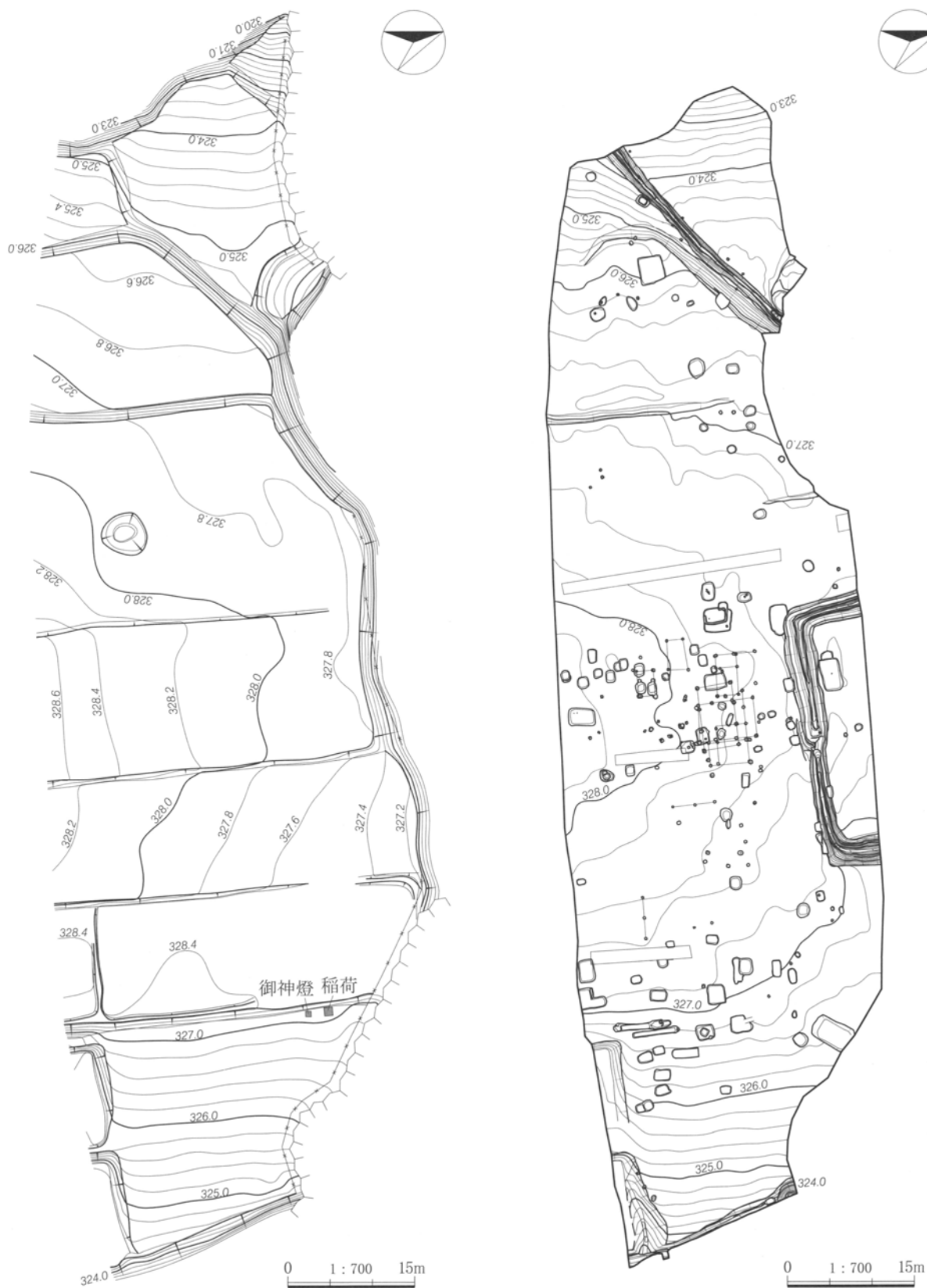
**形態** 1号堀は、巾は1.4m（北東部）、1.2~1.7m（中央部）、2.2m（南西部）で、深さが1.2m（北東部）、1.6~2.6m（中央部）、3.0m（南西部）である。確認した地点での長さは断面形態は葉研形で、北東部と南西部が巾・深さともに大きい。中央部は巾狭の箇所と巾広の箇所がある。

**出土遺物** 堀の西部（A区）、中央部（B、C区）、東部（D区）に分かれて石製品遺物及び自然礫が出土している。

A区では、自然礫が覆土上層より数点出土している。中央部（B・C区）では、やはり覆土中～上層にかけて石臼・茶臼等が出土している。東部（D区）は、覆土中～上層にかけて石臼・未製品が出土している。2号堀での最下層～下層出土の状況と異なり興味深い。遺物中に土器類はなくすべて石製品及び自然礫のみである。

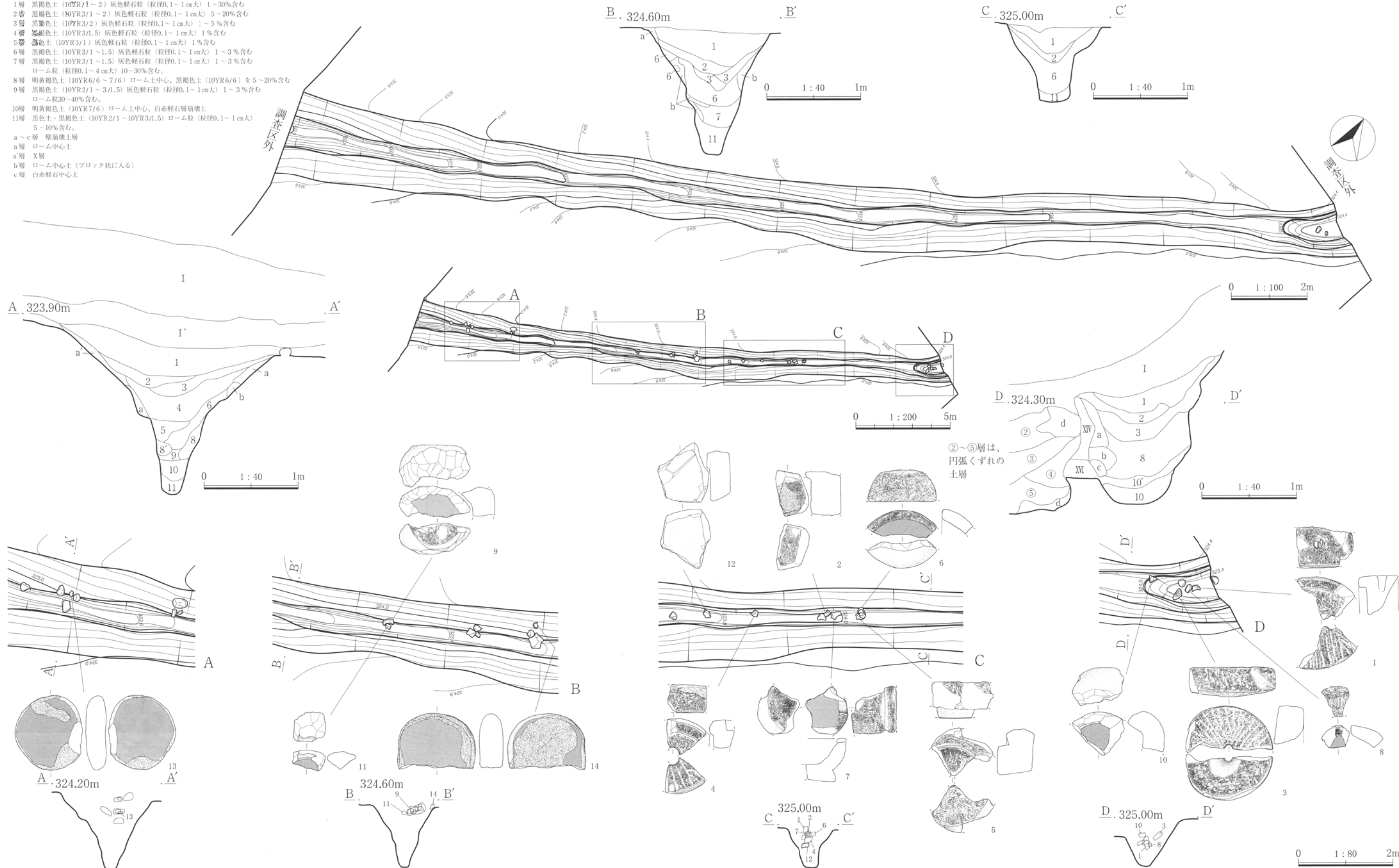


第79図 中世1号堀出土遺物(1)



第80図 遺跡調査前現況図・中世遺構全体平面図

- 1層 黒褐色土 (10YR7/1~2) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 1~30%含む
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1~2) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 5~20%含む
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 1~5%含む
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1.5) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 1%含む
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 1%含む
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1~1.5) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 1~3%含む
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1~1.5) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 1~3%含む  
ローム粒 (粒径0.1~4cm大) 10~30%含む
- 8層 明黄褐色土 (10YR6/6~7/6) ローム土中心、黒褐色土 (10YR6/6) を5~20%含む
- 9層 黒褐色土 (10YR2/1~3/1.5) 灰色軽石粒 (粒径0.1~1cm大) 1~3%含む  
ローム粒30~40%含む
- 10層 明黄褐色土 (10YR7/6) ローム土中心、白糸軽石層崩壊土
- 11層 黒色土・黒褐色土 (10YR2/1~10YR3/1.5) ローム粒 (粒径0.1~1cm大)  
5~10%含む
- a~c層 壁崩壊土層
- a層 ローム中心土
- a'層 X層
- b層 ローム中心土 (ブロック状に入る)
- c層 白糸軽石中心土



第81図 中世1号堀平面図・断面図・遺物出土状況図







第82図 中世1号掘出土遺物(2)

第4章 調査の成果

b 2号堀

**位置** 遺跡地の中央北側の崖線沿いに向かってコの字形に開いている。

**重複** 6号竪穴状遺構、70・73・74・75土坑を切って掘り下げている。

**走行方向** 南側東西堀N-101°E、東側南北堀N-15°E、西側南北堀N-3°E

**形態** 北側崖線に向かって、コの字形に開く。崖線が崩壊して北側にどのくらい伸びていたか不明である。

土坑の断面は薬研形を呈し、部位により堀の中・深さが異なる。南側中央に陸橋の可能性がある施設があり、東部と西部に分けることができる。

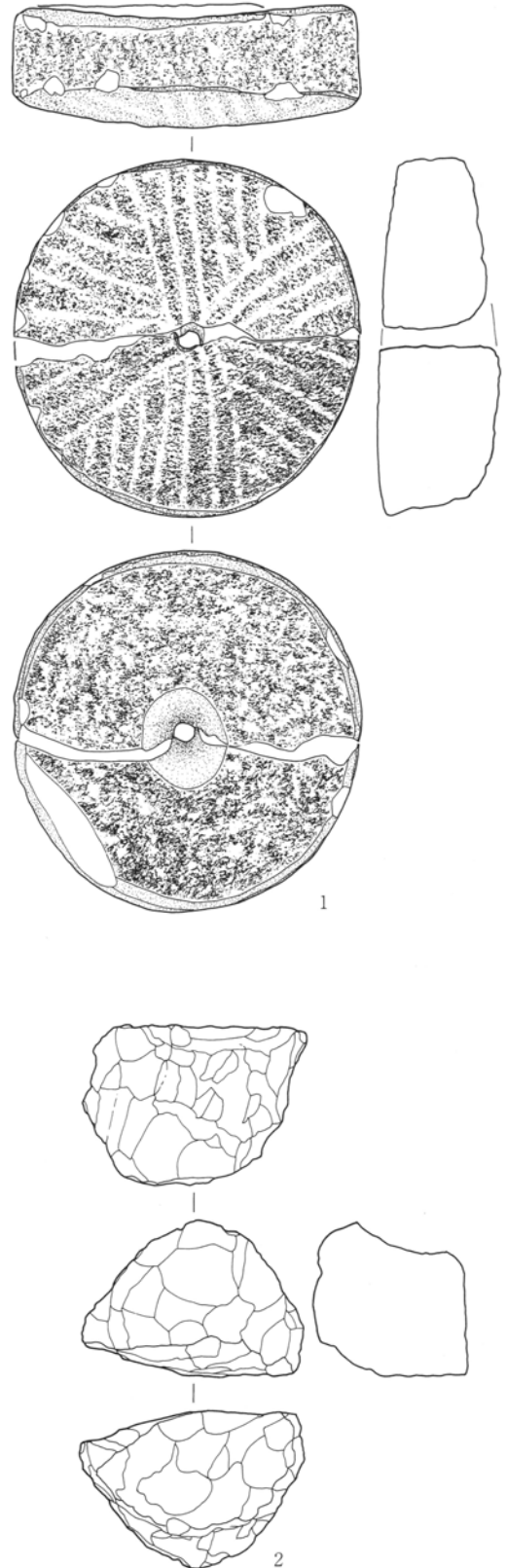
東部からみてみると北東のB断面で堀巾3.3m、深さ2.3m、東部中央の位置C断面で巾3.1m、深さ1.4m、東側陸橋部手前5mの地点で巾2.1m、深さ1.4m、陸橋部で巾3.5m、深さ0.9mである。陸橋西部手前5mの地点で巾3.3m、深さ1.2m、西部中央E断面で巾2.15m、深さ1.85m、北西部端A断面で巾3.2m、深さ2.2mである。

地形は東から西に向かっており、堀底のレベルも東に向かって下がっている。陸橋部は高まりをみせる。南西・南東のコーナー部の屈曲は明瞭である。

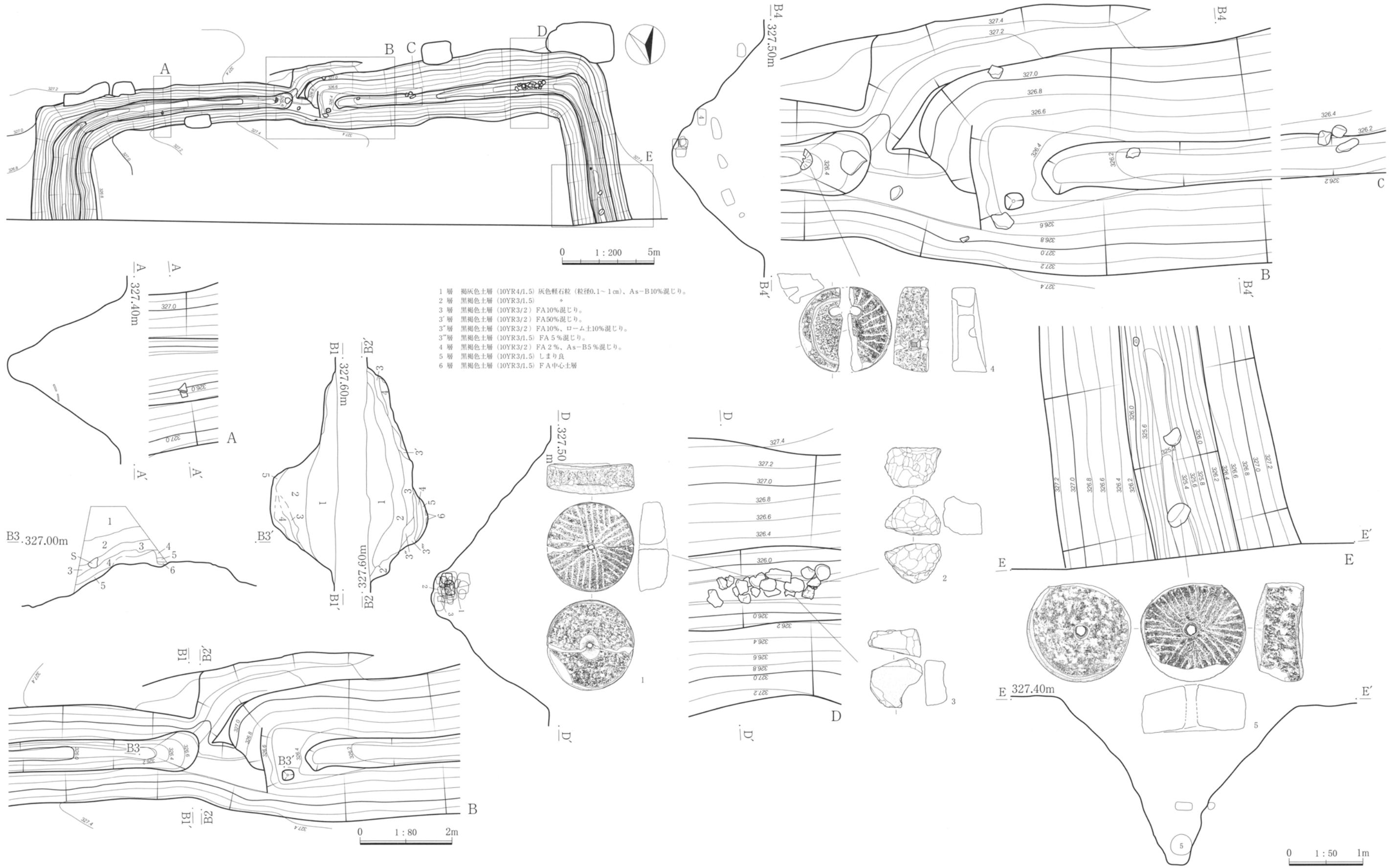
**出土遺物** 遺物は大きく4ヶ所より出土している。東部からは自然礫のみの出土で、B区は陸橋部を中心に石臼などが覆土下層より出土している。C区は集中して出土した地点で、石臼等が覆土最下層より出土した。D区は西部北端部で石臼が完形で最下層より出土している。

特定の地点に石製品を堀が機能を停止してから間もない時期に廃棄しているのだろう。土器類が出土せず、2号堀の時期を特定することができなかった。

天聖元寶が覆土上層より出土した。

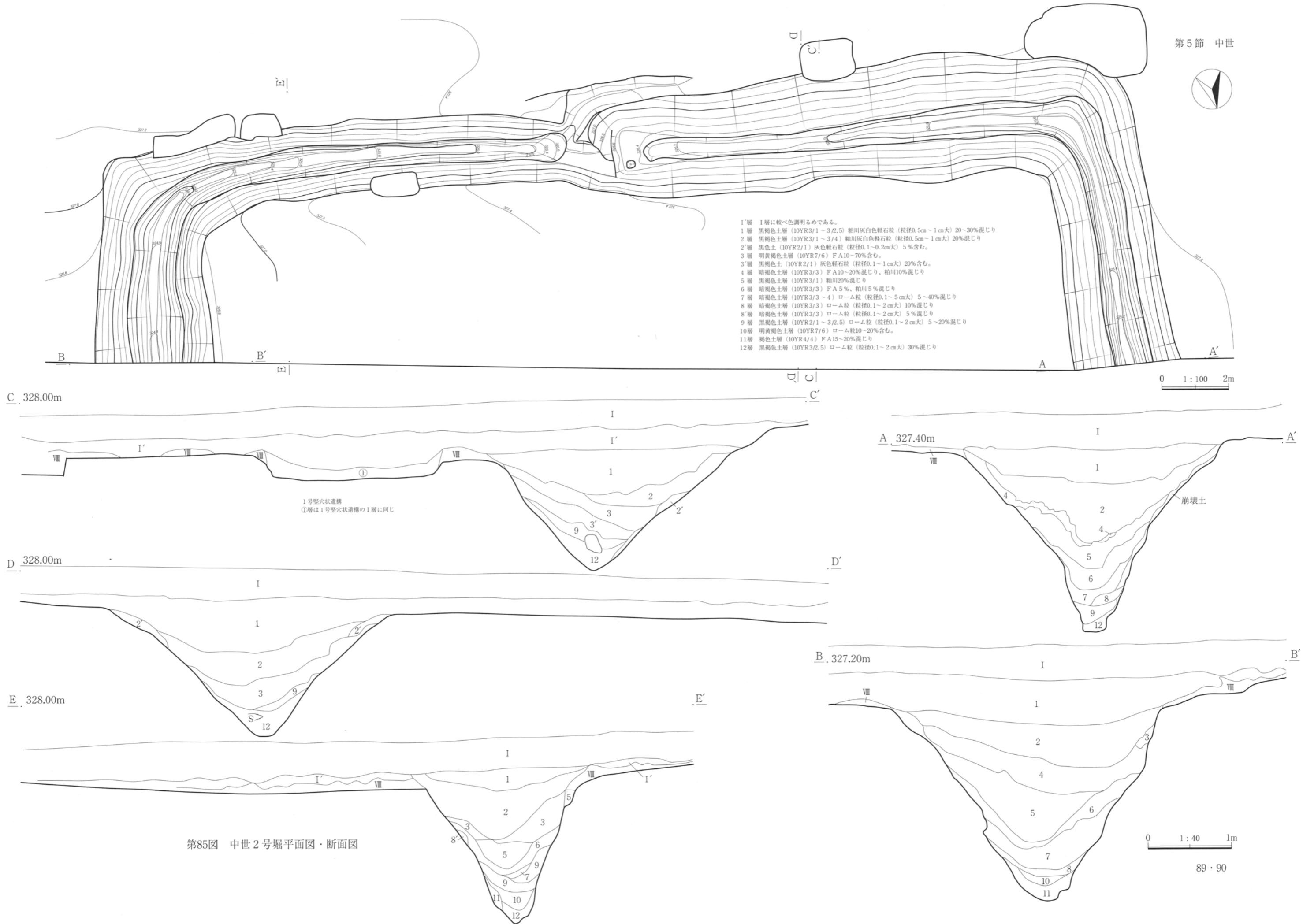


第83図 中世2号堀出土遺物(1)



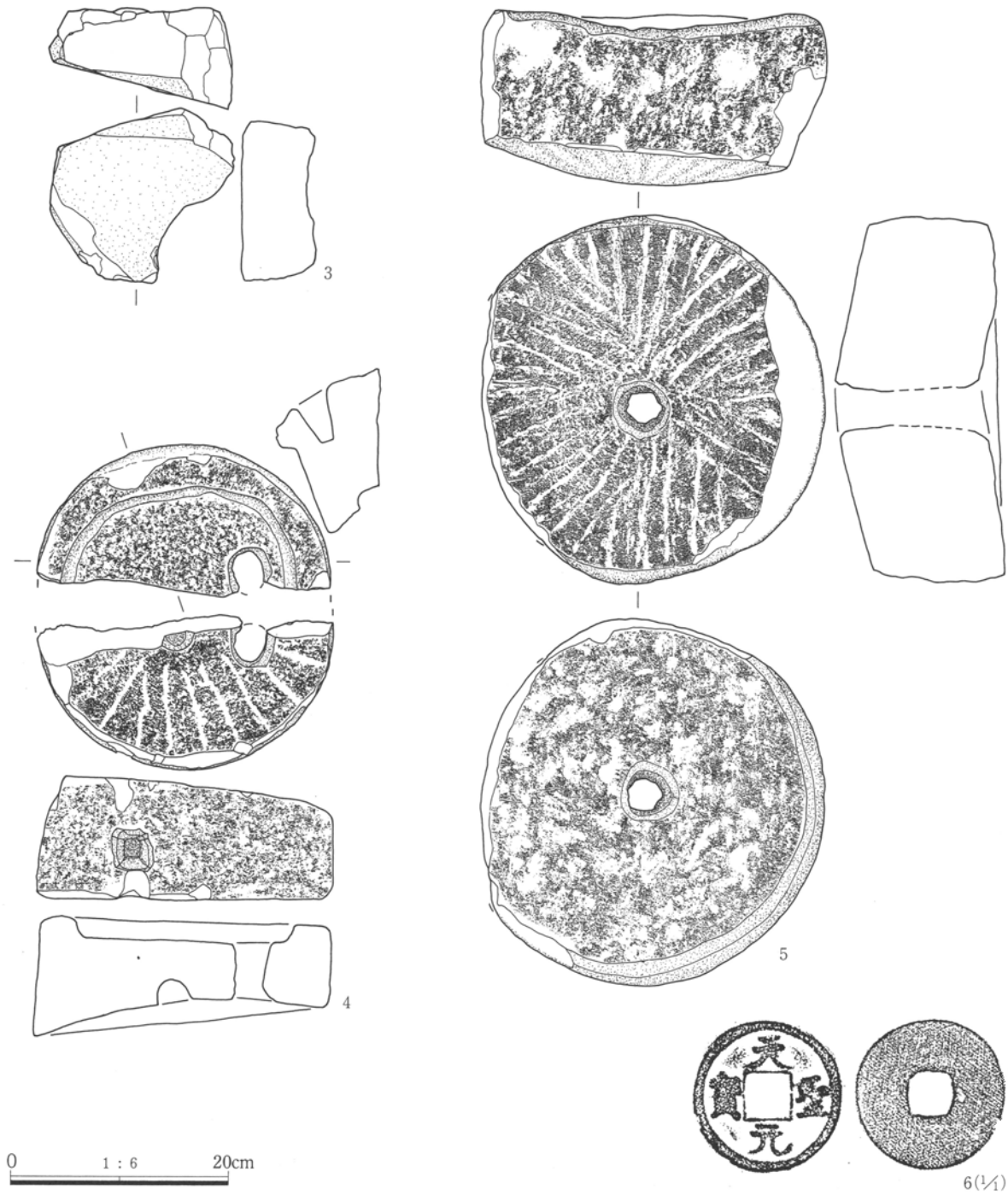
第84図 中世2号堀遺物出土状況図





第85図 中世2号堀平面図・断面図





第86図 中世2号堀出土遺物(2)

3. 切岸

**位置** 遺跡地東端にあり、館の東を区画する。

**重複** 平安時代の1号溝を切る。

**走行方位** N-2°W

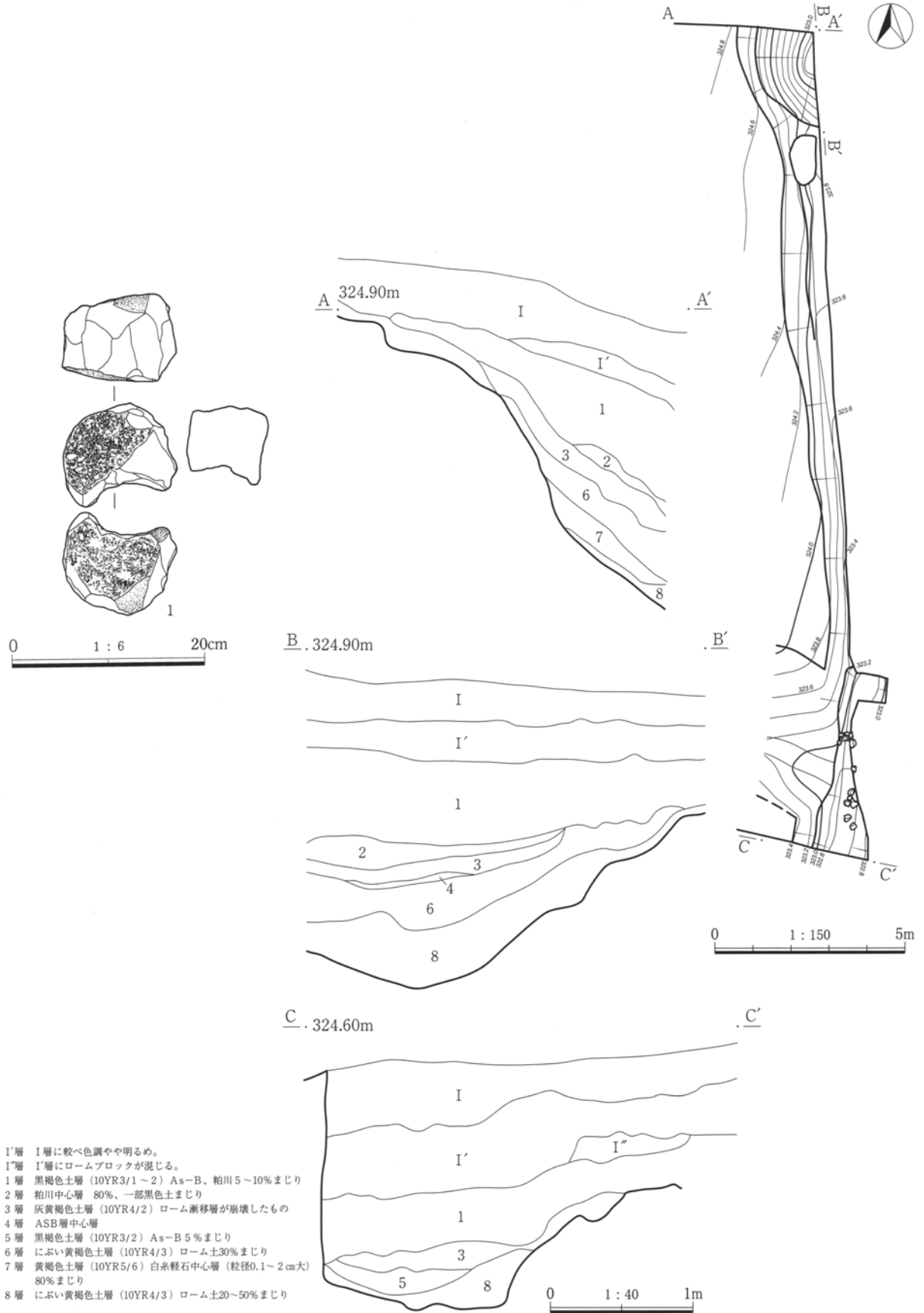
**形態** 南北に走行する切岸で北から南に向けてゆるやかに下る。巾は、東側に平坦状になっており、明

瞭な境界は確認できないが、2.1m以上の巾はある。

深さは北端で1.6m以上、中央部で0.6m以上、南部で0.8m以上あったと思われる。

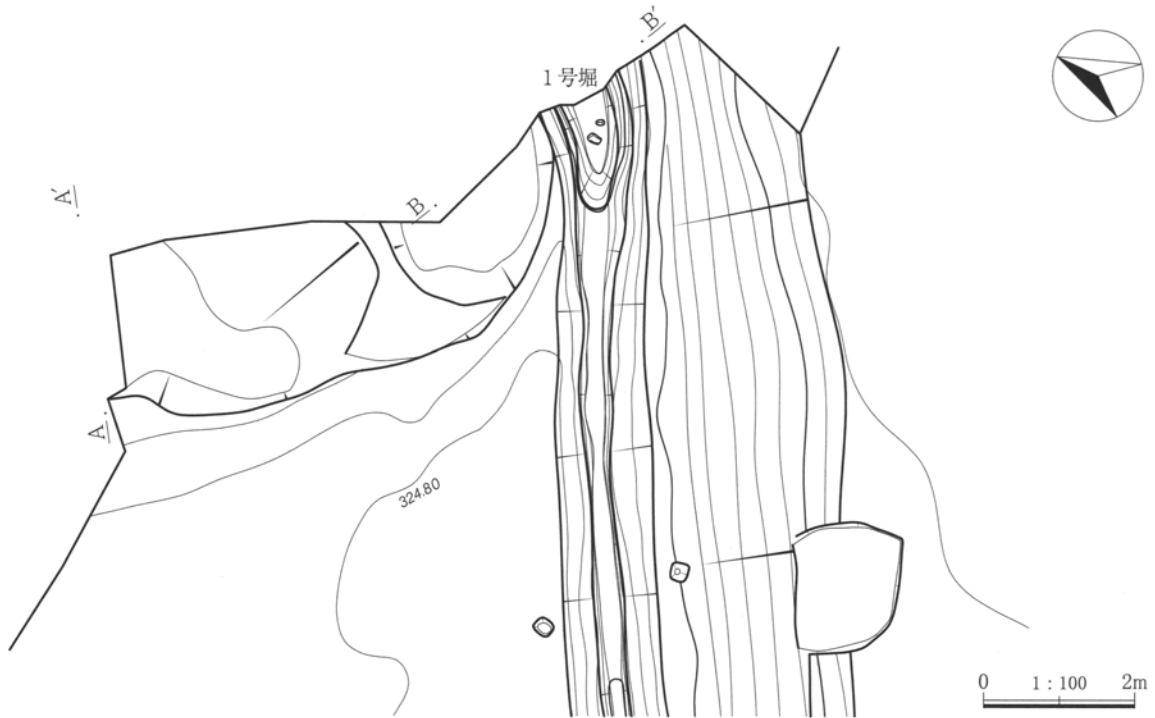
**出土遺物** 遺物は南端部より自然礫が出土したのみである。

6(1/1)



第87図 中世1号切岸平面図・断面図・出土遺物





4. 円弧くずれ

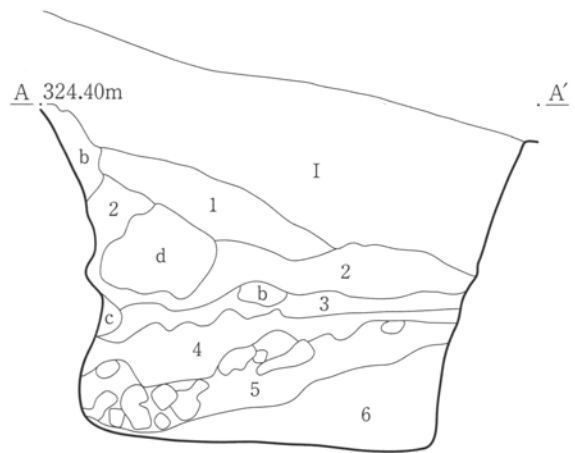
自然地形であるが、1号堀とかかわる所より検出されたのでここで略述する。

**位置** 遺跡地西端、1号堀の東端のすぐ北側にある。

**重複** 1号堀を切っている。

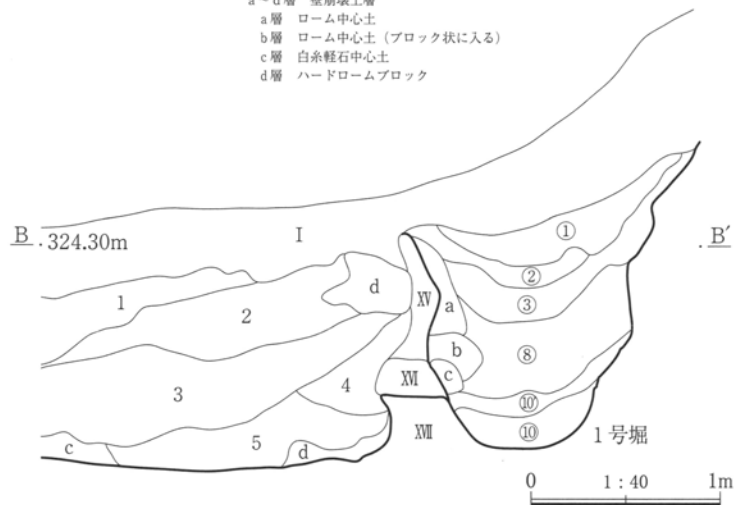
**形態** 土砂崩壊に伴い、北側に向けて円弧状に一気に崩れ落ちたものと考えられる。土層断面をみても地山のローム土が大きなブロック状のかたまりで下に向けて流れ落ちるような形で観察できる。

このような崩壊が崖線の他の部位でも起きていたらしいことが地形の観察及び地区の住民からの聞き取りで想定される。

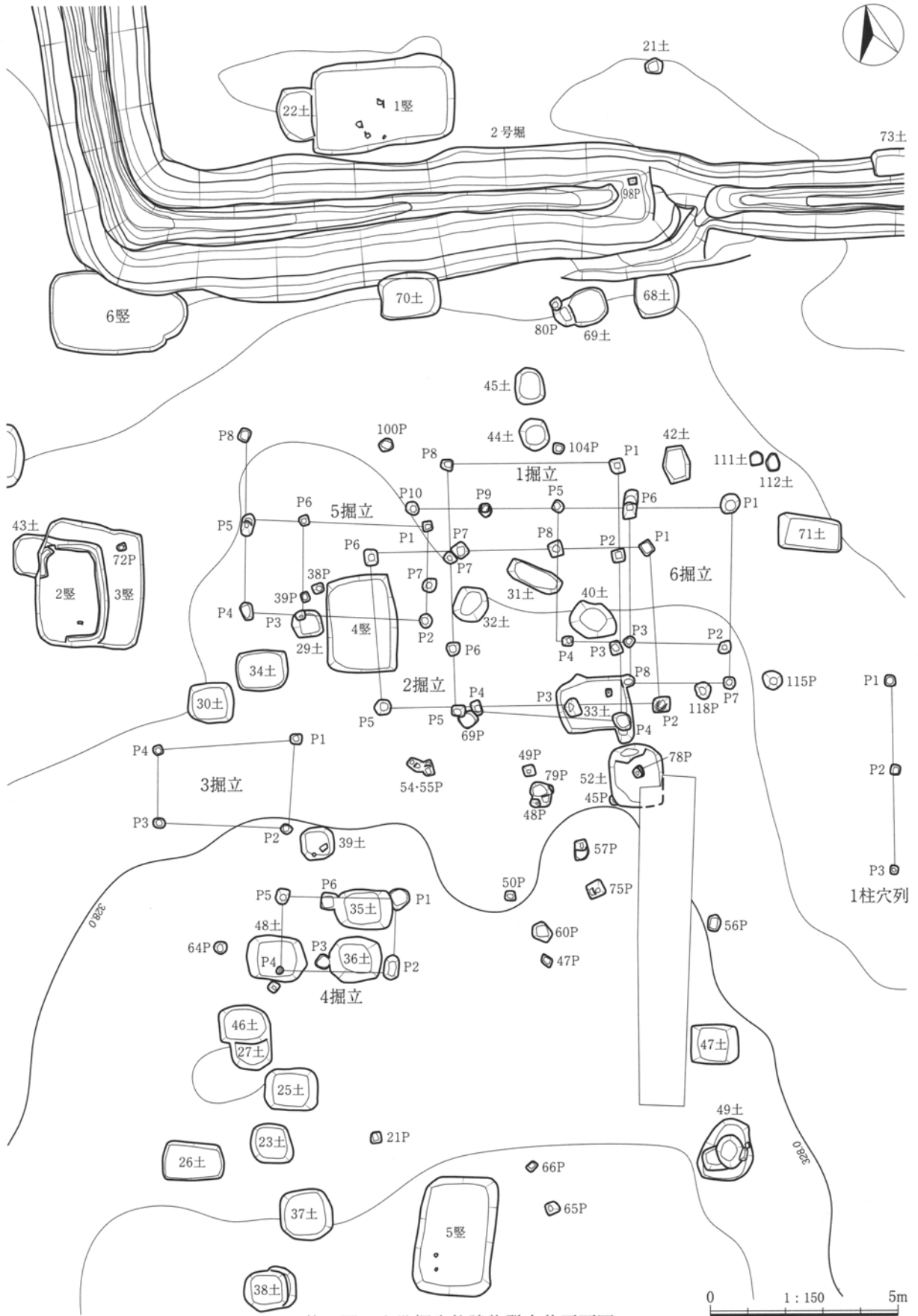


a~d層 壁崩壊土層  
 a層 ローム中心土  
 b層 ローム中心土 (ブロック状に入る)  
 c層 白糸軽石中心土  
 d層 ハードロームブロック

- 1層 灰黄褐色土層 (10YR4/2)  
 ローム粒 (粒径0.1~1cm大) 白糸軽石5%まじる
  - 2層 灰黄褐色土層 (10YR4/2)  
 ローム粒 (粒径0.1~5cm大)、白糸軽石10%まじる
  - 3層 黒褐色土層 (10YR3/1)  
 ローム粒 (粒径0.1~5cm大) 3%まじる  
 白糸軽石1%まじる
  - 4層 白糸軽石中心層、黒褐色土 (10YR3/1) 1%まじる
  - 5層 黒褐色土層 (10YR3/1)  
 ロームブロック (粒径1~20cm大) 40%まじり
  - 6層 ローム土中心層  
 白糸軽石層、ローム土の崩壊が中心となる層  
 しまり やや強い → 弱い
- 3層・5層 1層・2層・4層



第88図 円弧くずれ平面図・断面図



第89図 中世掘立柱建物群全体平面図

5. 掘立柱建物

a 1号掘立柱建物

**位置** 2号堀南側外側中央部やや西寄りに位置し、2号堀の長軸に対し直交する。

**重複** 2号掘立柱建物と重複し、ピットとの切り合い関係から、1号掘立柱建物が古く、2号掘立柱建物が後出する。

**主軸方位** N-13°-E

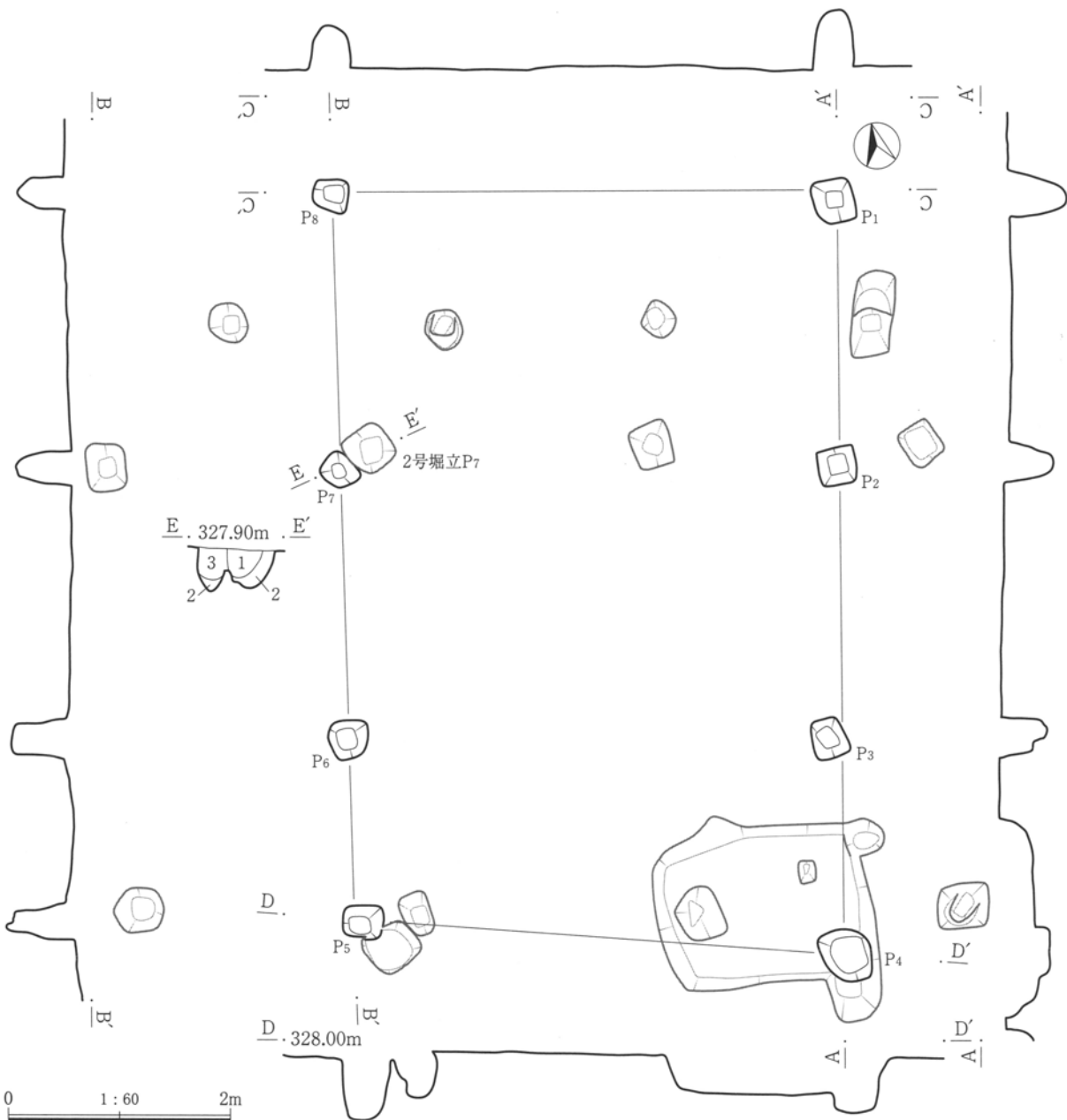
**形態** 1間(平均値4.36m)×3間(平均値6.79m)

の南北棟である。

**内部施設** 31号土坑がほぼ中央やや北よりにあるが、掘立柱建物の主軸方位ともずれており同一時期のものとは考えられない。今の所この掘立柱建物に伴う土坑はない。

**出土遺物** ピット・土坑ともに遺物の出土は無い。

- 1号掘立柱建物
- P7・2号掘立柱建物P7
- 1層(2号掘立柱建物P7土層) 黒褐色土層(10YR3/2) As-B 20%含む。
- 2層( ) にぶい黄褐色土層(10YR4/3) FA20%含む。
- 3層(1号掘立柱建物P7土層) にぶい黄褐色土層(10YR4/3) As-B 5%、FA20%含む



第90図 中世1号掘立柱建物平面図・断面図

第4章 調査の成果

b 2号掘立柱建物

**位置** 2号堀南側中央部やや西寄りに位置し、2号堀の長軸に平行する。

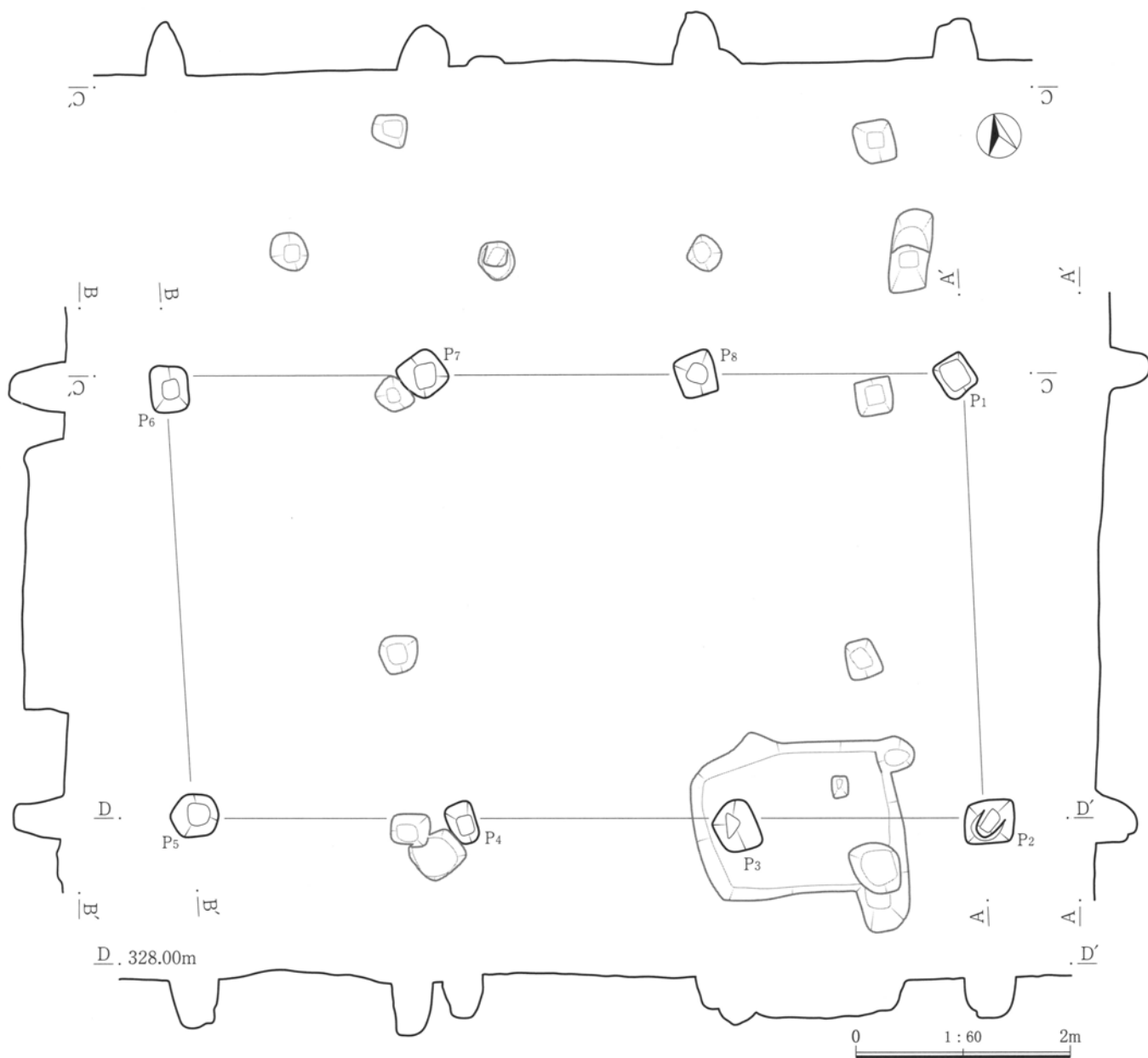
**重複** 1号掘立柱建物と重複し、ピットの切り合い関係から、2号掘立柱建物が1号掘立柱建物より新しい。

**主軸方位** E-77°-W

**形態** 1間（平均値4.085）×3間（平均値7.41）の東西棟である。

**内部施設** 31号土坑が掘立柱建物内部の中央やや北東寄りにあるが、掘立柱建物の主軸方位ともずれており同一時期のものと考えられない。この掘立柱建物に伴う土坑はない。

**出土遺物** ピット・土坑ともに遺物の出土無い。



第91図 中世2号掘立柱建物平面図・断面図

c 3号掘立柱建物

**位置** 2号堀南側1・2・5・6号掘立柱建物群が集中する地点よりやや南西よりに少し離れたところにある。

**重複** 他の土坑・ピット・掘立柱建物ともに重複は無い。

**主軸方位** N-71.5~80°-W

**形態** 1間(平均値2.18m)×1間(平均値3.56m)の東西棟である。

**内部施設** 無し。

**出土遺物** 無し。

d 4号掘立柱建物

**位置** 3号掘立柱建物のすぐ南東側に位置する。

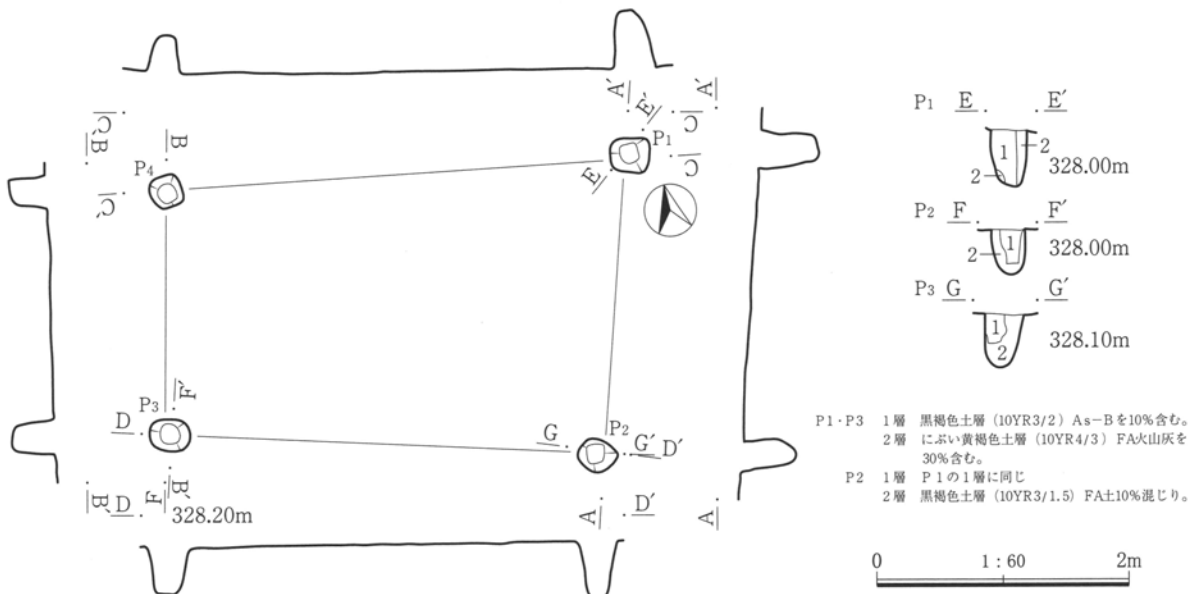
**重複** 35・36号土坑がP1・3・6を切っている。

**主軸方位** N-75.5°-W

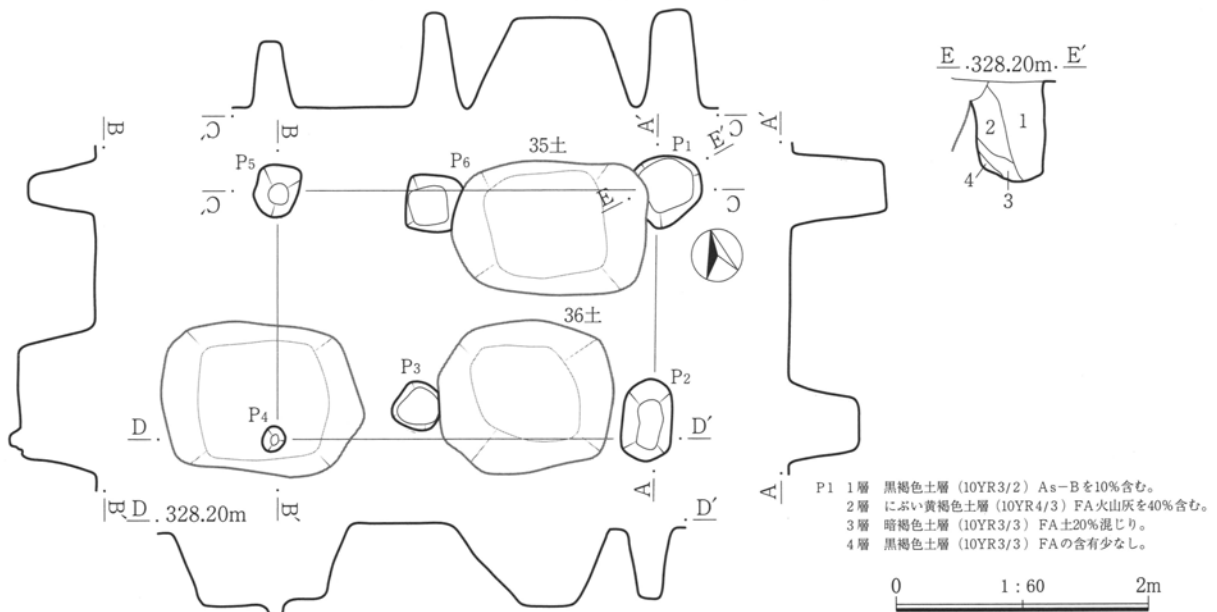
**形態** 1間(平均値1.9m)×2間(平均値3.055m)の東西棟である。

**内部施設** 35号・36号土坑は、柱穴との切り合い関係等からみて、4号掘立柱建物と関連づけるのは困難である。

**出土遺物** 無し。



第92図 中世3号掘立柱建物平面図・断面図



第93図 中世4号掘立柱建物平面図・断面図

第4章 調査の成果

e 5号掘立柱建物

**位置** 2号堀南側、2号掘立柱建物の西側に重なる位置にある。

**重複** 2号掘立柱建物と重複するが切り合い関係を持たないために新旧関係は不明である。4号竪穴状遺構、29号土坑などと重複するがいずれも新旧関係は不明。ただし、5号掘立柱建物と同時期とは考えられない。

**主軸方位** N-75°-S

**形態** 1間(平均値2.535m)×1間(平均値3.325m)の東西棟。西壁面から北に向けて1間壁面を伸ばしている。

**内部施設** 38・39が内部で検出されているが位置等からして同時期とは思えない。

**出土遺物** 無し。

f 6号掘立柱建物

**位置** 2号堀南側、1・2号掘立柱建物の東側に重なる位置にある。

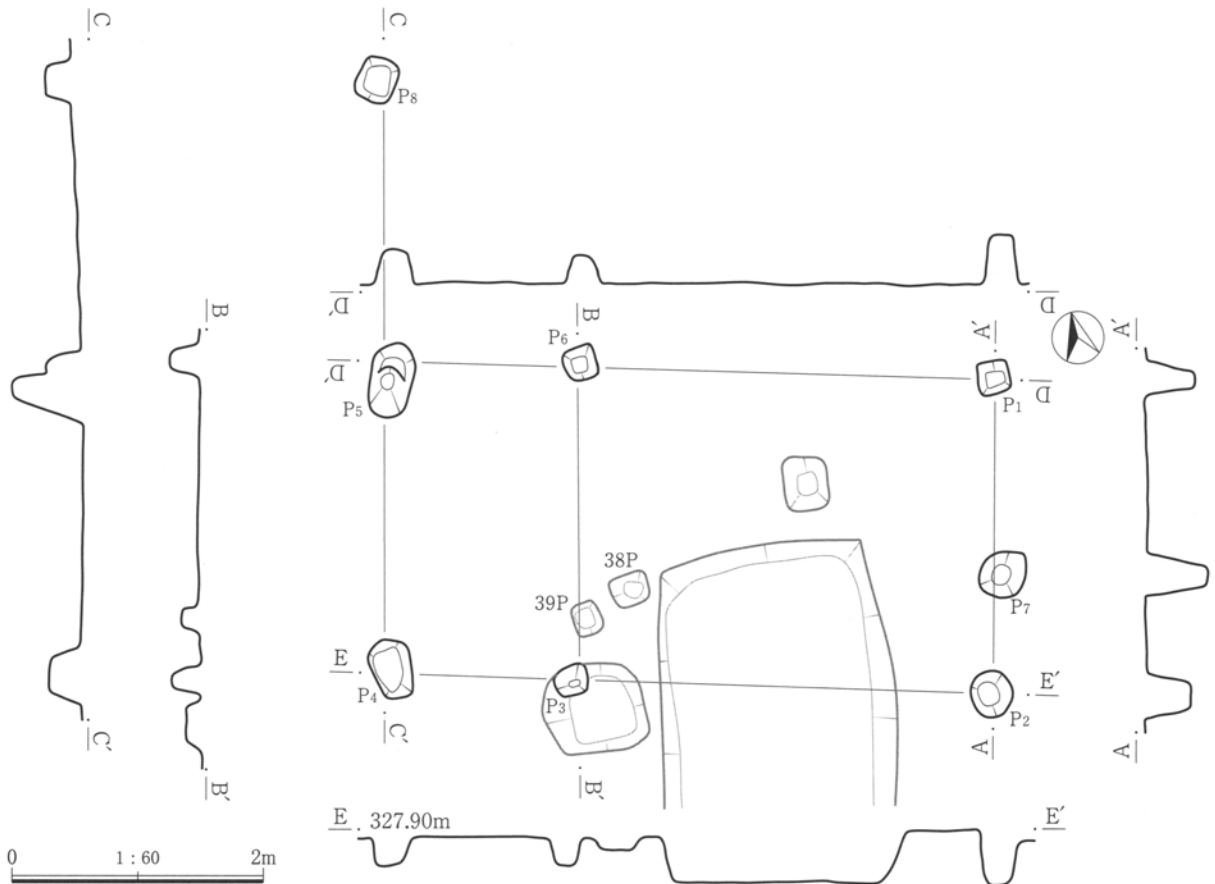
**重複** 1・2号掘立柱建物と重複するが切り合い関係を持たないために新旧関係は不明である。

**主軸方位** N-15°-E

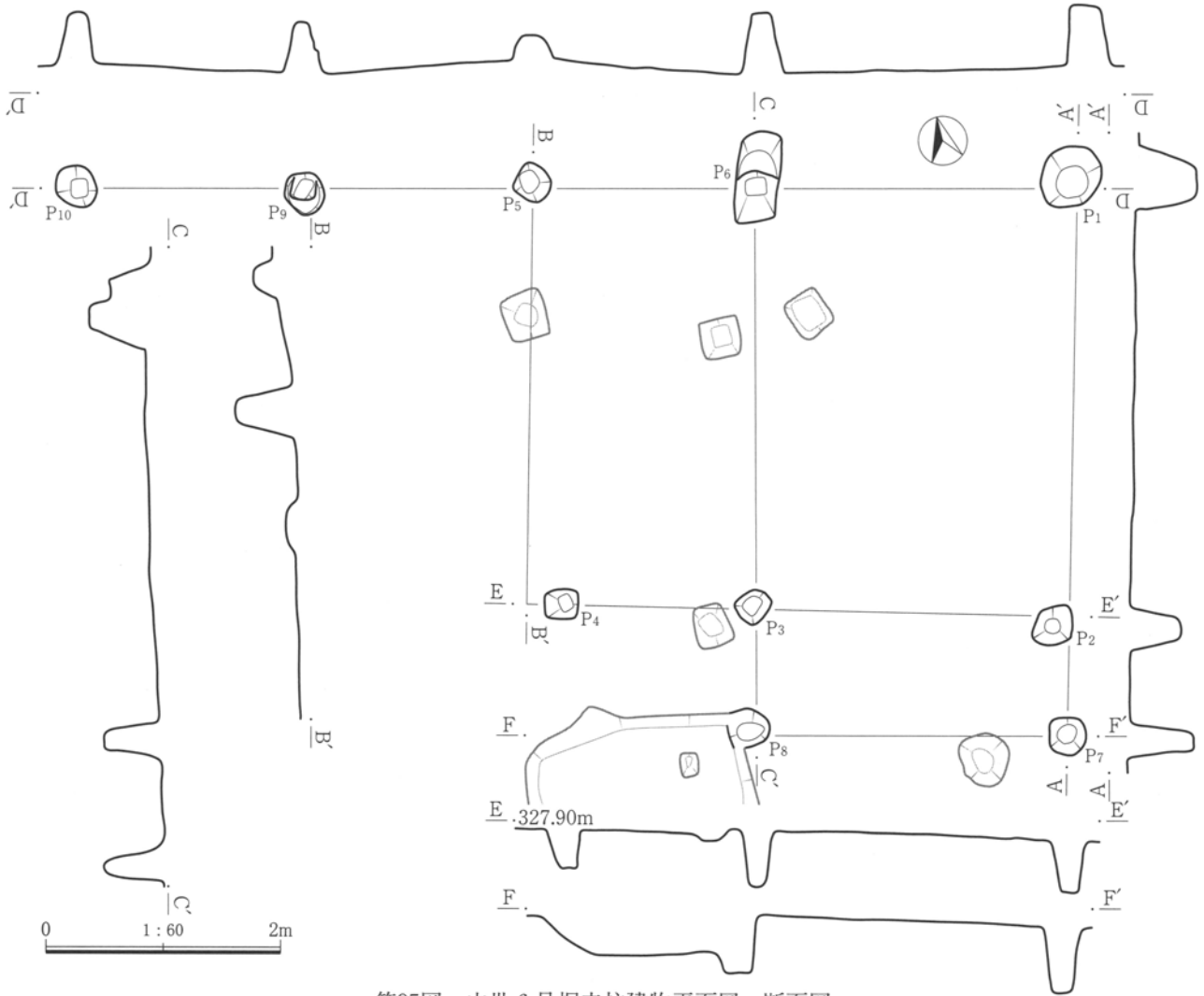
**形態** 1間(平均値2.66m)×1間(平均値3.65m)の南北棟。庇が南壁面と西壁面にある。また北壁面に連続して西側に2間壁面を伸ばしている。

**内部施設** 40号土坑が内部で検出されているが、庇の中に収まりあるいは、6号掘立柱建物に所属する可能性もあるが、現時点では基本的に建物に関係の無いものとする。

**出土遺物** 無し。



第94図 中世5号掘立柱建物平面図・断面図



第95図 中世6号掘立柱建物平面図・断面図

6. 柱穴列

a 1号柱穴列

**位置** 2号堀南側、1・2・5・6号掘立柱建物群の東側少し間を置いて位置する柱穴列。

**重複** 無し。

**主軸方位** N-10°-E

**形態** 2間(4.91m)の南北方向柱穴列。おそらく柵跡と考えられる。

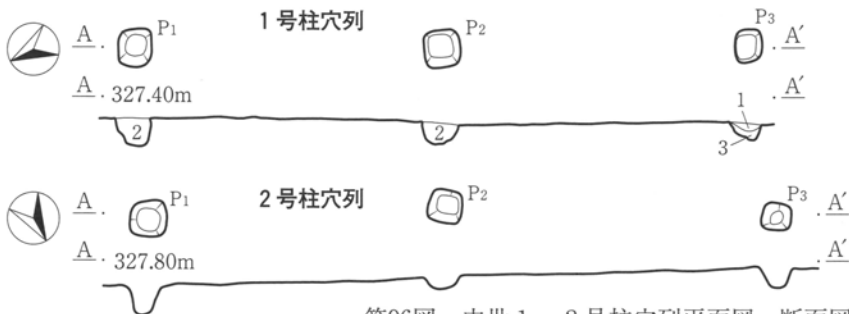
b 2号柱穴列

**位置** 中世の一群の掘立柱建物群からは東に大きく離れて位置する。

**重複** 無し。

**主軸方位** N-70°-W

**形態** 2間(5.03m)の東西方向柱穴列。おそらく柵跡と考えられる。



第96図 中世1・2号柱穴列平面図・断面図

P1  
1層 灰黄褐色土層(10YR4/2)As-B10%混じり。  
3層 灰黄褐色土層(10YR4/2)As-B20%混じり。  
P2・P3  
2層 黒褐色土層(10YR3/2)As-B10%、FA5%混じり。

第4章 調査の成果

7. 竪穴状遺構

a 1号竪穴状遺構

**位置** 2号堀内側の主郭内に位置する唯一の明瞭な遺構である。

**重複** 22号土坑を重複するも新旧関係は不明。あるいは1号竪穴状遺構に付属する施設か。

**主軸方位** N-82°-W

**形態** 隅円長方形を呈し、長辺3.82m×短辺2.25～2.40mである。柱穴、ピット、土坑ともに無い。

**出土遺物** 鉄製刀子が1点出土した。茎を南に刃の切先を北にして南北方向で出土している。ただ覆土上層からの出土である。他に自然礫がいくつか出土した。

b 2号竪穴状遺構

**位置** 2号堀南側、1・2、5・6号掘立柱建物群のすぐ西側に位置する。

**重複** 43号土坑を切り、3号竪穴状遺構に切られている。新旧関係でいうと、古い順に43号土坑→2号竪穴状遺構→3号竪穴状遺構である。

**主軸方位** N-6°-E

**形態** 隅円長方形で、長辺は2.8m、短辺は1.73～1.84mで、深さは3号竪穴状遺構に切られているため明瞭でないが現状で、遺構確認面からの深さが41～50cmである。柱穴・ピット・土坑ともに確認できなかった。

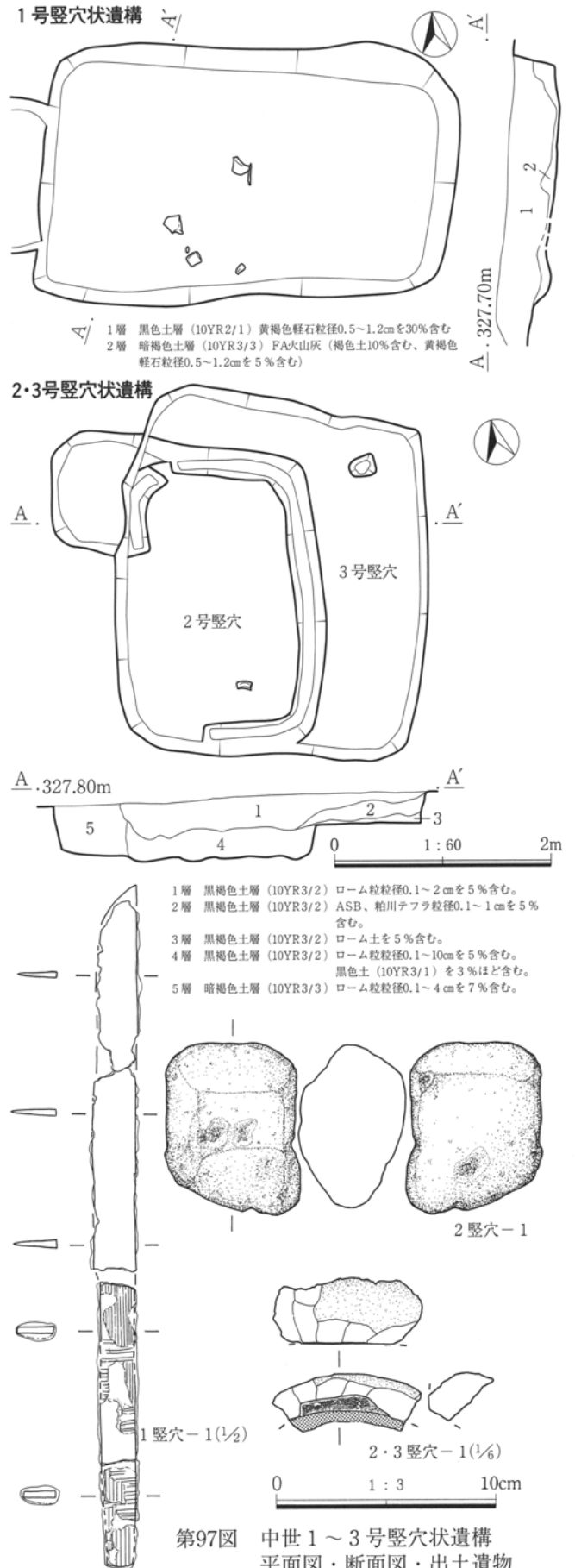
c. 3号竪穴状遺構

**位置** 2号堀南側、2号竪穴状遺構のすぐ東に2号竪穴状遺構を切る形で位置する。

**重複** 43号土坑、2号竪穴状遺構を切っている。3つの遺構の中で一番新しい。

**主軸方位** N-8°-E

**形態** 隅円長方形で、長辺3.10～3.33m、短辺2.50～2.91mである。深さは現状で14～29cmある。





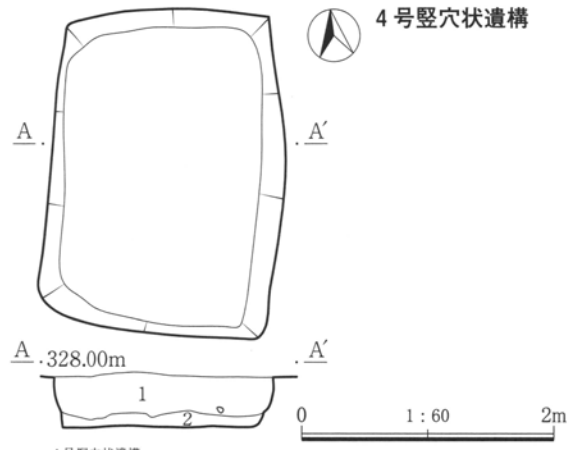
d 4号竖穴状遺構

**位置** 2号堀南側、2・5号掘立柱建物群と重複する位置にある。

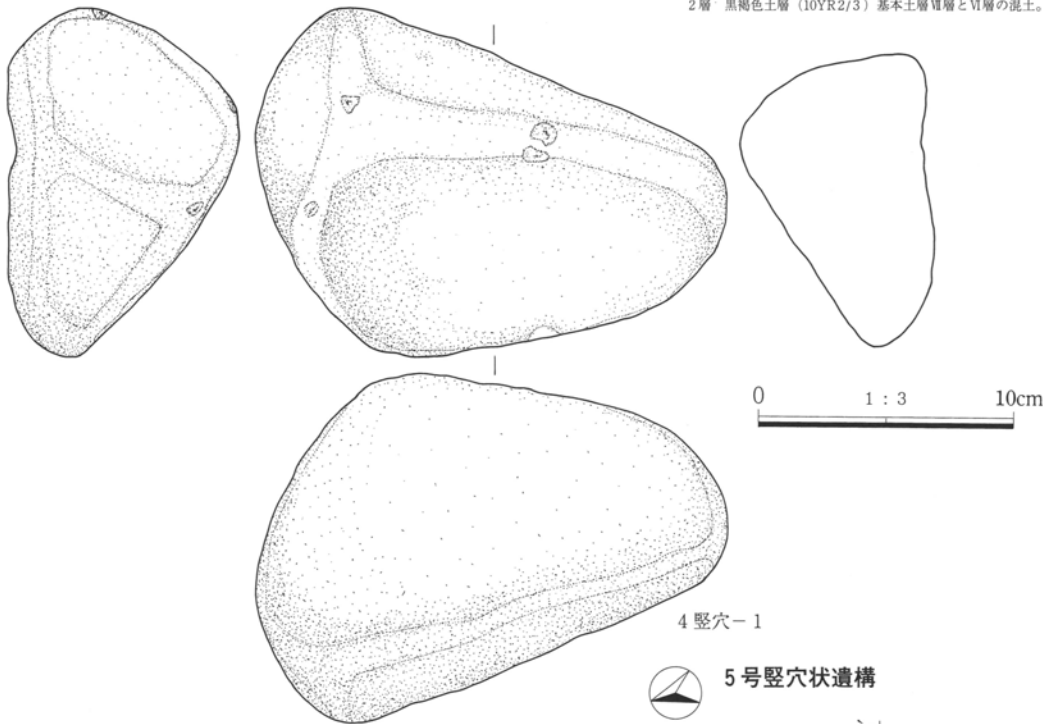
**重複** 2・5号掘立柱建物と重複するが切り合い関係に無く、新旧は不明。

**主軸方位** N-5°-E

**形態** 隅円長方形で、長辺2.44~2.58m、短辺1.65~1.86mである。深さは現状で24~44cmある。柱穴・ピット・土坑ともに無し。



4号竖穴状遺構  
1層 黒褐色土層 (10YR3/1) As-Bを5%含む。FAをブロック状に5%含む。  
2層 黒褐色土層 (10YR2/3) 基本土層Ⅶ層とⅥ層の混土。FAを5%含む。



4号竖穴-1

e 5号竖穴状遺構

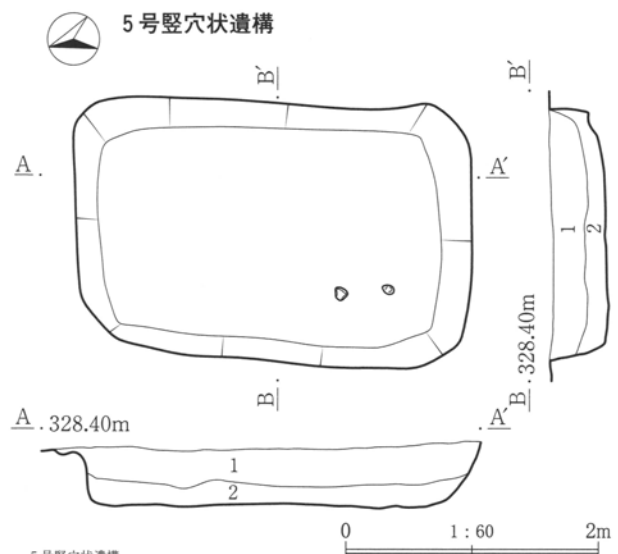
**位置** 2号堀南側、3・4号掘立柱建物より南の遺跡地では南端にあたる位置にある。

**重複** 無し。

**主軸方位** N-17°-E

**形態** 隅円長方形で、長辺3.03~3.15mをはかり、短辺1.94~2.05mをはかる。深さは現状で36~50cmである。柱穴・ピット・土坑ともに無し。

**出土遺物** 図示はしないが、土師器及び中世在地皿が出土する。



5号竖穴状遺構  
1層 黒褐色土層 (10YR3/2) As-Bを10%含む。FAを10%含む。  
2層 黒褐色土層 (10YR3/2) As-Bを5%含む。FAを20%含む。黒色土ブロック状に少し含む。

第98図 中世4・5号竖穴状遺構平面図・断面図・出土遺物

第4章 調査の成果

f 6号堅穴状遺構

**位置** 2号堀南西部コーナーにあり、2号堀と一部が重複する。

**重複** 2号堀で切られている。

**主軸方位** N-82°-W

**形態** 隅円長方形で72号土坑が東短辺に円弧状に飛び出るようにあり新旧の判断がつかない。あるいは、堅穴状遺構の付属施設の可能性もある。現状で長辺3.67m、短辺2.14~2.20m、深さ9~29cmである。

g 7号堅穴状遺構

**位置** 2号堀南東側の掘立柱建物群から大きく東に離れた位置にある。

**主軸方位** N-84°-W

**形態** 隅円長方形で長辺2.22~2.40m、短辺2.06~2.18mで、現状の深さで31~60cmある。柱穴・ピット・土坑ともに無し。

h 8号堅穴状遺構

**位置** 2号堀南東側、7号堅穴状遺構よりかなり離れた南側にある。南北の位置では西側の5号堅穴状遺構とほぼ同じ位置であるが主軸方位とは異なる。

**主軸方位** N-83°-W

**形態** 隅円長方形で、長辺2.62~2.68m、短辺1.76~1.93mで現状の深さで60~66cmある。

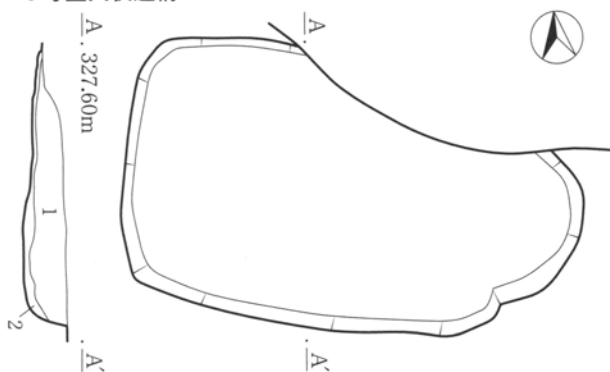
i 9号堅穴状遺構

**位置** 遺跡地西側、1号堀の南東に孤立して位置する。

**主軸方位** N-1°-E

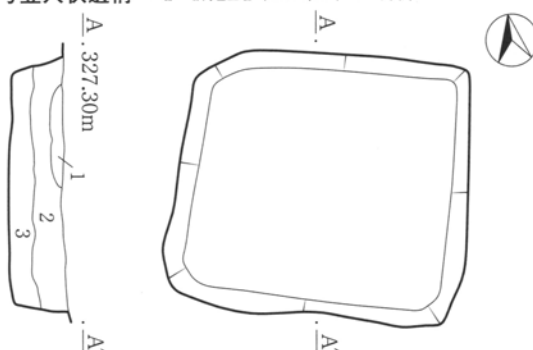
**形態** 隅円長方形で長辺2.86~3.23m、短辺2.84~2.93mで、現状での深さは29~51cmである。柱穴・ピット・土坑ともに無し。

6号堅穴状遺構



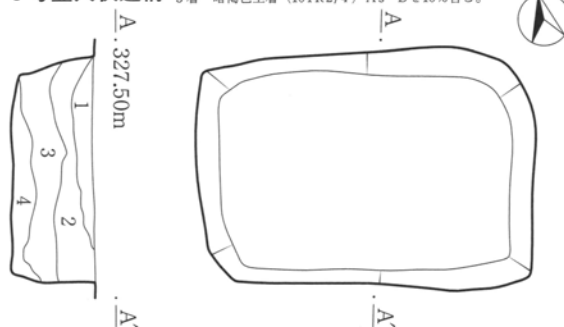
1層 黒褐色土層 (10YR3/2) As-B、柏川テフラを10%含む。FAを5%含む。  
2層 暗褐色土層 (10YR3/2.5) しまり良好

7号堅穴状遺構



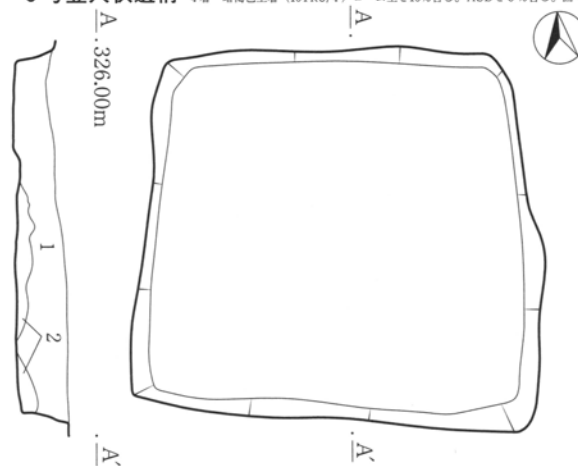
1層 にぶい黄褐色土層 (10YR5/2) FA主体、黒褐色土50%含む。  
2層 暗褐色土層 (10YR3/2) As-Bを20%含む。下層にFAを多く含む。  
3層 暗褐色土層 (10YR2/4) As-Bを10%含む。

8号堅穴状遺構



1層 黒褐色土層 (10YR2/2) FAを10%含む。  
2層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) FAを40%含む。As-Bを5%含む。  
3層 黒褐色土層 (10YR3/2) As-Bを20%含む。ローム土を5%含む。  
4層 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム土を10%含む。ASBを5%含む。固くしまる。

9号堅穴状遺構



1層 黒褐色土層 (10YR3/2.5) As-B、柏川テフラを5%含む。ロームブロック (0.1~2cm) を2%含む。炭化物極少量含む。  
2層 黒褐色土層 (10YR3/2) As-B、柏川テフラを3%含む。

第99図 中世6~9号堅穴状遺構平面図・断面図

8. 土坑

土坑に関しては、一部近世のものも含まれると思われるが、明瞭に区分できなかったので、中近世という形でまとめて報告することにする。

平面形による分類で円形・楕円形・隅円方形・隅円長方形・不定形・溝状の6分類される。

それぞれの類の個数を上げると円形が13基、隅円方形が38基、楕円形が22基、不定形が9基、隅円長方形が9基、溝状が2基の計93基である。

形態により分布の集中・偏在性は各形式の土坑群の分布を調べた結果認められなかった。

円形の土坑は、径90~100cm代で、断面が逆台形の深めものを中心としている。

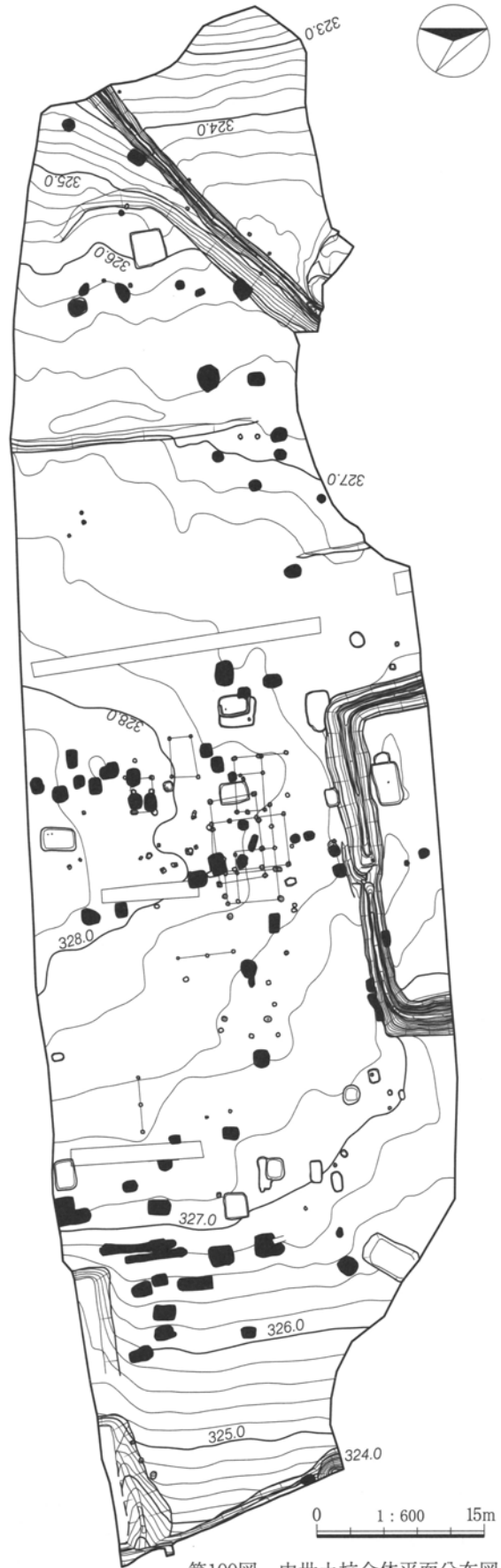
楕円形の土坑は長径80cm代と130~170cm代で、断面逆台形の深めものが主流をなしている。

隅円方形~長方形の土坑は、断面逆台形のもので中心で、隅円方形のものは90~150cm代を中心にして一部2mを越える大形のものもあり、竪穴状遺構に含まれる可能性のあるものもある。隅円長方形のものは大形で130~190cm代に集中する。

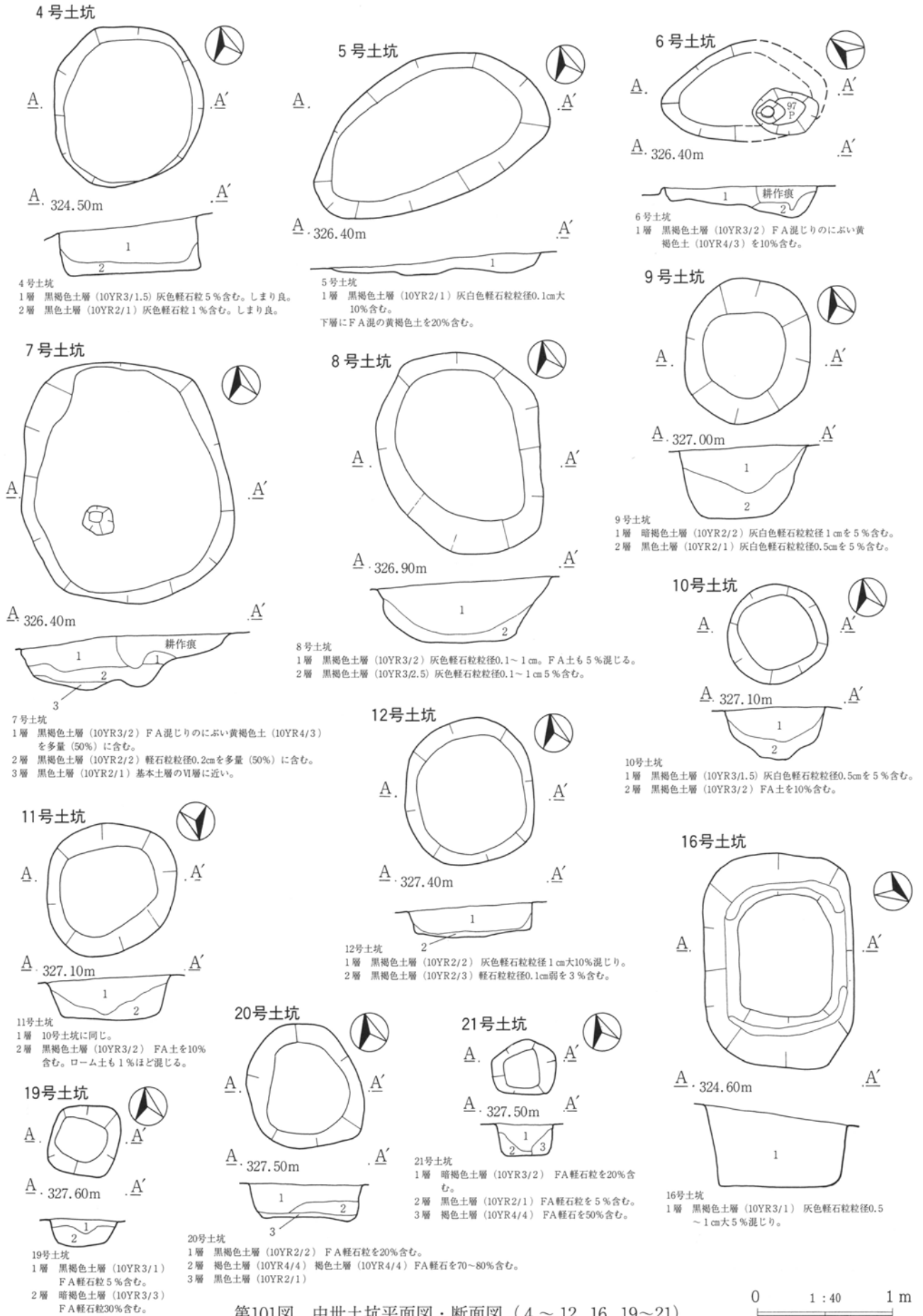
溝状の遺構は、深さが50cm以上の深い逆台形状のもので、長さが5mを越えるものである。

土坑からの出土遺物では、中世土器（図109-44土-1・81・82土-1）、中世陶器（図109-63土-1・85土-1）、石製品として石臼（図109-25土-3・図112-115土-1・2）、茶臼（図109-25土-2）、石搗鉢（図109-25土-1・図111-38土-1）、凹石（図109-25土-4）、磨石（図110-28土-1・図110-33土-1・図110-34土-1・図111-39土-1・図111-40土-1・図111-47土-1・図111-47土-2・図112-85土-2）、台石（図110-25土-5・図111-38土-2）、不明石製品（図110-25土-6）、金属製品として鉄鎌（図112-47土-3）、不明鉄板（図112-52土-1）、棒状鉄製品（図112-89・90土-1）などが出土している。全体的に土坑からの遺物出土が少なく、時期比定・性格の想定は困難である。

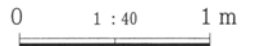
溝が1本、2号堀の区画内より検出された（1号溝、図108）が2号堀内では1号竪穴状遺構より一時期古いものと思われる。

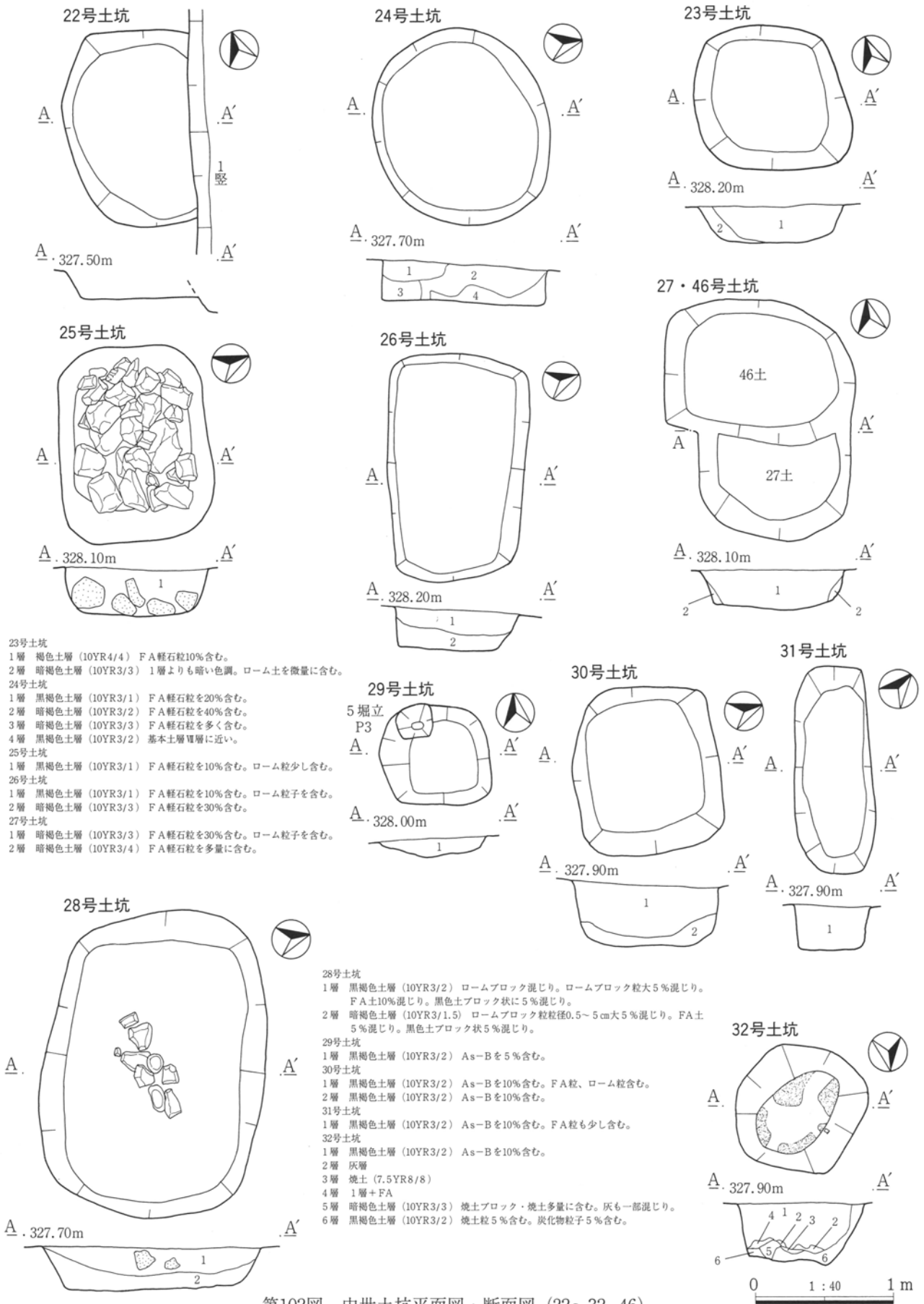


第100図 中世土坑全体平面分布図

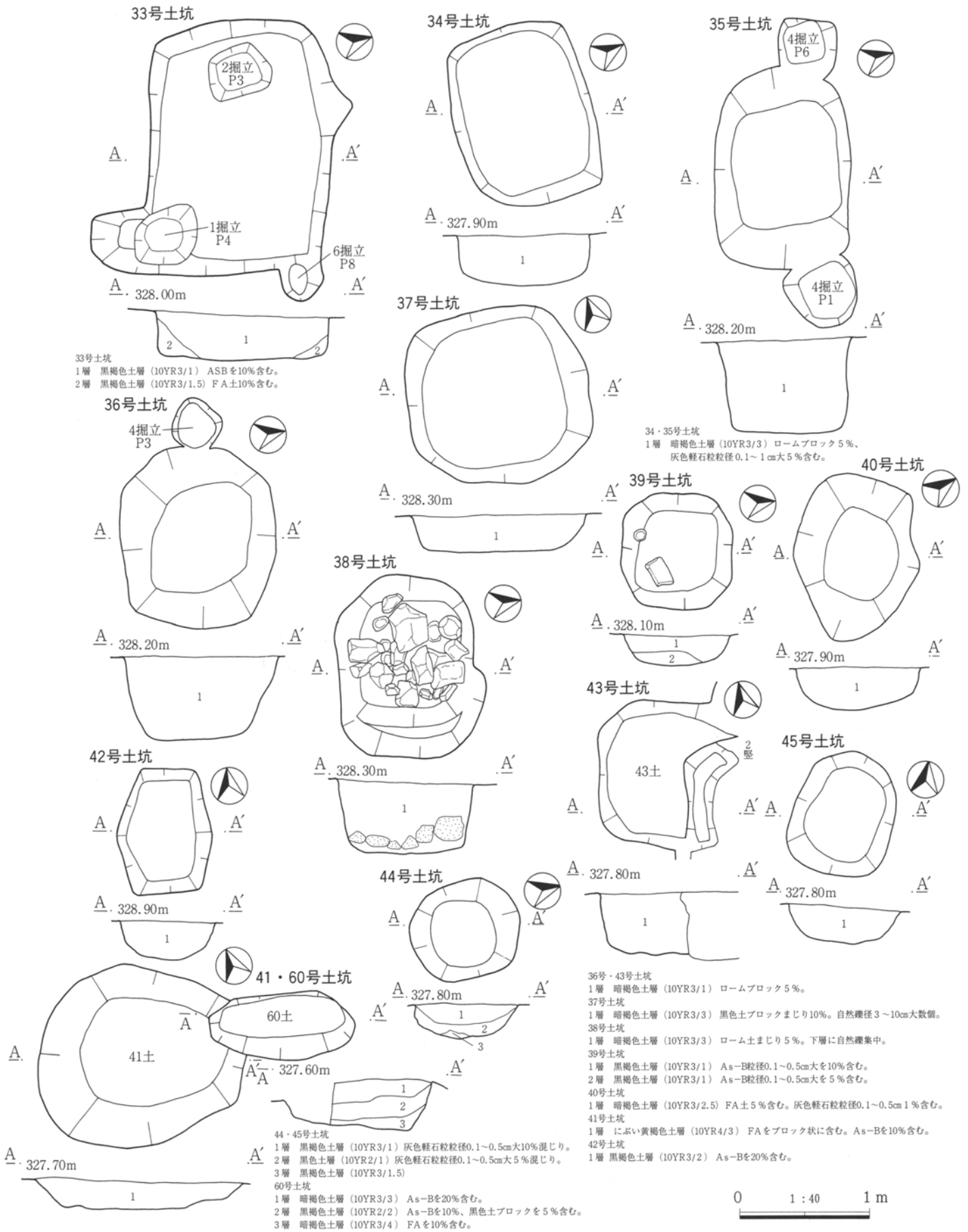


第101図 中世土坑平面図・断面図 (4~12, 16, 19~21)

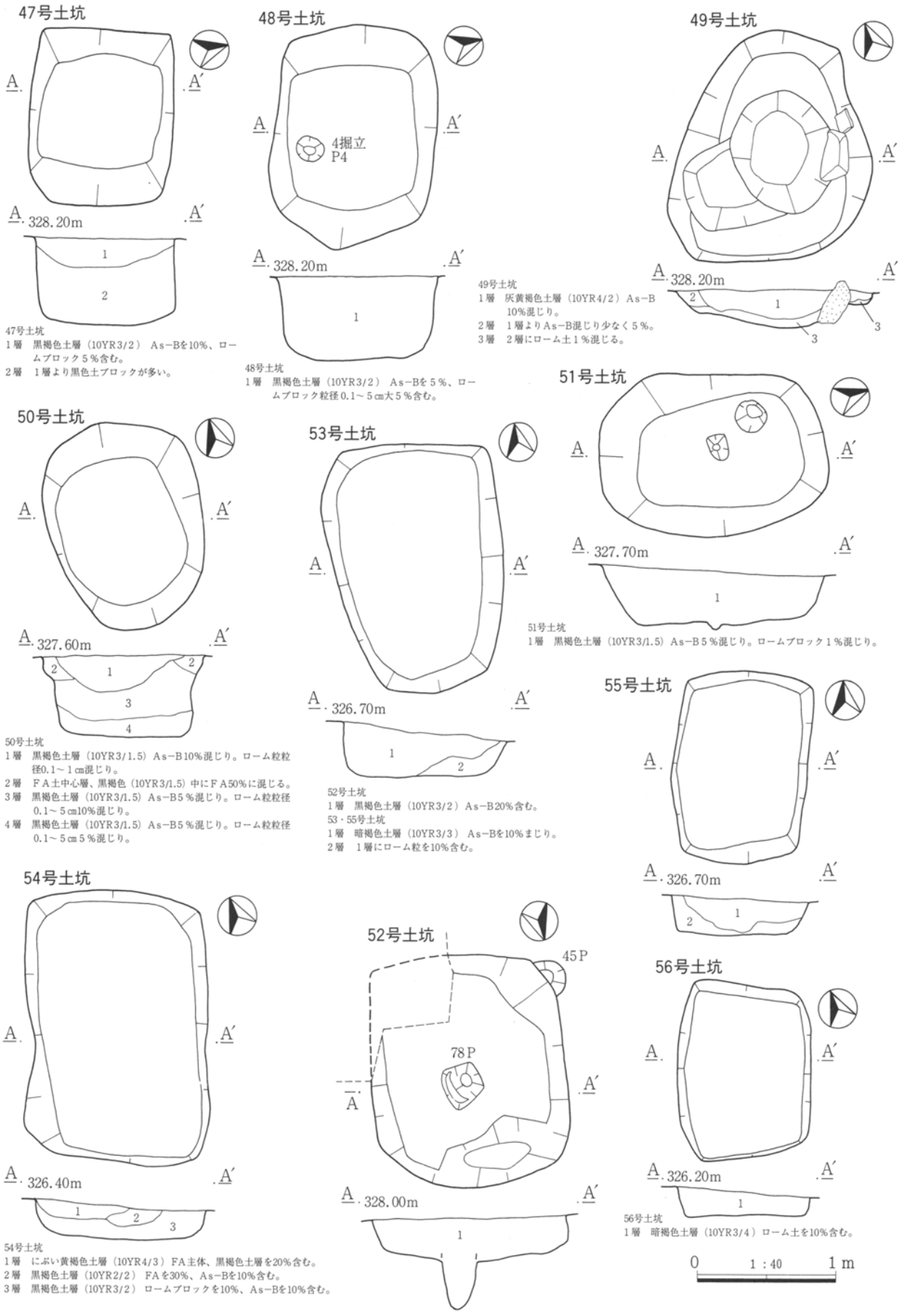




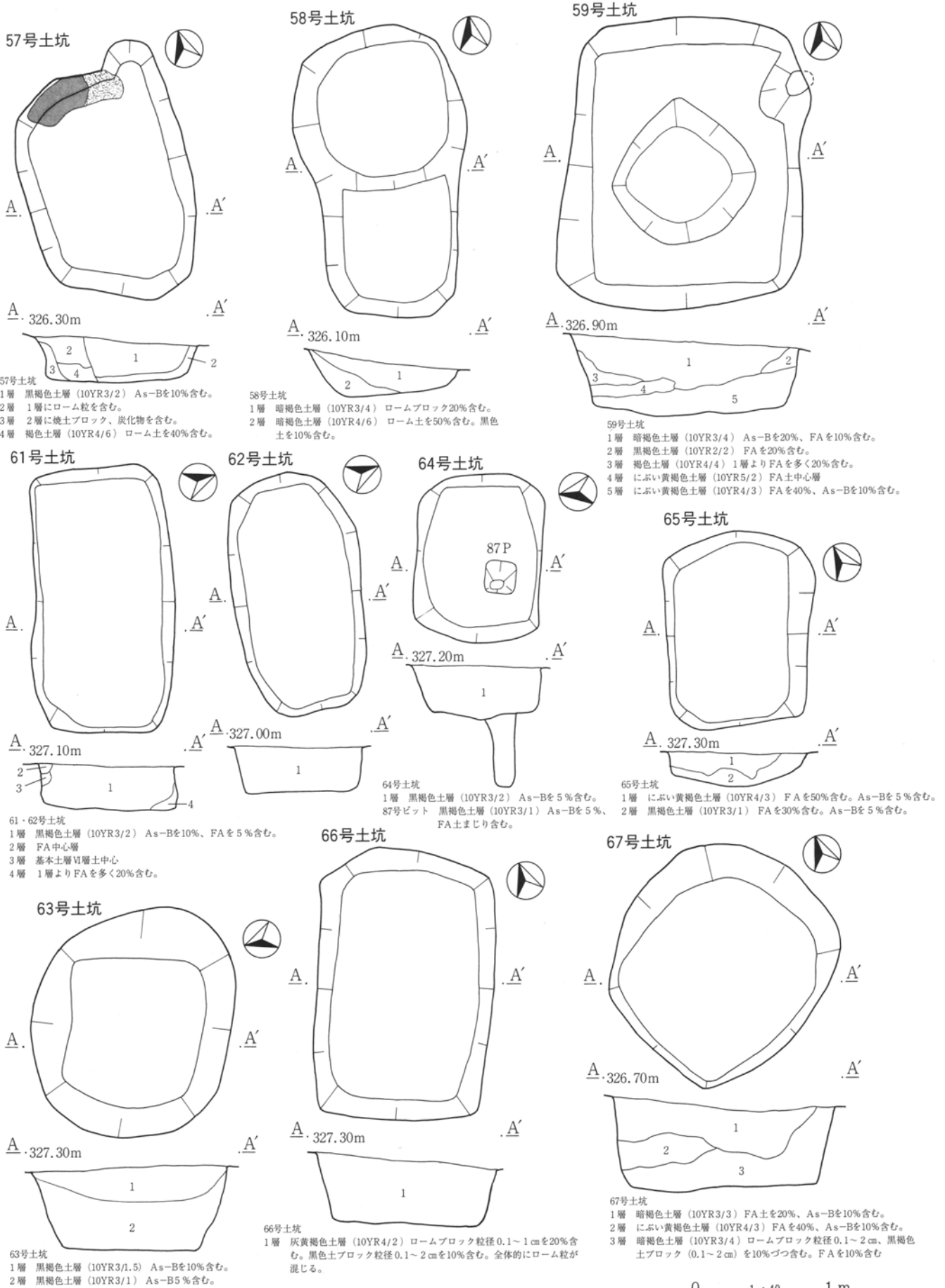
第102図 中世土坑平面図・断面図 (22~32, 46)



第103図 中世土坑平面図・断面図 (33~45, 60)

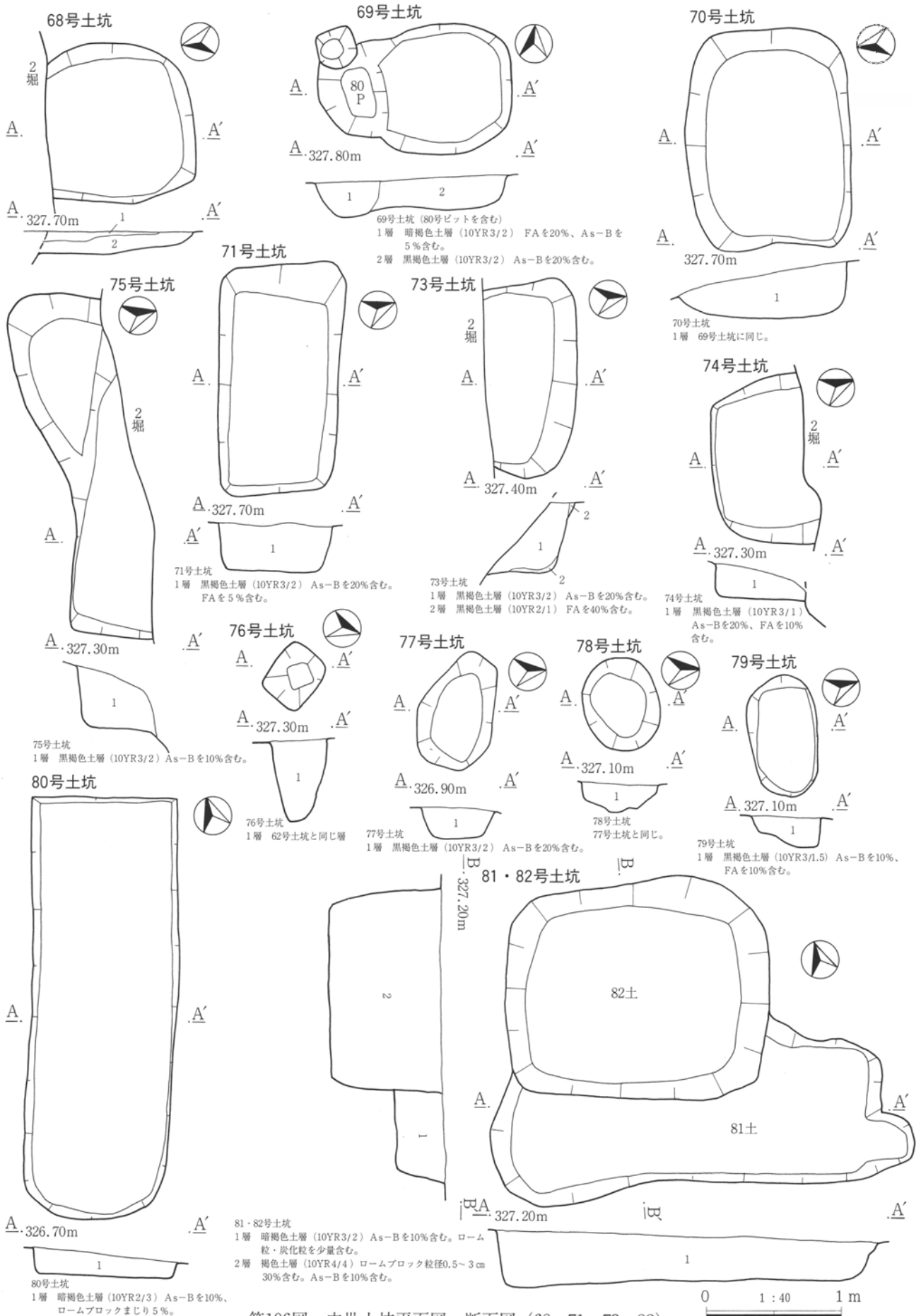


第104図 中世土坑平面図・断面図 (47~56)

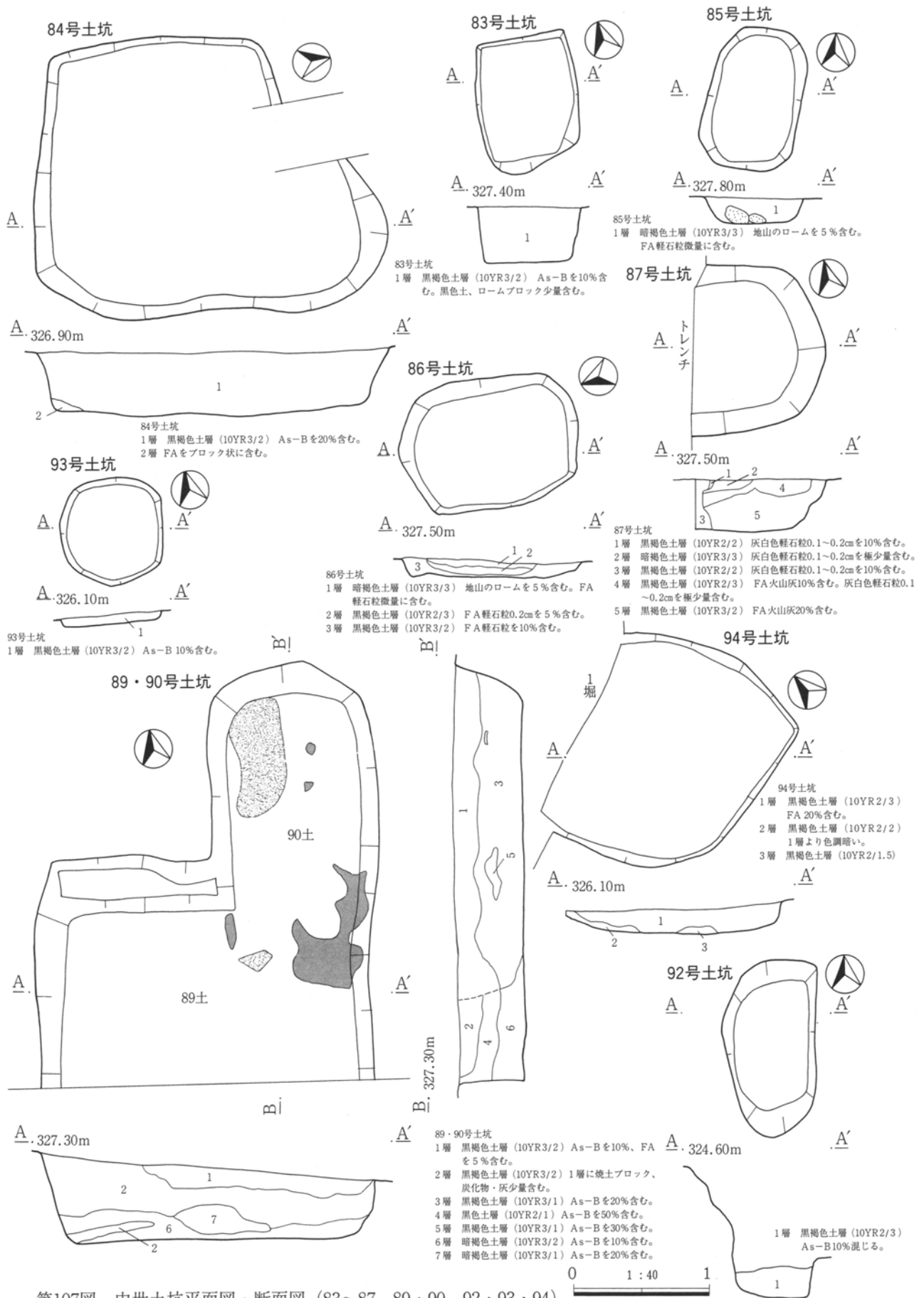


第105図 中世土坑平面図・断面図 (57~59, 61~67)

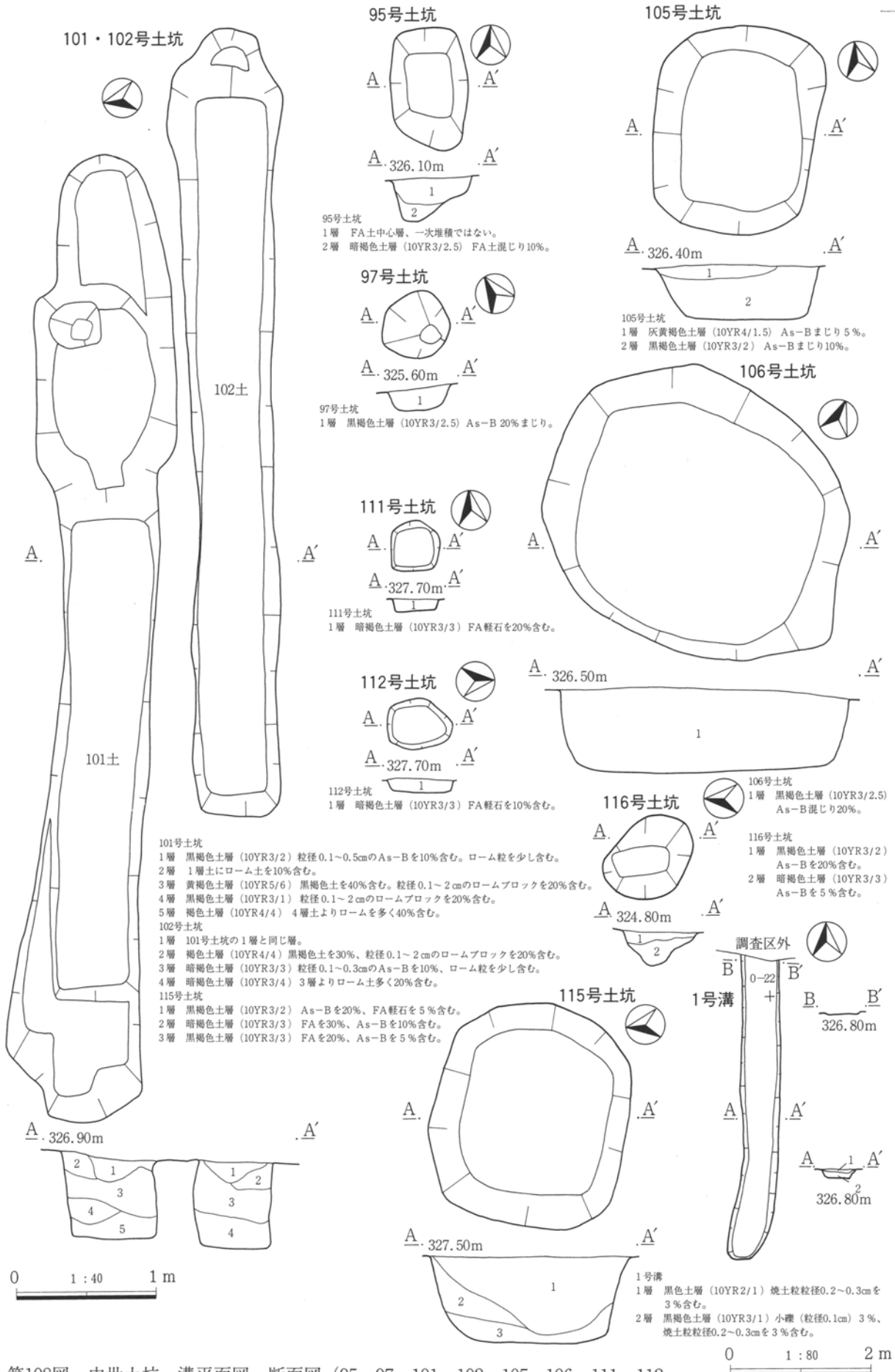




第106図 中世土坑平面図・断面図 (68~71, 73~82)



第107図 中世土坑平面図・断面図 (83~87, 89・90, 92・93・94)

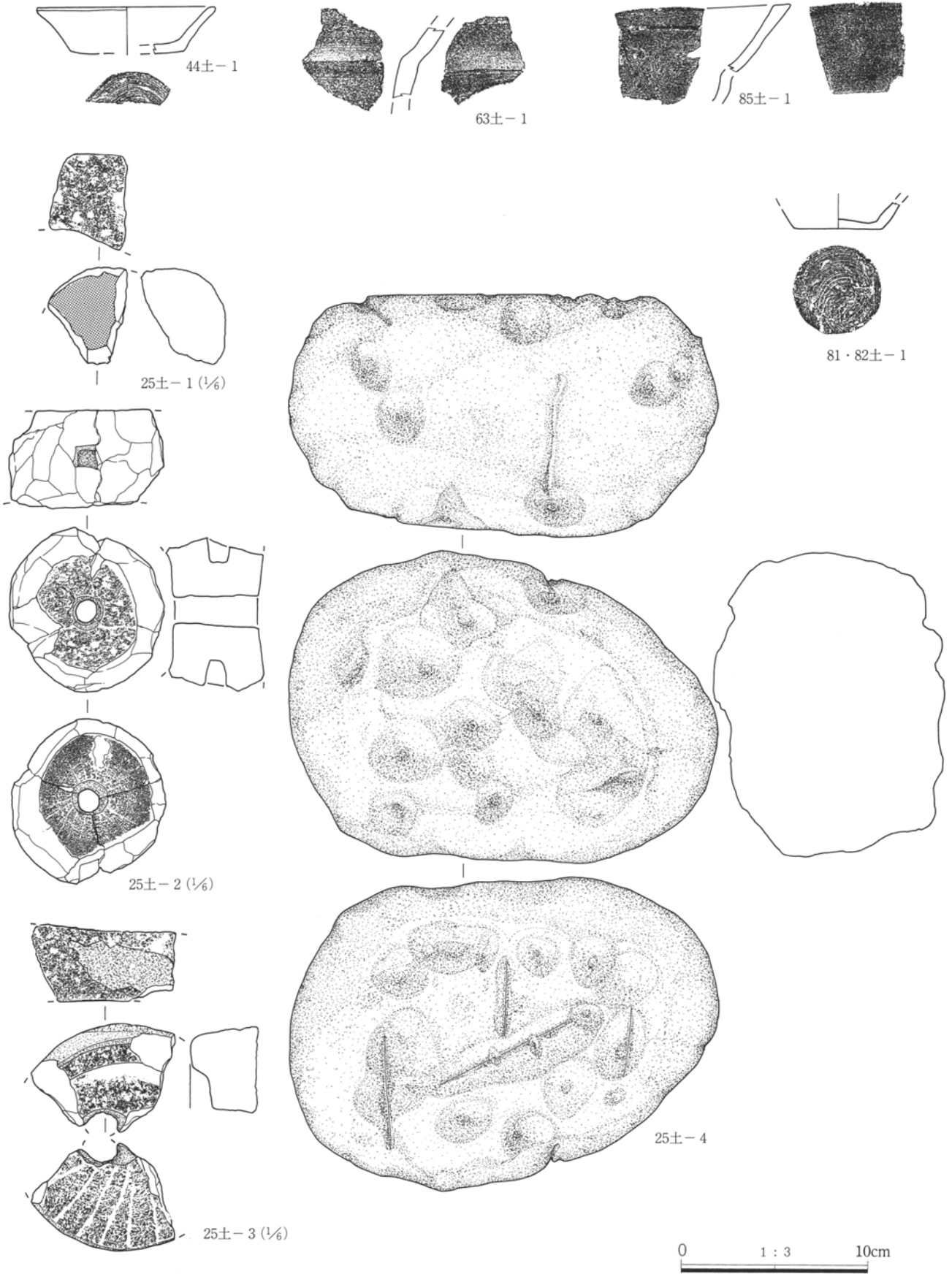


第108図 中世土坑・溝平面図・断面図 (95, 97, 101・102, 105・106, 111・112, 115・116, 1号溝)

## 中近世土坑一覽表

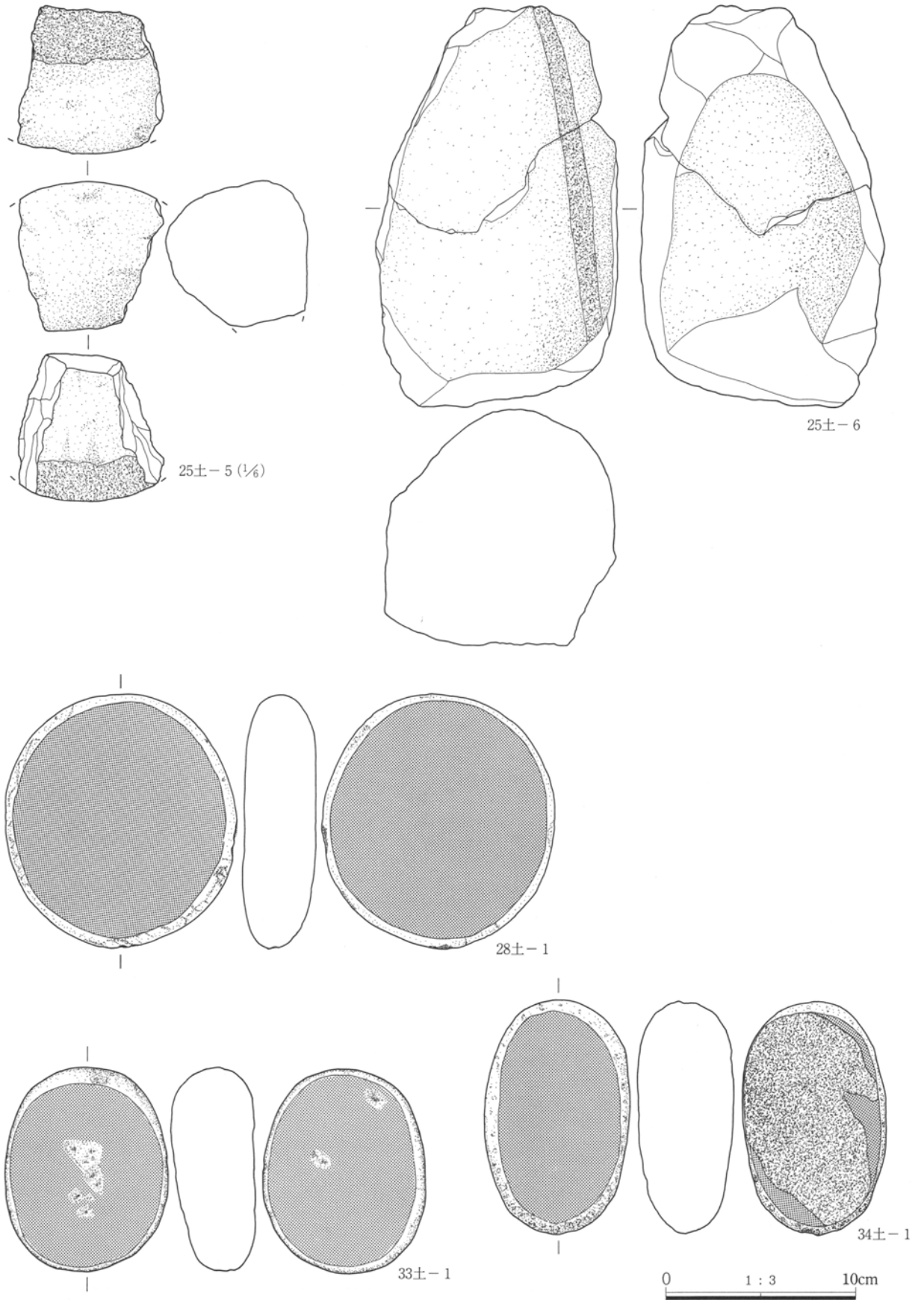
遺構No	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	備考
4	M 1	円	115	113	38	
5	M 4	楕円	181	103	14	
6	L 4	楕円	(121)	73	16	
7	L 4	隅円方形	182	155	36	
8	O 9	楕円	153	120	46	
9	O 9	円	108	97	56	
10	P 10	円	68	74	47	
11	N 9	円	98	95	32	
12	N 9	円	104	97	24	
16	H 2	隅円方形	159	109	66	
19	P 14	隅円方形	53	50	17	
20	O 19	隅円方形	94	81	27	
21	O 19	隅円方形	45	38	22	
22	O 16	楕円	143	(91)	86	
23	H 14	隅円方形	108	106	27	
24	O 13	円	144	127	28	
25	I 15	隅円方形	141	108	36	
26	H 14	隅円長方形	163	98	27	
27	I 14	円?	108	(70)	28	
28	L 13	隅円方形	224	161	32	
29	L 15	隅円方形	80	71	18	
30	K 15	隅円方形	122	106	45	
31	L 17	楕円	148	55	32	
32	L 17	円	90	89	43	
33	K 17	隅円方形	193	138	34	
34	K 15	隅円長方形	139	108	39	
35	J 15	隅円方形	155	104	69	
36	I 15	隅円方形	155	118	64	
37	H 14	隅円方形	140	137	28	
38	G 14	不定形	140	106	56	
39	J 15	隅円方形	90	85	23	
40	K 17	不定形	128	90	35	
41	K 20	楕円	158	140	22	
42	L 18	不定形	95	73	30	
43	M 14	隅円方形	109	(60)	45	
44	M 17	楕円	86	73	27	
45	M 17	楕円	97	78	28	
46	I 14	隅円長方形	136	100	39	
47	H 17	隅円方形	126	105	64	
48	J 15	隅円長方形	162	118	62	
49	H 17	不定形	182	137	28	
50	O 12	楕円	150	110	60	
51	M 14	楕円	164	119	43	
52	J 17	楕円	170	142	30	
53	F 25	隅円長方形	180	120	38	
54	F 26	隅円長方形	197	126	25	
55	F 25	隅円長方形	138	98	20	

遺構No	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	備考
56	H 27	隅円方形	125	98	20	
57	F 27	不定形	177	123	32	
58	E 27	楕円	217	108	30	
59	H 25	隅円方形	216	174	56	
60	K 20	楕円	112	50	40	
61	J 24	隅円長方形	197	113	34	
62	K 25	楕円	178	97	37	
63	L 23	円	176	150	60	
64	L 23	隅円方形	125	93	40	
65	I 23	隅円方形	145	106	24	
66	G 24	隅円方形	200	132	51	
67	J 27	隅円方形	169	155	72	
68	M 18	隅円方形	120	(108)	14	
69	M 18	円	97	94	27	
70	N 17	隅円方形	158	123	46	
71	K 19	隅円長方形	170	90	35	
73	N 20	楕円	143	(68)	52	
74	M 21	隅円方形	126	68	27	
75	M 21	不定形	256	(54)	45	
76	H 24	隅円方形	42	35	60	
77	K 26	楕円	86	56	23	
78	K 24	楕円	68	55	22	
79	M 23	楕円	89	50	22	
80	G 26	不定形	312	108	18	
81	I 24	不定形	312	107	43	
82	J 24	隅円方形	196	160	85	
83	H 23	隅円方形	98	75	40	
84	I 26	不定形	250	202	47	
85	F 20	隅円方形	104	70	17	
86	F 23	楕円	132	97	10	
87	G 23	隅円方形	124	(98)	38	
89	E 23	隅円方形	246	(166)	56	
90	E 23	隅円方形	(308)	73	56	
92	H 31	楕円	132	65	28	
93	N 5	円	83	83	6	
94	P 5	隅円方形	170	(137)	18	
95	O 5	隅円方形	87	55	30	
97	N 3	円	48	46	15	
101	F 25	溝状	685	70	60	
102	F 25	溝状	560	57	61	
105	O 7	隅円方形	148	115	40	
106	N 7	円	243	190	60	
111	L 19	隅円方形	36	33	9	
112	L 19	楕円	46	35	9	
115	J 22	隅円方形	160	138	63	
116	E 29	楕円	70	56	23	

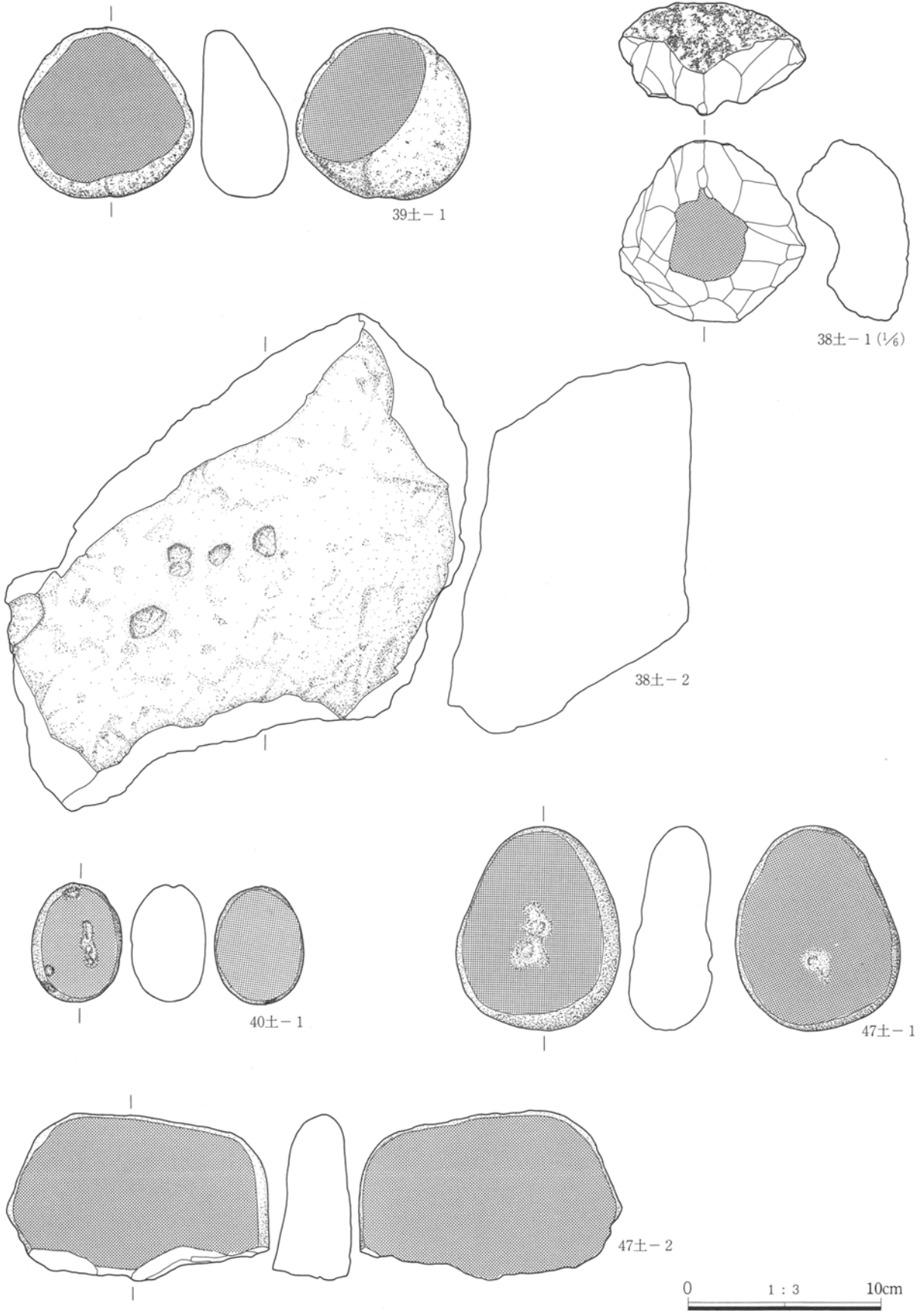


第109図 中世土坑出土遺物 (1)

第4章 調査の成果

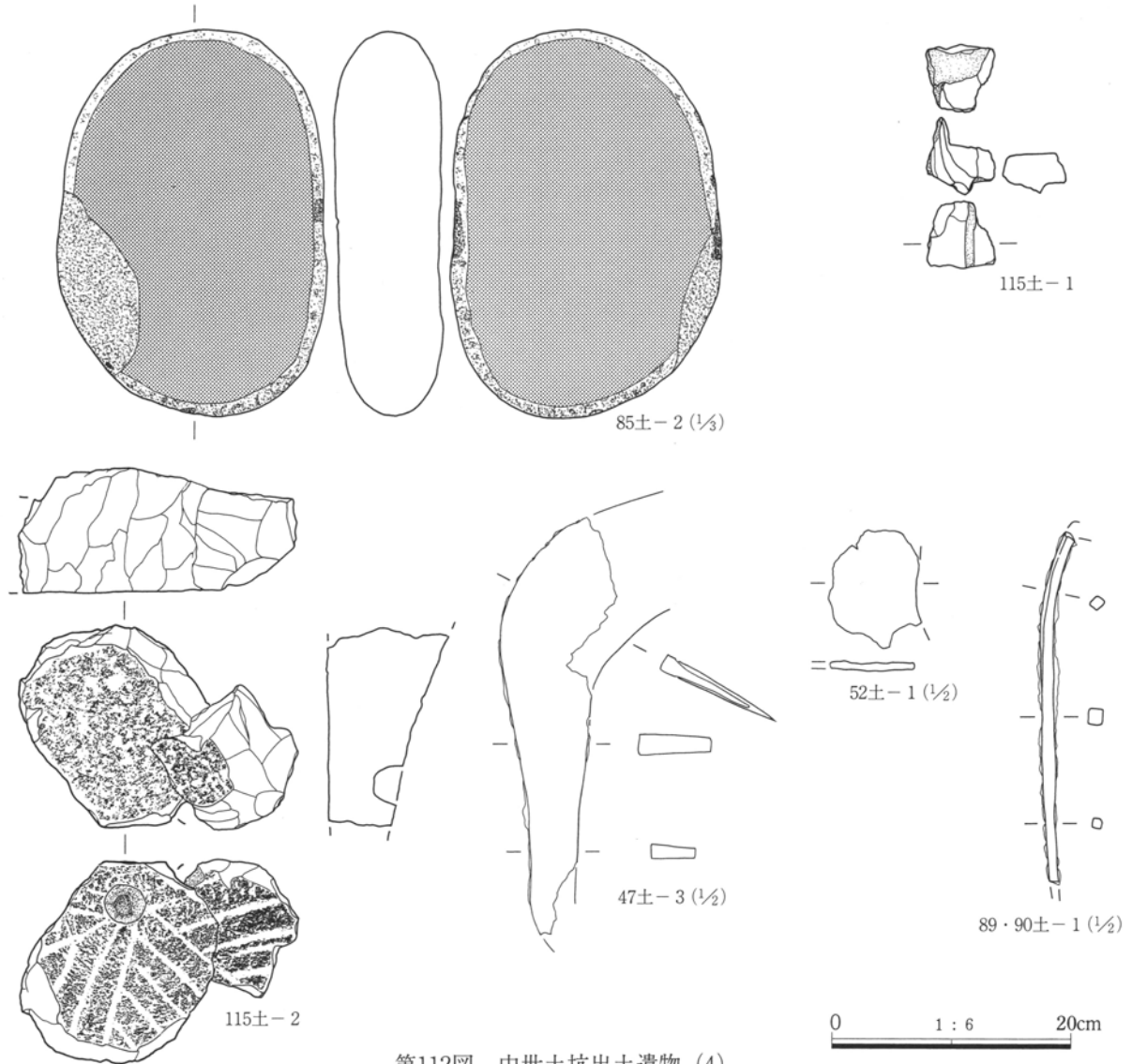


第110図 中世土坑出土遺物 (2)



第111図 中世土坑出土遺物 (3)

第4章 調査の成果



第112図 中世土坑出土遺物 (4)

9. グリッド他出土の遺物

中世の遺物の特に土器は、中世の遺構群からもほとんど出土せず、グリッド他からも30点ほど出土したのみである。分布は遺跡地の西端のⅠ・Ⅱ区と中央やや東側のⅣ・Ⅴ区から数点ずつ出土している。

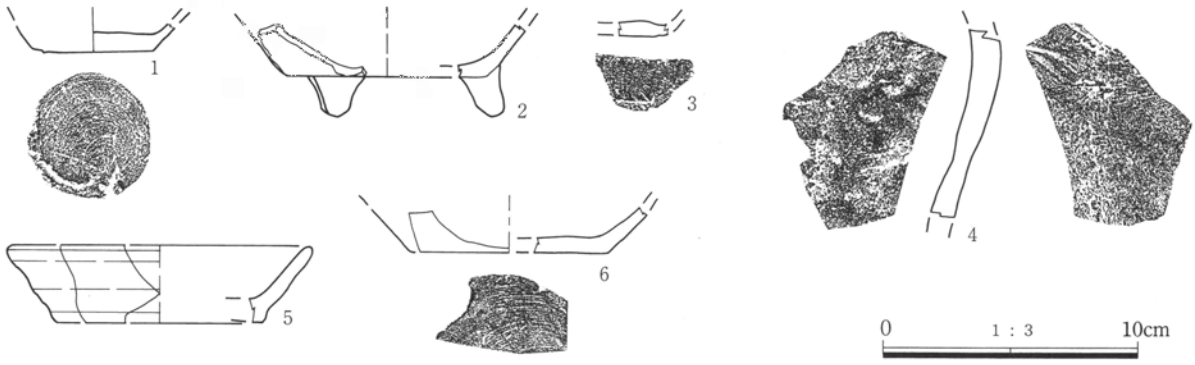
土器は、皿(図113-1・3・5・6)、香炉(図113-2)、常滑陶器甕(図113-4)などが出土している。

石製品は、圧倒的多数が1・2号堀から出土しており、グリッド出土は少ない。

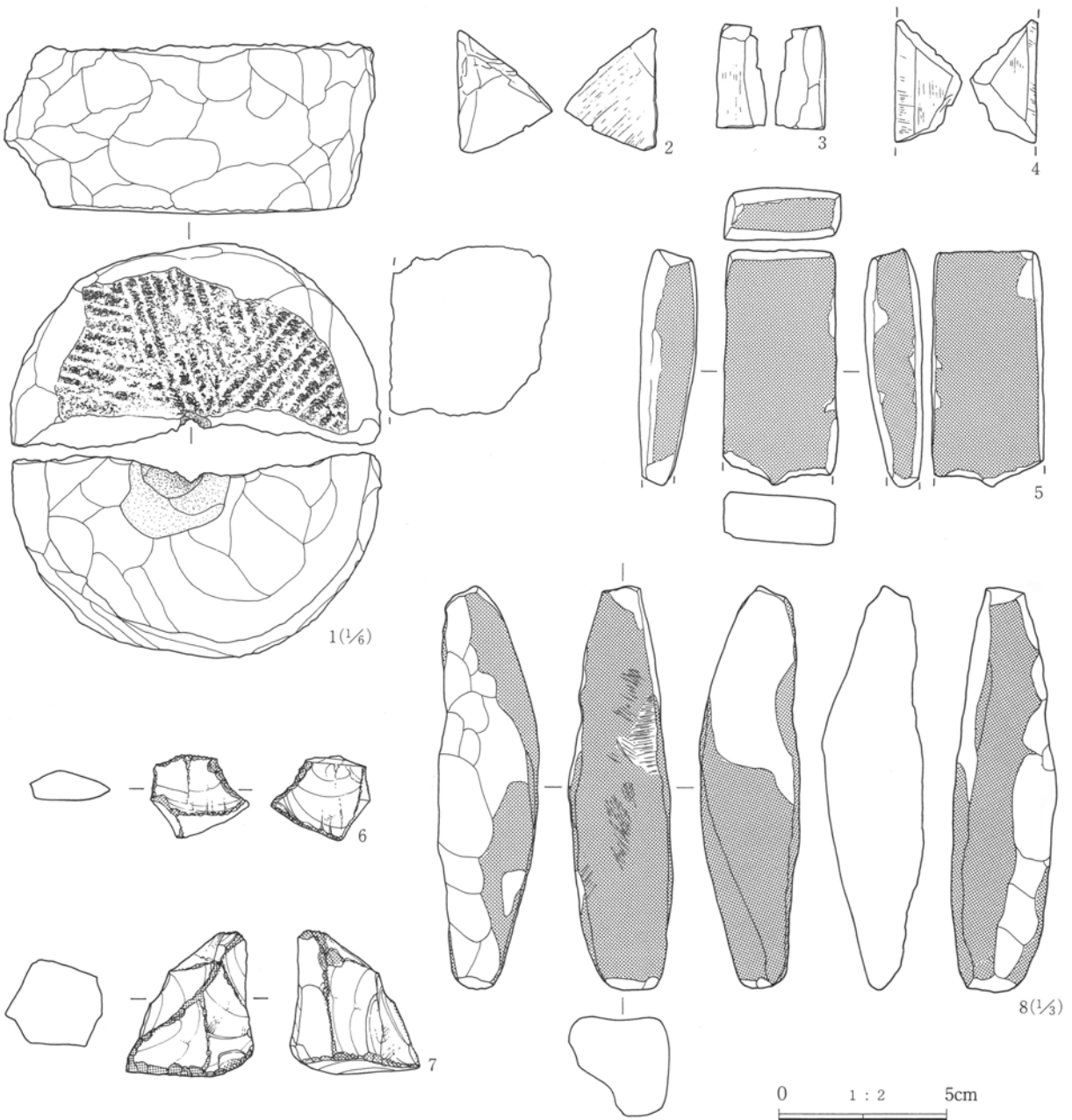
石製品は、石臼(図114-1)、石板(図114-2~4)、火打石(図114-6・7)、砥石(図114-5・8)、磨石(図115-9~13)が出土している。

金属製品は全体に少なく、グリッド他からの出土も6点のみである。渡来銭(至和元寶)(図116-1)、刀(図116-2)、鉄釘(図116-3~5)、不明鉄製品(図116-6)が出土している。

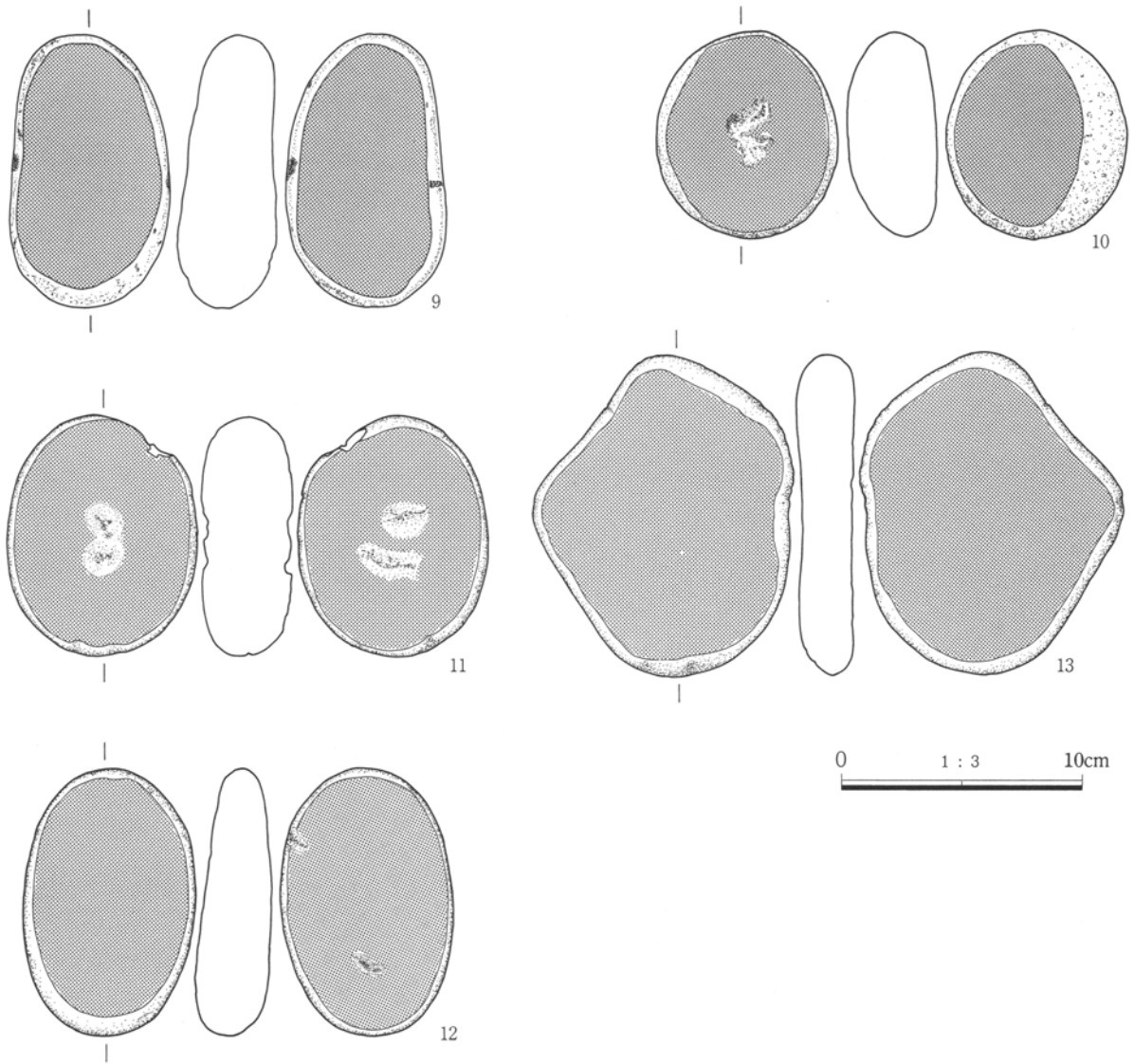




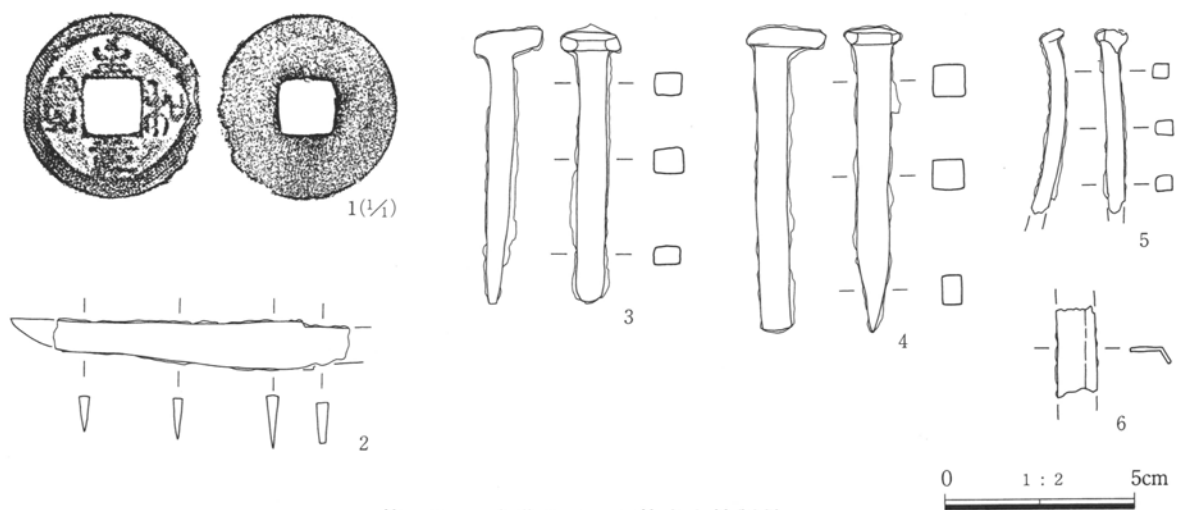
第113図 中世グリッド他出土土器



第114図 中世グリッド他出土石製品 (1)



第115図 中世グリッド他出土石製品 (2)



第116図 中世グリッド他出土鉄製品

第6節 近世以降

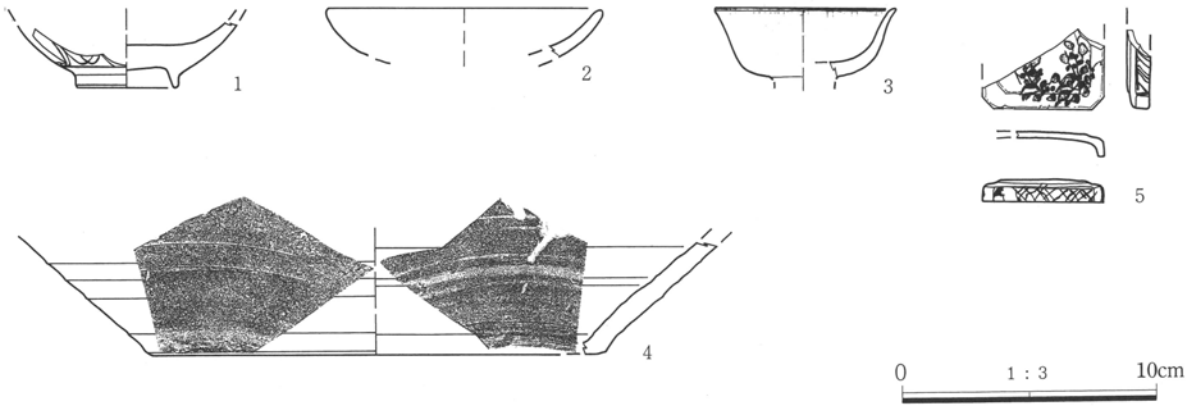
中世の土坑の項で先述しているが土坑のうちで近世に所属するものが一部あると思われる。しかし、遺物が覆土中より出土しているため、該期の土坑か否か明確に判断できないため中近世という形で既に中世の項目で土坑を取り上げた。

ここでは、近世以降の明確な遺構は前述したように確認出来ないため、主に近世以降と判断できるものについて遺物を中心に簡単に記述する。

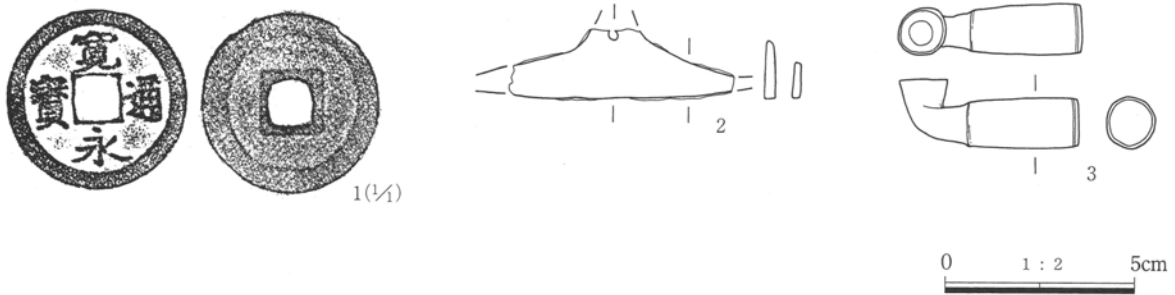
江戸時代の陶磁器は遺跡地からまんべんなく出土しており分布の偏在性はない。総数は114点、総重量683.7g出土している。近代以降は総数85点、総

重量725.4g出土している。遺物の分布は近世同様偏在性は無い。

図示した遺物は江戸時代では、肥前磁器の碗（図117-1）、瀬戸・美濃陶器皿（図117-2）がある。他に寛永通寶（図118-1）や火打金（図118-2）煙管（図118-3）が出土している。近代以降では、瀬戸・美濃磁器合子（図117-5）、製作地不詳磁器坏（図117-3）、土器鍋（図117-4）がある。この他にも江戸時代では、肥前陶磁器及び瀬戸・美濃陶器が多く出土しており、当時の陶磁器の流通の一端を伺うことができる。



第117図 近世グリッド他出土土器



第118図 近世グリッド他出土金属製品

## 第5章 まとめと考察

### 第1節 縄文時代のまとめ

当遺跡よりは、縄文時代前期有尾黒浜式期を中心とした住居が6軒（1, 2, 4～7号住）有尾黒浜～諸磯式期の住居が1軒（3号住）の計7軒検出された。うち、1号住と3号住に拡張が認められた。特に3号住では、有尾黒浜式期と諸磯式期の土器が混在しており、重複の住居での分離はできなかったがおそらく拡張の過程で諸磯式期の住居が構築されたものと考えられる。

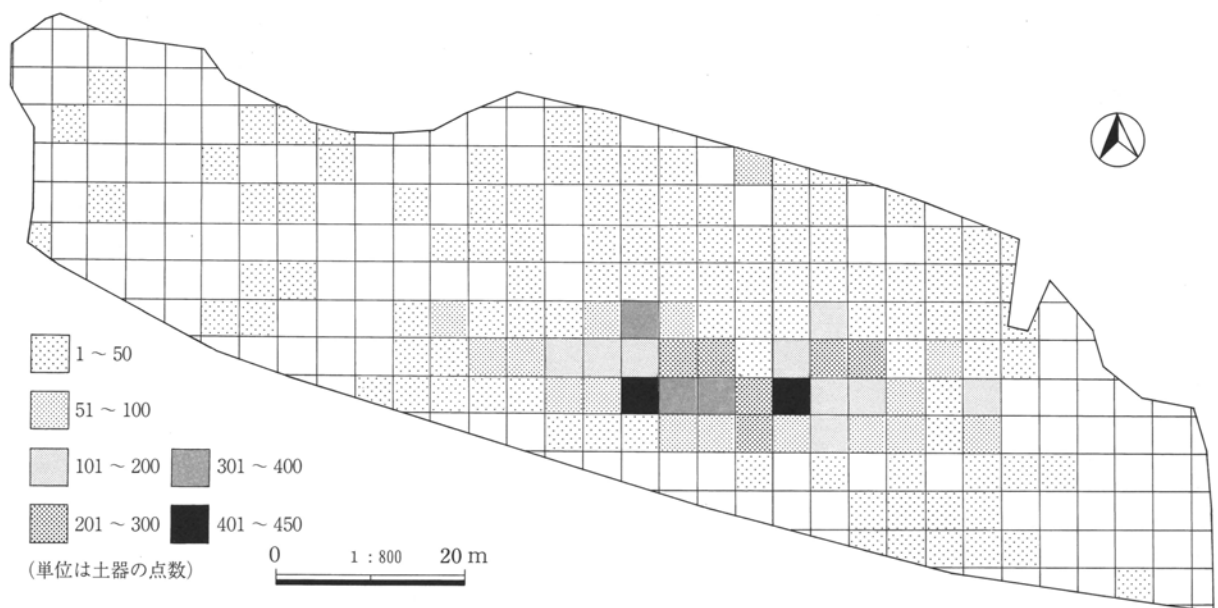
縄文土器及び縄文石器のグリッド出土の分布を調べた。すると、1～7号住居が集中する箇所に遺物も基本的に集中分布することが当然の結果として出てきた。

まず土器を見てみる。(図119) 土器は、1号住・3号住の近辺に集中的に分布し、2号住・4号住の周辺も密に土器が出土している。5～7号住居はそれぞれの住居からの土器出土が少なく住居周辺のグリッドからの出土も少ない。住居の廃絶後の土器のあり方と関係するものかもしれない。土坑の分布との関係でも一番土坑が集中するのは1・3号住居周辺で土器の出土の集中と相関関係がある。

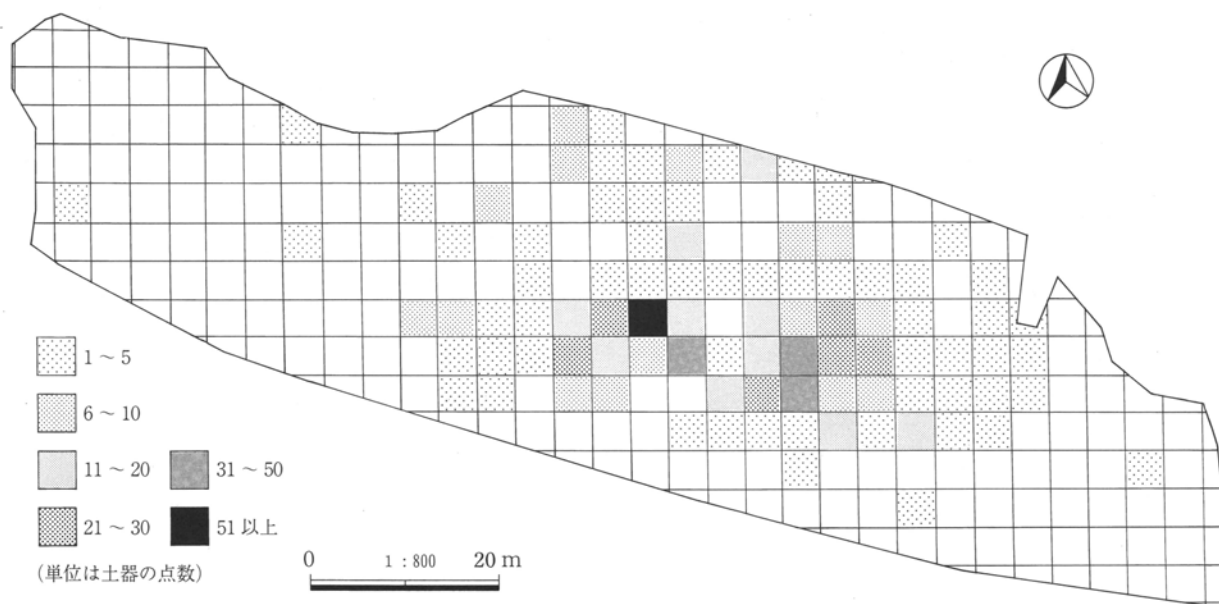
帰属する時期は有尾式を9割以上としてそれ以外の土器型式はわずかである。このことは当該遺跡が有尾式期を中心にしたものであることを証明する。

次に石器である。(図120) 石器の分布も土器と同様に1～4号住の周辺から集中して出土している。特に1住・3住付近からは大量の石器群が出土している。石器石材の構成であるが、総数は246点でその内訳を見ると最も多い石材が黒色頁岩で93点(37%)、次に多いのが粗粒輝石安山岩で77点(31%)、3番目がチャートで15点(6%)、4番目が珪質頁岩で13点(5%)、以下黒曜石9点(3%)・細粒輝石安山岩6点(2%)・赤碧玉5点(2%)・変質玄武岩5点(2%)、2点出土したのがデイサイト・黒色安山岩・変質安山岩・変質玄武岩がある。1点のみの出土は硬質頁岩・硬質泥岩・緑色片岩・溶結凝灰岩・ひん岩・デイサイト・石英閃緑岩・ぎょくずい・珪質変質岩・角閃石安山岩・凝灰質砂岩・流紋岩・変質蛇紋岩・砂岩・頁岩・蛇紋岩である。このうち東北地方に特徴的な硬質頁岩は石匙形の特徴的な押出型石器と呼ばれる石器の石材である。

特定の石器型式が特定の地点に偏るような分布の特異性はほとんど認められなかった。以上簡単ではあるが縄文土器と石器についてその分布と石材について述べた。



第119図 縄文時代土器グリッド別出土分布図



第120図 縄文時代石器グリッド別出土分布図

## 第2節 弥生～平安時代のまとめ

### 第1項 弥生時代のまとめ

弥生時代は遺構が確認できなかったが、土器が集中して出土するところがあった。

吾妻郡内の弥生土器は中期を初現として、後期には中之条町伊勢町天神・伊勢町川端遺跡のように拠点集落も存在しており、吾妻郡内でも東吾妻地区を中心に集中している。

今回の東村の奥田道下遺跡の調査で弥生時代最終末の樽式が出土したが、このような例は今後も吾妻地域で増えていく可能性が高い。

### 第2項 古墳時代のまとめ

古墳時代の遺構が興味深いことが分かった。F Aの火砕流によるF A軽石が流下し、一瞬のうちに埋没した1・2・4・6号土坑が検出された。特に4号土坑は、長径4.2m、短径3.5mの不整楕円形で深さは最深部で1.2mあるが、土坑の覆土はF A軽石・灰が中心で下から4/5まで埋め尽くされている。土坑の性格であるが、鋤先状のもので掘削した跡が残り、掘削の黒色の地山土がブロック状にF A軽石の中にランダムに入り込むなど、土坑を掘削中にF Aの火砕流が流下したのではないかと考えられる。

島のサクと道状遺構が火砕流前にある程度時間差を置いて埋まっていた。後世の攪乱でかなり遺存状況が悪いが少なくともこの地点で畠作が営まれていたことが分かる。その後、土地利用形態を変更し、生産地から何らかの理由で土坑を掘削している段階でF Aの火砕流の被害に遭うのである。4号土坑はあるいは竪穴式住居の基礎を掘削していた可能性がある。土坑の大きさ等から一般に土坑と呼ばれるものの法量から見ると大きすぎており住居のための掘削痕跡の可能性が高い。

### 第3項 平安時代のまとめ

平安時代の溝が1本検出された。この平安時代の溝の断面で、重要な知見が得られた。As-Bと粕川テフラの新古関係が確認できたのである。断面をみると明瞭にAs-B降下後に間層を置いて粕川テフラ層が確認できたのである。年代的にAs-Bが古く粕川テフラが新しいことが分かったのである。この新古関係は、基本土層Bセクでも確認できた。

平安時代には該当する遺構は溝1本のみでこの溝の性格は今ひとつ分からない。さらに南側に該期の遺構が展開する可能性が高い。

## 第3節 中世のまとめ

今回の調査では、縄文時代前期と中世がメインと

## 第5章 まとめと考察

なった。中世の遺跡として稲城（いなりじょう）と地元で呼称されている館跡を山崎一氏が縄張図とともに紹介している。今回の調査で明らかになった遺構と山崎氏が紹介した縄張図と重ね合わせてみると一部齟齬はあるが、ほぼ山崎氏が想定した縄張の中に遺構群が入る。ただし、調査区は崖線北端沿いのみなので南側に中世の遺構群が展開する可能性もある。

屋敷の構成などは、第4節で飯森氏が他遺跡の例と比較しながら分析されているので巻頭の飯森氏企画の復元図とともに参照していただき、当時の遺構の様子をイメージして欲しい。

ここでは、吾妻川流域の特に稲城付近での中世山城の分布を巻頭の口絵にて俯瞰図を作成したこともあり、簡単に述べてみる。

山崎一氏によれば、吾妻郡下では岩櫃城を盟主として57の城郭があり、平郭式山城16、その他の山城3、囲郭式の丘城3、並郭式を貴重とする丘城7、その他の丘城7、平城7、崖端城4、山丘城1、館等6、不明3である。最も多い並郭式山城は他の地方にも見られるものであるが、吾妻におけるこの種の城は、ほとんどが大堀切りで二部に分断されたいわゆる一城別郭の城で、群馬の他地方には少なく、吾妻自体に発達したとの推定が可能である。岩櫃・柳沢・内山・長野原・岩下の中核的諸城および嵩山・尻高の両城がこれに入る。いずれにしても、吾妻川流域では、一城別郭式山城が圧倒的に多く注意を喚起する必要があるだろう。その意味でここ稲城は利根地域に多い典型的な崖端城で反対の意味で特徴的である。吾妻の崖端城は、南西部の鎌原、西窪の外はすべて中之条以東の吾妻川河岸にあり、白井城の影響を受けていると考えられている。

山城の分布について、遺跡分布図と口絵の俯瞰図を参考にして述べてみる。岩櫃城を基点にして、吾妻川流域と沼田へ抜ける道沿いの主要なポイントすべてに山城を築いている。

特に吾妻川流域では、左右両岸に上流より右岸では内出城、植栗城、荒巻屋敷、稲城、白狐城、寄居

城、柏原城が、左岸では同じく上流より稲荷城、中条城、伊参城、古城、岩下城、古城台、田の保屋敷、田野城が川沿いすぐに築城されている。各々地形を選んで選地しており、当時の緊張した社会の状況が窺える。

## 第4節 奥田道下遺跡（稲城）調査の建物を中心として

飯森康広

## 1 はじめに

本遺跡の掘立柱建物跡の認定は、調査時に数度実見した際、目測と部分的な計測により、1～4号建物を確認したものである。加えて、今時スケール1/20の実測平面図を頂戴して再検討を行い、若干の修正とともに、新しく5・6号建物を図上で認定した。このため、ほぼ調査段階で建物認定を行えたものとする。ピットは少ないが集中しており、建物柱穴として無駄なく拾えた印象である。

本遺跡は戦国時代の城郭として、地元伝承されていた。崖側で発見された東西約31m規模でコの字状にめぐらされた堀は、城の主郭を区画したものと見られる。本来崖側に展開していたはずの主郭は、作業の安全性から回避した部分を考慮しても、経年変化により大部分が崩落消滅したものと判断できる。したがって、内部で調査できた遺構も残念ながら堅穴状遺構1基程度であり、内部の実態は不明とならざるをえなかった。このため、今回発見できた建物群は、堀の外側であるとはいえ、城の性格を窺える資料となるのである。県内では単郭の崖端城と前面の建物という構図の調査事例は意外とない。管見の限り、下鎌田遺跡（下仁田町）のみであったので、これを参考事例としながら若干の検討を進めたい。

## 2 建物の形態的特徴

6棟ある建物は2種類に分けられる。1・2号建物とほかの4棟である。第4表に明らかとなり、両者の規模は違う。1・2号建物の面積はともに30㎡強で、住宅用の建物として一般的な規模である。建物の主軸方位を見ると僅差ではあるが、やはり1・2号建物とほかの4棟で分けることができる。更に建物の重複関係では、1・2・6号建物は重複、さらに2号建物は5号建物とも重複している。建物の変遷を想定するとき、少なくとも1・2・6号建物で3時期が存在することとなるが、主軸方位と重複関係から、1・2号建物で各1時期、ほかの4棟で1時期と考えるのが最もすっきりした展開であろう。

1・2号建物では柱穴の新旧関係から、2号建物が後出であるという所見がある。両者は南北棟と東西棟の違いはあるが、面積はほぼ等しく、構造もともに1×3間を採っている。桁行平均柱間は1号建物が2.263mで約7.47尺、2号建物が2.470mで約8.15尺で、ともに広い規格を採っている。この数値は建物の程度を反映するものとするが、いまだ検討中である（註1）。本遺跡を特徴付ける数値であることは確かである。後出である2号建物の桁行平均柱間が広く、桁行も当然長くなっている。同規模の建物の場合、建て替えられた可能性が高く、建築部材を再利用して若干桁行が狭くなる例が見られる。ここでは、新造の部材を使って同様な建物を作り替えたのだろうか。

6号建物は1・2号建物と重複する位置にあるが、面積は19.12㎡と小さい。機能的な連続性は想定しにくい。庇を2面設けている点で面積は大きいですが、身舎部分のみを比較すると、3～6号建物すべて大きさも構造も類似していることに気づく。さらに5号建物とは庇の付け方も似る。1×1間構造では建物の程度は良くないだろう。4棟は類似する零細な建物であり、4棟で1時期を構成する可能性、2棟ずつで2時期、或いは1棟ずつで4時期など可能性はあるが、遺構の重複などを考えれば、2時期までが限度と言えるだろう。6号建物の形態で注目されるのは、北壁面を西に2間延長して堀とし、西壁面も1間分壁面を延ばしている点である。見通しを効かせない配慮が構造から読み取れる。同様に5号建物も西壁のみ1間北へ延ばしている。

## 3 建物の位置付け

1・2号建物は同じ機能を持って連続的に建て替えられた可能性が高い。主郭に対する位置は、2号堀に設

## 第5章 まとめと考察

けられた土橋から南へ真っ直ぐ伸ばした中軸線の西側に沿う形になっている。位置から見て通路を遮断するものではなく、構造的にも門とは思えない。建物の規模や構造は一般的な居住用と思える。ただし、1棟のみの構成で2時期にわたって設営されている状況を見ると、門前の従者の家屋というばかりでなく、門前の守り・監視を視野に入れた配置になっていたのではなかろうか。

1・2号建物との新旧関係は不明だが、6号建物は位置的に1・2号建物に対比される存在であり、質的な違いも窺える。構造的に居住用としては貧弱と言える。主郭の土橋から延びる中軸線を軽微ではあるが遮断する形になっている。壁面から延びる塀など遮断を意識している面もあることから、門の機能も窺える。開口部は西面とも考えられるが、土橋までの距離が有りすぎ、門としては疑問が残る。周辺に同程度の雑舎が点在することから、遮断的な機能を持つ一連の建物群と見ることも可能だろう。5号建物も塀を延ばすなど、主郭寄り2棟は主郭への遮断を意識している。4号建物は内部に重複する土坑を内部施設とする可能性もあることから、南より2棟は周辺に点在する土坑との関連が窺える。3～6号建物は、番小屋のような側面を持つとともに、もう少し生活に密着した納屋などの雑舎の集まりであったと考える。

### 4 下鎌田遺跡（下仁田町）の建物 ー比較資料としてー

#### (1) 概要

下鎌田遺跡は、昭和63年から平成2年まで上信越自動車道の事前発掘調査によって新たに発見されたものである。特徴としては、鎭川に向かって迫り出した痩せ尾根の先端を堀切と横堀で城郭化する（堀の内）とともに、土橋から延びる中軸線（通路）に沿って両側に建物（堀の外）が並んでいる。堀の内では一部重複して建物9棟が整然と建ち並び、屋敷的な空間を形成している。時期は短期間で15世紀以降から16世紀末までの間とされる。堀の外では建物が軒を並べて16棟あり、通路を挟んで北側に11棟、南側に5棟が整然と並んでいる。建物の重複も出土遺物もないことから、報告者は「生活痕跡を残さない遺構」と性格付けしている。

#### (2) 堀の内の建物

6号建物が主要建物で、2×5間の東西棟に西庇を持ち、南面には2カ所の張り出しを設け、面積は67.31㎡とやや大きい。3号建物と9号建物が重複することから、概ね2時期の変遷が想定されているものと考えられる。しかし、今回桁行平均柱間を検討することでもう少し違った様相を見ることができた（註2）。

桁行平均柱間は、①1.833～1.917m（約6.0～6.3尺）が1・2・5・6・9号建物の5棟、②2.056～2.100m（約6.8～6.9尺）が7・8号建物の2棟、③2.381m（約7.9尺）が3号建物の1棟、④1.633m（約5.4尺）が4号建物の1棟である。これによって分別される建物を見ると、建物の変遷を反映している可能性が非常に高い。数値①は主屋である6号建物が含まれるとおりに、屋敷成立当初の構成と思われる。6号建物を中心に南・北・西に1棟ずつ付属建物があり、やや西に離れて5号建物がある。5棟のみの構成であるが、当初から整然とした構成であったことが判明する。以下、時期的な順位は不明だが、9号建物を建て替える形で、数値③の3号建物が建てられ、また東端の7・8号建物は数値②を採っており、数値①以降に付け足された付属建物ということになる。残る数値④の4号建物は5号建物と並立し、当初から存在してもいいが、数値から後出としておく。堀の内の建物は3～4時期の段階を経て形成されたこととなる。なお、主軸方位を加味して考えると、7・8号建物は6号建物ほかに方位を合わせており、方位の変わる9号建物と違う。前者を追加された建物、後者を立て替えられた建物と考えれば、最終的に8棟で構成される建物群であったと結論できる。

#### (3) 堀の外の建物

主軸方位は、22号建物を除きあまり違いはないが4つに分類できる。A群はN-40～46°-E（東西棟は直交方向、以下同じ）で5棟、B群はN-48～51°-Eで7棟、C群はN-53～56°-Eで3棟、D群がN-



15°-Eの1棟である。分布を見るとA群では13号建物を除き、4棟が建物群の中央部に位置する。C群の3棟では、2棟が北端で1棟が南端と縁辺に集中する。D群の1棟も南端である。つまり、主軸方位の違いは所在する位置が大きく作用していて、傾斜など地形的な制約に左右されている可能性が高い。ただし、C・D群は時期差を反映している可能性も残している。

桁行平均柱間では、①1.856m（約6.1尺）が12号建物で1棟、②2.042～2.108m（約6.7～6.95尺）が10・22号建物の2棟、③2.275m（約7.5尺）が23号建物の1棟、⑤1.667～1.817m（約5.5～5.99尺）が13～15・24号建物の4棟、⑥2.125～2.225m（約7.0～7.3尺）が11・16・18・20・25号建物の5棟、⑦2.733～2.863m（約9.0～9.4尺）が19・21号建物の2棟、⑧1.375m（約4.5尺）が17号建物の1棟である。分類は堀の内に合わせたが、数値的に近い数値①と⑤、数値②と⑥をまとめることも可能である。堀の内で当初の構成である数値①に対応して、数値①⑤の4棟があり、次いで堀の内で追加された建物の数値②に対応して、数値②⑥の7棟となる。立て替えである数値③も23号建物1棟に対応する。残る3棟では数値⑦2棟が非常に広く特異であるが、21号建物は2×2間で梁側と桁側を逆にとらえることも可能なため、梁間平均柱間で数値②に含めた方が良いと思う。一方の19号建物は特異なまま残る。面積は堀の外建物群で最大であり、しかも中央に位置する。これは異例な建物と考えて、時期は数値①⑤段階に入れておきたい。なお、数値⑧の1棟は建物も極端に小さく1例のため、周辺の数値②のなかで考えておく。堀の外建物は当初一定の距離をおいて点在していたが、その後間を埋める形で軒を連ねる配置になったものと考えられる。報告書では短期間の遺構と想定されているが、元来遺物の少ない本県の状況では、存続時期を長く見ることも可能だろう。

## 5 まとめ

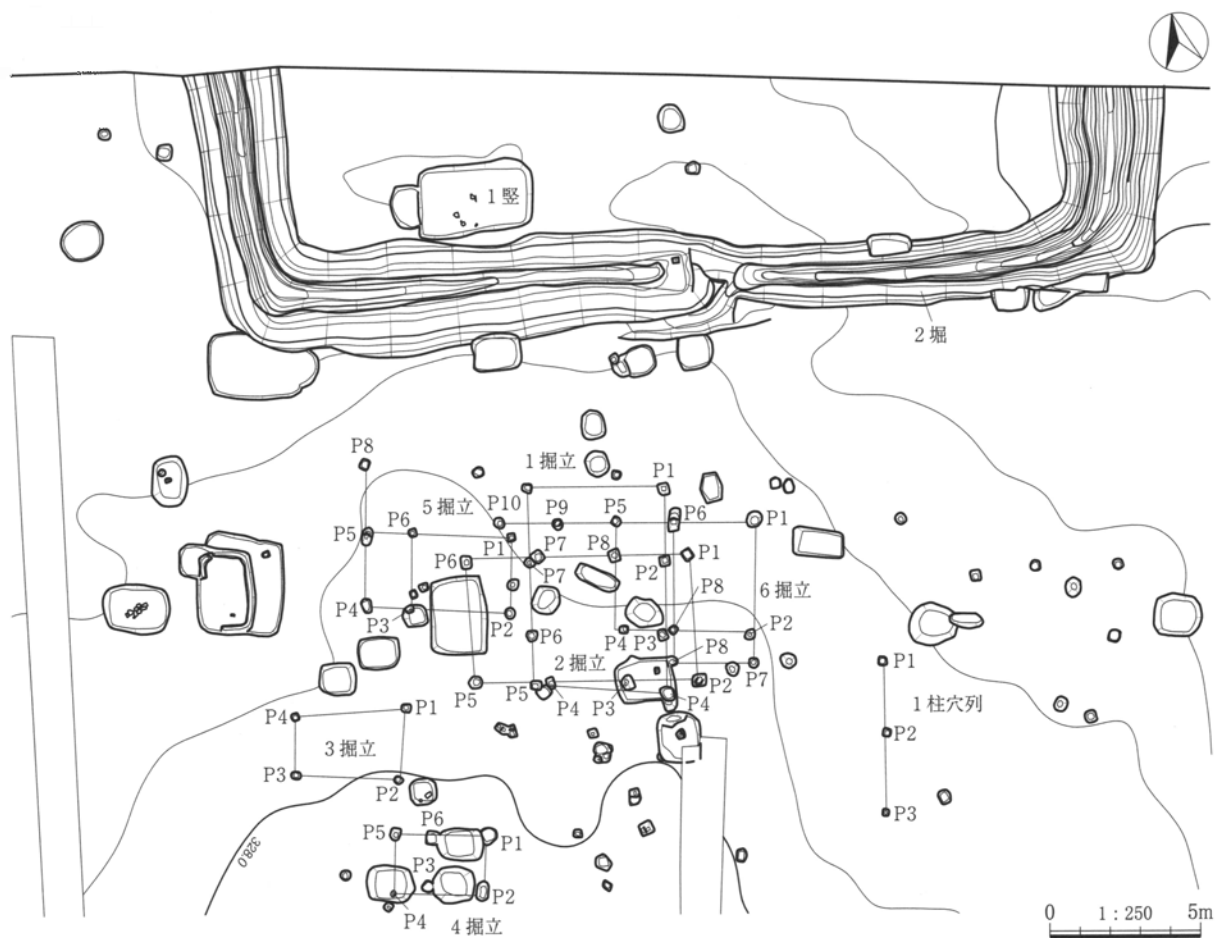
本遺跡では堀の外側だけで建物が発見され、3～4時期を想定することができた。また、類例として下鎌田遺跡を検討した結果、堀の内と堀の外ではほぼ3時期の変遷を想定することができた。したがって、本遺跡の主郭（堀の内）部分でもこうした変遷があった可能性を指摘しておきたい。ただし、地形として痩せ尾根である下鎌田遺跡では通路に沿って細長く建物を並べる必然性があるが、本遺跡は広い台地を利用しており、そうした必然性がない。通路を指向していることは確かであるが、周辺の空き空間をどう活用しているのか。類例の増加を待って、いずれ検討したい課題である。

註1. 筆者は、以前桁行平均柱間の違いに着目したことがあるが、未だ検討途中である（飯森2003・2004）。そこでは主に遺跡内での建物変遷を考える資料として扱っているが、今後は採用数値を総括・比較することで、遺跡同志の性格の違いなども見て行ければと考えている。

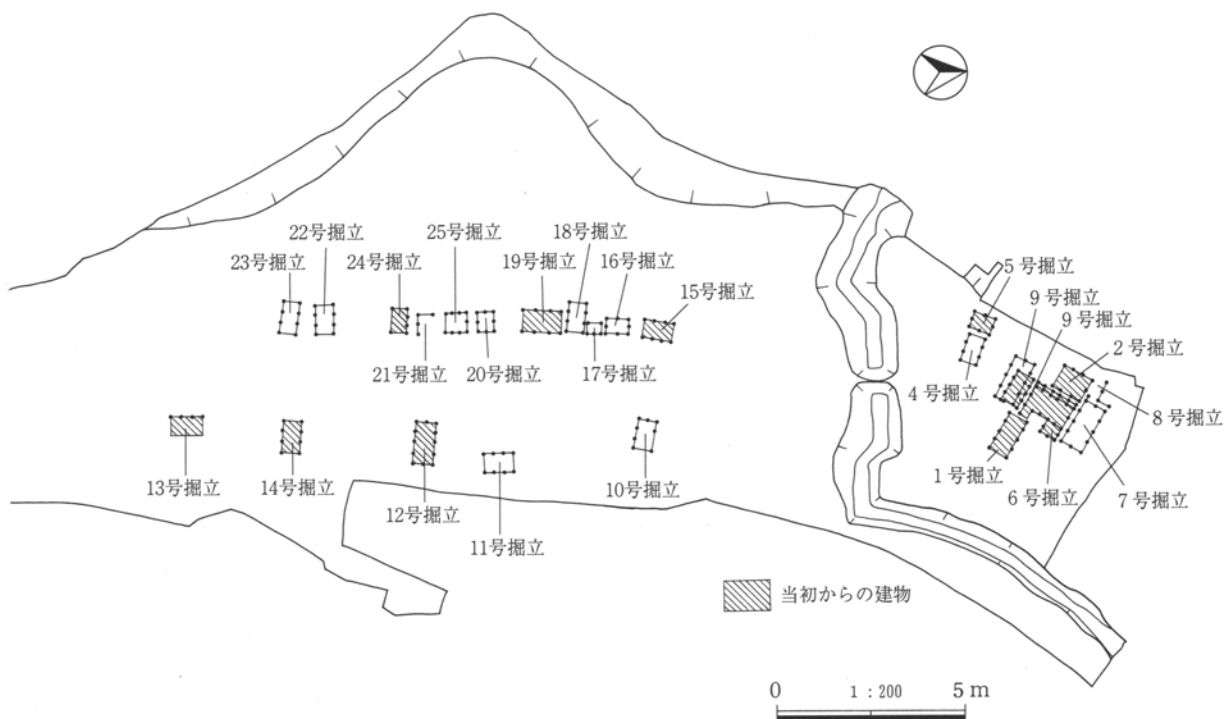
2. 報告書で大賀健氏は、「軒竿からみた企画性では、6.2尺若しくは7尺の軒竿を用いたものと考えられるものは、25棟中21棟で全体の84%にあたる」（大賀 1997）としている。これは計画寸法に視点をおいた考察と見られ、本文中の計測表でもこうした視点が反映されている。興味深い知見ではあるが、筆者は今回挿図を計測して新たに計測表を作成した。縮尺の関係でやや誤差も大きいですが、検討数値としては有効であると考えられる。

## 参考文献

- 飯森康広 2003 「元総社西川・塚田中原遺跡の屋敷遺構について ー下植木壱町遺跡修正案を兼ねてー」『元総社西川・塚田中原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 同 2004 「荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡・荒砥諏訪西遺跡の屋敷遺構について」『荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大賀 健ほか 1997 『下鎌田遺跡』下仁田町教育委員会



第121図 奥田道下遺跡遺構分布図



第122図 下鎌田道下遺跡建物分布図 (1 : 400)

奥田道下遺跡建物計測表

No	主 軸 方 位	面積	桁行 1	桁行 2	桁行平均	分類	平均柱間	梁間 1	梁間 2	梁間平均	平均柱間	規 格	庇・外形	重 複
1	N-13°-E	30.94	6.76	6.82	6.79		2.263	4.54	4.18	4.36	1.700	1×3間・南北棟		2 (新)・5
2	N-77°-W	30.96	7.38	7.44	7.41		2.470	3.97	4.20	4.085	2.125	1×3間・東西棟		1 (旧)・5・6
3	N-71.5~80°-W	7.98	3.72	3.4	3.56			2.43	1.93	2.18	2.162	1×1間・東西棟	台形	
4	N-75.5°-W	5.56	3.1	3.01	3.055		1.528	1.95	1.85	1.9	1.563	1×2間・東西棟		
5	N-75°-W	11.71	3.33	3.32	3.325			2.51	2.56	2.535	1.475	1×1間・東西棟	西1.50	2
6	N-15°-E	19.12	3.55	3.75	3.65			2.72	2.60	2.66	2.350	1×1間・南北棟	南1.06・西1.85	1・2

下鎌田遺跡建物計測表

No	主 軸 方 位	面積	桁行 1	桁行 2	桁行平均	分類	平均柱間	梁間 1	梁間 2	梁間平均	平均柱間	規 格	庇・外形	重 複
1	N-8°-W	24.68	7.2	7.1	7.15	①	1.875	3.4	3.40	3.4	1.700	2×4間・南北棟		
2	N-75°-E	22.26	5.55	5.45	5.5	①	1.833	4.3	4.20	4.25	2.125	2×3間・東西棟		
3	N-19°-W	39.99	9.55	9.5	9.525	③	2.381	4.35	4.30	4.325	2.162	2×4間・南北棟		9
4	N-26°-W	13.02	4.9	4.9	4.9	④	1.633	3.15	3.10	3.125	1.563	2×2間・東西棟		
5	N-64°-E	12.25	3.75	3.7	3.725	①	1.863	2.95	2.95	2.95	1.475	2×2間・南北棟		
6	N-75°-E	67.31	9.55	9.35	9.45	①	1.890	4.7	4.70	4.7	2.350	2×5間・東西棟	北0.9南張出2ヶ	
7	N-17°-W	33.62	8.3	8.15	8.225	②	2.056	4.05	3.95	4	2.000	2×4間・南北棟		
8	N-19°-W	-	4.2			②	2.100	2.45				1×2間以上・南北棟		
9	N-14°-W	26.60	5.8	5.7	5.75	①	1.917	4.05	4.00	4.03		1×3間・南北棟	南1.05	3
11	N-41°-E	25.28	6.45	6.4	6.425	⑥	2.142	3.95	3.95	3.95		1×3間・南北棟		
13	N-42°-E	18.55	5.45			⑤	1.817	3.55				1×3間・南北棟		
20	N-50°-W	14.19	4.4	4.3	4.35	⑥	2.175	3.4	3.35	3.375	1.688	2×2間・東西棟		
21	N-45°-E	21.56	5.75	5.7	5.725	⑦	2.863	4.05	3.90	3.975	1.988	2×2間・南北棟	桁・梁逆办	
25	N-46°-W	15.73	4.25	4.25	4.25	⑥	2.125	3.55	3.45	3.5	1.750	2×2間・南北棟		
12	N-40°-W	25.55	7.6	7.25	7.425	①	1.856	3.7	3.65	3.625	1.813	2×4間・東西棟		
16	N-48°-E	15.93	4.5	4.4	4.45	⑥	2.225	3.25	3.15	3.2	1.600	2×2間・南北棟		
17	N-49°-E	6.02	2.8	2.7	2.75	⑧	1.375	2.3	2.20	2.25		1×2間・南北棟		
18	N-42°-W	23.50	6.4	6.35	6.375	⑥	2.125	3.45	3.35	3.4	1.700	2×3間・東西棟		
19	N-48°-E	39.06	8.2	8.2	8.2	⑦	2.733	4.75	4.70	4.725		1×3間・南北棟		
23	N-39°-W	24.79	6.85	6.8	6.825	③	2.275	3.7	3.60	3.65		1×3間・東西棟		
24	N-41°-W	16.00	5			⑤	1.667	3.4	3.10	3.25		1×3間・東西棟		
10	N-34°-W	24.26	6.3	6.35	6.325	②	2.108	3.35	3.30	3.325	1.663	2×3間・東西棟		
14	N-37°-W	16.43	5.35			⑤	1.783	3.15			1.575	2×3間・東西棟		
15	N-55°-E	16.54	5.25	5.15	5.2	⑤	1.733	3.15	3.10	3.1		1×3間・南北棟		
D群	N-15°-W	24.89	6.15	6.1	6.125	②	2.042	3.95	3.95	3.95		1×3間・東西棟		

第4表 奥田道下遺跡・下鎌田遺跡建物計測表

## 第6章 自然科学的分析

### 第1節 奥田道下遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された奥田道下遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行い、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった遺構は、R-2グリッド、4号トレンチ、試掘Aトレンチ、調査区北壁、91号土坑、調査区南壁の6地点である。

#### 2. 土層の層序

##### (1) R-2グリッド

R-2グリッドでは、下位より橙色軽石混じり褐色岩屑なだれ堆積物（層厚74cm以上、軽石の最大径27mm、角礫の最大径188mm、亜円礫の最大径338mm）、橙色軽石混じり灰褐色砂層（層厚8cm、軽石の最大径9mm）、褐色砂質土（層厚7cm）、橙色軽石層（層厚6cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径3mm）、褐色土（層厚2cm）、橙色軽石層（層厚8cm、軽石の最大径15mm、石質岩片の最大径3mm）、褐色土（層厚12cm）、灰白色軽石混じり褐色土（層厚13cm、軽石の最大径13mm）、成層した黄橙色軽石層（層厚30cm）、黄橙色軽石を多く含む褐色土（層厚17cm、軽石の最大径12mm）、黄色軽石混じり褐色土（層厚31cm、軽石の最大径13mm）、灰褐色砂質土（層厚7cm）、褐色土（層厚15cm）が認められる（図1）。

これらのうち、岩屑なだれ堆積物は、層位や層相などから約2万年前<sup>\*1</sup>に発生した浅間火山の山体崩壊に由来する前橋泥流堆積物（新井，1967，早田，1995）の本地点における主体部に相当する可能性が高い。またその上位の3層準の橙色軽石や橙色軽石層については、層相から約1.9~2.4万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井，1962，早田，未公表資料）の中・上部に同定される可能性が高い。さらに成層したテフラ層は、下位より黄橙色粗粒軽石層（層厚8cm、軽石の最大径41mm、石質岩片の最大径30mm）、黄橙色軽石層（層厚7cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径2mm）、黄橙色軽石混じり灰色石質岩片層（層厚5cm、軽石の最大径9mm、石質岩片の最大径4mm）、灰色石質岩片に富む黄橙色軽石層（層厚4cm、軽石の最大径5mm、石質岩片の最大径3mm）、黄橙色軽石層（層厚4cm、軽石の最大径6mm、石質岩片の最大径2mm）からなる。このテフラ層は、層相から約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石層（As-Sr，町田ほか，1984，町田・新井，1992）に同定される可能性が高い。そのすぐ下位に層位がある灰白色軽石は、層位や岩相などから、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間萩生軽石（As-Hg，早田，1995，1996）に由来すると考えられる。

## (2) 4号トレンチ

4号トレンチでは、下位より褐色岩屑なだれ堆積物（層厚30cm以上、亜円礫の最大径278mm）、成層したテフラ層（層厚6cm）、褐色砂質土（層厚6cm）、橙色軽石層（層厚6cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径3mm）、褐色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、成層したテフラ層（層厚5.5cm）、褐色土（層厚9cm）、灰白色軽石混じり褐色土（層厚7cm、軽石の最大径9mm）、暗褐色土（層厚5cm）、成層した黄橙色軽石層（層厚37cm）、黄橙色軽石を多く含む褐色土（層厚29cm、軽石の最大径11mm）、褐色土（層厚16cm）、成層したテフラ層（層厚5.8cm）、褐色土（層厚10cm以上）が認められる（図2）。

これらのうち、岩屑なだれ堆積物は、層位や層相などから前橋泥流堆積物の本地点における主体部に相当する可能性が高い。下位の成層したテフラ層は、下部の橙色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径18mm、石質岩片の最大径3mm）と、上部の黄灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）からなる。中位の成層したテフラ層は、最下部の暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）と橙色軽石層（層厚5cm、軽石の最大径9mm、石質岩片の最大径2mm）からなる。これらのテフラ層については、層相からAs-BP Groupの可能性が高いテフラに対比される。成層したテフラ層は、層相からAs-Srの可能性が高いテフラに対比される。その下位にある灰白色軽石については、層位や岩相などから、As-Hgに由来すると考えられる。

また上位の成層したテフラ層は、下部の灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.8cm）と、上部の黄色細粒軽石層（層厚5cm、軽石の最大径3mm）からなり、層相から約1.3~1.4万年前<sup>\*1</sup>の浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992）にほぼ連続して噴出したと考えられている浅間草津黄色軽石（As-YPk, 新井, 1962, 町田・新井, 1992）に同定される。

## (3) 試掘Aトレンチ

試掘Aトレンチでは、黒ボク土の下部をよく観察することができた（図3）。ここでは、下位より褐色土（層厚5cm以上）、暗褐色土（層厚13cm）、色調がとくに暗い暗褐色土（層厚13cm、縄文時代前期遺物包含層）、暗褐色土（層厚12cm、縄文時代中期遺物包含層）、黄褐色軽石や黄灰色軽石を含む黒褐色土（層厚23cm、軽石の最大径5mm、弥生時代遺物包含層）が認められる。

## (4) 調査区北壁

調査区北壁では、黒ボク土の上部をよく観察することができた（図4）。ここでは、下位より暗褐色土（層厚3cm以上）、成層したテフラ層（層厚23cm）、褐色土（層厚8cm）、暗褐色土（層厚11cm）、黄灰色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径2mm）、暗褐色土（層厚5cm以上）が認められる。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の白色軽石や灰色石質岩片を含む灰白色粗粒火山灰層（層厚11cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径12mm）、黄褐色砂質細粒火山灰層（層厚12cm）からなる。この成層したテフラ層は、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）に同定される。一方、その上位にある黄褐色軽石層については、層相から1128（大治3）年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ（As-Kk, 早田, 1991, 1995）に同定される。

## (5) 91号土坑

91号土坑の被覆層は、下位より基底部約50cmに黒ボク土やローム層のブロックを多く含む炭化物混じり灰白色火砕流堆積物（層厚89cm、白色軽石の最大径23mm、灰色石質岩片の最大径59mm）、灰色粗粒火山灰層（層厚

## 第6章 自然科学的分析

5 cm)、正の級化構造をもつ桃灰色粗粒火山灰層 (層厚 3 cm)、正の級化構造をもつ桃灰色粗粒火山灰層 (層厚 6 cm、白色軽石の最大径 11 mm、灰色石質岩片の最大径 3 mm)、黄褐色細粒火山灰層 (層厚 1.3 cm) からなる (図 5)。最下部の厚い火砕流堆積物に含まれる石質岩片は、下位ほど大きいものが見られる。これらの被覆層は、層相から Hr-FA に同定される。

### (6) 調査区南壁

調査区南壁では、黒ボク土の最上部をよく観察することができた (図 5)。ここでは、下位より黒灰色土 (層厚 3 cm 以上)、成層したテフラ層 (層厚 2.7 cm)、暗灰褐色土 (層厚 0.7 cm)、成層したテフラ層 (層厚 17 cm)、灰色細粒火山灰混じり灰色土 (層厚 3 cm)、黒灰褐色土 (層厚 3 cm 以上) が認められる。

これらのうち下位の成層したテフラ層は、下部の褐色軽石層 (層厚 1.4 cm、軽石の最大径 16 mm、石質岩片の最大径 5 mm) と上部の黄灰色粗粒火山灰層 (層厚 1.3 cm) からなる。一方、上位の成層したテフラ層は、下位より黄灰色軽石層 (層厚 7 cm、軽石の最大径 14 mm、石質岩片の最大径 5 mm)、下位より若干色調が暗い黄灰色軽石層 (層厚 8 cm、軽石の最大径 18 mm、石質岩片の最大径 7 mm)、灰色砂質細粒火山灰層 (層厚 2 cm) からなる。これら 2 層のテフラ層は、層相から下位より 1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ (As-B, 荒牧, 1968 新井, 1979) と As-Kk に同定される。

## 3. テフラ検出分析

### (1) 分析試料と分析方法

As-B および As-Kk に含まれるテフラ粒子の特徴を把握するために、調査区南壁において採取された 5 点について、テフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 10 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表 1 に示す。調査区南壁の試料 5 には、淡褐色軽石 (最大径 17.1 mm) の軽石がとくに多く含まれている。試料 4 には、淡褐色軽石 (最大径 6.2 mm) が少量含まれている。この試料には、ほかに暗灰色のガラス質岩片 (最大径 1.8 mm) が比較的多く含まれている。試料 3 および試料 2 には、淡褐や淡灰褐色の軽石がとくに多く含まれている。それぞれの試料に含まれる軽石の最大径は、11.3 mm と 16.7 mm である。試料 1 には、淡灰褐色軽石 (最大径 16.1 mm) が少量含まれている。この試料には、ほかに暗灰色のガラス質岩片 (最大径 3.7 mm) が多く含まれている。いずれの軽石の班晶にも、斜方輝石や単斜輝石が認められる。以上のように、As-B には淡褐色の軽石、As-Kk にはそのほかに淡灰褐色の軽石も含まれている。

## 4. 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

いわゆるローム層の中のテフラ同定の精度を向上させるために、R-2 グリッドの試料 8 (前橋泥流堆積物中の赤色岩片)、試料 5、試料 2、試料 1 の 4 試料について、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993)

により屈折率測定を行った。

## (2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。R-2グリッドの試料8には、重鉱物として単斜輝石のみが認められ、屈折率の測定を行うことができなかった。試料5に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.516-1.522である。重鉱物としては斜方輝石と単斜輝石が認められ、斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は1.704-1.709である。試料2に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.507-1.510である。重鉱物としては斜方輝石と単斜輝石が認められ、斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は1.703-1.707である。試料1に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.503-1.506である。重鉱物として斜方輝石と単斜輝石が認められ、斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は1.704-1.709である。

## 5. 考察-指標テフラとの同定

R-2グリッドの試料5および2のテフラ層は、重鉱物組成、火山ガラスや斜方輝石の屈折率から、各々As-BP Group中・上部とAs-Srに同定される。また試料1の砂質土中に含まれるテフラは、重鉱物の組合せや、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、下位より浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)と浅間大窪沢第2軽石(As-Ok2, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)からなる、約1.6-1.8万年前\*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group)に由来すると考えられる。R-2グリッドの試料8の赤色岩片については、屈折率の測定を行うことができなかったことから、その起源については現在のところ不明である。

また発掘調査で検出された91号土壌は、Hr-FAにより覆われていることから、その層位はHr-FA直下に層位があると考えられる。このほか本遺跡では、今後の分析により4世紀中葉\*2に浅間火山から噴出したと考えられる浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979)や、縄文時代に浅間火山から噴出したテフラが検出される可能性もある。

## 6. まとめ

奥田道下遺跡において地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より前橋泥流堆積物(約2万年前\*1)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9-2.4万年前\*1)の中・上部、浅間菖生軽石(As-Hg, 約1.8万年前)、浅間白糸軽石(As-Sr, 約1.8万年前)、浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group, 約1.6-1.8万年前\*1)、浅間草津黄色軽石(As-YPk, 約1.3-1.4万年前\*1)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年)などのテフラ層あるいはそれらに由来するテフラ粒子を検出することができた。本遺跡において検出された遺構のうち、91号土壌については、Hr-FA直下に層位があると考えられる。

\*1 放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )年代。

\*2 現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである(たとえば, 若狭, 2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1967) 前橋泥流の噴出年代と岩宿I文化期. 地球科学, 21, p.46-47.
- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65 p.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276 p.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalog. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒班～前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
- 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no. 53, p.2-7
- 早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史. 御代田町誌自然編, p.22-43.
- 早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267
- 若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア		
		量	色調	最大径
調査区南壁	1	+	淡灰褐	16.1
	2	++++	淡褐, 淡灰褐	16.7
	3	++++	淡褐, 淡灰褐	11.3
	4	+	淡褐	6.2
	5	++++	淡褐	17.1

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, - : 少ない, - : 認められない. 最大径の単位は, mm.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	組成	斜方輝石 ( $\gamma$ )
R-2グリッド	1	1.503-1.506	opx>cpx	1.704-1.709
R-2グリッド	2	1.507-1.510	opx>cpx	1.703-1.707
R-2グリッド	5	1.516-1.522	opx>cpx	1.704-1.709
R-2グリッド	8	-	cpx	-

屈折率の測定は, 温度一定型測定法 (新井, 1972, 1993) による. opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石.



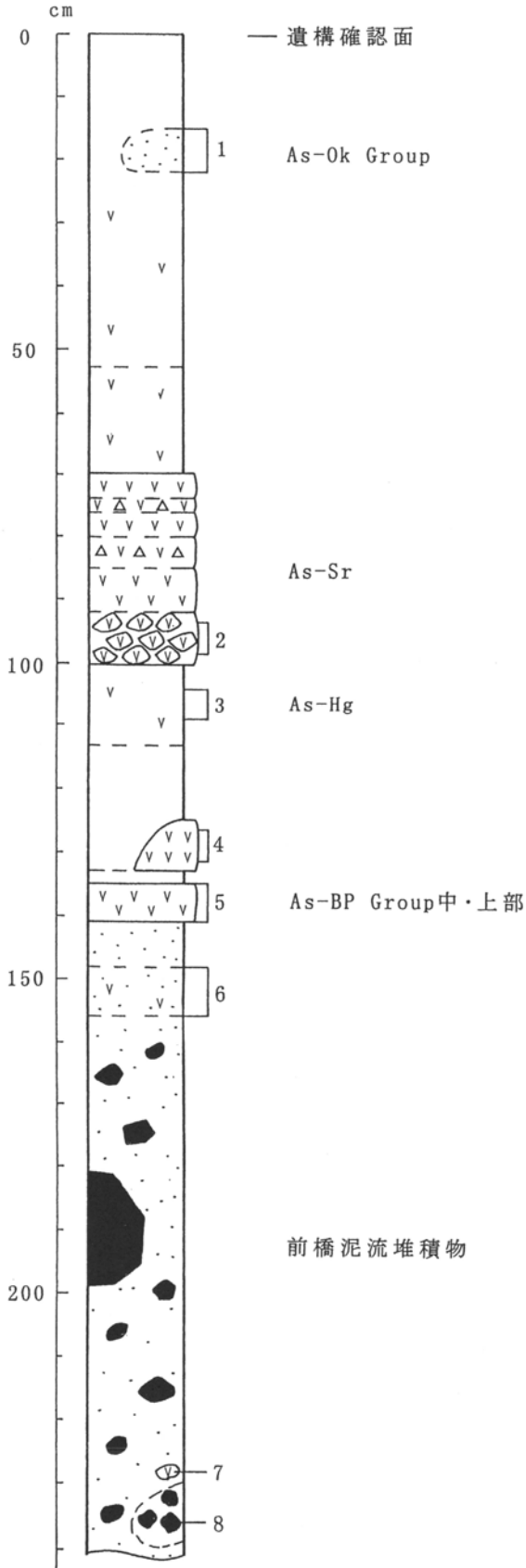


図1 R-2グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

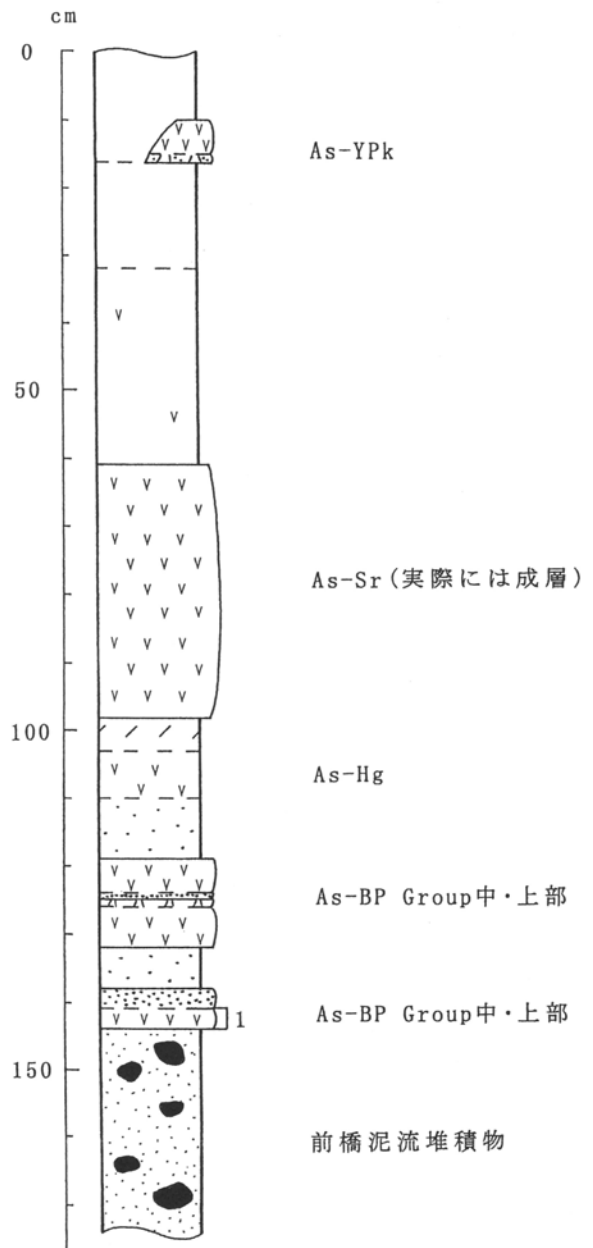


図2 4号トレンチの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

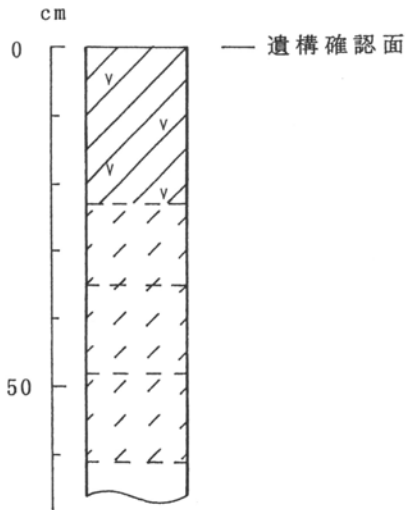


図3 M-7グリッド試掘Aトレンチの土層柱状図

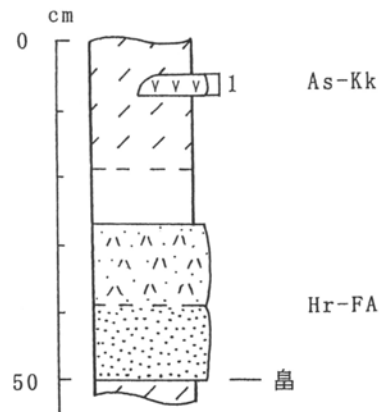


図4 調査区北壁の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

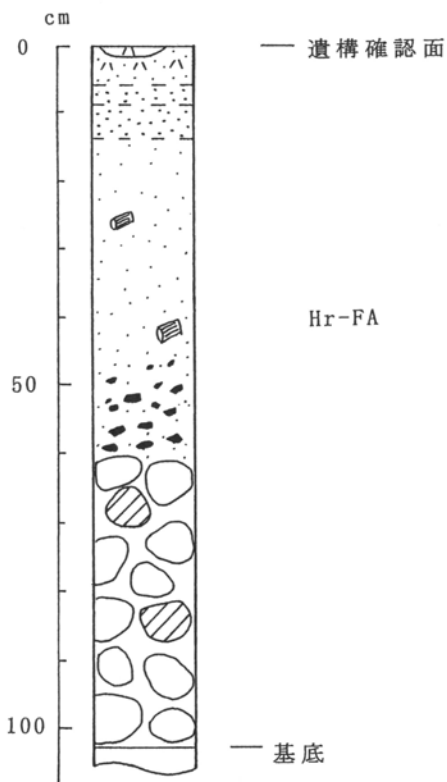


図5 91号土壙覆土の土層柱状図

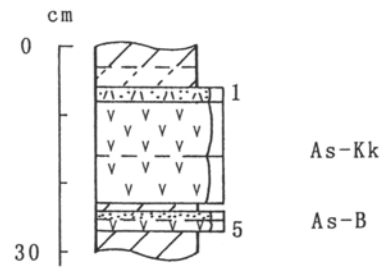


図6 調査区南壁の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

- |  |             |  |      |
|--|-------------|--|------|
|  | 軽石          |  | 黒色土  |
|  | 石質岩片(降下テフラ) |  | 暗褐色土 |
|  | 石質岩片(その他)   |  | 灰色土  |
|  | 粗粒火山灰       |  | 褐色土  |
|  | 細粒火山灰       |  |      |

## 第2節 奥田道下遺跡出土の削器の磨耗・光沢面の分析について

山田しょう

### 分析石器について

縄文時代前期中葉の有尾・黒浜式、諸磯 a, b 式土器の混在する 3 号住居から出土した削器 1 点の使用痕分析を行った。奥田道下遺跡の石器群の原石は、黒色頁岩を主体とし、チャート、黒曜石などを含むが、この石器は、東北地方産と考えられる、いわゆるチョコレート色の珪質頁岩を原石としている。押圧剥離で丁寧に仕上げられ、縄文前期の黒浜～諸磯 b 期に関東地方にしばしば見られ、大工原（2003）によって、威信財という仮説が提示された、一般に東北地方からの搬入品と考えられている精製の石匙・石槍の一群と同じ範疇に入る石器である。この石器が使用されているかどうか、されていた場合、何にどのように使用されたのかを調べることにより、この種の石器の性格を明らかにするひとつの手がかりが得られると考え、使用痕分析を行うことにした。

### 石器の形態的特徴

本資料は、一端が破損しているため、正確な器種名が同定できないが、両側縁に造りだされた刃部の形態を見ると、石匙のつまみ部が破損したものである可能性がある。しかし、側辺下半部の刃のラインを上から注意深く見ると、やや不規則であり、それに比べ上半部の刃のラインは、より直線的に整っている。これが、上半部がより機能部として意識されていたためと考え、欠損部分が石槍の先端を構成していた可能性も考えられる。

### 分析方法

肉眼、金属顕微鏡（Olympus BHM）の100倍、Keyence社のデジタルマイクロスコープVHX-100の落射型レンズ（VH-Z450）の450倍（金属顕微鏡の約200倍相当）、および通常照明のレンズVH-Z25（x25-175倍；金属顕微鏡の約10-80倍相当）の4種類の観察手段で分析を行った。

肉眼で石器のかなりの部分に光沢が認められたので、まず、この光沢の分布状況を注意深く観察、記録した。ついで、金属顕微鏡（Olympus BHM）の100倍で光沢部分を含めた石器の全面をおおまかに観察した。石器の広い範囲に磨耗・光沢面が及ぶこと、および全体として刃の端や稜線に、より強い磨耗が認められることから、視野が広く、かつ焦点深度が深くて磨耗の範囲や程度が観察しやすい上記のVH-Z25（x25-175倍）を主に用い、磨耗・光沢面の細部の特徴を観察する目的に、落射型レンズ（VH-Z450）の450倍を用いることにした。観察前に試料表面の手の脂などによる汚染をエタノールで拭き取った。

### 磨耗・光沢面の特徴

使用痕光沢面は、一般に磨耗面と考えられるが（山田 1986）、本資料では、光沢面が低倍でも観察可能な顕著な磨耗面を伴っているので、実際の印象に近くなるよう、本稿では、磨耗・光沢面と呼ぶことにする。

石器表面のかなりの部分に、肉眼でも確認できる石器の長軸方向の線状痕を伴った光沢面が分布する。線状痕の方向は、石器の全ての部分において全く正確に長軸方向に沿っているわけではなく、部分によって多少角度がずれる部分もあるが、ほぼ長軸に平行である。光沢面には、おおよそ4段階の程度の差があり、これを図

1・2に異なったトーンで示した。第一に、背面・腹面とも、中央部の平坦剥離によって構成される部分が、最も光沢が強い。次いで、背面下半の両側縁を構成する二次加工の部分の光沢が強い。この中では左側縁の方が、右側縁よりもやや光沢面が強いが、これは右側縁が全体としてやや凹刃になっているため、左側縁と同程度の摩擦を受けても、表面の実際の接触度が弱かったための可能性がある。この第2レベルの光沢を帯びた剥離面は、腹面右側縁の下端付近と右側中央部やや上の一部の剥離面にも見られる。第三に、腹面右側縁の二次加工部の中ほど、および背面両側上半の一部に見られる弱い光沢面がある。この第3レベルの中には、微妙な光沢面の程度の差があるが、トーンの違いで表現しきれない。最後に、光沢が見られない、図の白抜き部分がある。これは、背面両側縁の上半、腹面上半の両側縁の一部、および先端部（もしくは基部）の剥離面である。写真1・2に、これらの新しい剥離面が磨耗して光沢を帯びた剥離面を切っている状態を見ることができる。この、図の白抜きの剥離面においても、刃端には顕微鏡下でわずかに磨耗が見られる（写真9, 10, 12）。また、白抜きの剥離面の末端、すなわち磨耗の強い背面・腹面の中央部平坦面との境を成す稜線もわずかながら磨耗していることが観察される（写真19, 20）。したがって、もっとも新しい段階の側縁の剥離面が、先行する磨耗した剥離面を切って形成された後も、使用を含めた何らかの要因により、石器に磨耗・光沢面が形成され続けたことになる。

これに加えて、先端部では、磨耗・光沢面を切る剥離面の内面に褐色のパatinaが形成されている（写真2, 15, 16, 17において黒みを帯びた部分）。なぜ、ここにのみ褐色のパatinaが形成されたのか興味深い問題である。この部分に顕微鏡下で識別可能な残滓等は存在しないが、表面の微量元素の分布を調べることによって手がかりが得られる可能性もある。この先端部の新しい剥離面は、表裏に数枚ずつ見られ、全体として現在の先端部を形作っていることから、事故ではなく、意図的な剥離であると考えられる。剥離後、側縁の場合と同様に、縁の端に磨耗がわずかに形成されている。先端部の線状痕も長軸に平行なので（写真18）、錐のように回転させて使われたことによって生じたものではない。

磨耗・光沢面における光沢の強度の分布については、注意深い肉眼の観察と顕微鏡の観察とは一致した。ただし、肉眼による観察の場合は、手の脂による汚れをエタノールなどで十分に落とした上で観察しないと、手の脂による光沢を誤認する可能性がある。磨耗・光沢面の強度の差は、剥離面の新旧のグループとはほぼ対応している。すなわち、新しい剥離面のグループにおいて、より磨耗・光沢面の発達が弱い。

磨耗・光沢面は、特に剥離面の稜線において磨耗と線状痕が強く（写真3～6, 11, 13, 14）、剥離面の内面においては、光沢面が強くても、線状痕はあまり見られない部分が多い（写真7, 8）。落射型レンズの高倍で観察される光沢面タイプは、広がり比較的広範囲に及ぶものの、表面が粗く、丸みを帯びた、E<sub>2</sub>という乾燥皮の作業で典型的に現れるタイプ（梶原・阿子島 1981、芹沢他 1982）が最も近い。

#### 観察された磨耗・光沢面の形成因に関する考察

以上の観察に基づき、この石器の磨耗・光沢面の成因につき、解釈を試みたい。まず、光沢面のタイプがE<sub>2</sub>によく似ていることから、これが使用痕とすれば、皮の加工に使われたことが第一に考えられる。その場合、線状痕が、刃に直交せずに、概ね平行することから、皮なめしにおけるような、搔き取りの作業ではなく、切り取るような作業であったことになる。しかし、光沢面の分布が石器の表裏の内面全体に及ぶ点が問題となる。両側縁を使い、それぞれの刃の使用痕が内側まで及んでこうなったとしても、この石器の中央まで食い込むような厚い皮（厚約1cm）は、通常、考えがたい。石器の刃も比較的分厚く、皮を切るのに効率的とは言えない。他方、一般にイネ科などシリカ含有量の多い草本類による作業によって生じる光沢面は、刃から内側に数センチ

チも侵入することが頻繁にある。この種の光沢面は、それが非常に発達した時には、肉眼でもはっきり見られる sickle gloss とか corn gloss などと呼ばれる非常に滑らかな光沢面（東北大分類の A タイプ）を形成するが、植物の種類や作業状態によっては、より粗い光沢面が生じる場合がある。実際、これまで報告された縄文時代の石匙の使用痕分析では、A タイプが多く報告され、その中には、かなり粗い、A タイプとしては典型的ではないものもある（高橋 2003 a, b, c, 2004）。したがって、この奥田道下出土の石匙（もしくは石槍）の全面を覆う光沢面も、非典型的な A タイプの光沢面で、何らかの植物の作業によるものである可能性も検討したが、石器全体におよぶ光沢面の中に、植物の作業の特徴である、鏡のように滑らかな光沢面が形成されている部分が全くないことから、やはり植物の作業とは考えられない。

石匙の高倍率法による使用痕光沢面の分析については、梶原（1982）による分析を最初として、近年、高橋哲による分析例の蓄積がある（高橋 2003 a, b, c, d ; 2004）。縄文時代の石匙の量からすれば、決して分析数は多いとは言えないが、上記の A タイプ光沢面の類出など、参照できる結果は出ている。その中で、石器の形態、および光沢面の特徴等が本例に比較的近いのは、新潟県中条町二軒茶屋遺跡の No. 139（高橋 2003 a : p.162 ; 前期前葉布目式～新谷段階）、および岩手県盛岡市和野 I 遺跡の Nos. 150, 151（高橋 2004 : pp. 498, 499 ; 前期後葉～中期前葉）の資料である。しかし、いずれの場合も刃部と稜線の一部にのみ光沢面が形成され、本例のように全面に磨耗・光沢面がおよぶものはない。二軒茶屋 No. 139 と和野 I 遺跡 No. 150 には、E<sub>2</sub> タイプの光沢面が検出されているが、D<sub>2</sub> タイプも検出されている。和野 I 遺跡の No. 151 は、C と D<sub>2</sub> タイプの光沢面が報告されている。

では、本例の磨耗・光沢面は、狭義の使用痕ではなく、石器の長期にわたる維持・管理に伴って表面に生じた「多段階表面変化」（阿子島 1992）を示すものなのだろうか。磨耗・光沢面の程度が、石器の二次加工の段階に応じて変化しているので、一見この仮説があてはまりそうである。しかし、この場合問題なのは、石器全体に一貫した、長軸に平行な線状痕が形成されていることである。多段階表面変化で考えられているような長期間にわたる手ズレや表面の風化によってこうした磨耗・光沢面ができたのなら、こうした線状痕の方向の一貫性は、考えがたい。

また、大工原（2003 : p.4）が押出遺跡の出土品について指摘した、押圧剥離の際の固定具による磨耗の可能性は、磨耗・光沢面を伴わない剥離面が全くないこと（欠損部に存在した可能性がなくはないが）、および磨耗・光沢面全体に、方向の一貫した明瞭な線状痕が形成されていることから、この場合は、当てはまりそうもない。

この種の石器が威信財である可能性が提示されていること（大工原 2003）と関連して、この石器が普段、大切に革製の鞘に入れられていて、長年にわたる鞘からの出し入れによって、全面に革によるタイプの光沢面が形成され、かつ線状痕が長軸方向に向いているという解釈も考えられる。道具袋に入れて持ち運ばれた際の接触によって光沢面を生じたという可能性は、E. Moss (1983) が提示したことがある。しかし、この場合の光沢面は彼女が polish G と名付けた、輝斑 (bright spot) に似た光沢面で、本例のように全面に及ぶものではなく、かつ実験的裏付けの無い推定である。本例の場合も、鞘の出し入れによってどのような磨耗・光沢面が生じるか実験的裏付けはない。特に、一貫した方向を示す明瞭な線状痕が、鞘からの出し入れによって果たして形成されるかどうか、問題である。またもうひとつ問題となるのは、威信財とした場合、どのような機会に刃部再生もしくは石器の作り替えのためと考えられる二次加工がなされたのだろうか、という点である。可能性として、威信財ではあるが、何らかの用途にも使われたか（ただし、明確な使用痕が検出されない）、または石器が破損したために（特に欠損部にかつてあった石匙のつまみ部もしくは石槍の先端部が）、その部

分を作り直すに際して、石器の幅も狭くされたことが考えられる。

もうひとつ、威信財説に沿った解釈として、この種の搬入石器に研磨が施されたものが時々あることから(大工原2003による集成を参照)、この石器に見られる磨耗・光沢面も実は研磨によって形成された可能性が挙げられる。この場合、線状痕の方向から、研磨は石器の長軸に沿った方向にのみなされたことになる。また、磨耗面が丸みを帯び、かつ表面は粗いものの、光沢面が全面に形成されていることは、比較的軟らかい材料で「研磨」されたことを示す。また、上記のように、刃部再生もしくは石器の作り替えのためと考えられる二次加工がなされた理由が、やはり問題となり、その場合、上記と同様な理由が考えられる。さらに、最も新しい剥離を示す上半部の両側縁は、剥離後十分に研磨されなかったことになる。

#### まとめ

群馬県奥田道下遺跡出土の、東北地方からの搬入品と推定される珪質頁岩製石器の顕微鏡観察により、以下の所見が得られた。

- (1) 石器全体に、長軸に平行な線状痕を伴う磨耗・光沢面が観察される。
- (2) 磨耗・光沢面の発達度には、剥離の段階に対応して4段階が認められる。最も古い、背面・腹面中央の平坦剥離面で磨耗・光沢面が最も発達し、最も新しい、背面両側縁上部および基部(もしくは先端)の端部で、磨耗・光沢面が最も弱い。後者では、縁辺や稜線にのみ、軽く磨耗・光沢面が形成されている。
- (3) 磨耗・光沢面のタイプは、実験で知られているものでは、主に乾燥皮の作業で生じるE<sub>2</sub>タイプが最も近いが、石器の内部にまで深く分布する点が、通常の皮の切断作業による使用痕と異なる。

以上の観察に基づき、磨耗・光沢面の形成因を考察すると、

- (4) 使用痕とした場合、被加工物が不明である。また、剥離の段階にかかわらず、同じ種類の材料が加工され続けたことになる。
- (5) 多段階表面変化によるとした場合、すべての面と辺に同じ方向の線状痕が形成されているのは不自然であり、この仮説は支持されない。
- (6) 押圧剥離の際の固定具による磨耗とした場合、磨耗のない剥離面が無いこと、磨耗面全体に明瞭な線状痕を伴うことが矛盾し、この仮説は支持されない。
- (7) 革製の鞘への長期間にわたる出し入れの結果が考えられるが、実験的根拠はない。この場合、側縁に見られる磨耗の少ない新しい剥離面は、何らかの使用に伴う刃部再生か、石器の破損に伴う器形の修整によると考えられる。
- (8) 研磨によるとした場合、磨耗面の特徴から、研磨に使われた材料は比較的軟質のものとして推定される。この場合、長軸方向にのみ研磨されたことになる。また、(7)同様、側縁に見られる磨耗の少ない新しい剥離面は、何らかの使用に伴う刃部再生か、石器の破損に伴う器形の修整によると考えられる。最終段階の剥離が為された後は、研磨はごくわずかしが施されなかったことになる。

以上、本資料は、これまで顕微鏡によって使用痕分析が行われた石器の中には、同じ例が見出せず、分析によって磨耗・光沢面の特徴と、剥離面の新旧関係が明らかになったものの、その成因については完全には特定できない。上記いずれの仮説にもそれぞれ問題があるが、現段階では上記(7)、(8)の解釈が最も問題点が少なく、これは威信財の仮説と整合する。これまで、東北地方からの搬入品と考えられてきた同種の頁岩製の精製石器について、今後、顕微鏡によって、使用痕の有無、研磨面と言われる面の特徴と剥離面との新旧関係等

第2節 奥田道下遺跡出土の削器の磨耗・光沢面の分析について

を、丹念に明らかにしていくことによって、これらの石器の性格を決定するための、手掛かりが得られる可能性がある。

なお、本資料分析後、群馬県吉井町郷土資料館と群馬埋蔵文化財事業団岩崎泰一氏の御好意により、同資料館保管の、吉井町黒熊遺跡出土の、やはり東北地方からの搬入品と考えられる頁岩製の精製の槍先形尖頭器1点（吉井町教育委員会編1983 p.66；1984 p.64）を実体顕微鏡により観察する機会を得た。実体顕微鏡の数十倍以下でのみによる観察で限界があるが、石器全体に磨耗・光沢面が及び、特に器体の中央部で強く、一見鋭く見える縁辺も、顕微鏡で見るとわずかに磨耗している点、奥田道下の例と類似したパターンを示すことが分かった。基部で磨耗がより強くなるが、剥離面のグループごとに磨耗・光沢面の状態が段階的に変わらず、先端部と縁辺に行くにつれ、漸移的に磨耗・光沢面が弱くなる点、また、明瞭な線状痕が見られない点（ただし、落射型顕微鏡の高倍で観察できる可能性もある）が、奥田道下の例と異なる。今後、詳細な分析を行えば、黒熊遺跡の例についても磨耗・光沢面の形成因を、より限定できるかもしれない。

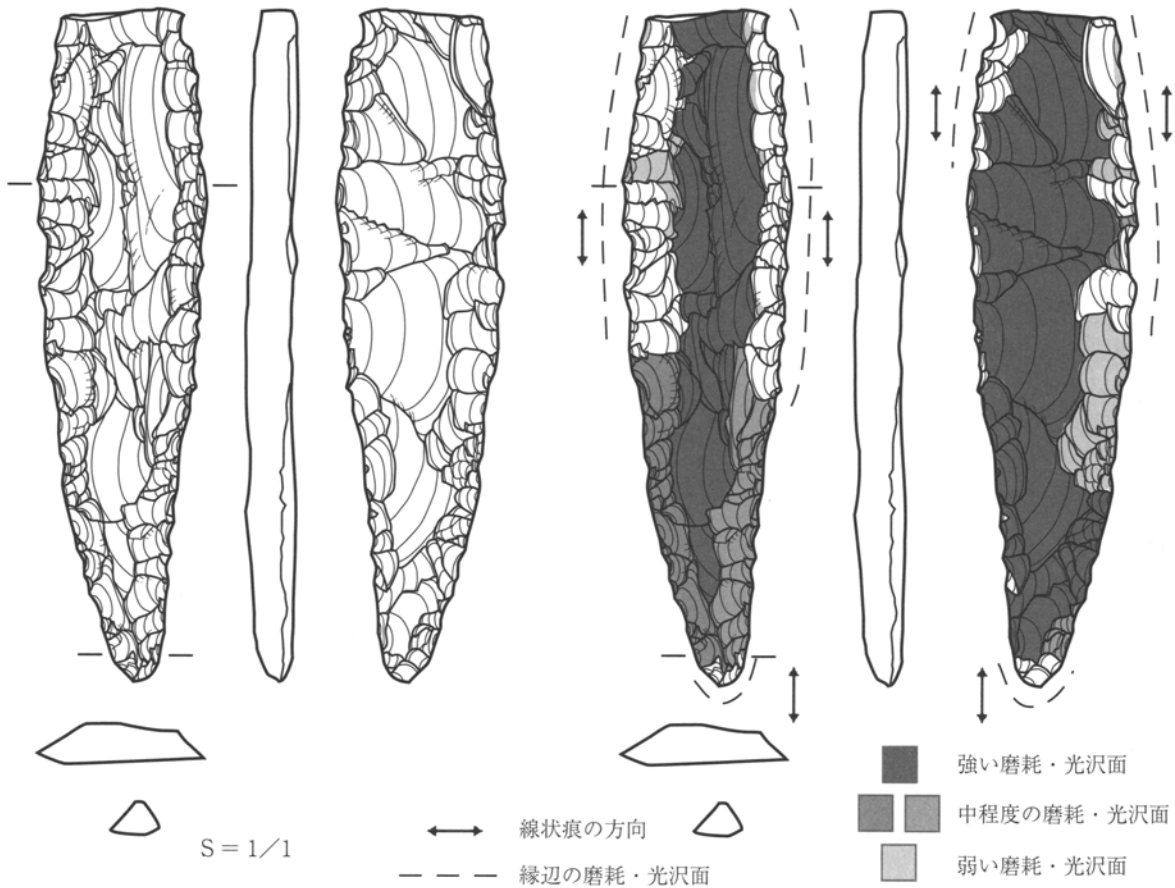


図1 石器実測図および磨耗・光沢面分布図

引用文献

- 阿子島香 1992 「実験使用痕分析と技術的組織 —パレオインディアン文化の一事例を通して—」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』：27-53. 加藤稔先生還暦記念会
- 梶原 洋 1982 「石匙の使用痕分析—仙台市三神峯遺跡出土資料を使って—（東北大学使用痕研究チームによる報告 No.3）」『考古学雑誌』68-2：43-81.
- 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—（東北大学使用痕研究チームによる報告 その2）」『考古学雑誌』67-1：1-36.
- 芹沢長介・梶原洋・阿子島香 1982 「実験使用痕研究とその可能性（東北大学使用痕研究チームによる報告 その4）」『考古学と自然科学』14：67-87.
- 大工原豊 2003 「模倣と模造—硬質頁岩製石匙・石槍の流通と形式変容—」『縄文時代』14：1-29.
- 高橋 哲 2003 a 「二軒茶屋遺跡出土石器の使用痕分析」中条町教育委員会『新潟県北蒲原郡中条町二軒茶屋遺跡—主要地方道中条紫雲寺線改築工事に伴う発掘調査報告書ⅠⅤ』：150-168
- 高橋 哲 2003 b 「石器の使用痕分析」『板敷野遺跡—中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—（縄文時代中期後葉の集落跡）」：194-206. 長野県木曾地方事務所・木曾福島町教育委員会。
- 高橋 哲 2003 c 「稲山遺跡出土石器の使用痕分析」『稲山遺跡 発掘調査報告書Ⅴ（分析・総括編）』：45-65. 青森市埋蔵文化財調査報告書72。青森市教育委員会。
- 高橋 哲 2003 d 「石器の使用痕について」『和台遺跡 主要地方道川俣安達線関連埋蔵文化財発掘調査報告書』：715-730. 飯野町教育委員会・福島県北建設事務所。
- 高橋 哲 2004 「剥片石器の使用痕」『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書 公共下水道整備（代行）事業に伴う発掘調査（第1分冊 本文・図版・表編）』：492-506.
- 山田しょう 1986 「使用痕光沢の形成過程（東北大学使用痕研究チームによる報告 その6）」『考古学と自然科学』19：101-123.
- 吉井町教育委員会編 1983, 1984 『黒熊遺跡群発掘調査報告書(3)』図版編(1983)、本文編(1984)
- Moss, E. H. 1983. *The Functional Analysis of Flint Implements. Pincevent and Pont d'Ambon: Two Case Studies from the French Final Paleolithic*. BAR International Series 177, Oxford.



# 遺物觀察表



## 縄文時代土器遺物観察表

①口径②底径③器高④重さ ①～③は単位はcm、重さはg

1号住居跡

番号	図版番号	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	14図-1	有尾	深鉢	口縁～胴	口唇部と頸部に横位に平行沈線をめぐらし口縁部文様を区画。区画内を鋸歯状に施文。全面に0段多条のRLとLRの羽状縄文を施文し菱形を構成する。	有	小礫0.5～0.1cm大極少量含む	橙7.5Y R	①(25.3) ③28.0+ ④550+
2	14図-2	有尾	深鉢	ほぼ完形	平行沈線により、口縁部文様帯を横位に施文。頸部以下をRL、LRの羽状縄文を施文。縄文の撚りが弱く、節が見えにくい。	有	細砂粒極少量含む	明褐 7.5Y R	①(20.4) ②9.2 ③26.0 ④1320+
3	15図-3	有尾	深鉢	口縁～底部	波状口縁で、波頂部から棒状に粘土が貼付される。平行沈線が口縁部に平行し、頸部にも横位の平行沈線で文様帯を区画。区画内を菱形状に平行沈線で文様を描く。頸部以下をRL、LRの羽状縄文を施文。縄文の撚りが弱く、節が見えにくい。	有	小礫0.1～0.7cm大極少量含む	にぶい褐 7.5Y R	①16.0 ②5.4 ③22.6+④750+
4	15図-4	有尾	深鉢	口縁～胴部	口唇部と頸部に横位に平行沈線をめぐらし口縁部文様を区画。区画内を鋸歯状に施文。頸部以下に0段多条のRLとLRの羽状縄文。	有	小礫0.1～0.3cm大極少量含む	にぶい黄 褐10Y R	①(40.0) ②28.8+ ④2300+
5	15図-5	有尾	深鉢	口縁～胴部	0段多条のRL・LRを横位に施文し羽状縄文で菱形を構成する。太さの違う縄文原体を併せて撚っているため、付加条のように見える。全体に縄文原体の弱いが弱い。	有	細砂粒少量混じる。小礫0.1～0.3cm大少量含む	褐7.5Y R	①(17.6) ②21.2+ ③320+
6	16図-6	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。平行沈線が口縁部に平行し、頸部にも横位の平行沈線で文様帯を区画。区画内を菱形状に平行沈線で文様を描く。頸部以下をRL、LRの羽状縄文を施文。	有	細砂粒少量含む	にぶい黄 橙10Y R	①(32.8) ③13.4+ ④280+
7	16図-7	有尾	深鉢	口縁～胴上半	0段多条のLRを横位に施文。	有	細砂粒少量含む	明黄褐 10Y R	①(14.6) ②9.8+ ③100+
8	16図-8	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文され、頸部を爪形文で横位に施文し口縁部文様帯を区画。区画内を菱形に爪形文を施文する。0段多条のRLとLRの羽状縄文。	有	小礫0.1～4cm大少量含む	浅黄2.5Y	③21.1+④1120+
9	16図-9	有尾	深鉢	頸部～胴上半	頸部の括れ部に横位に平行沈線が施文され、文様帯を区画する。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄 橙10Y R	③10.3+④150+
10	16図-10	有尾	深鉢	胴中位	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1～0.3cm大極少量含む。細砂粒少量含む。	にぶい黄 橙10Y R	④500+
11	16図-11	有尾	深鉢	胴下半～底部	底部片。平行沈線による波状文が横位に施文される。	有	細砂粒極少量含む	橙7.5Y R	②(12.3) ③11.0+ ④190+
12	16図-12	有尾	深鉢	胴下半～底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRL。摩滅が多く縄文原体が見えにくい。	有	小礫0.1～2cm大少量含む	橙5Y R	②9.2③9.4+ ④310+
13	17図-13	有尾	深鉢	口辺～胴上半	波状口縁。頸部に横位の平行沈線で文様帯を区画。区画内を菱形状に平行沈線で文様を描く。頸部以下をRL、LRの羽状縄文を施文。摩滅が多く縄文原体が見えにくい。	有	小礫0.1～0.8cm大極少量含む。砂粒少量含む。	橙7.5Y R	④500+
14	17図-14	有尾	深鉢	胴部	0段多条のLRを横位に施文。	有	小礫0.1～0.5cm大極少量含む	橙7.5Y R	③17.4+④600+
15	17図-15	有尾	深鉢	口辺～頸部	頸部を爪形文で横位に施文し口縁部文様帯を区画。区画内を菱形に爪形文を施文する。胴部には、羽状縄文が施文されるが、摩滅が多く縄文原体は不明。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄 橙10Y R	③16.0+④180+
16	17図-16	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文される。区画内の文様は、菱形を構成。	有	細砂粒少量含む	にぶい赤 褐7.5Y R	④90+
17	17図-17	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文される。	有	細砂粒少量含む	にぶい赤 褐5Y R	④60+
18	17図-18	有尾	深鉢	頸部	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文される。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄 橙10Y R	④50+

遺物観察表

19	17図-19	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文される。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む	灰黄褐 10Y R	④40+
20	17図-20	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文される。	有	小礫0.1~0.8cm大極少量含む。細砂粒少量含む。	橙7.5Y R	④190+
21	17図-21	有尾	深鉢	口縁	頸部を爪形文で横位に施文し口縁部文様帯を区画。区画内を菱形に爪形文を施文する。	有	小礫0.1~0.5cm大極少量含む。細砂粒少量含む。	にぶい橙 7.5Y R	③14.3+④180+
22	18図-22	有尾	深鉢	口縁	口唇部と頸部に横位に平行沈線をめぐらし口縁部文様を区画。区画内を鋸歯状に施文。全面に0段多条のR LとL Rの羽状縄文を施文し菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄 橙10Y R	④180+
23	18図-23	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように平行沈線文が施文される。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄 橙10Y R	④60.5+
24	18図-24	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように平行沈線文が施文される。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄 褐10Y R	④40+
25	18図-25	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように平行沈線文が施文される。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄 橙10Y R	④50+
26	18図-26	有尾	深鉢	口縁	平行沈線で横位に密に波状文を施文。	有	細砂粒少量含む	にぶい黄 橙10Y R	④30+
27	18図-27	有尾	深鉢	口縁~ 胴上位	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	褐10Y R	④180.5+
28	18図-28	有尾	深鉢	胴部	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	明黄褐 10Y R	④250+
29	18図-29	有尾	深鉢	胴部	0段多条のL R。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄 褐10Y R	④210+
30	18図-30	有尾	深鉢	口縁	軸繩に左右に交差させた付加条。軸繩L R、付加した繩L r。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄 橙10Y R	④210+
31	18図-31	有尾	深鉢	胴部	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.8cm大極少量含む。	にぶい橙 7.5Y R	④100+
32	18図-32	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のL R。	有	小礫0.1~0.5cm大極少量含む。細砂粒少量含む。	明赤褐 5Y R	②(10.2) ③5.9+ ④70+
33	18図-33	有尾	深鉢	底部	底部片。若干の上げ底。縄文は摩滅が多く不明。	有	小礫0.1~0.8cm大極少量含む。	にぶい黄 褐10Y R	②(8.0) ③2.9+ ④95+
34	18図-34	有尾	深鉢	底部	軸繩の反対方向に付加条。軸繩L R、付加した繩L r。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	橙7.5Y R	②(12.0) ③3.9+ ④80+
35	18図-35	有尾	深鉢	口縁	平行沈線で横位に波状文施文。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	褐灰 10Y R	④9.2+
36	18図-36	異系統 の土器	深鉢	口縁	口縁部に棒状の粘土紐貼付。平行沈線で横位に波状文。	少量	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。細砂粒少量含む。	褐灰 10Y R	④9.2+
37	18図-37	異系統 の土器	深鉢	胴部	平行沈線で横位に波状文施文。	少量	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。細砂粒少量含む。	褐灰 10Y R	④16.2+
38	18図-38	異系統 の土器	深鉢	胴部	平行沈線で横位に波状文施文。	少量	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	褐灰 10Y R	④6.0+
39	18図-39	異系統 の土器	深鉢	口縁	口縁部に棒状の粘土紐貼付。平行沈線で横位に波状文。	少量	細砂粒少量含む	褐灰 10Y R	④9.4+
40	18図-40	異系統 の土器	深鉢	胴部	細い平行沈線を横位に施文。沈線間に貝殻腹縁が施文。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	明褐 7.5Y R	④11.5+
41	18図-41	異系統 の土器	深鉢	胴部	平行沈線で横位に波状文。平行沈線下に押し引きの沈線を施文。	少量	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	黒褐 10Y R	④10.9+

2号住居跡

番号	図版番号	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	22図-1	有尾	深鉢	口縁	頸部の括れ部に横位に平行沈線で、口縁部文様帯を区画する。文様帯内は、平行沈線で連続した菱形を作る。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい黄 褐10Y R	①(24.0) ③7.2+ ④350+

遺物観察表

2	22図-2	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。全体に縄文が摩滅している。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.0) ②8.4+ ③100+
3	22図-3	有尾	深鉢	口縁~胴部	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文され、頸部を爪形文で横位に施文し口縁部文様帯を区画。区画内を鋸歯状に交互に連続させ、菱形に爪形文を施文する。胴部は、0段多条のRLとLRの羽状縄文。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	明赤褐5 Y R	①(36.4) ②26.5+ ③1000+
4	23図-4	有尾	深鉢	口縁~胴部	平行沈線が口縁部に平行し、頸部にも横位の平行沈線で文様帯を区画。区画内を菱形状に平行沈線で文様を描く。器面全面をRL、LRの羽状縄文を施文し、菱形を構成。	有	小礫0.1~0.3cm大多く含む。	にぶい黄褐10Y R	①(34.2) ②28.8+ ④600+
5	23図-5	有尾	深鉢	頸部~胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	③16.1+④290+
6	23図-6	黒浜	深鉢	口縁~胴上部	口縁部縄文は、RLとLRの羽状縄文。胴部には、縄文原体を換えて直前段合熱りて羽状縄文を表現している。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(16.8) ②15.4+ ③300+
7	23図-7	有尾	深鉢	口縁~底部	0段多条のRLとLRの羽状縄文。浅鉢になる。	有	細砂粒少量含む	橙7.5Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④95+
8	23図-8	有尾	深鉢	口縁~底部	0段多条のLR。浅鉢になる。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい橙7.5 Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④96+
9	23図-9	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文される。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④97+
10	23図-10	有尾	深鉢	口縁	口唇部に平行沈線をめぐらし口縁部文様を区画。区画内を鋸歯状に交互に施文し菱形を構成。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	明赤褐5 Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④98+
11	23図-11	有尾	深鉢	口縁	口縁部。横位に平行沈線が施文される。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④99+
12	23図-12	有尾	深鉢	口縁	口唇部に平行沈線をめぐらし口縁部文様を区画。山形状に施文。	有	細砂粒極少量含む	橙7.5Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④100+
13	24図-13	有尾	深鉢	頸部~胴上半	胴部括れ部を横位に平行沈線で区画。胴部下を直前段合熱りの縄文原体で羽状縄文にする。全体に摩滅が多く縄文原体が見づらい。	有	小礫0.1~0.5cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④101+
14	24図-14	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRL。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい黄褐10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④102+
15	24図-15	有尾	深鉢	口縁	0段多条のLR。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④103+
16	24図-16	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。補修孔がある。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④104+
17	24図-17	有尾	深鉢	口縁	0段多条のLR。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④105+
18	24図-18	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+④106+
19	24図-19	黒浜	深鉢	胴部	括れ部には、平行沈線で緩やかな波縄文が施文。縄文は、付加条が施文される。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄褐10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④107+
20	24図-20	諸磯b	浅鉢	口縁	有孔浅鉢口縁部。無文。全面を丁寧に磨いている。口縁に沿って、細い粘土紐が貼り付けられる。	無	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	褐7.5Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④108+
21A	24図-21A	諸磯b	浅鉢	胴部	有孔浅鉢口縁部。無文。全面を丁寧に磨いている。	無	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④109+
21B	24図-21B	諸磯b	浅鉢	胴部	有孔浅鉢胴部。無文。全面を丁寧に磨いている。	無	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④110+
22	24図-22	北白川下層?	深鉢	口縁	沈線と縄文を交互に施文。他の土器に比べ薄手で黒い。	無	細砂粒極少量含む	オリブ黒5 Y	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④111+
23	24図-23	諸磯b	深鉢	口縁	平行沈線で直線、斜線を描く。地文の縄文は、RL。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい褐7.5 Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④112+
24	24図-24	浮島II	深鉢	胴部	貝殻復縁文。	無	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④113+
25	24図-25	諸磯b	深鉢	底部	細い粘土紐を貼り付けた浮線文。浮線文には、斜めに刻みが入られる。	無	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(14.2) ②(8.2) ③6.8+ ④114+

遺物観察表

3号住居跡

番号	図版番号	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	29図-1	有尾	深鉢	口縁~胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(31.7) ②25+ ④1600+
2	29図-2	有尾	深鉢	口縁	0段多条の付加条にしたRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.3cm多く含む。	にぶい赤褐5 Y R	①(22.6) ②9.5+ ④240+
3	29図-3	有尾	深鉢	口縁	1段多条の付加条にしたRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄褐10Y R	①(23.8) ③8.7+ ④195+
4	29図-4	有尾	深鉢	口縁	波状口縁の口唇に沿うように爪形文が施文される。頸部には、横位に爪形文が施文され文様帯を区画する。区画内を鋸歯状に爪形文を施文し、菱形と山形の文様を上下に描いている。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	黒褐2.5Y	①(13.6) ③8.0+ ④130+
5	29図-5	有尾	深鉢	口縁	0段多条の付加条にしたRL。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	①(13.0) ③5.4+ ④40+
6	29図-6	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	明赤褐10Y R	③12.7+④350+
7	29図-7	関山 I	深鉢	口縁	細い粘土紐による鋸歯状の施文。粘土紐にそうように爪形文が施文される。爪形文の交点には、粘土瘤の突起が付けられる。	有	胎土精良	浅黄2.5Y	④19.5+
8	29図-8	有尾	深鉢	口縁	波状口縁の口唇に沿うように爪形文が施文される。口縁部には、平行沈線で山形に描いている。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④53.4+
9	29図-9	関山 I	深鉢	口縁	細い単沈線で口縁部を横位施文。胴部には、細い縄文が施文される。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄2.5Y	④12.4+
10	29図-10	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有	細砂粒極少量含む	にぶい橙7.5Y R	④62.3+
11	29図-11	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④96.7+
12	29図-12	黒浜	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。地文にLRの縄文が施文される。	有	細砂粒極少量含む	黄褐2.5Y	④46.9+
13	29図-13	黒浜	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄褐10Y R	④64.1+
14	29図-14	黒浜	深鉢	口縁	幅の狭い平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が横位に施文される。さらに、鋸歯状に交互に施文されることで三角を連続させた格子目状になる。	有	小礫0.1~0.5cm多く含む。	にぶい黄橙10Y R	④100.4+
15	30図-15	有尾	深鉢	口縁	縄文原体L rと正反の撚りR lで羽状縄文に施文する。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④45+
16	30図-16	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④75.4+
17	30図-17	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④104.6+
18	30図-18	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④150.9+
19	30図-19	有尾	深鉢	口縁	縄文原体は、R lに見えるが、全体に施文状態が悪い。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄褐10Y R	④38.8+
20	30図-20	有尾	深鉢	口縁	0段多条のLR縄文。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④32.0+
21	30図-21	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④51.1+
22A	30図-22A	有尾	深鉢	胴部	0段多条の付加条にしたRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	黄褐10Y R	④100+
22B	30図-22B	有尾	深鉢	胴部	0段多条の付加条にしたRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④80+

遺物観察表

23	30図-23	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRに付加条した原体で羽状縄文を施文。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④101.9+
24	30図-24	有尾	深鉢	胴部	直前段合撚りによる羽状縄文。軸になる原体の施文が浅く、撚りの戻った部分が強調される。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④180+
25	30図-25	有尾	深鉢	胴部	直前段合撚り。	有	小礫0.1~1cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④30+
26	30図-26	有尾	深鉢	胴部	直前段合撚りによる羽状縄文で、菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④60+
27	30図-27	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④45.9+
28	30図-28	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。縄文は、0段多条のRL。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	②(11.0) ③3.8+ ④80+
29	31図-29	諸磯 a	深鉢	口縁~胴部	LRの縄文原体を撚糸にして施文。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	明赤褐2.5Y R	①(32.4) ②33.1+ ④1450+
30A	31図-30A	諸磯 a	深鉢	胴部	単節RLの斜行縄文。	無	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④100+
30B	31図-30B	諸磯 a	深鉢	底部	単節RLの斜行縄文。底部片。	無	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	②(8.0) ③4.4+ ④95+
31	31図-31	諸磯 a	深鉢	口縁~底部	無文。	無	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	橙7.5Y R	①(14.6) ②(9.0) ③17.0 ④200+
32	31図-32	黒浜	深鉢	口縁~胴上部	径の細い半截竹管による平行沈線で格子目状に文様を描く。	少量	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄10Y R	①(18.0) ③11.2+ ④100+
33	31図-33	諸磯 a	深鉢	胴下部~底部	単節RLの斜行縄文。胴部に縄文原体の端末が見える。	無	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	橙5Y R	②(8.6) ③14.0+ ④240+
34	31図-34	諸磯 a	深鉢	口縁	LRの縄文原体を圧痕状に施文。	無	細砂粒極少量含む	明赤褐5Y R	④19.7+
35A	31図-35A	諸磯 a	深鉢	胴部	単節RLの斜行縄文。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい橙5Y R	④230+
35B	31図-35B	諸磯 a	深鉢	底部	単節RLの斜行縄文。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい橙5Y R	②(10.4) ③5.5+ ④290+
36	32図-36	諸磯 b	浅鉢	口縁	有孔浅鉢口縁部。無文。全面を丁寧に磨いている。口縁に沿って、細い粘土紐が貼り付けられる。	無	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④19.2+
37	32図-37	諸磯 b	深鉢	口縁	半截竹管による平行沈線を横位・斜位に施文。地文に、RLの縄文。	無	小礫0.1~0.2cm多く含む。	にぶい黄橙10Y R	④36.6+
38	32図-38	諸磯 b	深鉢	口縁	半截竹管による平行沈線を横位・斜位に施文。地文に、RLの縄文。	無	小礫0.1~0.2cm多く含む。	にぶい赤褐10Y R	④35.1+
39	32図-39	諸磯 b	深鉢	底部	底部片。半截竹管による平行沈線を横位に施文。地文に、RLの縄文。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい赤褐10Y R	④138.6+
40	32図-40	諸磯 b	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口縁部から胴部にかけて横位に施文し文様帯を区画。口縁部文様帯には、蕨手状、弧線、斜線が描かれる。地文の縄文原体は、単節RL。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい赤褐5Y R	④190+
41	32図-41	諸磯 a	深鉢	口縁	口唇部に沿うように結節状の爪形文を持つ。口縁部には、幅の細い平行沈線が斜めに施文される。	無	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④5.5+
42	32図-42	北白川下層	深鉢	口縁	浮線文に刻みを持つ。器壁が薄く、色調は黒色である。	無	細砂粒極少量含む	褐灰10Y R	④4.5+
43	32図-43	諸磯 b	深鉢	胴部	浮線文に刻みを持つ。	無	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④6.4+
44	32図-44	浮島II	深鉢	口縁	口唇部に沿うように結節状の爪形文を持つ。口縁部には、細い単沈線が斜めに施文され格子目状になる。	無	小礫0.1~0.4cm大極少量含む。	にぶい赤褐5Y R	④80+
45	32図-45	浮島II	深鉢	胴部	幅の狭い平行沈線による施文。斜めに施文される。	無	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④8.4+
46A	32図-46A	浮島II	深鉢	口縁	口唇部に沿うように、大型の半截竹管で垂直に爪形文を施文。口縁部は、幅の狭い平行沈線を条線状に直線と波状を交互に横位施文。条線間を爪形文が施文される。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい橙7.5Y R	④120+

遺物観察表

46B	32図-46B	浮島Ⅱ	深鉢	口縁	46の口唇部片	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	黄灰2.5Y	④14.0+
46C	32図-46C	浮島Ⅱ	深鉢	胴部	半截竹管にり器面を削るように施文された爪形文。	無	細砂粒極少量含む	黄灰2.5Y	④12.7+

4号住居跡

番号	図版番号	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	36図-1	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文される。区画内の文様は、山形を構成する。	有	小礫0.1~0.4cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④93.8+
2	36図-2	有尾	深鉢	胴部	地文に0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。縄文に沿って、爪形文が、菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄褐10Y R	④136.6+
3	36図-3	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④113.8+
4	36図-4	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。縄文原体を押しつけるように施文している。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④21.0+
5	36図-5	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④30.8+

5号住居跡

番号	図版番号	時期	器形	胎土	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	40図-1	有尾	深鉢	口縁~胴上部	波状口縁の土器。平行沈線が口縁部に平行し、頸部にも横位の平行沈線で文様帯を区画。区画内を菱形状に平行沈線で文様を描く。器面全面をRL、LRの羽状縄文を施文し、菱形を構成。	有	小礫0.1~0.4cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(25.5) ③20.5+ ④540+
2	40図-2	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.4cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(23.0) ③7.5+ ④150+
3	40図-3	有尾	深鉢	口縁~胴上部	緩やかな大波状口縁の土器。口縁に沿って、3条の爪形文が施文される。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	①(19.4) ③7.5+ ④150+
4	40図-4	有尾	深鉢	口縁~胴上部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	①(14.6) ③14.4+ ④140+
5	41図-5	有尾	深鉢	口縁~胴上部	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文され、頸部を爪形文で横位に施文し口縁部文様帯を区画。区画内を鋸歯状に交互に連続させ、菱形に爪形文を施文する。胴部は、0段多条のRLとLRの羽状縄文。	有	細砂粒極少量含む	黄橙7.5Y R	①(43.4) ③37.0+ ④3900+
6	41図-6	有尾	深鉢	胴下部~底部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.4cm大極少量含む。	明褐7.5Y R	②8.6 ③16.5 ④440+
7	41図-7	有尾	深鉢	底部	底部片。若干上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.5cm大極少量含む。	にぶい赤褐5Y R	②(7.0) ③4.4+ ④35+
8	41図-8	有尾	深鉢	胴~底部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。底部は、若干の上げ底になる。	有	細砂粒極少量含む	明赤褐5Y R	②(8.0) ③14.5+ ④230+
9	41図-9	有尾	深鉢	胴下部~底部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。底部は、若干の上げ底になる。	有	細砂粒極少量含む	橙7.5Y R	②6.0 ③10.4+ ④280+
10	41図-10	有尾	深鉢	胴部	頸部の括れ部に平行沈線を横位に施文。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④41.8+
11	42図-11	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④43.8+
12	42図-12	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄褐10Y R	④34.7+
13	42図-13	前期初頭	深鉢	胴部	縄文原体R1を絡条体に縦位に施文。	有	小礫0.1~0.4cm大多く含む。	にぶい赤褐5Y R	④120+
14	42図-14	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	小礫0.1~0.7cm大少量含む。	褐10Y R	④280+
15	42図-15	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。	有	胎土精良 細砂粒極少量含む	灰黄褐10Y R	④46.0+

6号住居跡

番号	図版番号	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	44図-1	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文。	有	小礫0.1~0.2cm大多く含む。	明黄褐10Y R	④58.0+



遺物観察表

2	44図-2	有尾	深鉢	胴部	口縁部片。口縁部文様帯に平行沈線が施文される。	有	小礫0.1~0.3cm大多く含む。	にぶい黄橙10Y R	④24.8+
---	-------	----	----	----	-------------------------	---	-------------------	------------	--------

7号住居跡

番号	図版番号	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	47図-1	有尾	深鉢	口縁~胴上部	波状口縁。口唇部に平行するように爪形文が施文され、頸部を爪形文で横位に施文し口縁部文様帯を区画。区画内を鋸歯状に交互に連続させ、菱形に爪形文を施文する。胴部は、0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.4cmやや多めに含む。	にぶい黄橙10Y R	①(21.0) ③18.7+ ④1250+
2	47図-2	有尾	深鉢	口縁~胴上部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.5cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	①(22.0) ③14.3+ ④220+
3	47図-3	有尾	深鉢	口辺~底部	頸部を平行沈線で横位に施文し口縁部文様帯を区画。区画内に平行沈線を鋸歯状に交互に連続させ、菱形に爪形文を施文する。胴部は、0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.5cm大極少量含む。	褐灰10Y R	③19.3+ ④3850+
4	48図-4	有尾	深鉢	口縁	波状口縁部に平行するように爪形文が施文される。口縁部文様は山形に爪形文で描かれる。	有	小礫0.1~0.8cm大少量含む。	橙7.5Y R	④43.0+
5	48図-5	有尾	深鉢	口縁	波状口縁部に平行するように爪形文が施文される。口縁部文様は山形に爪形文で描かれる。	有	小礫0.1~0.4cm大少量含む。	橙7.5Y R	④50+
6	48図-6	有尾	深鉢	口縁	波状口縁部に平行するように爪形文が施文される。頸部には、平行沈線が施文され、口縁部文様帯を区画する。口縁部文様は山形に爪形文で描かれる。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④120+
7	48図-7	有尾	深鉢	胴部	波状口縁部に平行するように爪形文が施文される。頸部には、平行沈線が施文され、口縁部文様帯を区画する。口縁部文様は山形に爪形文で描かれる。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④35.1+
8	48図-8	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.5cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④86.4+

土坑群

番号	図版番号	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
5土-1	59図5土-1	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有	細砂粒極少量含む	黒褐10Y R	④34.6+
5土-2	59図5土-2	有尾	深鉢	胴部	燃りの密な絡状体による燃糸文。横位に施文。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	橙7.5Y R	④103.6+
5土-3	59図5土-3	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	黒褐7.5Y R	④63.2+
9土-1	59図9土-1	有尾	深鉢	台付底部	底部片。上げ底になる。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	③3.0+ ④76.5+
19土-1	59図19土-1	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.4cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④50.4+
19土-2	59図19土-2	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	橙7.5Y R	④21.4+
21土-1	59図21土-1	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④33.2+
21土-2	59図21土-2	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	橙7.5Y R	④22.2+
33土-1	59図33土-1	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	褐7.5Y R	②(5.0) ③3.0+ ④35.2+
36土-1	59図36土-1	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	橙7.5Y R	④18.9+
38土-1	59図38土-1	有尾	深鉢	口辺	口縁部に爪形文で山形状に文様が施文される。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい褐7.5Y R	④31.6+
38土-2	59図38土-2	有尾	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	橙7.5Y R	④20.5+
38土-3	59図38土-3	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④88.3+

遺物観察表

42士-1	59図42士-1	有尾	深鉢	口縁	口唇部に丸棒による刺突。器面は荒れている。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	灰褐 7.5Y R	④81.3+
43士-1	59図43士-1	有尾	深鉢	胴部	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	橙7.5Y R	④33.5+
47士-1	59図47士-1	有尾	深鉢	口縁	器面に筥状の工具による擦痕	有	細砂粒極少量含む	灰黄褐 10Y R	④32.8+
47士-2	59図47士-2	有尾	深鉢	胴部	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.4cm大多く含む。	黒褐 10Y R	④50.1+
48士-1	59図48士-1	有尾	深鉢	頸部	平行沈線による横位の施文。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	褐10Y R	④23.3+
48士-2	59図48士-2	有尾	深鉢	頸部	頸部の括れ部を横位に平行沈線で文様帯を区画する。胴部は、R lの縄文。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	黒褐 10Y R	④14.6+
50士-1	59図50士-1	前期前半	深鉢	胴部	0段多条のR Lを斜位に施文。	有	細砂粒やや多く含む	にぶい黄 橙10Y R	④62.4+
50士-2	59図50士-2	前期前半	深鉢	胴部	0段多条のL Rを斜位に施文。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい褐 7.5Y R	④24.9+
50士-3	59図50士-3	前期前半	深鉢	胴部	0段多条のL Rを斜位に施文。	有	小礫0.1~0.5cm大少量含む。	にぶい褐 7.5Y R	④55.1+
53士-1	59図53士-1	有尾	深鉢	口縁	0段多条のL Rを斜位に施文。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	橙7.5Y R	④46.0+
53士-2	59図53士-2	有尾	深鉢	口辺	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	褐灰 10Y R	④49.0+
56士-1	59図56士-1	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	橙7.5Y R	④61.7+
56士-2	59図56士-2	有尾	深鉢	胴部	頸部の括れ部を横位に平行沈線で文様帯を区画する。胴部は、0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい褐 7.5Y R	④147.5+
57士-1	60図57士-1	有尾	深鉢	口縁	口縁部屈曲部で口縁部文様帯は、二段になる。上段には、渦巻き、下段には、山形の文様が爪形文で施文される。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄 褐10Y R	④195.0+
57士-2	60図57士-2	有尾	深鉢	口縁~胴上部	0段多条の無節R lとL rの羽状縄文で菱形を構成する。器面が荒れている。	有	細砂粒極少量含む	橙7.5Y R	④222.9+
57士-3	60図57士-3	有尾	深鉢	口縁~胴上部	0段多条の無節R lとL rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄 橙10Y R	④191.0+
57士-4	60図57士-4	有尾	深鉢	胴部	0段多条の無節R lとL rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい橙 5Y R	④176.9+
59士-1	60図59士-1	有尾	深鉢	口辺	幅の狭い、平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	灰黄褐 10Y R	④15.3+
59士-2	60図59士-2	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	橙7.5Y R	④93.0+
60士-1	60図60士-1	有尾	深鉢	口辺	幅の狭い、平行沈線による施文。斜位に施文し山形を描く。	有	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい黄 褐10Y R	④11.4+
60士-2	60図60士-2	有尾	深鉢	頸部	爪形文が横位に施文される。	有	小礫0.1~0.4cm大少量含む。	橙7.5Y R	④22.7+
61士-1	60図61士-1	有尾	深鉢	口縁	平行沈線が口縁に沿って施文される。地文の縄文は、L R。	有	小礫0.1~0.4cm大極少量含む。	にぶい黄 褐10Y R	④55.6+
61士-2	60図61士-2	有尾	深鉢	口縁	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.4cm大少量含む。	黒褐 10Y R	④62.2+
61士-3	60図61士-3	有尾	深鉢	口縁	平行沈線が口縁に沿って施文される。地文の縄文は、L R。	有	細砂粒少量含む	明黄褐 10Y R	④23.3+
61士-4	60図61士-4	有尾	深鉢	口辺	口縁部文様帯を菱形に爪形文が施文される。	有	小礫0.1~0.8cm大極少量含む。	黒褐 10Y R	④51.5+
61士-5	60図61士-5	有尾	深鉢	頸部	0段多条のR LとL Rの羽状縄文で菱形を構成する。	有	細砂粒極少量含む	明黄褐 10Y R	④80.6+

遺物観察表

61土-6	60図61土-6	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する器面が荒れていて、縄文本体が認めづらい。	有	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	赤褐 5 Y R	②(7.0) ③3.4+ ④60.5+
63土-1	60図63土-1	田戸上層	深鉢	口縁	口唇部に貝殻腹縁による刺突。口縁部には、貝殻腹縁による刻みを持った隆帯が巡る。沈線による幾何学的文様区画内を貝殻腹縁が充填される。	無	細砂粒やや多めに含む	にぶい橙 7.5 Y R	④52.9+
63土-2	60図63土-2	有尾	深鉢	胴部	細い平行沈線で条線のように施文している。	有	小礫0.1~0.3cm多く含む。	にぶい橙 7.5 Y R	④20.2+
64土-1	60図64土-1	有尾	深鉢	口縁	平行沈線と爪形文が施文される。口縁部文様帯に山形状に施文。	有	小礫0.1~0.5cm大極少量含む。	浅黄2.5 Y	④22.8+
64土-2	60図64土-2	有尾	深鉢	口縁	平行沈線が横位に施文される。	有	細砂粒少量含む	にぶい黄 褐10 Y R	④22.8+
64土-3	60図64土-3	有尾	深鉢	頸部	0段多条の正反撚りのRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有	小礫0.1~0.5cm大やや多めに含む。	明黄灰 2.5 Y	④135.5+
64土-4	60図64土-4	有尾	深鉢	胴部	RLの斜行縄文。	有	細砂粒少量含む	橙7.5 Y R	④24.3+
64土-5	60図64土-5	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。RLの斜行縄文。	有	細砂粒やや多めに含む	橙7.5 Y R	②(7.6) ③3.1+ ④57.4+
65土-1	61図65土-1	有尾	深鉢	胴部	無節Lrの斜行縄文。	有	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄 褐10 Y R	④141.0+
66土-1	61図66土-1	諸磯b	深鉢	底部	波状の沈線と細い粘土紐による浮線文。	無	小礫0.1~0.2cm大やや多めに含む。	にぶい黄 褐10 Y R	④21.8+
69土-1	61図69土-1	早期末	深鉢	胴部	内外面とも条痕が斜位に施文される。	有	細砂粒極少量含む	橙5 Y R	④37.2+
73土-1	61図73土-1	中期後半	深鉢	胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文。	無	細砂粒極少量含む	にぶい黄 橙10 Y R	④68.9+
74土-1	61図74土-1	中期後半	深鉢	口縁~胴部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	無	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	灰黄褐 10 Y R	①(16.0) ③22.5+ ④600+
76土-1	61図76土-1	中期後半	深鉢	頸部	RLの斜行縄文。	無	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい橙 7.5 Y R	④41.5+
76土-2	61図76土-2	中期後半	深鉢	頸部	0段多条の無節RlとLrの羽状縄文で菱形を構成する。	無	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄 褐10 Y R	④39.2+
11P-1	61図11P-1	中期後半	深鉢	頸部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	無	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄 橙10 Y R	④76.8+
30P-1	61図30P-1	中期後半	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	無	小礫0.1~0.3cm大極少量含む。	にぶい黄 褐10 Y R	④50.0+
30P-2	61図30P-2	中期後半	深鉢	口縁	平行沈線と爪形の押圧施文。口縁に沿って細い条線が施文される。	無	細砂粒極少量含む	黒褐 10 Y R	④37.3+

グリッド他

番号	図版番号	遺構地点	時期	器形	部位	文様の観察	繊維	胎土	色調	法量
1	64図-1	J-22G	鶴ヶ島台	深鉢	頸部	沈線による幾何学的文様区画内を刺突。内面条痕文。	有り	細砂粒極少量含む	にぶい橙 7.5 Y R	④27.6+
2	64図-2	J-22G	鶴ヶ島台	深鉢	胴部	沈線による幾何学的文様区画内を刺突。内面条痕文。	有り	細砂粒極少量含む	橙7.5 Y R	④23.8+
3	64図-3	I-20G	黒浜	深鉢	口縁	平行沈線が波状に施文される。	有り	小礫0.1~0.3cm大やや多めに含む。	黄褐2.5 Y	④9.5+
4	64図-4	L-15G	黒浜	深鉢	口縁	口縁部に幅の狭い半截竹管によるコンパス文。胴部は、縄文が施文されるが、摩滅が多く原体不明。	有り	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい橙 7.5 Y R	④56.0+
5	64図-5	J-22G	黒浜	深鉢	胴部	口縁に刺突が加えられる。全体に器面が荒れており、文様不明。	有り	細砂粒極少量含む	にぶい赤褐 5 Y R	④45.0+
6	64図-6	4号竪穴状遺構	黒浜	深鉢	口辺	半截竹管の爪形が刺突される。	有り	細砂粒少量含む	にぶい橙 7.5 Y R	④13.8+
7	64図-7	5号竪穴状遺構	黒浜	深鉢	頸部	幅の狭い半截竹管による爪形文が2段、横位に施文される。縄文は、RL。	有り	細砂粒極少量含む	にぶい黄 橙10 Y R	④28.0+
8	64図-8	I-18G	有尾	深鉢	口縁	半截竹管の爪形文が施文される。	有り	細砂粒極少量含む	にぶい黄 褐10 Y R	④61.1+
9	64図-9	I-20G	黒浜	深鉢	口縁	平行沈線で口縁部文様帯を格子目状に施文。地文は、RLの縄文。	有り	小礫0.1~0.8cm大少量含む。	にぶい黄 褐10 Y R	④65.9+

遺物観察表

10	64図-10	I-21G	黒浜	深鉢	口縁	幅の狭い平行沈線が口縁部に横位に施文される。口縁部以下は、LRの縄文。	有り	小礫0.1~0.8cm大少量含む。	にぶい褐7.5Y R	④50.1+
11	64図-11	J-20G	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有り	小礫0.1~0.5cm大少量含む。	にぶい黄褐10Y R	④50.8+
12	64図-12	J-20G	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有り	細砂粒少量含む	にぶい橙7.5Y R	④66.6+
13	64図-13	J-19G	有尾	深鉢	口縁	波状口縁。平行沈線で菱形を作る。口縁部には、RL、LRの縄文が施文される。	有り	小礫0.1~0.7cm大少量含む。	褐7.5Y R	④120.1+
14	64図-14	J-22G	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで菱形を描く。	有り	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい褐7.5Y R	④98.6+
15	64図-15	K-16G	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで菱形を描く。	有り	小礫0.1~0.3cm大やや多めに含む。	にぶい黄橙10Y R	④189.4+
16	64図-16	K-21G	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。補修孔が開く。	有り	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい褐7.5Y R	④34.5+
17	64図-17	4号堅穴状遺構	有尾	深鉢	口辺	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有り	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	灰黄褐10Y R	④50.2+
18	64図-18	4号堅穴状遺構	有尾	深鉢	口辺	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有り	細砂粒極少量含む	灰黄褐10Y R	④35.8+
19	64図-19	F-22G	有尾	深鉢	口縁	平行沈線による施文。口唇に沿うように施文。口縁部には、同じ原体による平行沈線が斜位に施文されることで三角を描く。	有り	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④72.6+
20	64図-20	H-21G	有尾	深鉢	口縁	平行沈線を横位に施文。	有り	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④38.7+
21	64図-21	I-18G	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLの縄文。	有り	細砂粒極少量含む	暗褐10Y R	④52.5+
22	64図-22	34号土坑	有尾	深鉢	口縁	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。口唇部を折り返している。	有り	小礫0.1~0.3cm大少量含む。	にぶい赤褐5Y R	④72.5+
23	64図-23	L-25G	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLの羽状縄文で菱形を構成する。	有り	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	橙7.5Y R	④64.2+
24	64図-24	J-24G	関山II	深鉢	底部	底部片。縄文は、ループのRL。	有り	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10Y R	④46.1+
25	64図-25	K-22G	有尾	深鉢	底部	底部片。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有り	小礫0.1~0.4cm大極少量含む。	橙7.5Y R	④54.5+
26	64図-26	J-22G	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。器面が荒れており、縄文が見にくい。	有り	細砂粒極少量含む	橙7.5Y R	④27.2+
27	65図-27	J-16G	有尾	深鉢	底部	0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成。器面が荒れており、縄文が見にくい。	有り	細砂粒少量含む	明褐7.5Y R	④100.6+
28	65図-28	J-21G	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有り	細砂粒少量含む	にぶい黄橙10Y R	④47.0+
29	65図-29	J-16G	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。器面が荒れており、縄文が見にくい。	有り	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④87.8+
30	65図-30	J-14G	有尾	深鉢	底部	底部片。上げ底になる。0段多条のRLとLRの羽状縄文で菱形を構成する。	有り	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	橙5Y R	④175.2+
31	65図-31	K-23G	諸磯a	深鉢	口縁	幅の狭い平行沈線で、横位に口縁部施文。頸部以下は縦位に施文。	無し	小礫0.1~0.2cm大少量含む。	橙7.5Y R	④14.4+
32	65図-32	H-25G	諸磯b	深鉢	胴部	浮線文。地文は、単節RL。	無し	細砂粒少量含む	橙7.5Y R	④30.2+
33	65図-33	101号土坑	諸磯b	深鉢	胴部	浮線文。浮線文には、斜位の刻み	無し	小礫0.1~0.2cm大極少量含む。	にぶい黄橙10Y R	④51.2+

## 遺物観察表

34	65図-34	I-9G	諸磯b	深鉢	胴部	平行沈線を横位に施文。RLの縄文。	無し	小礫0.1~0.3cm大 少量含む。	明赤褐 5YR	④52.0+
35	65図-35	I-9G	諸磯b	深鉢	口辺	平行沈線で口縁部文様帯を格子目状に施文。地文は、RLの縄文。縦位、渦巻状に施文。地文RLの斜行縄文。	無し	細砂粒やや多く含む。	にぶい黄橙 10YR	④32.8+
36	65図-36	H-25G	早期中葉	深鉢	口辺	単沈線を横位に施文。沈線間を交互に刺突。胎土に石英片を含む。	無し	小礫0.1~0.4cm大 少量含む。	にぶい黄 2.5Y	④28.2+
37	65図-37	O-19G	堀之内I	深鉢	底部	底部片。無文で全体に擦痕有り。	無し	小礫0.1~0.3cm大 極少量含む。	にぶい黄橙 10YR	④62.3+
38	65図-38	I-22G	堀之内I	深鉢	口縁	口縁部を単沈線で区画、口縁以下を細い条線が施文される。内面には、沈線が巡る。	無し	細砂粒極少量含む	明赤褐 5YR	④32.2+
39	65図-39	O-22G	堀之内I	深鉢	口縁	小波状口縁の土器。波頂部から8の字状の粘土紐が貼付される。	無し	細砂粒極少量含む	にぶい褐 7.5YR	④16.5+
40	65図-40	P-6G	堀之内I	深鉢	口~胴上部	小波状口縁の土器。波頂部には、沈線で渦巻状の文様。頸部は無文帯。胴部には、単沈線で文様を区画し、曲線を描いている。沈線間にRL、LRの縄文が乱雑に施文される。	無し	小礫0.1~0.3cm大 多く含む。	にぶい黄橙 10YR	④1600+
41	65図-41	P-6G	後期	深鉢	胴部	沈線による文様区画。縄文は、RLの斜行縄文。	無し	小礫0.1~0.3cm大 少量含む。	橙7.5YR	④146.0+
42	65図-42	O-19G	後期	深鉢	口縁	無文。器面全体に擦痕有り。	無し	小礫0.1~0.2cm大 やや多く含む。	明赤褐 2.5YR	④50.5+
43	65図-43	101号土坑	後期	浅鉢	口縁	内面に横位に沈線が施文される。縄文は、Lr。外面無文。	無し	小礫0.1~0.3cm大 少量含む。	にぶい黄橙 10YR	④23.5+
44	65図-44	101号土坑	後期	浅鉢	口縁	無文。器面全体に擦痕有り。	無し	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙 10YR	④10.5+

遺物観察表

縄文時代石器遺物観察表

石材 1 黒色頁岩・2 粗粒輝石安山岩・3 チャート・4 珪質頁岩・  
5 黒曜石・6 細粒輝石安山岩・7 赤碧玉・8 変玄武岩・  
9 デイサイト・10 黒色安山岩・11 変質安山岩・12 変質玄武岩

1号住居跡

No	図版番号	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	19図-1	平基無茎鎌	基部欠	3	2.6	1.8+	0.6	3.0
2	19図-2	凹基無茎鎌		3	2.8	2.0	0.4	2.0
3	19図-3	凹基無茎鎌		硬質泥岩	1.8	1.1	0.4	0.5
4	19図-4	石匙		1	3.5	4.9	0.4	7.9
5	19図-5	石匙		1	5.0	5.3	0.9	18.8
6	19図-6	石匙		1	5.3	6.3	1.2	38.6
7	19図-7	縦型石匙		1	5.5	2.5	1.7	8.4
8	19図-8	削器・横長		1	4.9	7.8	0.8	36.3
9	19図-9	石匙?・縦長		1	6.0	3.9	0.8	18.4
10	19図-10	削器・巾広		1	6.8	4.9	1.0	46.5
11	19図-11	削器・巾広		1	6.3	5.6	0.7	15.5
12	19図-12	削器・その他		1	6.3	4.8	1.7	59.9
13	19図-13	削器・その他		1	7.0	3.0	0.5	21.0
14	19図-14	打製石斧	一部欠	1	6.2+	4.4	2.3	76.4
15	19図-15	打製石斧・未製品?		4	6.0	4.2	1.6	45.8
16	19図-16	打製石斧・未製品?		1	9.1	4.8	2.6	130
17	19図-17	石核		1	10.2	6.4	3.8	251.9
18	19図-18	凹石		2	8.4	8.0	3.4	311.3
19	19図-19	凹石		2	8.8	6.8	4.3	321.7
20	19図-20	凹石		2	10.4	6.7	3.9	360.5
21	20図-21	凹石		2	12.8	8.2	4.3	580.4
22	20図-22	磨石		2	10.5	9.9	5.2	690.4
23	20図-23	磨石		2	9.4	8.0	4.4	448.8
24	20図-24	磨石		2	7.0	5.9	2.6	153.2
25	20図-25	磨石		2	12.6	7.0	3.3	421
26	20図-26	磨石		2	11.0	8.1	3.9	475.8
27	20図-27	敲石		6	10.9	3.5	2.3	146.9
28	20図-28	敲石		2	9.2	4.7	3.0	201.9
29	20図-29	石皿	2/3欠	2	9.3+	12.5+	6.2	633.9
30	20図-30	石皿	一部欠	2	19.5+	22.0	6.0	3400
31	20図-31	石皿	1/2欠	緑泥片岩	38.2	18.0+	3.6	3720
32	PL35-32	削器・縦長		1	7.4	5.7	1.0	36.5
33	PL35-33	削器・縦長	一部欠	1	6.0+	5.7	1.5	57.5
34	PL35-34	削器・巾広	一部欠	1	7.4	5.1+	1.3	73.7
35	PL35-35	削器・巾広	一部欠	1	3.2	2.8+	1.0	8.3
36	PL35-36	削器・巾広		1	5.4	4.9	0.7	19.8
37	PL35-37	削器・巾広		1	6.8	4.7	1.1	33.5
38	PL35-38	削器・巾広		1	4.2	6.0	1.2	27.6
39	PL35-39	削器・巾広	一部欠	1	4.4	4.2+	1.3	23.9
40	PL35-40	削器・巾広		1	4.3	3.6	0.9	13.3
41	PL36-41	削器・その他		1	6.4	5.5	1.8	63.1
42	PL36-42	削器・その他	一部欠	4	4.2	2.1+	1.0	7.3
43	PL36-43	削器・その他		3	3.0	2.0	1.0	5.3
44	PL36-44	削器・その他		4	1.6	3.2	0.5	2.7
45	PL36-45	使用痕・縦長		4	5.8	3.8	1.1	22.6
46	PL36-46	使用痕・巾広		1	4.5	4.3	0.7	13.6
47	PL36-47	使用痕・巾広		1	4.7	4.1	1.0	20.0
48	PL36-48	使用痕・巾広		4	5.0	2.8	1.0	9.6
49	PL36-49	凹石		2	7.5	7.4	4.2	281.7
50	PL36-50	凹石		2	10.3	8.8	4.0	506.3
51	PL36-51	凹石		2	9.5	7.8	4.2	395.5
52	PL36-52	凹石		2	10.7	7.5	3.85	454.8

53	PL36-53	磨石		2	7.2	6.9	2.5	166.5
54	PL36-54	磨石		2	11.0	10.0	4.9	801.8
55	PL36-55	磨石		2	13.7	10.9	5.0	1096.3
56	PL36-56	磨石		2	10.6	10.0+	5.5	651.5
57	PL36-57	磨石	溶結凝灰岩	10.2	8.3	4.35	524.5	
58	PL36-58	磨石		2	11.6	6.3	2.7	273.2
59	PL36-59	磨石		2	12.2	7.3	4.0	558.5
60	PL36-60	磨石		2	12.1	8.8	7.4	894.3

2号住居跡

No	図版番号	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	25図-1	石鎌・未製品	基部欠	3	2.0	1.5+	0.45	1.2
2	25図-2	石鎌・未製品	先端欠	1	2.7+	1.5	0.4	0.6
3	25図-3	石鎌・未製品	先端欠	3	1.6+	2.1	0.6	2.1
4	25図-4	石鎌・未製品	先端欠	3	2.5+	1.1	0.5	1.4
5	25図-5	石匙・縦長		5	2.7	1.35	0.5	1.5
6	25図-6	削器・縦長		3	4.2	2.1	1.1	7.4
7	25図-7	削器・横長		1	5.0	7.6	1.5	68.8
8	25図-8	削器・縦長		1	6.2	3.7	0.8	28.2
9	26図-9	削器・横長		1	11.2	4.8	1.6	66.8
10	26図-10	削器・形状不明		4	7.1	4.0	1.5	45.0
11	26図-11	打斧・短冊?	一部欠	6	3.6+	3.8	1.1	19.4
12	26図-12	打斧・短冊		1	8.7	5.0	1.4	54.7
13	26図-13	石核		3	4.0	2.1	1.0	9.0
14	26図-14	凹石・垂円		2	11.5	9.7	7.5	963.6
15	26図-15	凹石・楕円		2	11.2	7.85	3.65	508.9
16	26図-16	凹石・楕円		2	11.5	8.2	3.5	541.5
17	26図-17	磨石・円形		2	7.6	6.2	2.0	161.7
18	26図-18	磨石・円形		2	8.1	7.1	2.9	278.3
19	26図-19	磨石・円形		2	9.6	9.0	4.0	462.2
20	27図-20	磨石・円形		2	11.3	10.5	5.7	940.9
21	27図-21	磨石・垂円		2	10.0	8.2	3.2	336.0
22	27図-22	磨石・楕円		2	11.3	9.1	5.0	739.6
23	27図-23	磨石・楕円		2	9.4	7.35	2.75	280.3
24	27図-24	磨石・棒状	1/2欠	1	5.7+	6.1	3.9	217.1
25	27図-25	スタンプ形石器	一部欠	ひん岩	12.9+	7.6	3.8	646.5
26	PL38-26	削器・縦長		4	6.3	3.35	1.2	21.0
27	PL38-27	削器・横長		10	3.0	5.9	0.7	15.2
28	PL38-28	削器・巾広	一部欠	1	3.8	5.2+	1.2	25.2
29	PL38-29	削器・巾広		1	3.6	4.25	0.9	15.3
30	PL38-30	削器・形状不明		1	5.2	2.8	0.9	15.5
31	PL38-31	加工痕		1	6.7	4.2	1.8	49.5
32	PL38-32	加工痕・形状不明	一部欠	6	2.1+	1.35	0.5	1.3
33	PL38-33	加工痕・形状不明		1	3.5	1.5	0.4	2.2
34	PL38-34	加工痕・形状不明		1	2.2	2.15	0.7	2.5
35	PL38-35	使用痕・巾広剥片		1	5.4	6.4	1.3	36.2
36	PL38-36	使用痕・巾広剥片		1	5.0	6.0	0.9	14.8
37	PL38-37	使用痕・巾広剥片		1	4.6	4.3	0.6	10.3
38	PL38-38	使用痕・巾広剥片	一部欠	5	2.5	2.4+	1.1	3.7
39	PL38-39	使用痕・形状不明		5	1.8	1.2	0.5	0.7
40	PL38-40	凹石・垂円		2	9.4	7.75	4.2	392.3
41	PL38-41	凹石・垂円		2	10.0	9.0	5.7	580.7
42	PL38-42	凹石・楕円		2	9.8	7.3	4.3	487.1
43	PL39-43	凹石・棒状		2	9.3	5.3	3.4	196.8
44	PL39-44	磨石・円形		2	6.2	5.9	4.3	219.8
45	PL39-45	磨石・円形		2	8.7	7.9	4.0	379.9
46	PL39-46	磨石・楕円		2	6.8+	6.5	2.8	174.1
47	PL39-47	磨石・楕円		2	10.3	7.5	4.8	547.2
48	PL39-48	磨石・楕円		9	12.4	9.9	2.2	379.8
49	PL39-49	磨石・楕円	1/2欠	2	15.0	6.0+	4.0	485.4

遺物観察表

50	PL39-50	磨石		石英閃緑岩	10.2	8.5	2.8	389.1
----	---------	----	--	-------	------	-----	-----	-------

3号住居跡

No	図版番号	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	33図-1	凹基無茎鎌		5	1.7	1.2	0.3	0.5
2	33図-2	凹基無茎鎌	基部欠	5	1.5	1.35+	0.5	0.8
3	33図-3	石匙・横長		7	2.2	1.8	0.55	1.7
4	33図-4	石匙・横長		7	3.2	3.3	0.6	6.6
5	33図-5	石匙・巾広		4	3.8	3.5	0.65	6.8
6	33図-6	削器・横長		1	8.2	4.5	1.6	64.2
7	33図-7	削器・両面		硬質頁岩	8.9	2.4	0.5	15.9
8	33図-8	削器・横長		10	4.4	8.6	1.1	50.5
9	33図-9	削器・巾広		1	5.7	7.4	1.1	47.9
10	33図-10	加工痕・横長	一部欠	7	4.6	2.3+	0.75	7.5
11	33図-11	加工痕・縦長	一部欠	6	8.2+	6.0	1.0	57.4
12	34図-12	加工痕・巾広		1	6.0	7.2	1.7	78.5
13	34図-13	摩斧	一部欠	8	10.1+	4.3	2.2	152.5
14	34図-14	凹石・垂門礫		2	9.0	8.2	4.4	448.0
15	34図-15	凹石・楕円		2	14.1	7.5	2.3	342.0
16	34図-16	凹石・楕円		2	11.9	8.8	5.4	899.2
17	34図-17	磨石・円礫		2	8.4	7.65	3.2	279.1
18	34図-18	磨石・円礫		2	10.0	9.5	4.3	604.3
19	34図-19	石製品・円		軽石	10.8	8.75	2.35	87.4
20	34図-20	不明石製品		2	10.5	4.0	2.4	61.2
21	PL41-21	削器・横長		1	4.0	7.0	1.7	37.5
22	PL41-22	削器・縦長		4	5.5	3.7	1.4	23.5
23	PL41-23	加工痕・縦長	一部欠	1	4.6+	3.8	1.0	21.2
24	PL41-24	加工痕・縦長		1	4.2	2.4	0.8	9.6
25	PL41-25	加工痕・横長		3	2.2	3.8	1.2	8.9
26	PL41-26	加工痕・巾広		6	6.7	5.0	2.3	77.0
27	PL41-27	加工痕・巾広		1	6.5	4.65	1.2	37.4
28	PL42-28	加工痕・巾広	一部欠	1	5.5	4.0+	0.9	21.3
29	PL42-29	加工痕・巾広		1	4.5	4.25	1.2	22.4
30	PL42-30	加工痕・その他		ぎよくずい	2.1	1.2	0.3	1.0
31	PL42-31	使用痕・縦長	一部欠	1	5.5+	3.8	1.1	18.1
32	PL42-32	使用痕・巾広		1	4.0	5.7	0.7	12.7
33	PL42-33	使用痕・巾広		4	3.5	4.6	0.9	10.4
34	PL42-34	凹石・楕円		2	9.2	5.5	2.85	160.0
35	PL42-35	凹石・欠損	一部欠	2	6.5+	7.1+	4.4	238.2
36	PL42-36	磨石・円礫		2	9.8	9.85	6.0	638.1
37	PL42-37	磨石・垂門礫		2	9.2	6.9	5.2	488.0
38	PL42-38	磨石・楕円		2	14.4	8.8	5.1	958.3
39	PL42-39	敲石・棒状		2	10.6	5.7	3.2	282.8

土坑他出土

No	図版番号	遺構名	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	62図5土-1	5土坑	石斧・短冊・巾広		12	6.8+	7.8	3.8	224.1
2	62図6土-1	6土坑	石斧・短冊・巾広		1	13.2	6.9	4.8	348.4
3	62図19土-1	19土坑	磨石・楕円		2	12.1	7.0	4.45	572.6
4	62図22土-1	22土坑	凹基無茎鎌		3	2.3	1.4	0.35	0.7
5	62図35土-1	35土坑	石核		3	2.8	3.3	1.2	9.6
6	62図36土-1	36土坑	削器・巾広		1	2.0	7.4	1.3	35.5
7	62図38土-1	38土坑	へら状		1	7.3	4.7	1.1	41.2
8	62図41土-1	41土坑	石斧・その他		1	11.7	9.4	3.6	351.8
9	63図47土-1	47土坑	凹石・楕円		2	6.9+	7.8	3.6	260
10	63図52土-1	52土坑	凹石・円礫		2	10.1	9.3	4.5	574.4
11	63図59土-1	59土坑	磨石・楕円礫		2	12.05	8.7	5.8	844.7
12	63図66土-1	66土坑	石核		3	1.9	4.0	1.2	20.8
13	63図69土-1	69土坑	凹石・楕円		2	9.1	7.1	4.3	427.8
14	63図77土-1	77土坑	加工痕・形状不明		7	2.2	2.8	0.9	3.2

4号住居跡

No	図版番号	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	37図-1	削器・縦長		1	10.9	4.4	2.0	82.7
2	37図-2	不明石製品		8	7.1	2.5	1.3	42.0
3	37図-3	凹石・棒状		2	14.4	6.3	5.75	664.4
4	37図-4	凹石・円形		2	10.8	9.7	4.3	669.3
5	37図-5	石皿	3/4欠	2	17.0+	20.5+	6.0	2100
6	37図-6	石皿	一部欠	2	24.5	18.0+	8.6	3200
7	PL42-7	使用痕・縦長		1	6.25	4.7	0.8	20.5
8	PL42-8	使用痕・巾広		1	5.1	3.8	0.9	12.6
9	PL42-9	使用痕・巾広		4	3.4	4.3	1.0	8.5

5号住居跡

No	図版番号	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	43図-1	平基無茎鎌		5	2.6	1.7	0.4	1.0
2	43図-2	石鎌・未製品		3	2.9	2.0	0.7	3.7
3	43図-3	石匙・横形		1	4.2	5.5	0.7	10.4
4	43図-4	削器・横長		1	4.5	8.2	1.5	53.2
5	43図-5	削器・横長		1	3.8	6.0	1.1	25.5
6	43図-6	打斧?		1	6.6+	5.7	1.6	81.7
7	43図-7	磨石・円形		2	7.6	7.2	3.9	314.9
8	43図-8	磨石・楕円		2	8.8	7.0	4.1	381.3
9	43図-9	不明石製品		珪質変質岩	8.7	3.4	2.2	73.8
10	PL44-10	加工痕・巾広		1	3.7	2.9	0.7	7.8
11	PL44-11	使用痕・縦長		5	2.85	1.3	0.8	1.9
12	PL44-12	使用痕・巾広		6	4.2	4.25	0.7	9.5
13	PL44-13	使用痕・巾広		1	3.7	4.3+	0.5	10.1
14	PL44-14	使用痕・巾広		1	2.1	3.5+	0.8	2.7
15	PL44-15	使用痕・巾広		1	5.4	5.5	1.2	39.8
16	PL44-16	使用痕・巾広		1	3.55	5.8	0.9	14.4

6号住居跡

No	図版番号	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	45図-1	石匙		1	6.8	2.5	0.9	11.5
2	45図-2	凹石・垂門礫		2	9.0	8.6	3.6	377.2
3	45図-3	磨石・円形		2	9.0	7.8	4.0	343.3

7号住居跡

No	図版番号	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	49図-1	石匙・縦形		1	9.2	2.6	0.7	23.8
2	49図-2	加工痕・縦長		4	4.5	1.9	0.35	3.6
3	49図-3	磨石・楕円		2	11.8	8.2	4.2	666.3
4	49図-4	磨石・楕円		角閃石安山岩	11.7	9.2	5.4	727.2
5	PL45-5	磨石・円形		2	12.0	10.75	7.7	1087.8

遺物観察表

15	63図101土-1	101土坑	加工痕・巾広		流紋岩	5.4	2.2	0.5	7.6
16	PL47 2土-1	2土坑	石核		3	3.2	4.6	1.5	19.4
17	PL47 7土-1	7土坑	加工痕・横長		1	3.4	8.4	1.4	33.9
18	PL47 8土-1	8土坑	加工痕・巾広		4	4.0	3.2+	0.9	11.1
19	PL47 9土-1	9土坑	加工痕・巾広		4	1.4	3.1	0.7	1.9
20	PL47 31土-1	31土坑	使用痕・巾広		1	5.2	6.5	1.0	30.4
21	PL47 35土-2	35土坑	加工痕・巾広		1	3.8	4.4	1.6	22.2
22	PL47 39土-1	39土坑	加工痕・巾広		1	2.5	3.7	1.2	6.6
23	PL47 39土-2	39土坑	加工痕・形状不明		7	1.4	2.5	0.6	1.8
24	PL47 65土-1	65土坑	使用痕・巾広		1	4.9	5.3+	1.1	26.4
25	PL47 66土-2	66土坑	使用痕・巾広		1	8.3	7.9	1.6	96.1
26	PL47 66土-3	66土坑	敲石		2	8.3	5.0	3.3	157.6
27	PL47 69土-2	69土坑	加工痕・巾広		1	2.6	3.7	0.7	6.0
28	PL47 74土-1	74土坑	敲石・棒状		凝灰質砂岩	8.0	3.7	2.2	103.8
29	PL47 84土-1	84土坑	磨石?・楕円?		2	8.9+	10.25	3.4	505.6
30	PL47 102土-1	102土坑	削器・巾広	一部欠	1	6.5+	6.0+	1.1	34.9

グリッド他出土

No	図版番号	遺構名	器種名	欠損	石材	長さ	巾	厚さ	重量
1	66図-1	J-22G	石匙		3	5.1	1.7	0.5	4.3
2	66図-2	I-19G	石匙・ミニチュア		5	1.3	2.0	0.3	0.5
3	66図-3	K-16G	削器・特殊?		1	6.5	3.5	1.5	35.4
4	66図-4	I-20G	削器・特殊?		1	8.3	4.0	2.0	80.9
5	66図-5	J-17G	削器・特殊?		1	7.2	4.5	3.1	95.2
6	66図-6	I-23G	打斧短冊巾広		11	14.8	11.6	5.4	1402.8
7	66図-7	1溝	打斧短冊巾狭		12	8.5	4.8	2.9	128.9+
8	66図-8	G-18G	打斧短冊巾狭		9	14.0	5.0	2.5	176.6
9	66図-9	K-21G	打斧短冊巾狭		1	14.3	7.0	3.9	390.8
10	66図-10	K-19G	打斧短冊巾狭		1	11.6	4.6	2.0	118.7
11	66図-11	K-16G	分銅形石斧		2	5.0	8.5	3.2	113.7+
12	66図-12	O-18G	分銅形石斧		6	9.1	8.0	1.2	82.9
13	66図-13	表採一括	ヘラ状石器		1	6.4	4.0	1.4	42.0
14	66図-14	J-19G	ヘラ状		1	6.6	4.1	1.4	43.9
15	66図-15	2号竪穴状遺構	ヘラ状		1	7.0	4.1	1.0	25.8
16	66図-16	H-21G	ヘラ状		1	7.7	4.6	2.5	82.1
17	66図-17	J-21G	ヘラ状		1	7.0	3.9	1.1	30.4
18	66図-18	I-17G	ヘラ状		1	9.2	5.6	1.6	67.5
19	66図-19	J-11G	ヘラ状?		1	8.2	5.0	2.4	125.6
20	67図-20	J-20G	その他		1	8.8	5.9	3.8	210.4
21	67図-21	J-22G	その他		1	11.9	8.1	3.2	290.0
22	67図-22	I-17G	砥石?		頁岩	6.2	3.5	0.4+	11.5
23	67図-23	2堀	石核		5	1.7	3.0	1.1	5.2
24	67図-24	J-17G	磨製石斧		変質蛇紋岩	8.5+	5.2	1.8	125.8
25	67図-25	2トレ	磨製石斧		8	12.2	3.8	2.7	189.6
26	67図-26	J-19G	磨製石斧		8	19.0	5.1	3.7	541.7
27	67図-27	J-22G No.1	磨製石斧		8	19.1	5.4	4.0	654.6
28	67図-28	J-17G	環状石斧		2	11.4	5.9+	3.9	336.6
29	67図-29	K-20G	けつ状耳飾り		蛇紋岩	(1.6)		0.35	0.8+
30	67図-30	N-10G	磨石・特殊		2	18.3	7.4	4.5	1031.6
31	67図-31	4ビット	磨石・棒状礫		11	19.2	7.1	5.6	116.6
32	PL50-32	6ビット	凸基有茎鏃		1	2.7	1.5	0.5	1.7
33	PL50-33	46ビット	使用痕・巾広		1	3.2	3.7	0.7	8.1
34	PL50-34	2堀	使用痕・縦長		1	6.3	5.4	1.1	48.5
35	PL50-35	1トレ	ヘラ状石器		1	6.5	4.1	1.4	46.3
36	PL50-36	32ビット	磨石・亜円礫		2	11.0	11.0	5.0	867.6



## 弥生時代土器遺物観察表

No	図版番号	器形	部位	形態・成形・調整等の特徴	胎土	色調	法量
1	69図-1	浅鉢	口縁～底部	内外面ともにミガキを全面に施す。後、全面に朱彩。 口辺部に双孔あり。	細砂粒混、精良	赤10R	①(15.0) ②5.0 ③5.7 ④214.9+
2	69図-2	碗	口縁	内外面ともにミガキを全面に施す。後、全面に朱彩。 口縁部は小さなくの字形に成形。	細砂粒混、精良	にぶい赤褐5YR	①(14.8) ③4.4+ ④19.2+
3	69図-3	高坏	脚部	外面ミガキ。内面ハケ調整。外面朱彩。	細砂粒混、精良	赤褐5YR	②(10.8) ④103.2+
4	69図-4	浅鉢	口縁～底部	内外面ともにミガキを全面に施す。全面朱彩。	細砂粒混、精良	赤10R	①(24.4) ②7.5 ③11.2 ④765.6+
5	69図-5	小型壺	口縁～胴部	内外面ともにミガキを施す。胴部内面には1/2程 施す。外面全部、内面口辺のみ朱彩。	細砂粒混、精良	明赤褐2.5YR	①(13.0) ③13.5+ ④670.4+
6	69図-6	甕	口縁欠	外面胴下半～底部タテ方向ミガキ。胴上部波状文。 頸部簾状文。口辺部波状文。内面ヨコ方向ミガキ。	細砂粒混、精良	橙7.5YR	②7.0 ③19.0+ ④671.5+
7	69図-7	甕	口縁～胴部	外面口縁部欠失。頸部簾状文、胴上半波状文、胴下 半タテ方向ミガキ、内面ヨコ方向ミガキ。	細砂粒混、精良	にぶい黄橙10YR	①(11.6) ③19.3+ ④110.5+
8	69図-8	甕	口縁～胴部	外面口縁部欠失。頸部簾状文、胴上半波状文、胴下 半タテ方向ミガキ、内面ヨコ方向ミガキ。	細砂粒混、精良	にぶい橙7.5YR	①(14.2) ③8.2+ ④248.8+
9	69図-9	壺	胴部～底部	外面タテミガキ。内面斜めミガキ。外面朱彩。	細砂粒混、精良	橙7.5YR	②6.4 ③10.0+ ④403.1+

## 古墳時代土器遺物観察表

No	図版番号	器形	部位	形態・成形・調整等の特徴	胎土	色調	法量
1	75図-1	高坏	接合部	外面ミガキ。内面ナデ。	細粒混、良	明褐5YR	③(1.6) ④60.3+
2	75図-2	器台	脚部	外面タテミガキ。内面ナデ。	細粒混、良	にぶい褐7.5YR	②(14.2) ④12.9+
3	75図-3	器台	脚部	内外面ともにナデ。外面一部ミガキ。	細粒混、良	にぶい黄橙10YR	④3.3+
4	75図-4	埴	口縁部	内外面ともにナデ。	細粒混、良	にぶい黄橙10YR	④5.7+
5	75図-5	埴	口縁部	内外面ともにナデ。	粗粒混、やや雑	にぶい黄橙10YR	④22.0+
6	75図-6	埴	口辺部	外面ミガキ。内面口辺ミガキ。胴部ケズリ後ナデ。	粗粒混、やや雑	にぶい橙7.5YR	②4.1 ④355.0+
7	75図-7	埴	口縁部	内外面ともにナデ。	細粒混、良	にぶい黄橙10YR	①(10.0) ④4.4+
8	75図-8	壺	頸部	内外面ともにナデ。	細粒混、良	にぶい黄橙10YR	④12.7+
9	75図-9	壺	底部	内外面ともにケズリ後ナデ。	粗粒混、やや雑	にぶい橙5YR	④17.5+
10	75図-10	壺	底部	底部ケズリ。内外面ともにケズリ後ナデ。	細粒混、やや雑	にぶい黄橙10YR	④31.1+
11	75図-11	台付甕	口縁部	内外面ともにナデ。S字の屈曲11よりあり。	細粒混、良	にぶい黄2.5Y	④5.9+
12	75図-12	台付甕	口縁部	外面ナナメハケ後ヨコハケ。内面ケズリ後ヨコハケ。	細粒混、良	にぶい褐7.5YR	④2.4+
13	75図-13	台付甕	胴上半	外面ナナメハケ。内面ケズリ後ナデ。	粗粒混、良	にぶい橙7.5YR	④7.5+
14	75図-14	台付甕	胴上半	外面ナナメハケ。内面ケズリ後ナデ。	細粒混、良	にぶい黄橙10YR	④5.9+
15	75図-15	台付甕	脚台接合部	外面ナナメハケ。内面ケズリ後ナデ。	細粒混、やや雑	にぶい黄褐10YR	④5.9+
16	75図-16	台付甕	脚台端部	外面ナデ。内面ケズリ後ナデ。台脚端部折り返し。	粗粒混、良	にぶい黄橙10YR	④9.7+
17	75図-17	台付甕	脚台部	外面タテハケ。内面ケズリ後ヨコハケ。	粗粒混、良	にぶい黄橙10YR	②(8.8) ④131.0+

## 平安時代土器遺物観察表

No	図版番号	器形	部位	形態・成形・調整等の特徴	胎土	色調	法量
1	76図-1	大型甕	口縁～胴部	外面タタキ、内面青海波文タタキ。口唇部斜めに凹 線状に凹み。	細砂粒良	灰10Y	③25.5+ ④3.1kg+
2	76図-2	大型甕	胴部～底部	外面タタキ、内面スリ。	細砂粒良	灰5Y	④810.1+

## 中世石製品遺物観察表

番号	図版番号	出土遺構・地点	器種・遺存度	石材	計測値	形態・特徴
1	79図-1	1号堀	茶白上白1/4	粗粒輝石 安山岩	①高さ12.3②上縁巾3.0③上縁高2.2 ④芯穴径(1.5)⑤挽穴径3.0⑥重さ1.9kg	上縁及び側面は水磨仕上げ。目は摩耗している。
2	79図-2	1号堀	粉挽白下白1/5	粗粒輝石 安山岩	①高さ11.0②上縁巾1.9③上縁高1.9 ④重さ1.9kg	目は摩耗著しい。一部、被熱の箇所あり。
3	79図-3	1号堀	粉挽白下白1/2	粗粒輝石 安山岩	①上面径26.5②高さ7.5③芯穴径2.4 ④重さ4.15kg	摩耗著しい。側面はやや雑な仕上げ。一部、被熱の箇所あり。
4	82図-4	1号堀	粉挽白上白	粗粒輝石 安山岩	①高さ8.6②上縁巾3.0③上縁高1.9 ④供給口径(3.2)④重さ1.15kg	上縁及び側面水磨き、目は粗い。一部被熱の箇所あり。
5	82図-5	1号堀	茶白下白1/4	粗粒輝石 安山岩	①高さ11.0②上縁巾(3.2+)③重さ2.0kg	上面摩耗、受皿部水磨き。
6	82図-6	1号堀	石搗鉢1/6	粗粒輝石 安山岩	①高さ(9.9+)②重さ1.0kg	内面の摩耗少なし。外面及び上縁面は丁寧な調整を施す。
7	82図-7	1号堀	石搗鉢1/4	粗粒輝石 安山岩	①高さ13.7②高台部高さ3.4③重さ1.8kg	内面少し摩耗、上縁、体部ともに丁寧な調整痕あり。片口部一部残る。
8	82図-8	1号堀	石搗鉢1/4	粗粒輝石 安山岩	①高さ10.2②重さ283.6	内面摩耗少なく、上縁、側面丁寧な調整。
9	82図-9	1号堀	石搗鉢1/4	粗粒輝石 安山岩	①高さ(12.3+)②重さ1.25kg	内面摩耗、底部調整痕残る。側面ハツリ痕残る。
10	82図-10	1号堀	石搗鉢1/4	粗粒輝石 安山岩	①高さ12.6②重さ1.15kg	内面摩耗するも少なし。外面部丁寧な調整痕有り。
11	82図-11	1号堀	石搗鉢1/8	粗粒輝石 安山岩	①高さ(9.3+)②重さ250	内面摩耗少なし。外面全体にハツリ痕あり。
12	82図-12	1号堀	台石破片	粗粒輝石 安山岩	①長さ(17.3+)②巾(124.7+) ③厚み(6.3+)④重さ728.9	上下面に平坦面を意識した調整痕あり。
13	82図-13	1号堀	磨石ほぼ完形	粗粒輝石 安山岩	①長さ11.6②巾11.0③厚さ3.3 ④重さ625.9	表裏面磨き面あり。被熱面側縁部を中心にあり。
14	82図-14	1号堀	磨石2/3	粗粒輝石 安山岩	①長さ(8.0+)②巾12.1③厚さ3.5 ④重さ728.9	表裏2面磨き面、表裏共に被熱受ける。
15	83図-1	2号堀	粉挽白ほぼ完形	粗粒輝石 安山岩	①上面径27.5②高さ9.9③ふくみ0.9 ④重さ10.4kg	目やや粗い6分割。
16	83図-2	2号堀	不明未製品	粗粒輝石 安山岩	①長さ16.6②巾11.5③高さ11.6 ④重さ2.4kg	全面にハツリ痕あり。あるいは五輪塔の未製品か？一部被熱痕跡あり。
17	86図-3	2号堀	台石？破片	粗粒輝石 安山岩	①長さ(17.0+)②巾(15.4+)③8.4 ④重さ2.38kg	平坦面は摩耗している。
18	86図-4	2号堀	粉挽白1/2	粗粒輝石 安山岩	①上面径26.9②高さ10.7③ふくみ2.1 ④芯穴径2.9⑤供給口3.3⑥重さ4.2kg	下面の目はしっかりとしている。上・側面は丁寧な調整。一部被熱痕跡あり。
19	86図-5	2号堀	粉挽白下白ほぼ完形	粗粒輝石 安山岩	①上面径31.8②高さ16.0③ふくみ3.3 ④えぐり1.5⑤芯穴径4.3⑥重さ24.6kg	目は粗い6分割。摩耗いちじるしい。
20	87図-1	1号切岸	不明未製品、石臼？	粗粒輝石 安山岩	①長さ11.4②巾7.9③高さ8.6④重さ1.2kg	上面に摩耗痕あり。
21	97図-1	2号堅穴状遺構	敲石	粗粒輝石 安山岩	①長さ7.2②巾5.6③厚さ3.8④重さ307.3	表裏に敲打痕あり。
22	97図-2	2・3号堅穴状遺構	石搗鉢1/6	粗粒輝石 安山岩	①高さ(5.3+)②重さ217.5	内外面共にハツリ痕あり。
23	98図-1	4号堅穴状遺構	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ18.2②巾11.5③厚さ8.6④重さ2.3kg	各面に一部づつ磨面あり。
24	109図25土-1	25号土坑	石搗鉢1/6	粗粒輝石 安山岩	①高さ(11.2+)②重さ400	内面粗い磨面。外面丁寧な調整。
25	109図25土-2	25号土坑	茶白1/2	粗粒輝石 安山岩	①高さ(10.1+)②芯穴径2.7③重さ4.8kg	周囲はハツリ痕。3つに割れたものを接合。
26	109図25土-3	25号土坑	粉挽白上白1/4	粗粒輝石 安山岩	①高さ(7.6+)②供給口(4.1) ③重さ1.3kg	上縁側面ともに丁寧な調整。目は粗め。摩耗少ない。一部被熱痕跡あり。
27	109図25土-4	25号土坑	凹石	粗粒輝石 安山岩	①長さ23.2②巾16.6③厚さ12.1 ④重さ4.1kg	表側裏面に敲打痕あり。
28	110図25土-5	25号土坑	台石破片？	粗粒輝石 安山岩	①長さ(14.6+)②巾(13.5+) ③厚さ(13.2+)④重さ4.8kg	被熱部分有り。表面はやや平坦である。

## 遺物観察表

29	110図 25土-6	25号土坑	不明石製品	粗粒輝石 安山岩	①長さ(20.1+) ②巾(12.7+) ③重さ4.5kg	ごく一部磨面らしきものあり。一部被熱受ける。
30	110図28土-1	28号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ13.2②巾11.7③厚さ3.2④重さ1.5kg	表裏面ともに磨面あり。
31	110図33土-1	33号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ10.5②巾11.7③厚さ3.8 ④重さ585.9	表裏面ともに磨面及び敲打痕有り。
32	110図34土-1	34号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ12.1②巾8.2③厚さ3.8④重さ715.9	
33	111図38土-2	38号土坑	敲打痕ある台石	粗粒輝石 安山岩	①長さ30.5②高さ19.6③厚さ10.5 ④重さ7.4kg	片面に敲打痕あり。
34	111図38土-1	38号土坑	石播鉢1/3	粗粒輝石 安山岩	①高さ(11.8+) ②重さ1.9kg	内面磨面、底部調整痕、他面ハツリ痕あり。
35	111図39土-1	39号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ8.6②巾8.2③厚さ4.6④重さ496.5	表裏面磨面あり。
36	111図40土-1	40号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ5.9②巾4.1③厚さ4.6④重さ149.9	表裏面磨面あり。片面に敲打痕あり。
37	111図47土-1	47号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ10.4②巾8.2③厚さ3.9④重さ437.3	表裏面磨面、敲打痕あり。
38	111図47土-2	47号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ13.2②巾(8.1+) ③厚さ3.7 ④重さ432.5	表裏面磨面あり。
39	112図85土-2	85号土坑	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ16.2②巾10.7③厚さ3.7 ④重さ1.35kg	表裏面磨面、一部被熱痕あり。
40	112図115土-1	115号土坑	粉挽白上白小破片	粗粒輝石 安山岩	①長さ5.3+②巾5.2+③厚さ3.4+ ④120.5+	芯穴あり。
41	112図115土-2	115号土坑	粉挽白上白	粗粒輝石 安山岩	①長さ(9.9+) ②芯穴径3.1③重さ3.68kg	目は粗めである。芯穴あり。
42	114図-1	不明地区	粉挽白下白	粗粒輝石 安山岩	①径(32.1+) ②高さ15.1③重さ11.2kg	芯穴の一部残る。目はやや粗い。側面及び下部にハツリ痕あり。
43	114図-2	Ⅲ-3区	石板	頁岩	①長さ(3.4+) ②巾(2.9) ③厚さ0.2 ④重さ2.5	細片のみ。
44	114図-3	V-3区	石板	頁岩	①長さ3.1②巾1.5③厚さ0.3④重さ2.5	細片のみ。
45	114図-4	Ⅵ区	石板	頁岩	①長さ(3.6+) ②巾(1.5+) ③厚さ0.3 ④重さ3.2	細片のみ。
46	114図-5	V-4区	砥石	砥沢石	①長さ(6.9+) ②巾(3.3+) ③厚さ1.4 ④重さ64.9	全面に磨面あり。
47	114図-6	Ⅳ-1区	火打ち石	ぎょくずい	①長さ2.8②巾2.6③厚さ1.5④重さ7.7	数箇所を使用痕跡あり。
48	114図-7	不明地区	火打ち石	ぎょくずい	①長さ4.2②巾2.3③厚さ2.1④重さ4.4	数箇所を使用痕跡あり。
49	114図-8	J-17G	砥石	粗粒輝石 安山岩	①長さ17.9②巾4.4③厚さ3.4④重さ336.0	4面全てに磨面。一部擦痕が明瞭に残る。
50	115図-9	H-20G	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ11.3②巾6.2③厚さ3.4④重さ7.9	表裏面に磨面。側面に敲打痕。
51	115図-10	I-16G	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ8.3②巾6.9③厚み3.4④重さ336.0	表裏面に磨面。片面に敲打痕あり。
52	115図-11	L-19G	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ9.8②巾7.4③厚さ3.4④重さ384.0	表裏面磨面、敲打痕あり。
53	115図-12	Ⅵ-4区	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ11.0②巾6.8③厚さ2.7④重さ361.1	表裏面磨面。片面に敲打痕あり。
54	115図-13	M-7G	磨石	粗粒輝石 安山岩	①長さ26.3②巾21.5③厚さ4.4④重さ4.5kg	表裏面磨面、片面にあるいは敲打痕か?
55	PL 54-14	I-14G	火打ち石	石英	①長さ2.3②巾1.9③厚さ1.6④重さ7.9	未使用の火打ち石
56	PL 54-15	I-22G	火打ち石	石英	①長さ3.7②巾1.9③厚さ1.3④重さ10.8	未使用の火打ち石

遺物観察表

中世陶磁器・土器遺物観察表

No	図版番号	出土遺構名	名称	部位	形態・成形・調整等の特徴	胎土	色調	法量	時代
1	109図44土-1	44号土坑	土器 皿	口縁～底部	底部左回転糸切り無調整。	細砂粒少量含む	橙 5YR	①(9.5) ②(6.0) ③2.5 ④18.5+	中世
2	109図63土-1	63号土坑	軟質陶器 内耳鍋	口辺	器壁やや厚い。	小礫0.1～0.3cm大 少量含む。	暗赤褐 5YR	④25.6+	中世
3	109図81土・ 82土-1	81・82号 土坑	土器 皿	底部	左回転糸切り無調整。	細砂粒極少量含む	にぶい黄橙10YR	②4.7 ④31.1+	中世
4	109図85土-1	85号土坑	軟質陶器 内耳鍋	口縁部片	焼成良好。	小礫0.1～0.3cm大 少量含む。	にぶい橙 5YR	④23.6+	中世
5	113図-1	I-2区	土器 皿	底部	外面左回転糸切り無調整。	細砂粒少量含む	にぶい橙7.5YR	②4.8 ④27.0+	中世
6	113図-2	K-23G	土器 香炉	脚部片	酸化炎焼成。	細砂粒極少量含む	にぶい橙7.5YR	②8.0 ③3.3+④17.6+	中世
7	113図-3	N-1G	土器 皿	底部	左回転糸切り無調整。	細砂粒少量含む	にぶい橙7.5YR	④5.7+	中世
8	113図-4	N-4G	常滑陶器 甕?	胴部	体部小片。	小礫0.1～0.3cm大 少量含む。	断面黄灰2.5Y	④66.9+	中世
9	113図-5	I-2区	土器 皿	口縁～底部	轆轤左回転か?	細砂粒極少量含む	にぶい橙7.5YR	①(12.0) ②(8.0) ③3.0 ④8.4+	中世
10	113図-6	一括	土器 皿	胴部～底部	底部左回転糸切り無調整。	細砂粒極少量含む	にぶい橙7.5YR	③ (8.0) ④16.9+	中世

近世陶磁器・土器遺物観察表

No	図版番号	出土遺構名	名称	部位	形態・成形・調整等の特徴	胎土	色調	法量	時代
1	117図-1	J-15G	肥前磁器 碗	胴下半～底部	波佐見系。二重網目文。	精良	灰白N8	②(4.0) ③2.5+ ④39.9+	江戸
2	117図-2	IV-4区	瀬戸・美濃 陶器 皿	口縁部	灰釉丸皿。	精良	淡黄 5Y	①(10.4) ③1.9+④5.6+	16世紀から 17世紀前半
3	117図-3	2号堀土橋	製作地不 詳磁器杯	口縁～胴下半	口縁部内外面に呉須を吹 き付ける。	精良	灰白N8	①(7.2) ②2.7+ ④17.2+	近代以降
4	117図-4	7号土坑	土器 鍋	底部～胴下半	体部下位片。燻し焼成。	細砂粒極少量含む	断面黄灰2.5Y	②(18.2) ③4.1+④53.5+	近現代
5	117図-5	N-7G	瀬戸・美濃 磁器 合子	蓋	外面染め付け。	精良	灰白N8	①4.9 ③0.9 ④8.4+	近代以降

中近世金属製遺物観察表

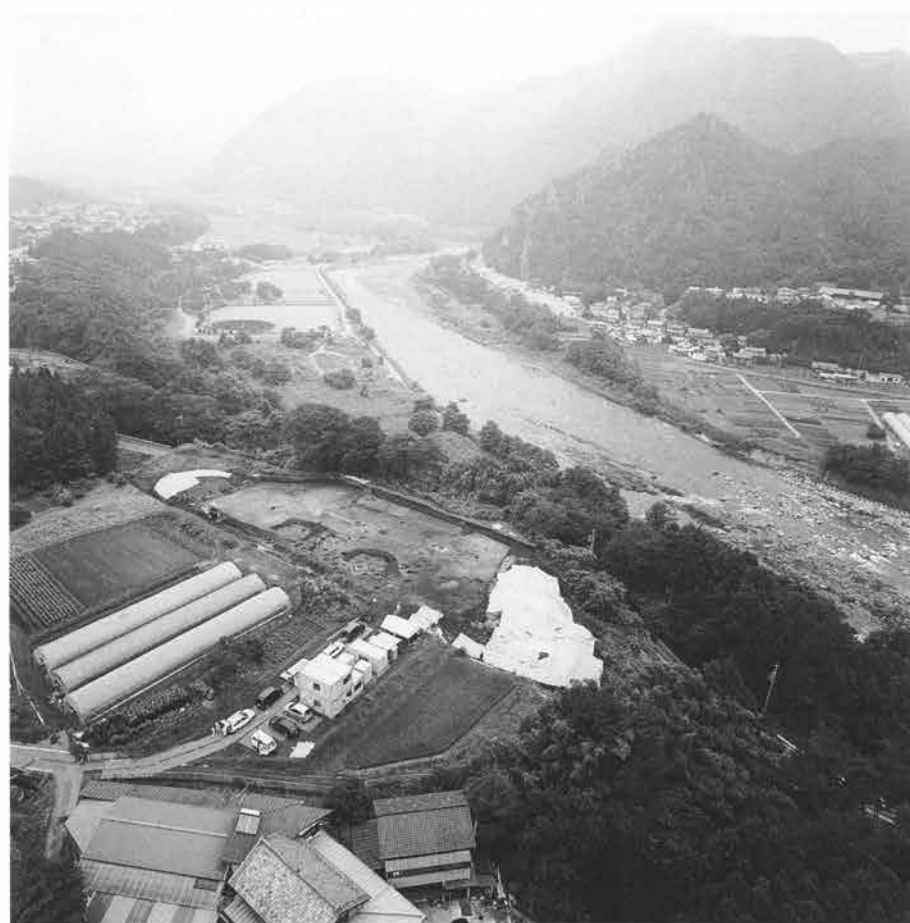
No	図版番号	種類	出土遺構名	法量	特徴
1	86図-6	天聖元寶	2号堀	径2.25, 方孔長0.7, 重さ2.9	北宋銭 (1023)。真書体。字は明瞭に見えず。
2	97図-1 竪穴状遺構-1	刀子	1号竪穴状遺構	刃長11.2+, 刃巾1.3, 茎長8.6+, 茎巾1.05, 重さ21.4	刃部は2つに分断され切先が欠失している。茎には木質が 残り、樹皮巻と思われるものがいくつか認められる。
3	112図47土-3	茎付鎌	47号土坑	茎長7.0+, 棟厚0.5, 重さ37.7	茎付鎌の茎の部分が残る。刃部はほとんど欠失している。
4	112図52土-1	不明鉄製品	52号土坑	長3.3, 巾2.5, 厚0.2, 重さ4.1	本来の形状が不明な鉄製品。四辺のうち生きている辺は一 辺のみ。
5	112図89・90土-1	鉄釘	89・90号土坑	長9.8, 巾0.35, 重さ8.7	釘頭が欠損しているため、古代～中世のものかどうか不明 だが錆や鉄質からみて古いものと考えて良い。
6	116図-1	至和元寶	一括	径2.4, 方孔長0.8, 重さ2.6	北宋銭 (1054)。篆書体。字の判読困難。
7	116図-2	刀子	F-25G	刃長6.5+, 刃巾1.2, 茎長1.2+, 茎巾1.1, 重さ8.9	刃先端及び茎尻が欠失している。茎に木質の付着は無い。 小型の刀子である。
8	116図-3	釘	J-15G	釘長7.0, 釘頭巾0.9, 重さ29.7	ほぼ完形の釘。中型でやや厚みのある釘である。木質の付 着は無い。
9	116図-4	釘	II-2区	釘長7.9, 釘頭巾1.5, 重さ38.8	釘頭・釘尻ともによく残る。木質の遺存なし。重みがある。
10	116図-5	釘	III-2区	釘長4.9, 釘頭巾0.9, 重さ4.1	釘尻欠損。釘頭の大きさ、全体の厚み、重さなどが116図 -3・4に較べ細くて軽い。
11	116図-6	不明鉄製品	IV-2区	長2.3, 巾1.0, 厚0.1, 重さ4.1	平面長方形状で、右側辺を3mmほど斜めに折り曲げている。
12	118図-1	寛永通宝	III-2区	径2.45, 方孔長0.7, 重さ2.9	明瞭に字が確認できる。
13	118図-2	火打金	IV-3区	長5.9+, 巾1.8+, 厚0.2, 重さ12.4	上端部及び両側端部が欠損している。
14	118図-3	煙管	IV-4区	長4.6, 径1.3, 重さ12.8	火皿は小さめで、首の短い形態である。

# 写真図版





①奥田道下遺跡遠景（南より）



②奥田道下遺跡中景（南西より）

PL-2



①調査前状況（東より）



②調査前状況（南より）



③調査前状況（西より）



④調査前稲荷様（調査に伴い移転）  
（南より）



⑤遺跡地より北を望む（中世遺構完掘時）



⑥遺跡地より北東を望む（中世遺構完掘時）



⑦遺跡地より東北を望む（中世遺構完掘時）



⑧遺跡地より東を望む（中世遺構完掘時）





①遺跡地より南東を望む（中世遺構完掘時）



②遺跡地より南を望む（中世遺構完掘時）



③遺跡地より南西を望む（中世遺構完掘時）



④遺跡地より西南を望む（中世遺構完掘時）



⑤遺跡地より西を望む（中世遺構完掘時）



⑥基本土層A断面（南より）



⑦基本土層A断面（南より）



⑧基本土層B断面（北より）

PL-4



①旧石器試掘1トレンチ完掘（北より）



②旧石器試掘1トレンチ断面（南より）



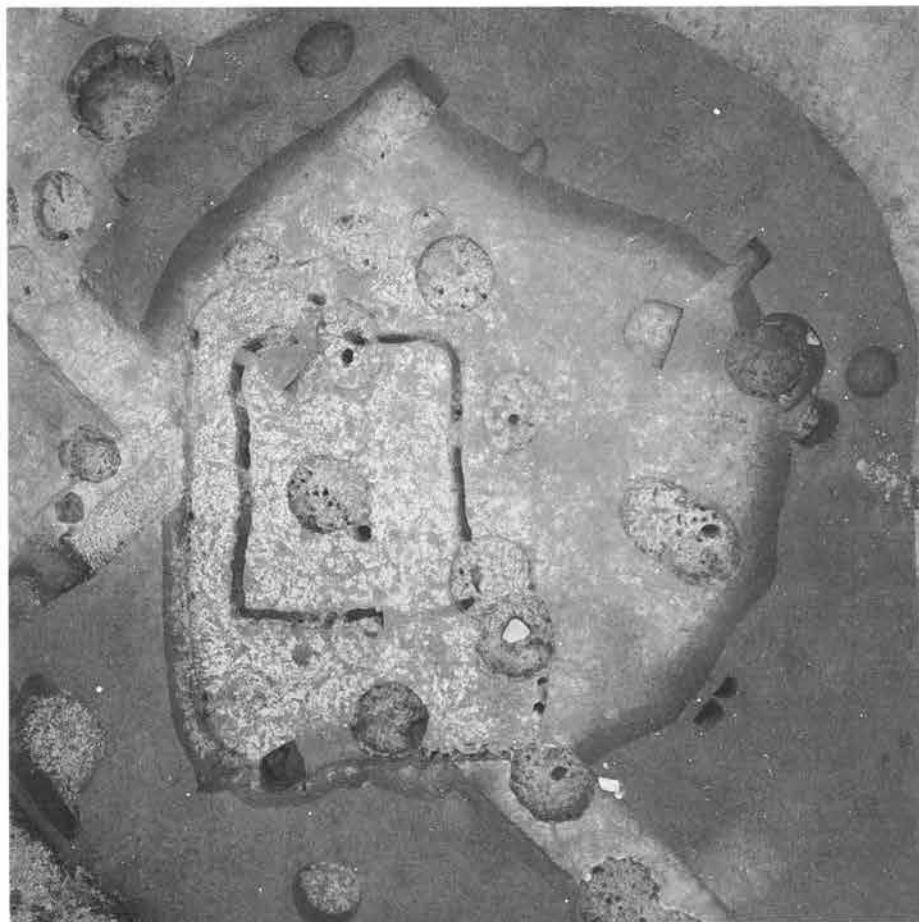
③旧石器試掘2トレンチ完掘（北より）



④旧石器試掘2トレンチ断面（南より）



⑤縄文時代完掘状況（真上より）



①縄文時代1号竪穴式住居完掘



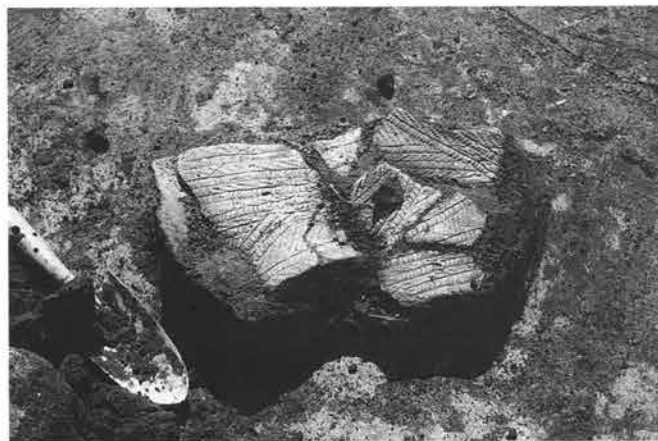
②1号住遺物出土状況（南西より）



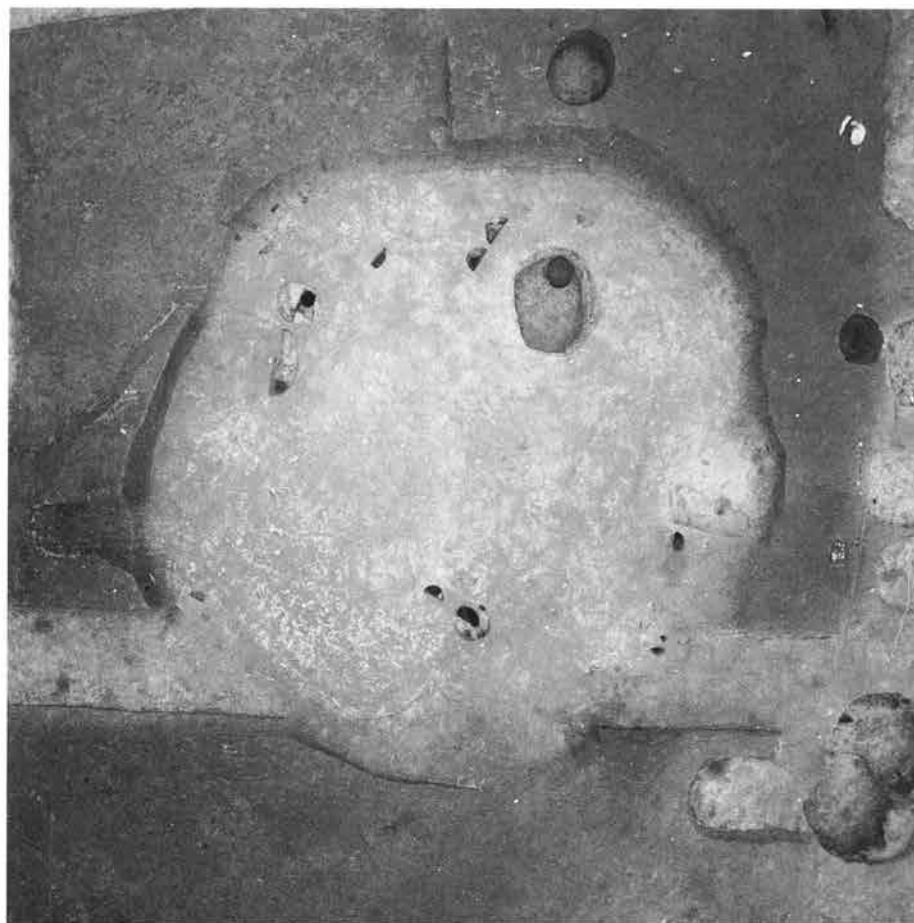
③1号住遺物出土状況（西より）



④1号住遺物出土状況（西より）



⑤1号住遺物出土状況（西より）



①縄文時代2号竪穴式住居完掘



②2号住遺物出土状況（西より）



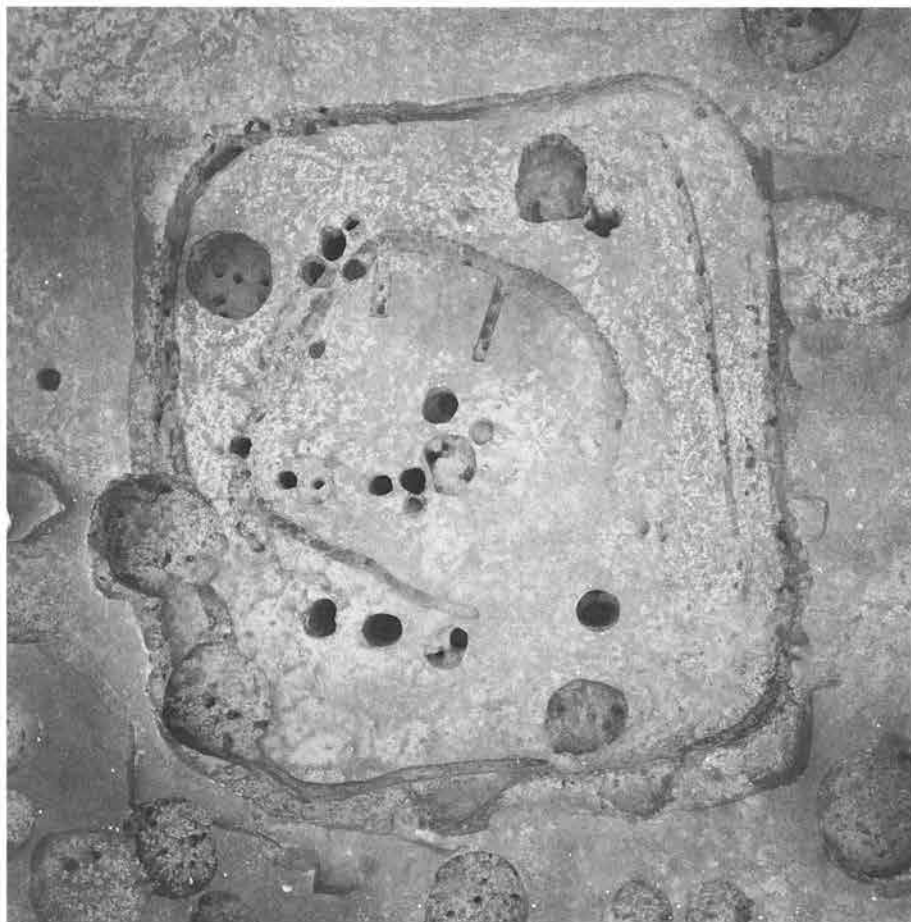
③2号住遺物出土状況（西より）



④2号住遺物出土状況（西より）



⑤2号住遺物出土状況（西より）



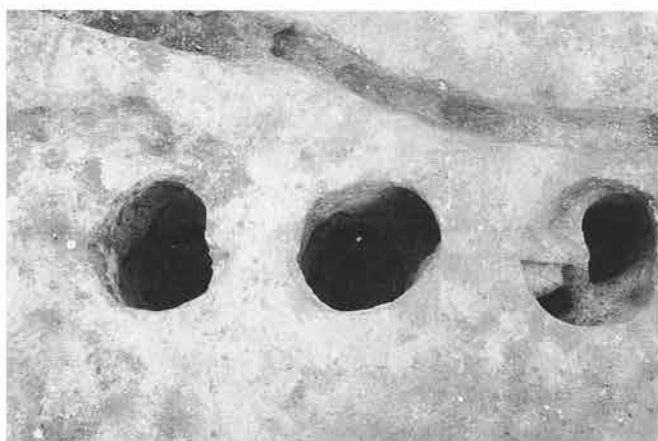
①縄文時代3号竪穴式住居完掘



②3号住完掘状況（南より）



③3号住遺物出土状況（西より）



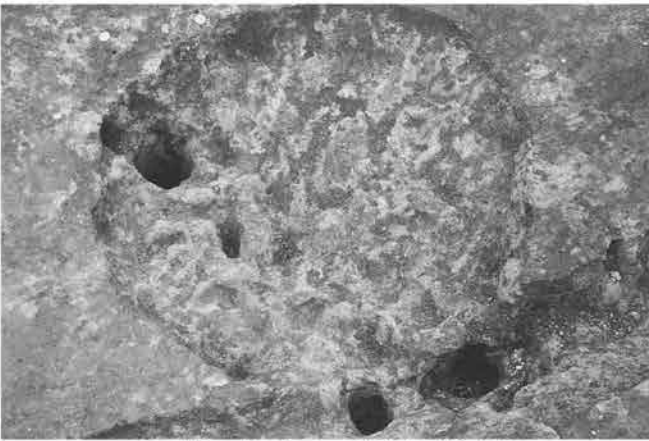
④3号住内10~12ピット（西より）



⑤3号住西側礫出土状況



①縄文時代4号竪穴式住居完掘



②4号住1号ピット完掘状況（北より）



③4号住2号ピット完掘状況（南より）



④4号住4号ピット完掘状況（南より）



⑤4号住3号ピット完掘状況（東より）



①縄文時代5号竪穴式住居完掘



②5号住遺物出土状況（西より）



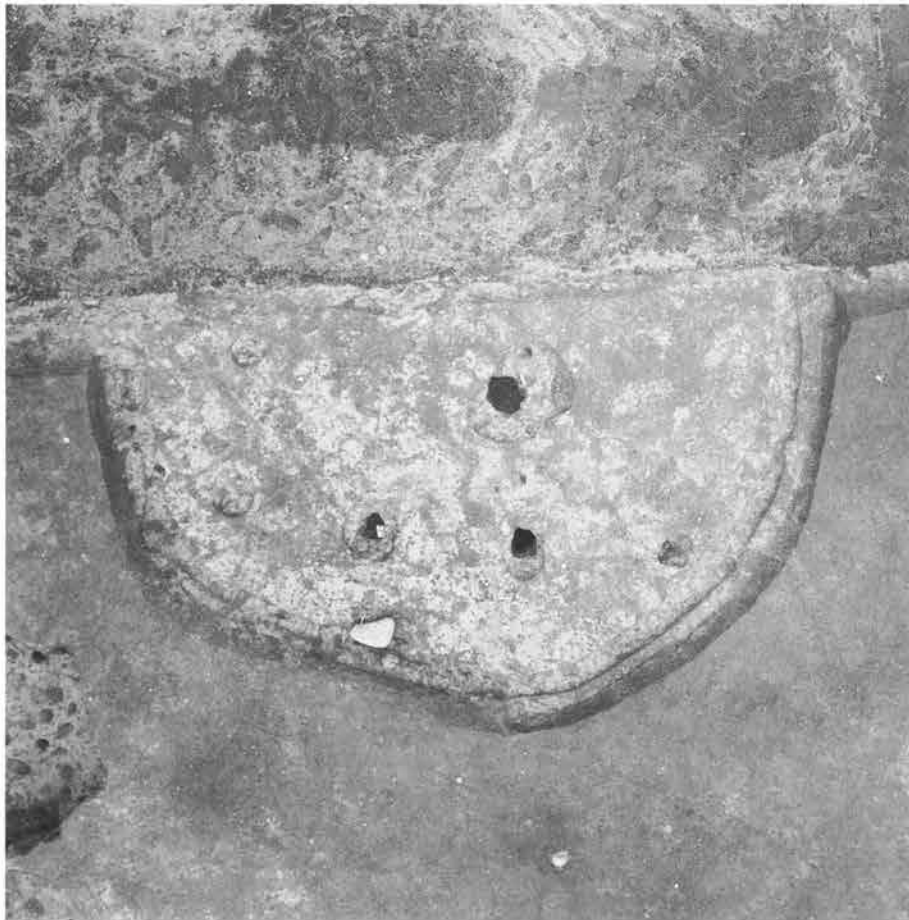
③5号住遺物出土状況（西より）



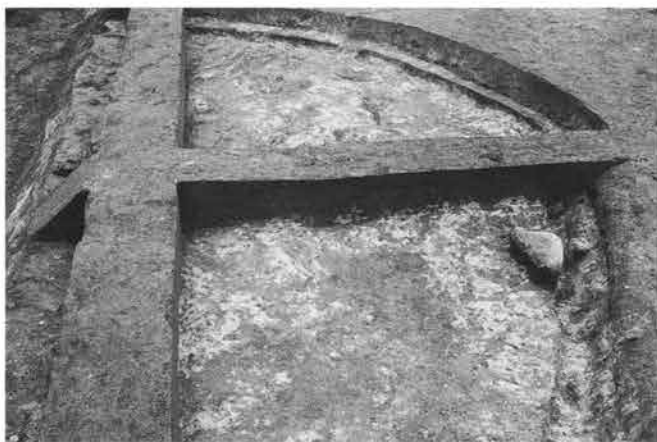
④5号住ピット群完掘状況（北東より）



⑤5号住1号土坑完掘状況（西より）



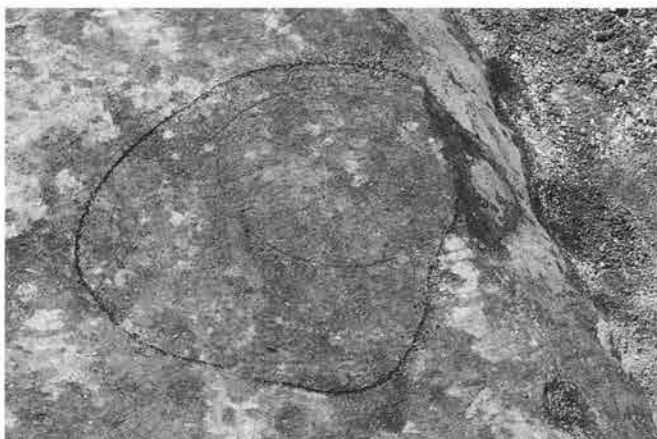
①縄文時代6号竪穴式住居完掘



②6号住南北土層断面状況(西より)



③6号住遺物出土状況(北より)



④6号住炉完掘状況(南より)



⑤6号住2号ビット半裁状況(南より)





①縄文時代7号竪穴式住居完掘



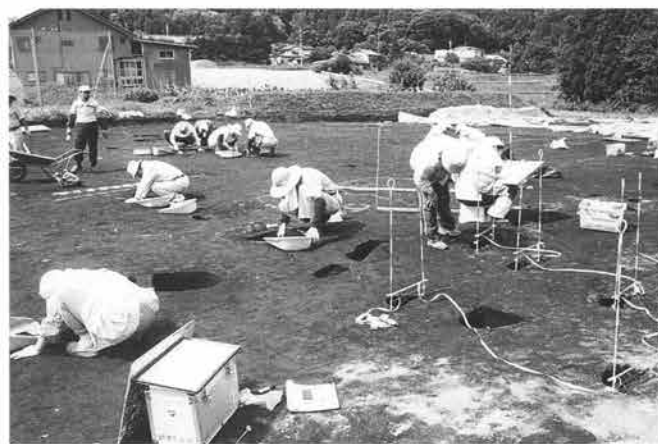
②7号住南北土層断面状況（東より）



③7号住東西土層断面状況（南より）



④遺跡調査風景（東より）



⑤遺跡調査風景（南東より）



①繩文期14号土坑全景



②繩文期15号土坑全景



③繩文期17号土坑全景



④繩文期18号土坑全景



⑤繩文期19号土坑全景



⑥繩文期20号土坑全景



⑦繩文期21号土坑全景



⑧繩文期22号土坑全景



⑨繩文期23号土坑全景



⑩繩文期24号土坑全景



⑪繩文期25号土坑全景



⑫繩文期27号土坑全景



⑬繩文期29号土坑全景



⑭繩文期33号土坑全景



⑮繩文期34号土坑全景



⑯繩文期36号土坑全景



⑰繩文期37号土坑全景



⑱繩文期38号土坑全景



⑲繩文期39・45号土坑全景



⑳繩文期40号土坑全景



㉑繩文期41号土坑全景



㉒繩文期42号土坑全景



㉓繩文期43号土坑全景



㉔繩文期44号土坑全景



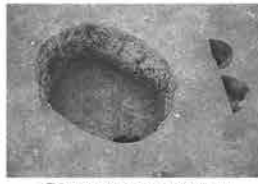
㉕繩文期47・48・49号土坑全景



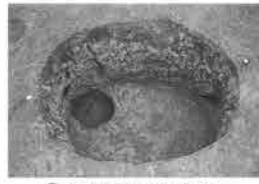
㉖繩文期50・51号土坑全景



㉗繩文期52号土坑全景



㉘繩文期53号土坑全景



㉙繩文期53号土坑全景



㉚繩文期54号土坑全景



㉛繩文期55号土坑全景



㉜繩文期56号土坑遺物出土狀況



㉝繩文期56号土坑遺物出土狀況全景



㉞繩文期57号土坑遺物出土狀況全景



㉟繩文期57号土坑全景



㊱繩文期58号土坑全景



㊲繩文期60号土坑全景



㊳繩文期61号土坑全景



㊴繩文期62号土坑全景



㊵繩文期63号土坑全景



①繩文期64号土坑全景



②繩文期65号土坑全景



③繩文期66号土坑全景



④繩文期67号土坑全景



⑤繩文期68号土坑全景



⑥繩文期69号土坑全景



⑦繩文期70号土坑全景



⑧繩文期71号土坑全景



⑨繩文期71・72号土坑全景



⑩繩文期73号土坑全景



⑪繩文期74号土坑全景



⑫繩文期75号土坑全景



⑬繩文期76号土坑全景



⑭繩文期77号土坑全景



⑮繩文期78号土坑全景



⑯繩文期79号土坑全景



⑰繩文期80号土坑全景



⑱繩文期81号土坑全景



⑲繩文期82号土坑全景



⑳繩文期83号土坑全景



㉑繩文期84号土坑全景



㉒繩文期95号土坑全景



㉓繩文期96号土坑断面



㉔繩文期97号土坑断面



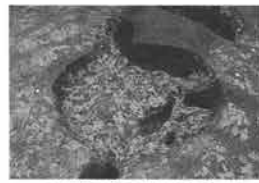
㉕繩文期98号土坑断面



㉖繩文期99号土坑断面



㉗繩文期100号土坑全景



㉘繩文期103号土坑全景



㉙繩文期109号土坑全景



㉚繩文期110号土坑全景



㉛繩文期114号土坑全景



㉜繩文期115号土坑全景



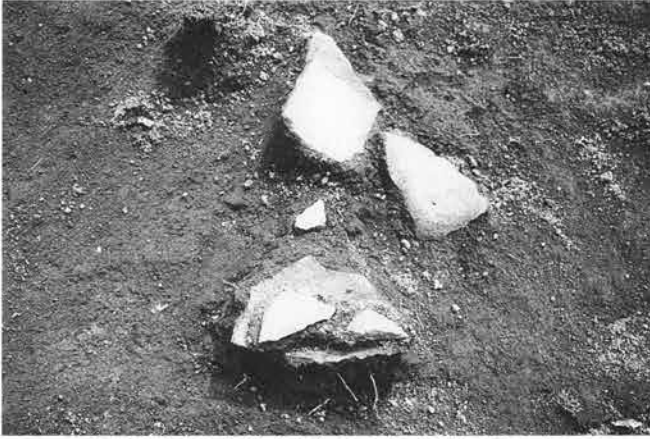
㉝繩文期116号土坑全景



㉞繩文期117号土坑全景



㉟繩文期118・119号土坑全景



①弥生時代土器集中遺物出土状況近接（北より）



②弥生時代土器集中遺物出土状況全体（北より）



③古墳時代1号土坑断面（西より）



④古墳時代3号土坑断面（南より）



⑤古墳時代3号土坑完掘（南より）



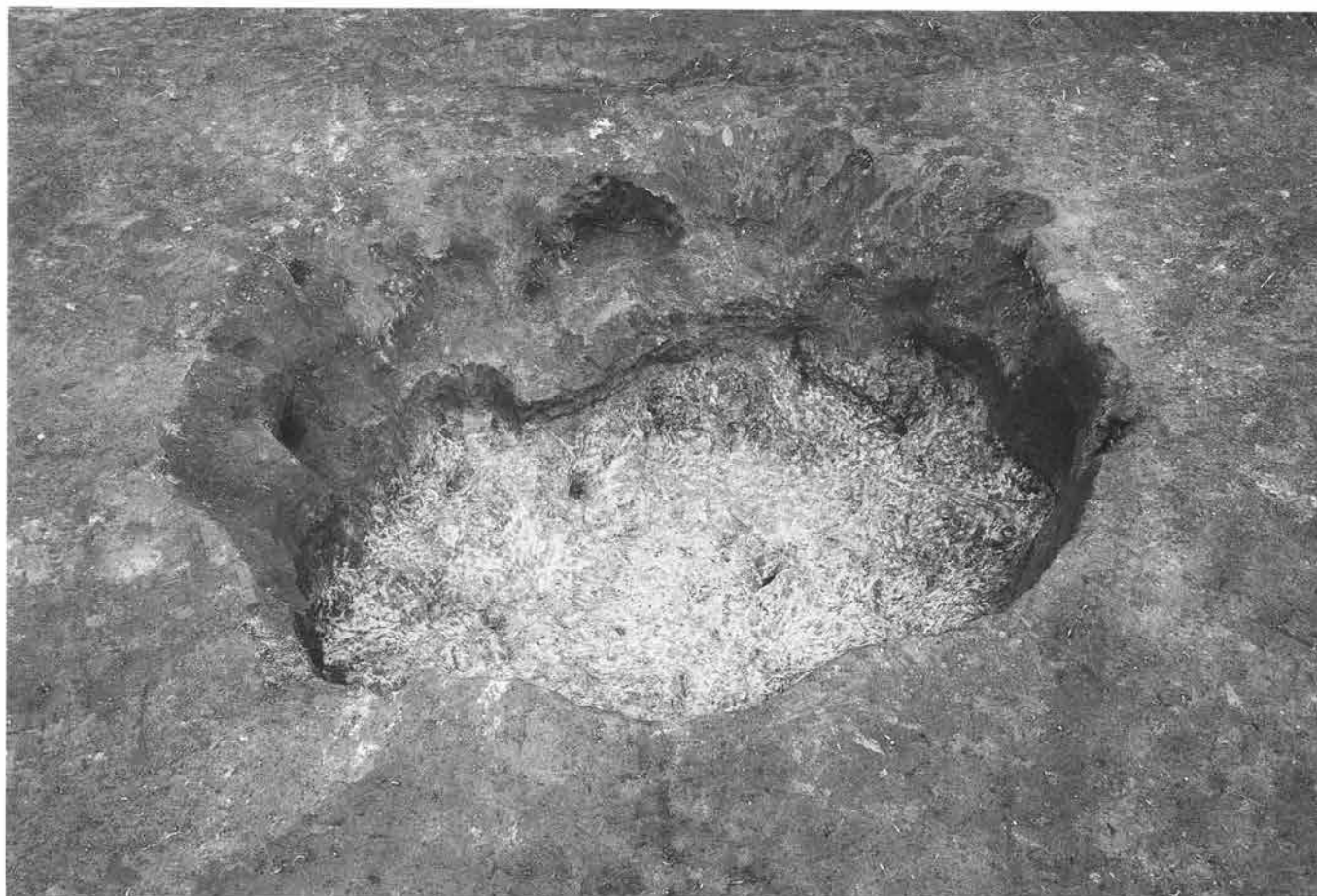
⑥古墳時代5号土坑完掘（南より）



⑦古墳時代6号土坑完掘（南より）



⑧古墳時代7号土坑完掘（南より）



①古墳時代4号土坑完掘（南より）



②古墳時代4号土坑他検出状況（南より）



③古墳時代4号土坑完掘近接（南西より）



④古墳時代4号土坑断面（南より）



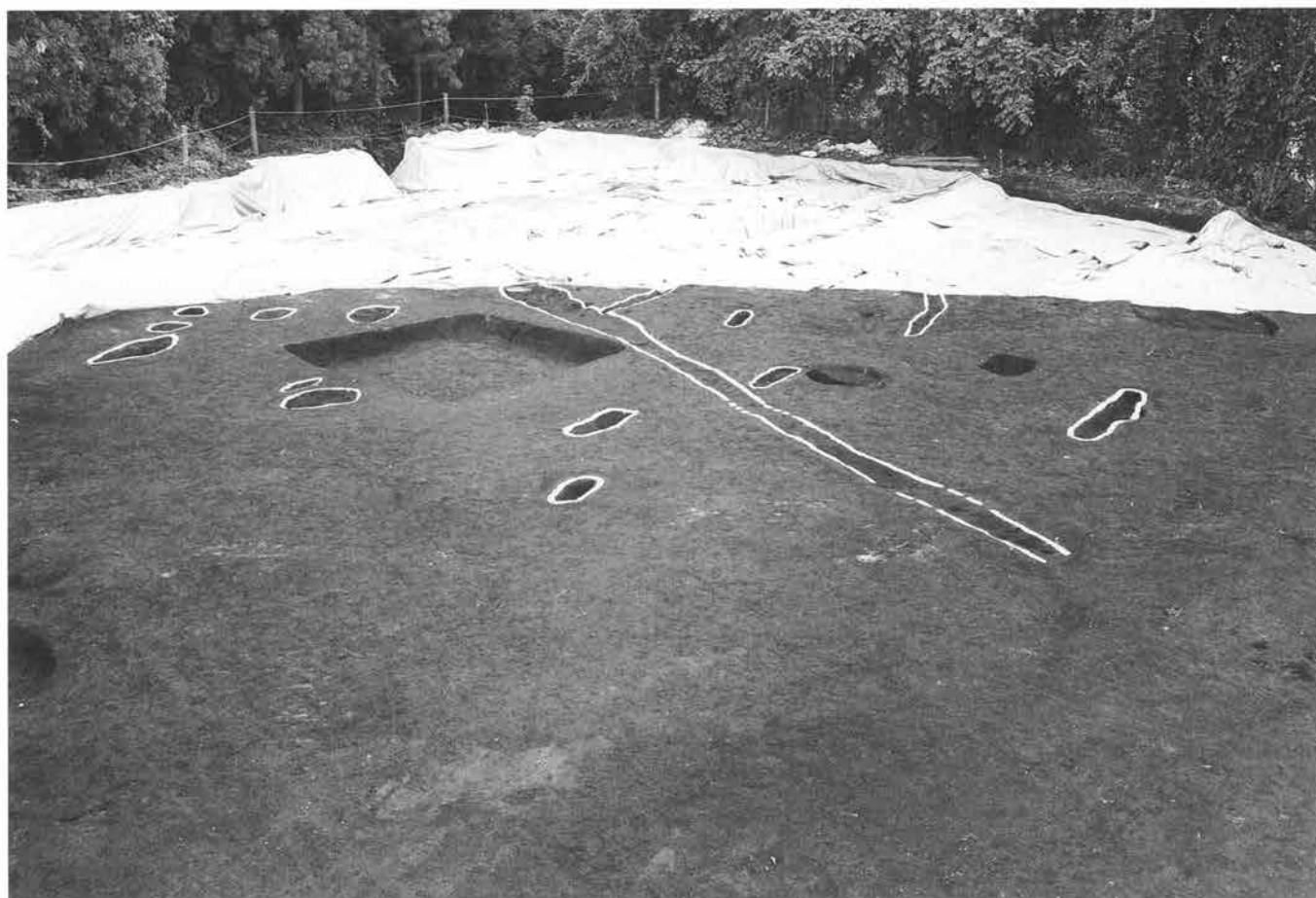
⑤古墳時代4号土坑断面近接（南より）



①古墳時代8号土坑完掘（南より）



②古墳時代3号土坑断面（南より）



③古墳時代島・道全体（南東より）



④古墳時代1号サク完掘



⑤古墳時代2号サク完掘



⑥古墳時代3号サク完掘



⑦古墳時代4号サク完掘



⑧古墳時代6号サク完掘



⑨古墳時代7号サク完掘



⑩古墳時代8号サク完掘



⑪古墳時代9号サク完掘



⑫古墳時代10号サク完掘



⑬古墳時代4号土坑調査風景



①平安時代1号溝完掘（西より）



②平安時代1号溝A断面（西より）



③平安時代1号溝遺物出土状況（北より）



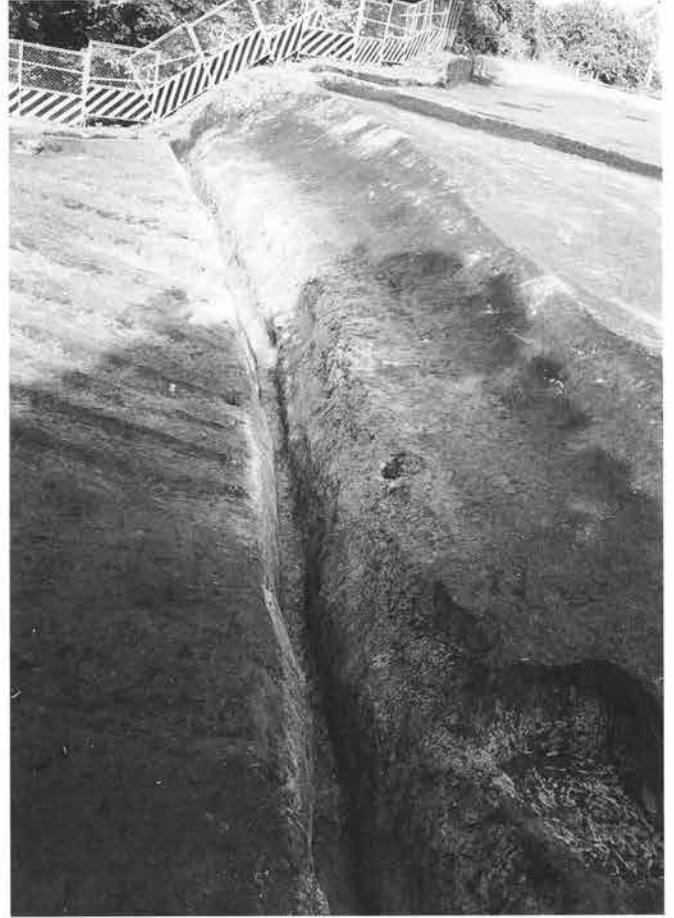
④平安時代1号溝遺物出土状況近接（北より）



⑤中世遺構群完掘（主要遺構群部分）（南より）



①中世1号堀完掘（南西より）



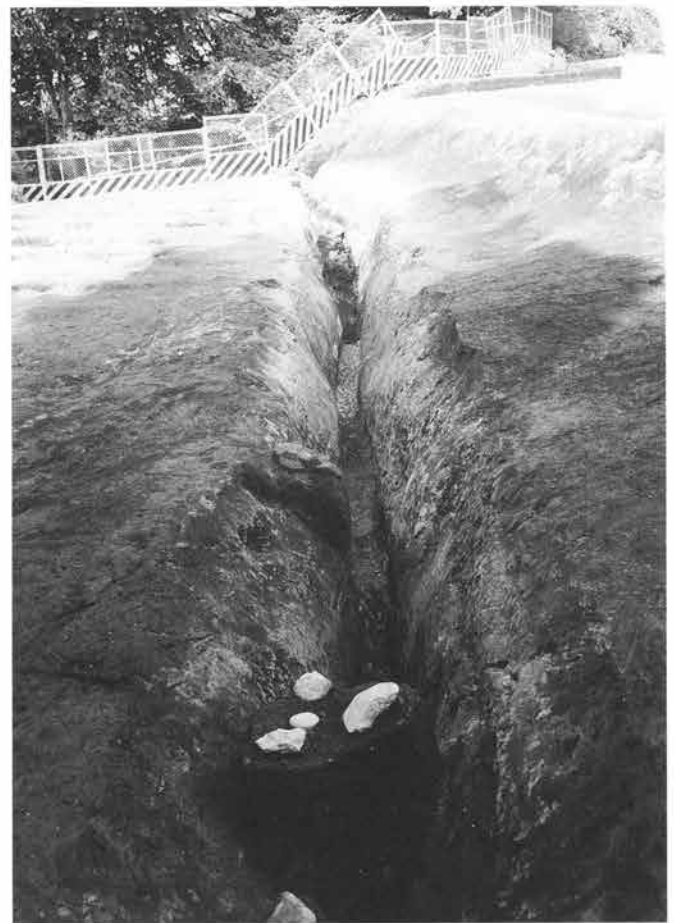
②中世1号堀完掘（西南より）



③中世1号堀土層断面（東より）



④中世1号堀断面（南より）



⑤中世1号堀遺物出土状況（西南より）





①中世1号堀完掘（西より）



②中世1号堀B断面（東より）



③中世1号堀B断面近接（東より）



④中世1号堀遺物出土状況



⑤中世1号堀遺物出土状況



⑥中世1号堀遺物出土状況



⑦中世1号堀遺物出土状況



⑧中世1号堀遺物出土状況



⑨中世1号堀遺物出土状況



⑩中世1号堀遺物出土状況



⑪中世1号堀遺物出土状況



⑫中世1号堀遺物出土状況



⑬中世1号堀遺物出土状況



⑭中世1号堀遺物出土状況



⑮中世1号堀遺物出土状況



⑯中世1号堀遺物出土状況



⑰中世1号堀遺物出土状況



⑱中世1号堀遺物出土状況



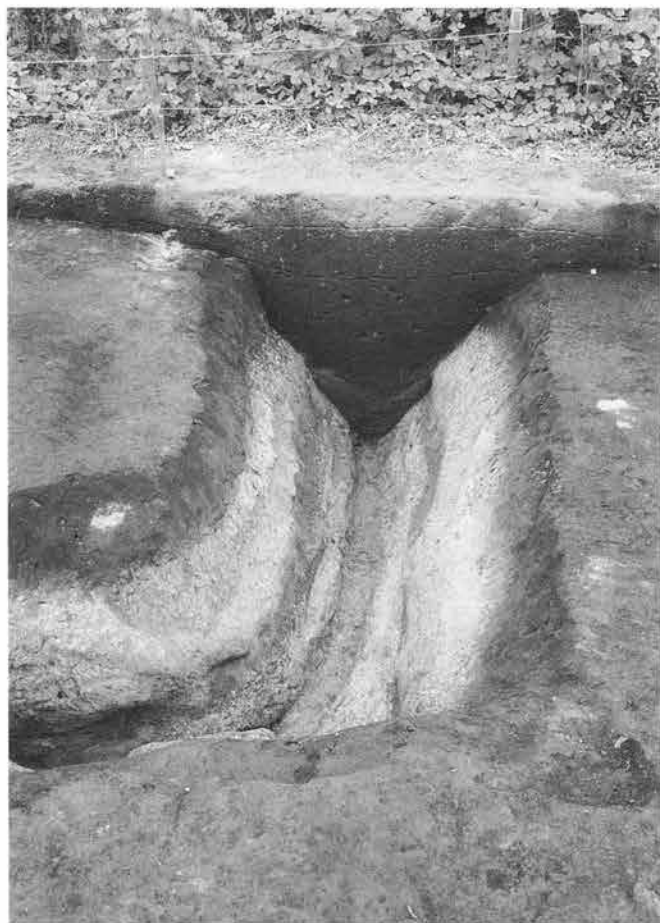
①中世2号堀完掘（南より）



②中世2号堀完掘（西より）



③中世2号堀完掘（東より）



①中世2号堀南東コーナー完掘（南より）



②中世2号堀南西コーナー完掘（南より）



③中世2号堀陸橋西側部完掘（東より）



④中世2号堀陸橋西側完掘（東より）



⑤中世2号堀陸橋東側完掘（東より）



⑥中世2号堀陸橋西側完掘（西より）



①中世2号堀陸橋西側完掘（東より）



②中世2号堀陸橋西側完掘（西より）



③中世2号堀東南部コーナー完掘（東より）



④中世2号堀東南部コーナー完掘近接（東より）



⑤中世2号堀陸橋西側完掘（東より）



⑥中世2号堀陸橋部完掘（北より）



①中世2号堀西南部コーナー完掘（東より）



②中世2号堀東南部コーナー完掘（東より）



③中世2号堀A断面（南より）



④中世2号堀C断面（南より）



⑤中世2号堀D断面（東より）



⑥中世2号堀E断面（東より）



①中世2号堀西部遺物出土状況（南より）



②中世2号堀北東部遺物出土状況（南より）



③中世2号堀南部遺物出土状況完掘（西より）



④中世2号堀 石臼出土状況近接（東より）



⑤中世2号堀北部 石臼・礫出土状況



①中世2号堀陸橋部西部遺物出土状況（西より）



②中世2号堀陸橋部西部遺物近接出土状況（南より）



③中世1号切岸完掘（北より）



④中世1号切岸土層断面（北より）



⑤中世1号切岸土層断面（南より）



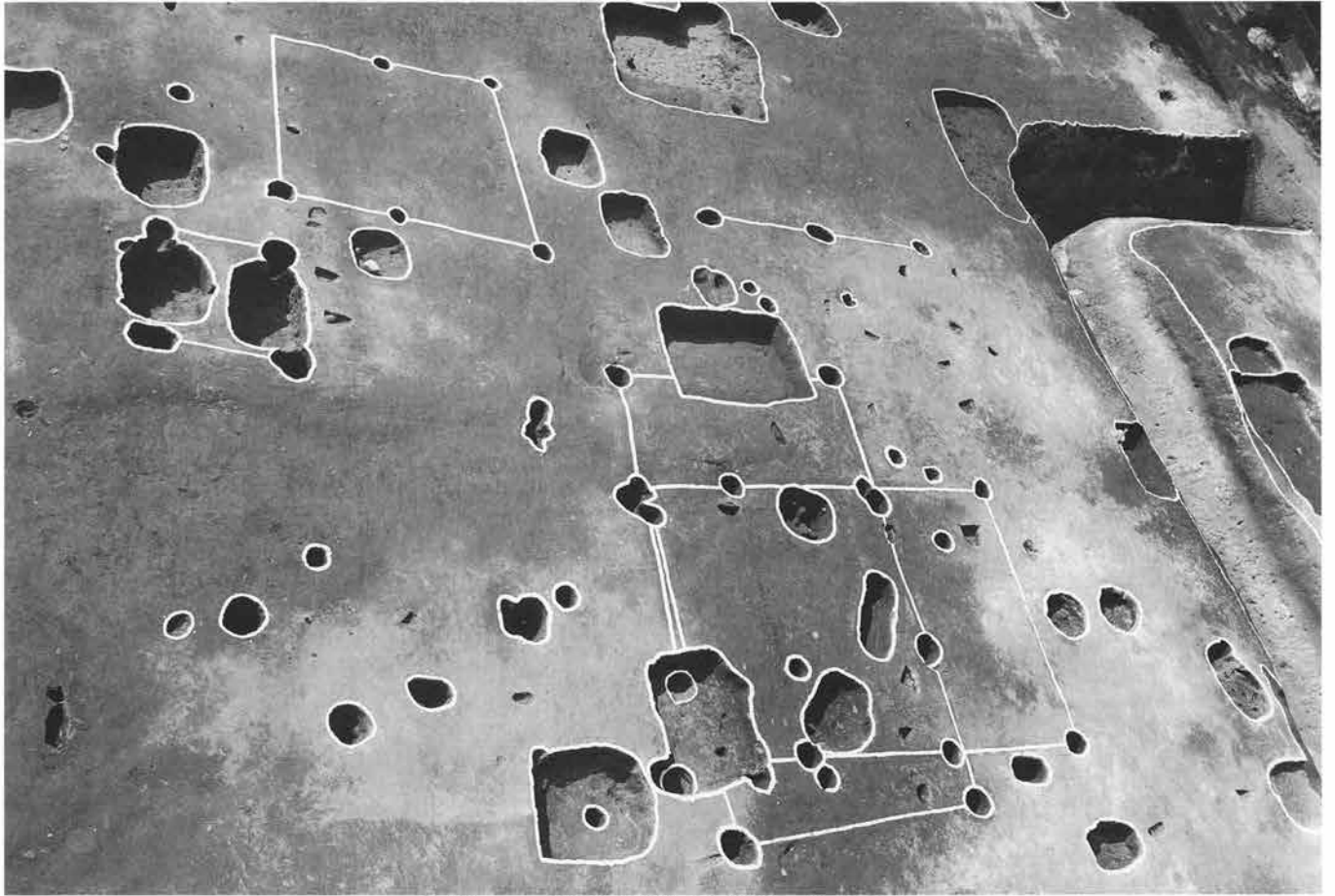
⑥円弧崩れ完掘（北より）



⑦円弧崩れ、中世1号堀断面（西より）



⑧円弧崩れ（東より）



①中世1～4号掘立柱建物群完掘状況（南東より）

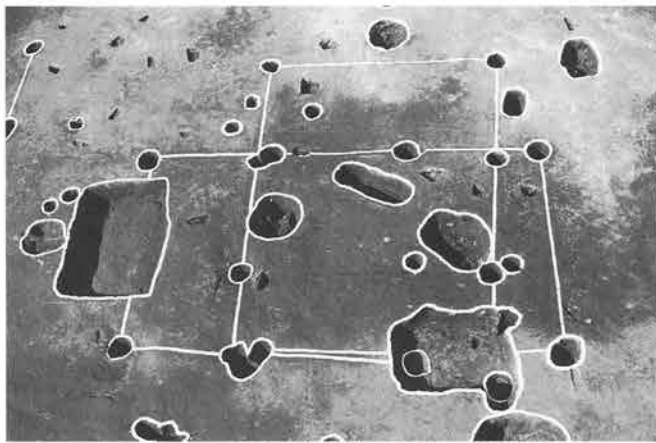


②中世3・4号掘立柱建物完掘状況（東より）

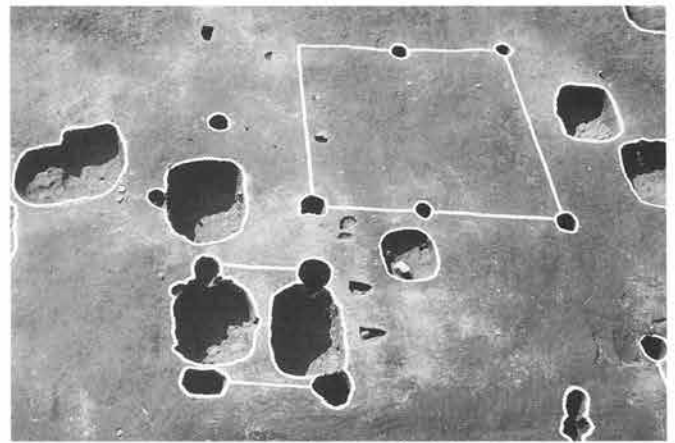




①中世1・2号掘立柱建物群完掘状況（南より）



②中世1・2号掘立柱建物完掘状況（南より）



③中世3・4号掘立柱建物群完掘状況



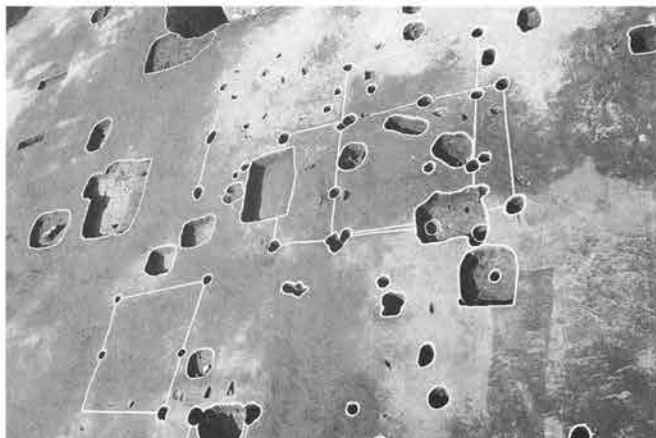
④中世1・2・5・6号掘立柱建物完掘状況（南より）



⑤2号柱穴列（南より）



①中世堅穴状遺構群（1～6号）完掘状況（南東より）



②中世堅穴状遺構群（2・3・4・6号）完掘状況



③中世5号堅穴状遺構完掘状況（東より）



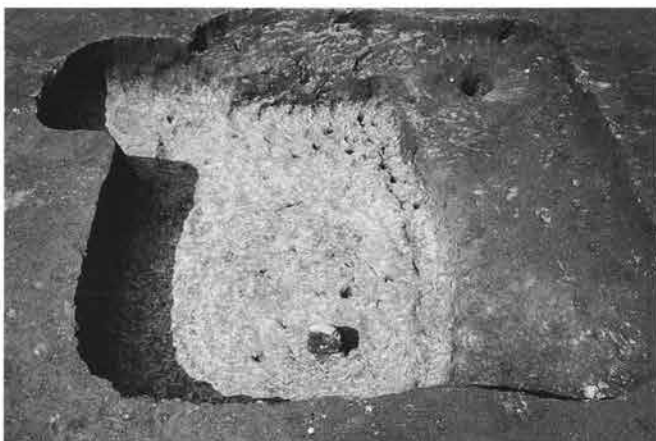
④中世1号堅穴状遺構完掘状況（南より）



⑤中世1号堅穴状遺構完掘状況（2号堀との位置）



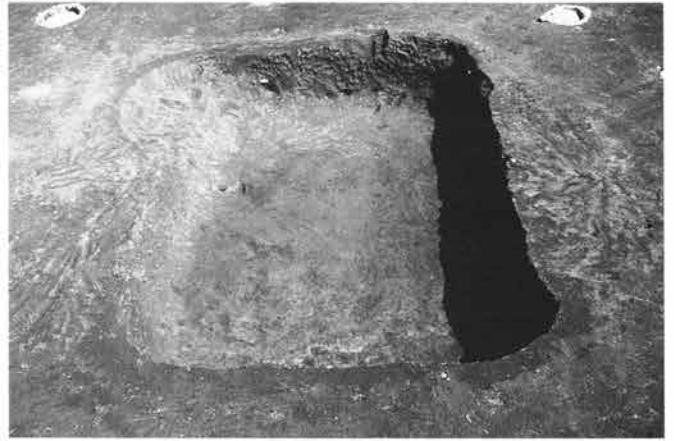
⑥中世1号堅穴状遺構刀子出土状況



⑦中世2・3号堅穴状遺構完掘状況（北より）



①中世4号竖穴状遺構完掘（北より）



②中世5号竖穴状遺構完掘（南より）



③中世6号竖穴状遺構完掘（西より）



④中世7号竖穴状遺構完掘（西より）



⑤中世8号竖穴状遺構完掘（北より）



⑥中世9号竖穴状遺構完掘（南より）



⑦中世4号土坑完掘



⑧中世9号土坑完掘



⑨中世10号土坑完掘



⑩中世11号土坑完掘



⑪中世12号土坑完掘



⑫中世16号土坑完掘



⑬中世20号土坑完掘



⑭中世21号土坑完掘



①中世22号土坑断面



②中世23号土坑完掘



③中世25号土坑完掘



④中世26号土坑完掘



⑤中世27号土坑遺物出土狀況



⑥中世28号土坑遺物出土狀況



⑦中世29号土坑完掘



⑧中世30号土坑完掘



⑨中世31号土坑完掘



⑩中世32号土坑完掘



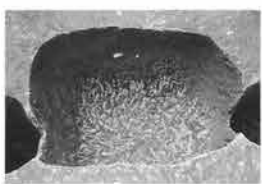
⑪中世32号土坑燒土炭化物出土狀況



⑫中世33号土坑完掘



⑬中世34号土坑完掘



⑭中世35号土坑完掘



⑮中世36号土坑完掘



⑯中世37号土坑完掘



⑰中世38号土坑完掘



⑱中世38号土坑遺物出土狀況



⑲中世39号土坑遺物出土狀況



⑳中世40号土坑完掘



㉑中世41号土坑完掘



㉒中世42号土坑完掘



㉓中世43号土坑完掘



㉔中世44号土坑完掘



㉕中世45号土坑完掘



㉖中世46号土坑完掘



㉗中世47号土坑完掘



㉘中世48号土坑完掘



㉙中世49号土坑完掘



㉚中世50号土坑完掘



㉛中世51号土坑完掘



㉜中世52号土坑完掘



㉝中世53号土坑完掘



㉞中世54号土坑完掘



㉟中世55号土坑断面



㊱中世56号土坑完掘



㊲中世57号土坑完掘



㊳中世58号土坑完掘



㊴中世59号土坑断面



㊵中世60号土坑完掘



①中世61号土坑完掘



②中世62号土坑完掘



③中世63号土坑完掘



④中世64号土坑完掘



⑤中世65号土坑完掘



⑥中世66号土坑完掘



⑦中世67号土坑完掘



⑧中世68号土坑完掘



⑨中世69号土坑完掘



⑩中世70号土坑完掘



⑪中世71号土坑完掘



⑫中世73号土坑完掘



⑬中世74号土坑完掘



⑭中世75号土坑完掘



⑮中世76号土坑完掘



⑯中世77号土坑完掘



⑰中世78号土坑完掘



⑱中世80号土坑完掘



⑲中世81·82号土坑完掘



⑳中世83号土坑完掘



㉑中世84号土坑完掘



㉒中世85号土坑完掘



㉓中世86号土坑完掘



㉔中世87号土坑完掘



㉕中世89·90号土坑完掘



㉖中世89·90号土坑烧土炭化物出土状况



㉗中世94号土坑完掘



㉘中世95号土坑完掘



㉙中世96号土坑完掘



㉚中世97号土坑完掘



㉛中世101(右)·102号土坑



㉜中世98号土坑完掘



㉝中世105号土坑完掘



㉞中世106号土坑完掘



㉟中世107号土坑完掘



㊱中世111·112号土坑完掘



㊲中世115号土坑完掘



㊳中世117号土坑完掘



㊴中世118号土坑完掘



1住-1



1住-3



1住-2



1住-4



1住-7



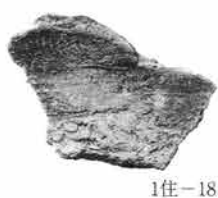
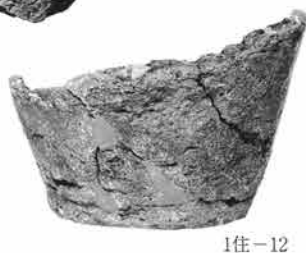
1住-5

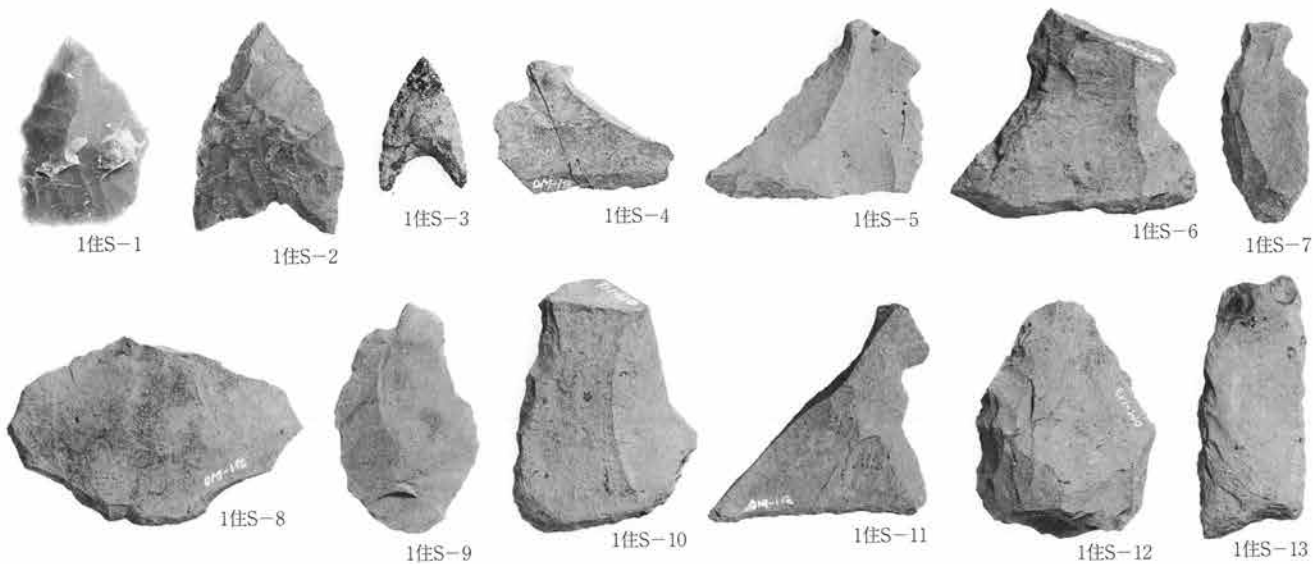
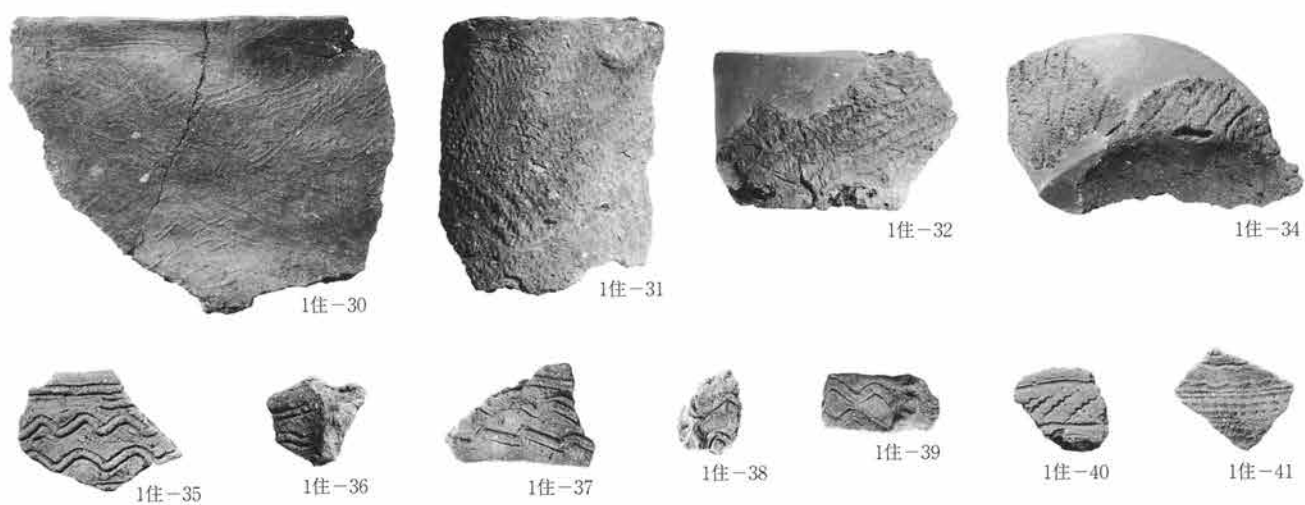
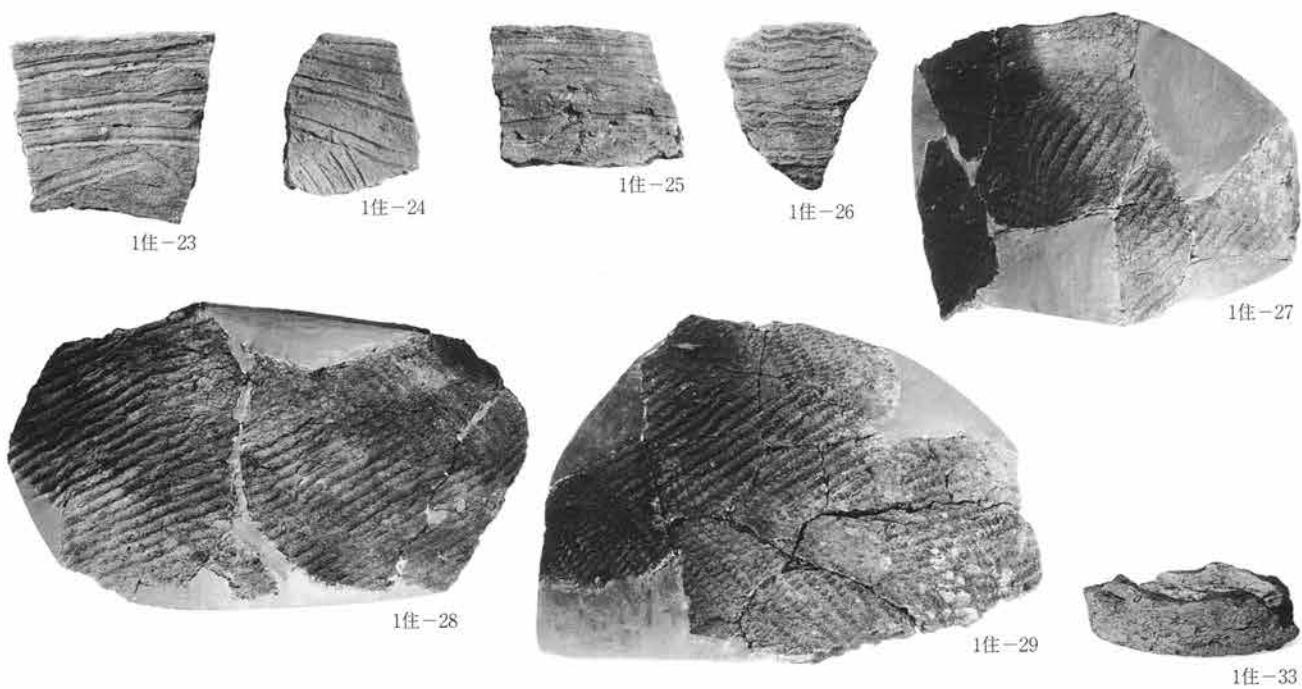


1住-6

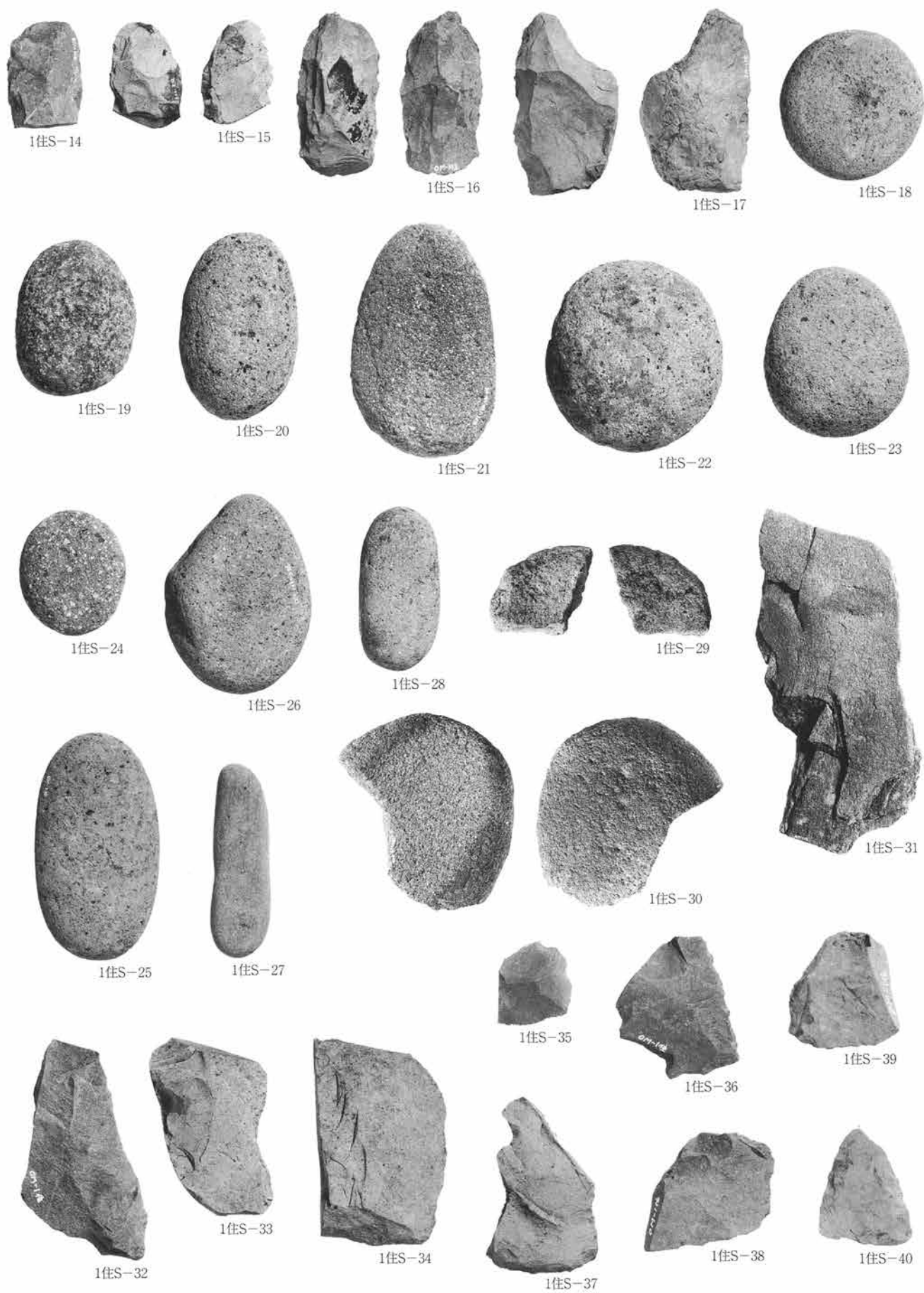


1住-8









PL-36



1住S-41



1住S-42



1住S-43



1住S-44



1住S-45



1住S-46



1住S-47



1住S-48



1住S-49



1住S-50



1住S-51



1住S-52



1住S-53



1住S-54



1住S-56



1住S-57



1住S-58



1住S-59



1住S-55



1住S-60



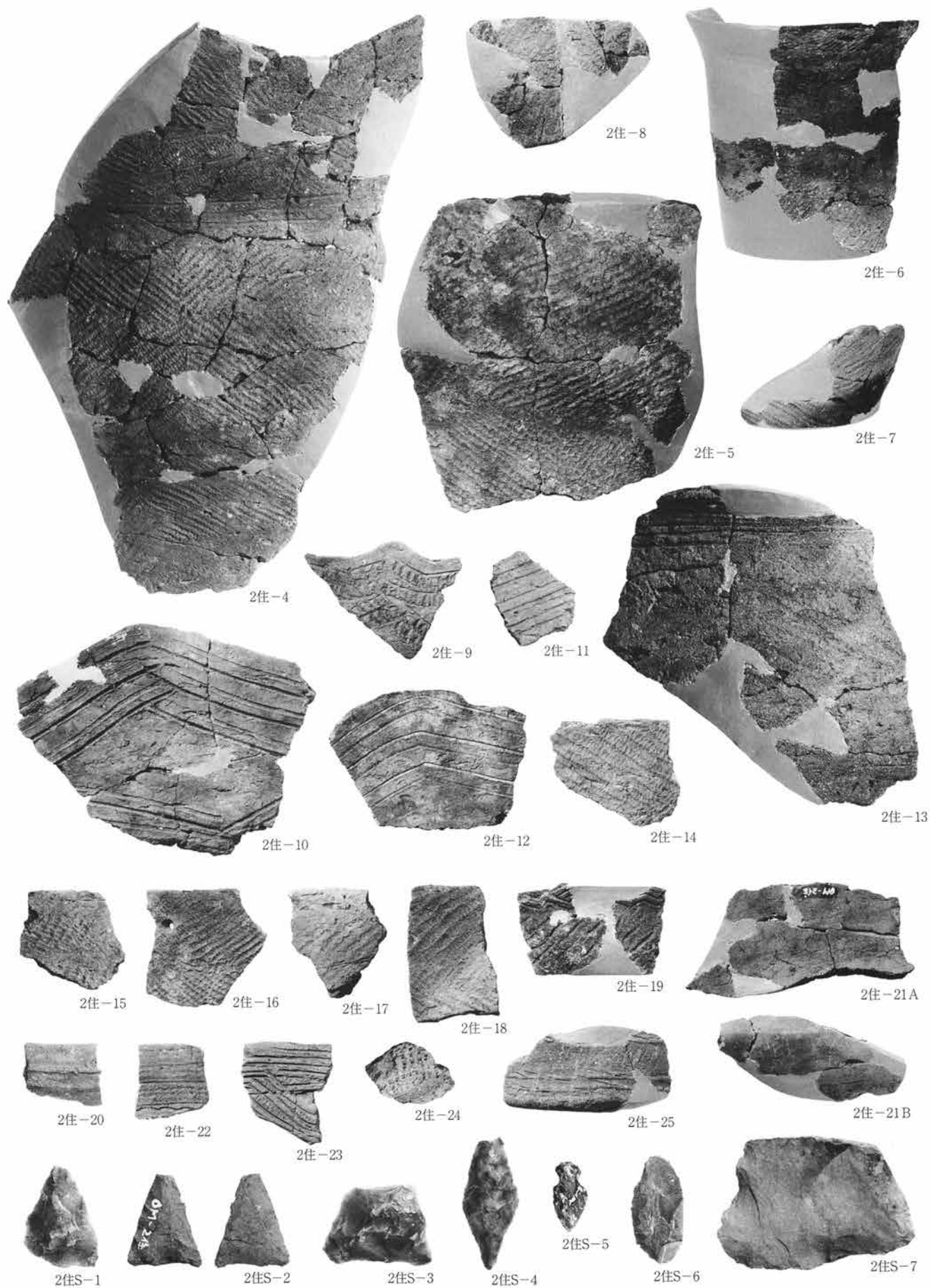
2住-1



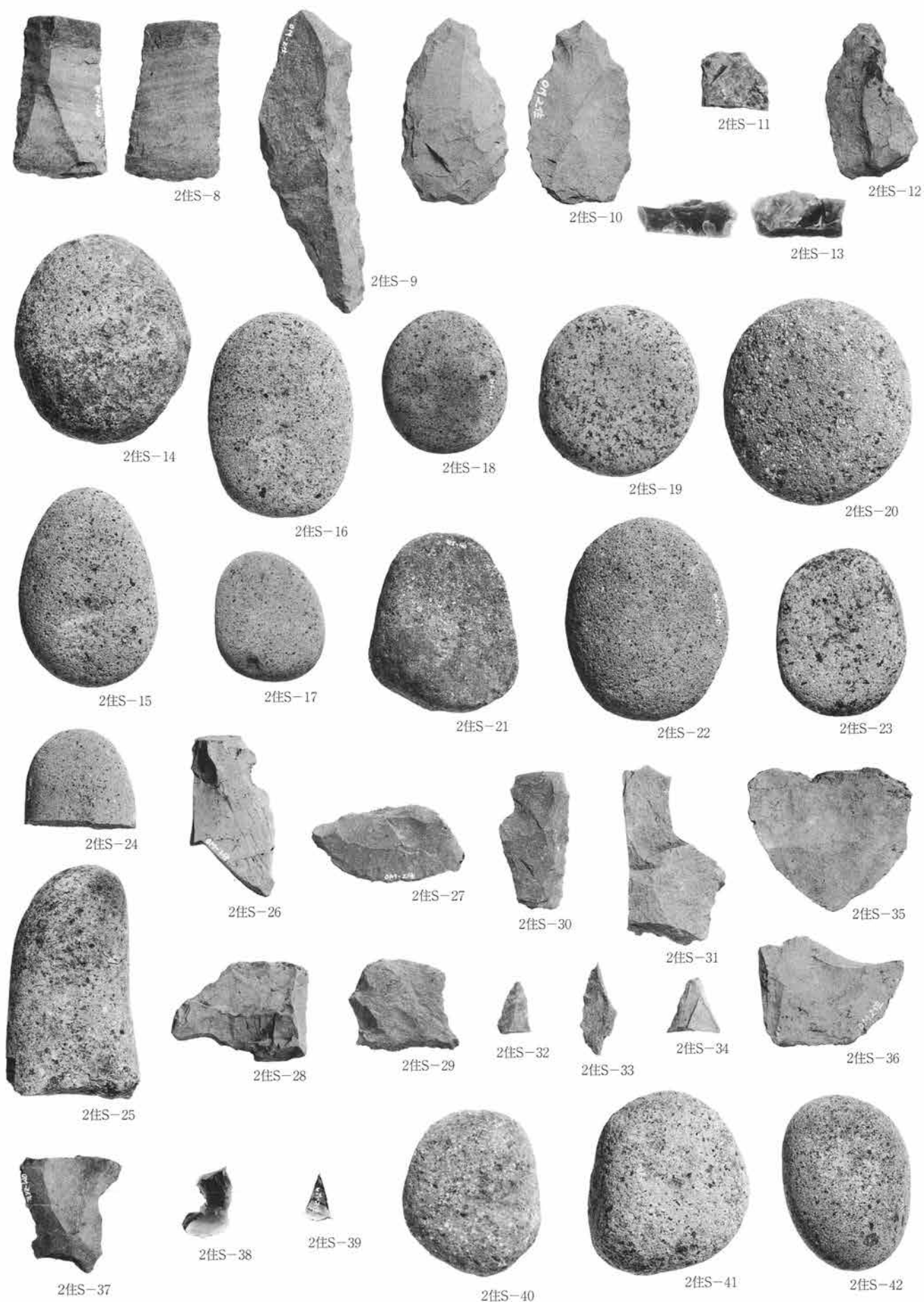
2住-2

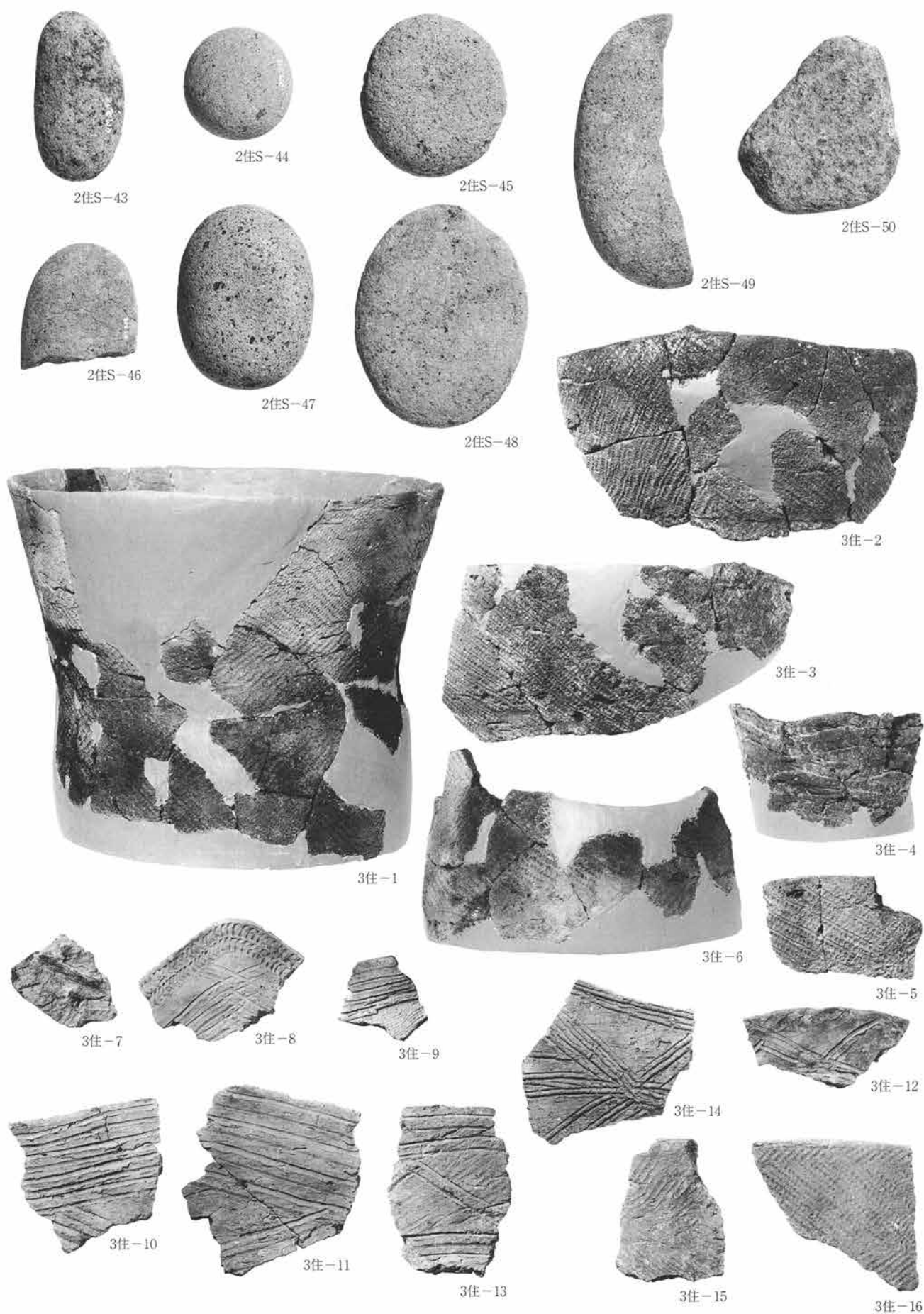


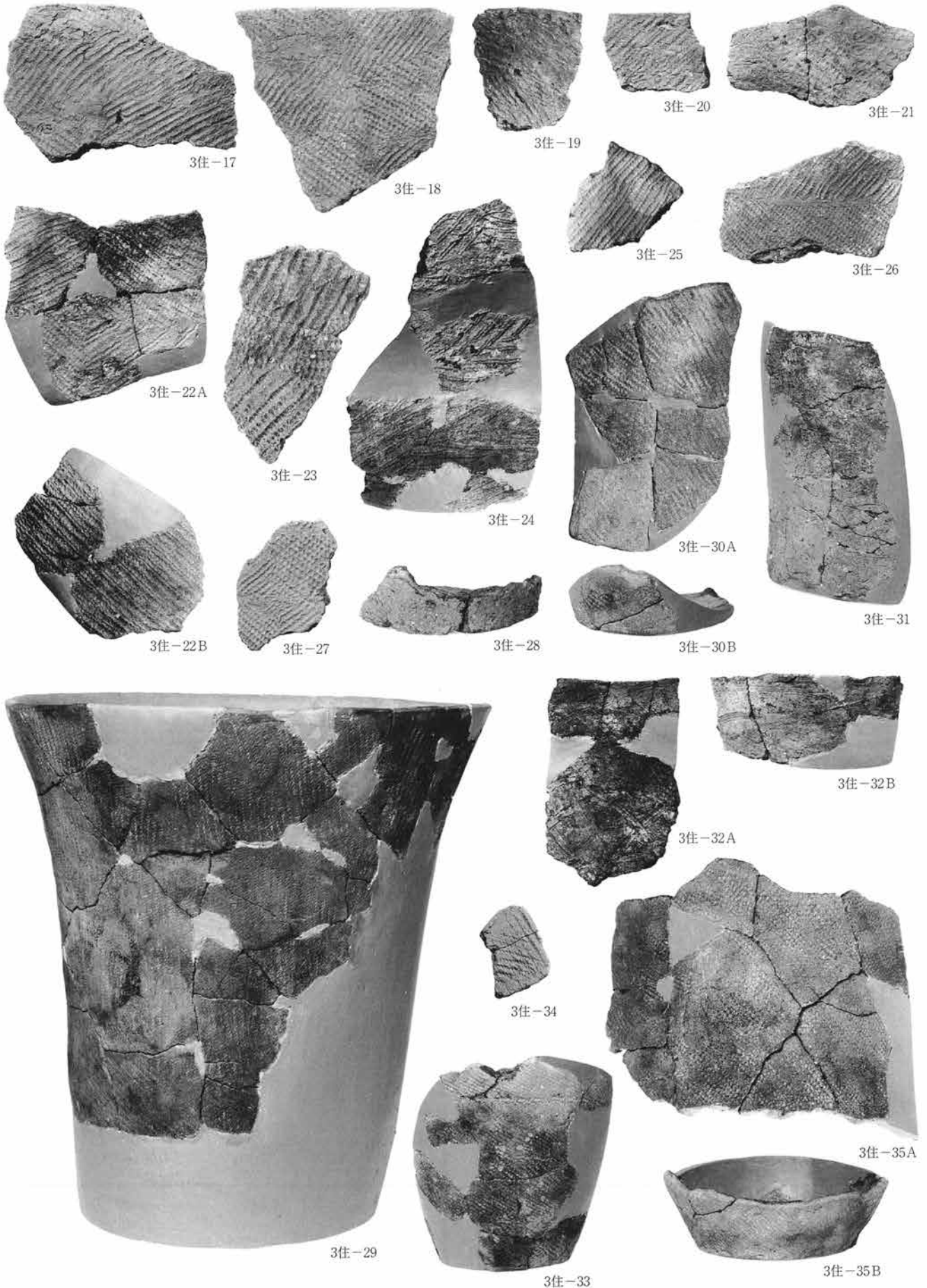
2住-3

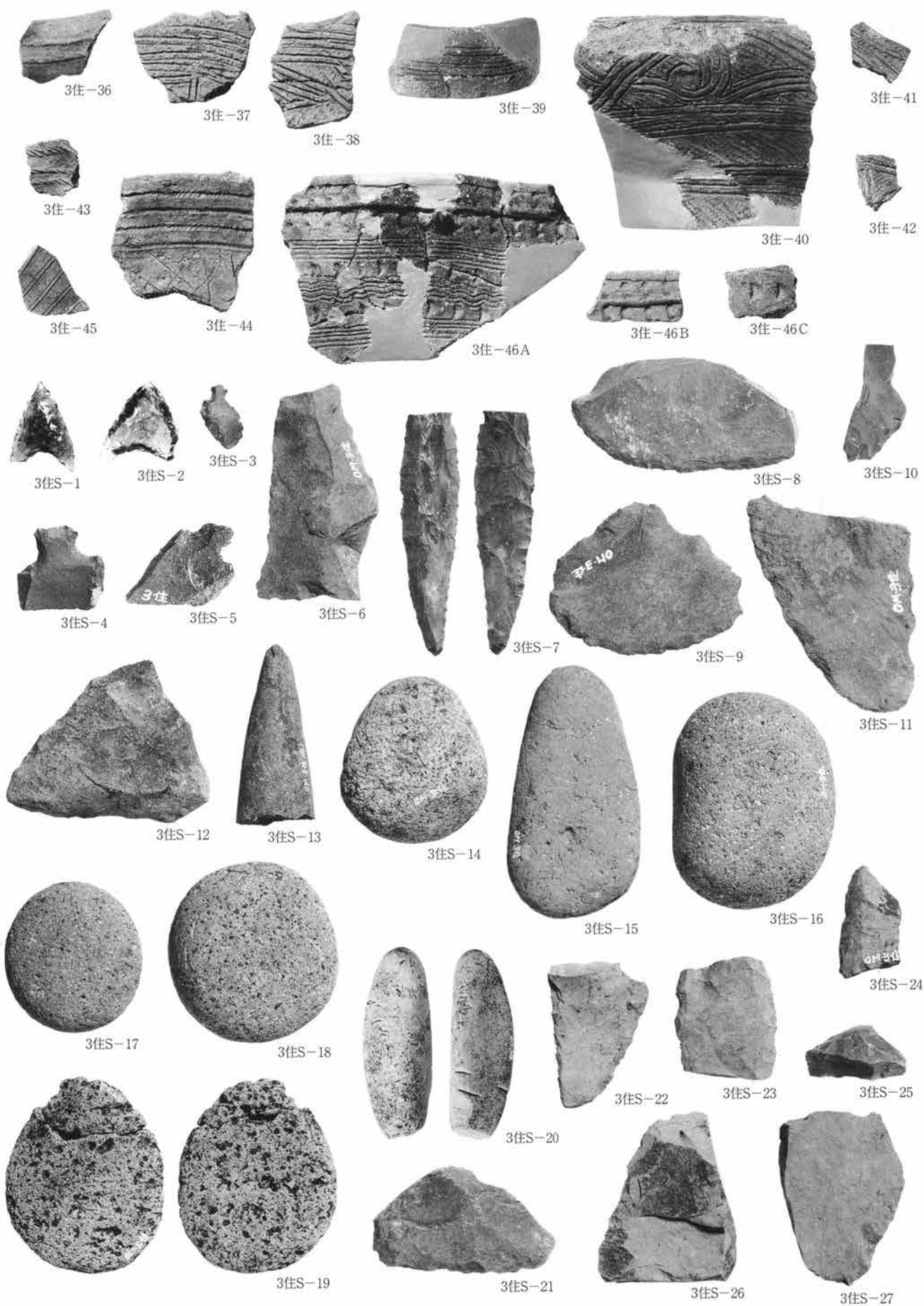


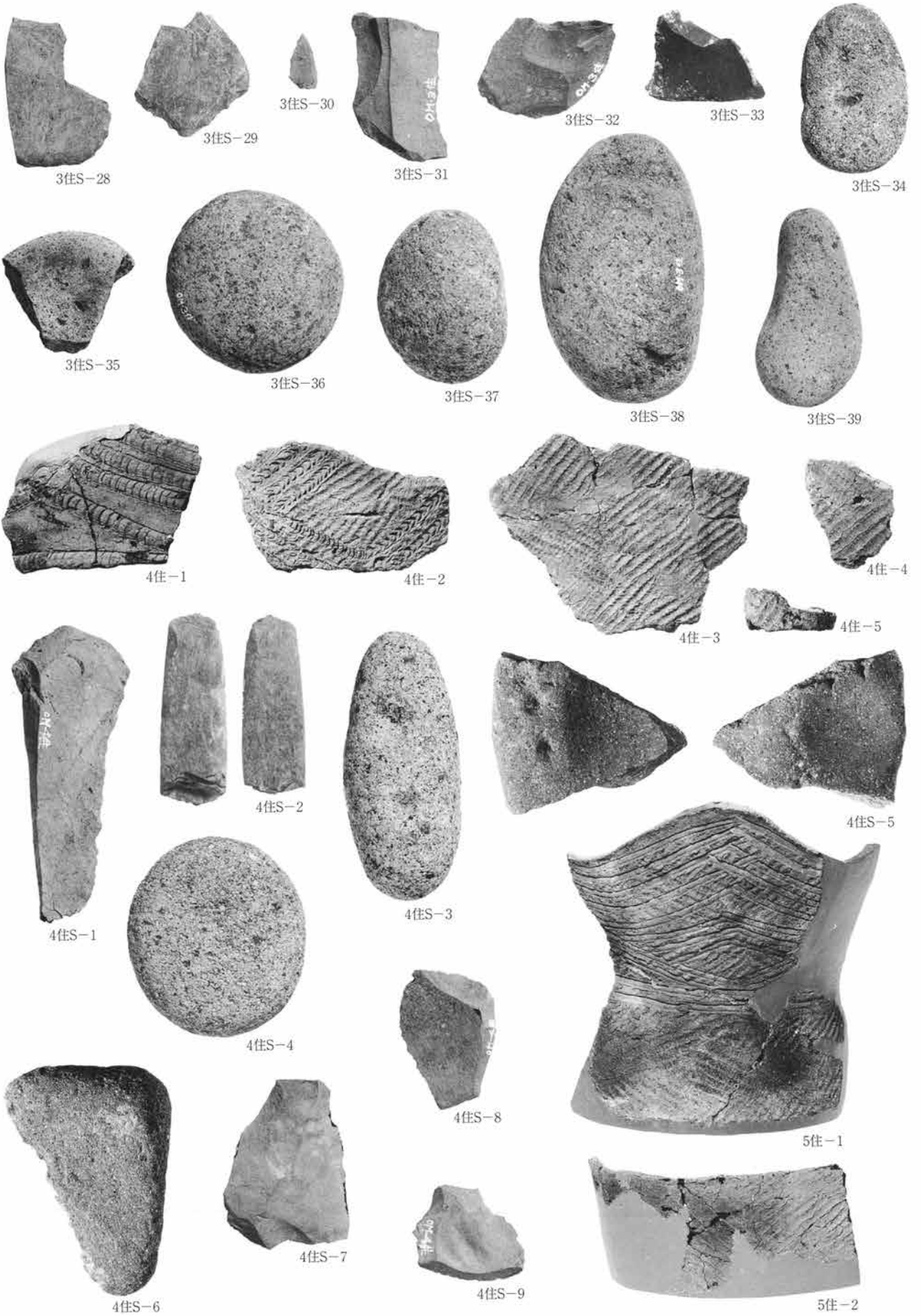
2号住居の出土遺物



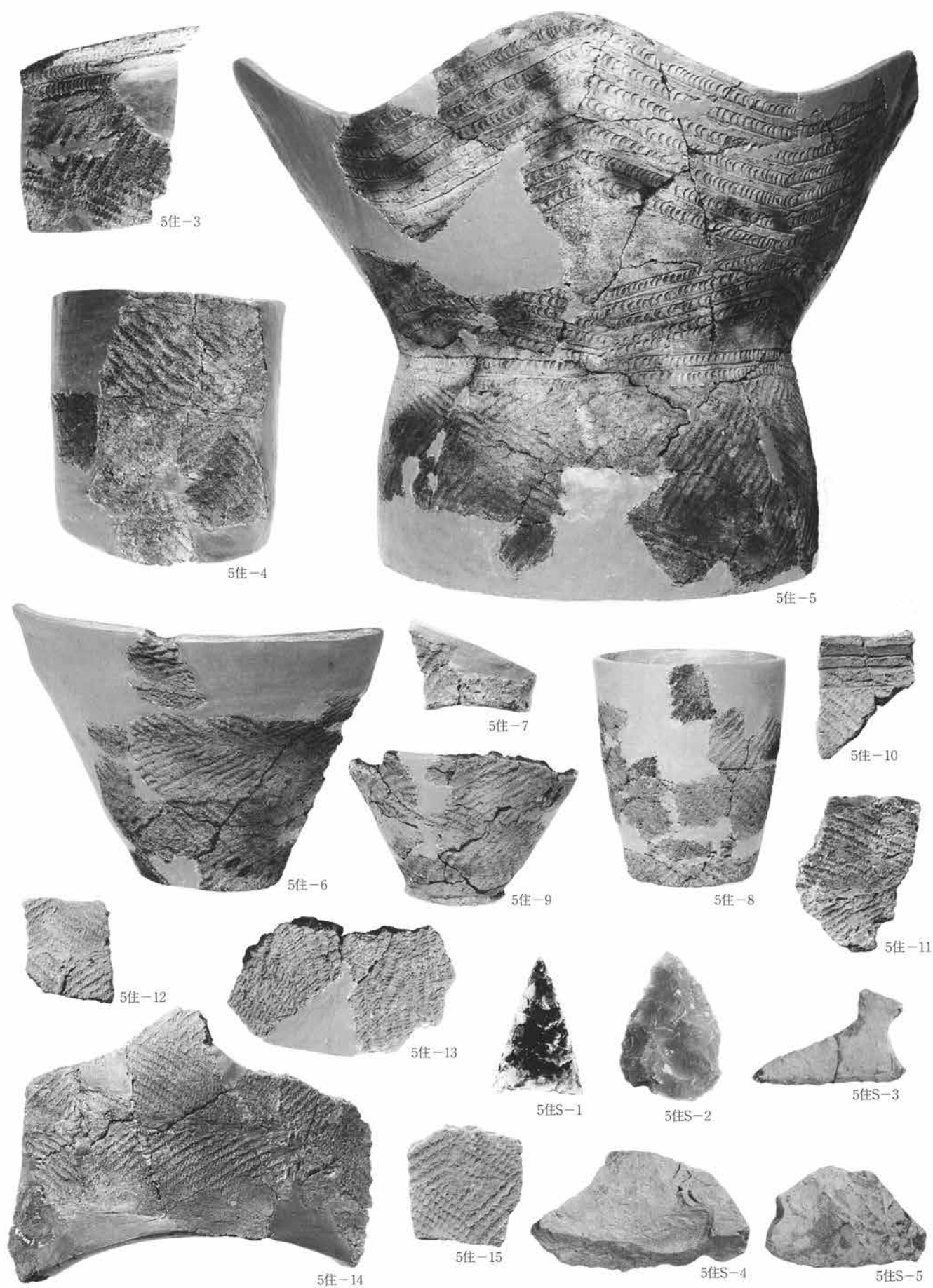












5号住居の出土遺物

PL-44



5住S-6



5住S-7



5住S-8



5住S-9



5住S-10



5住S-11



5住S-12



5住S-13



5住S-14



5住S-15



5住S-16



6住-1



6住-2



6住S-1



6住S-2



6住S-3



7住-1



7住-3A



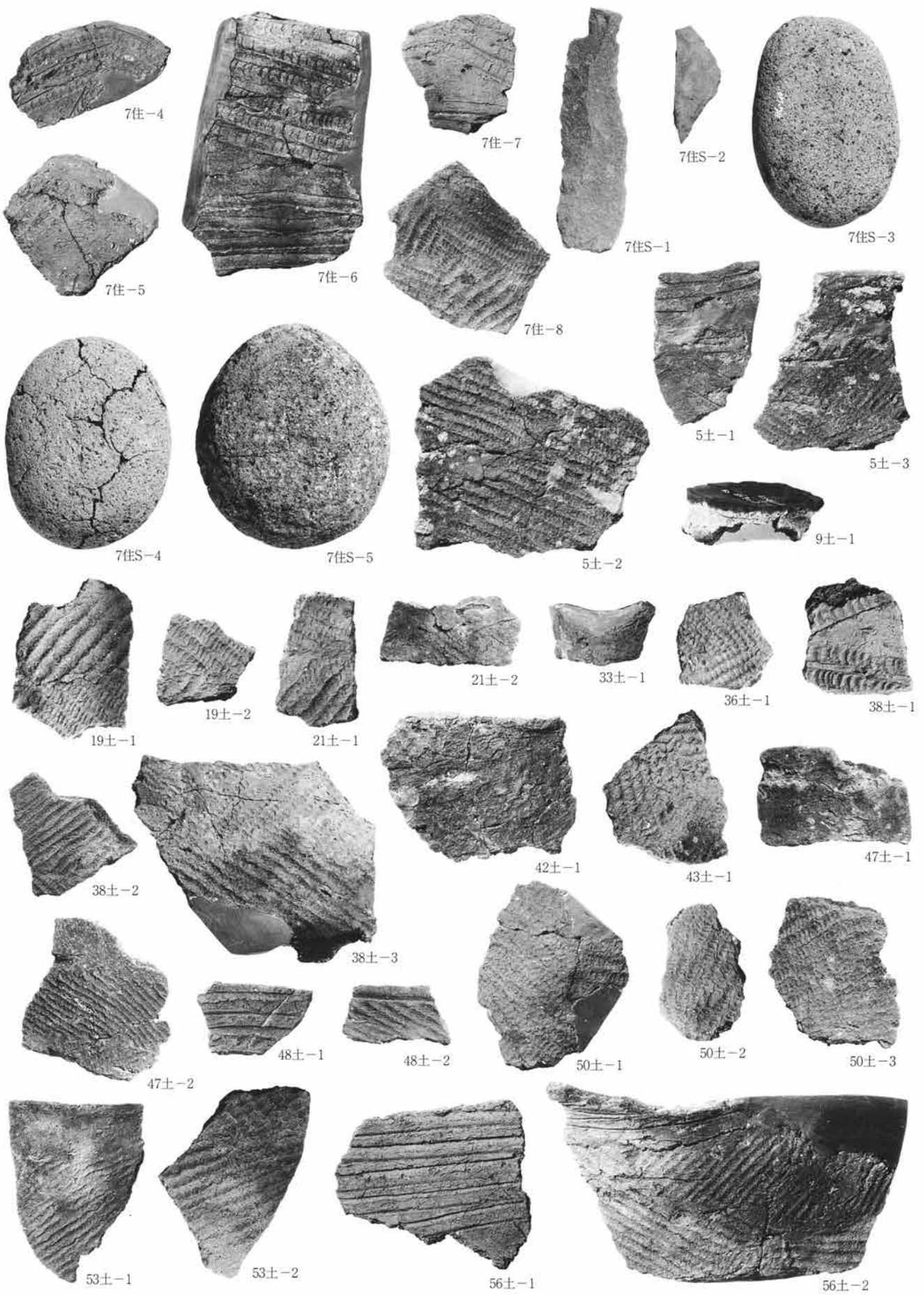
7住-2



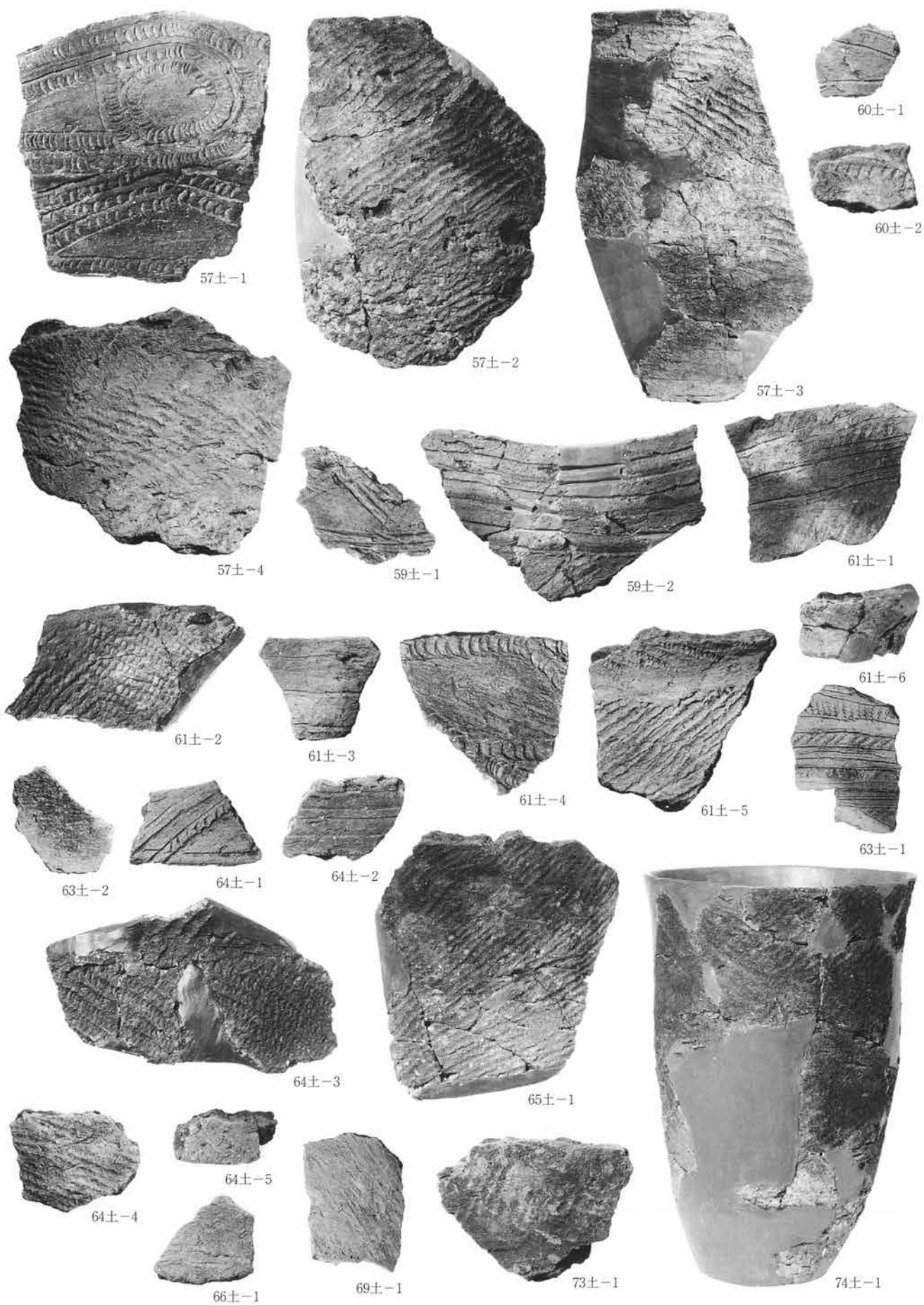
7住-3B

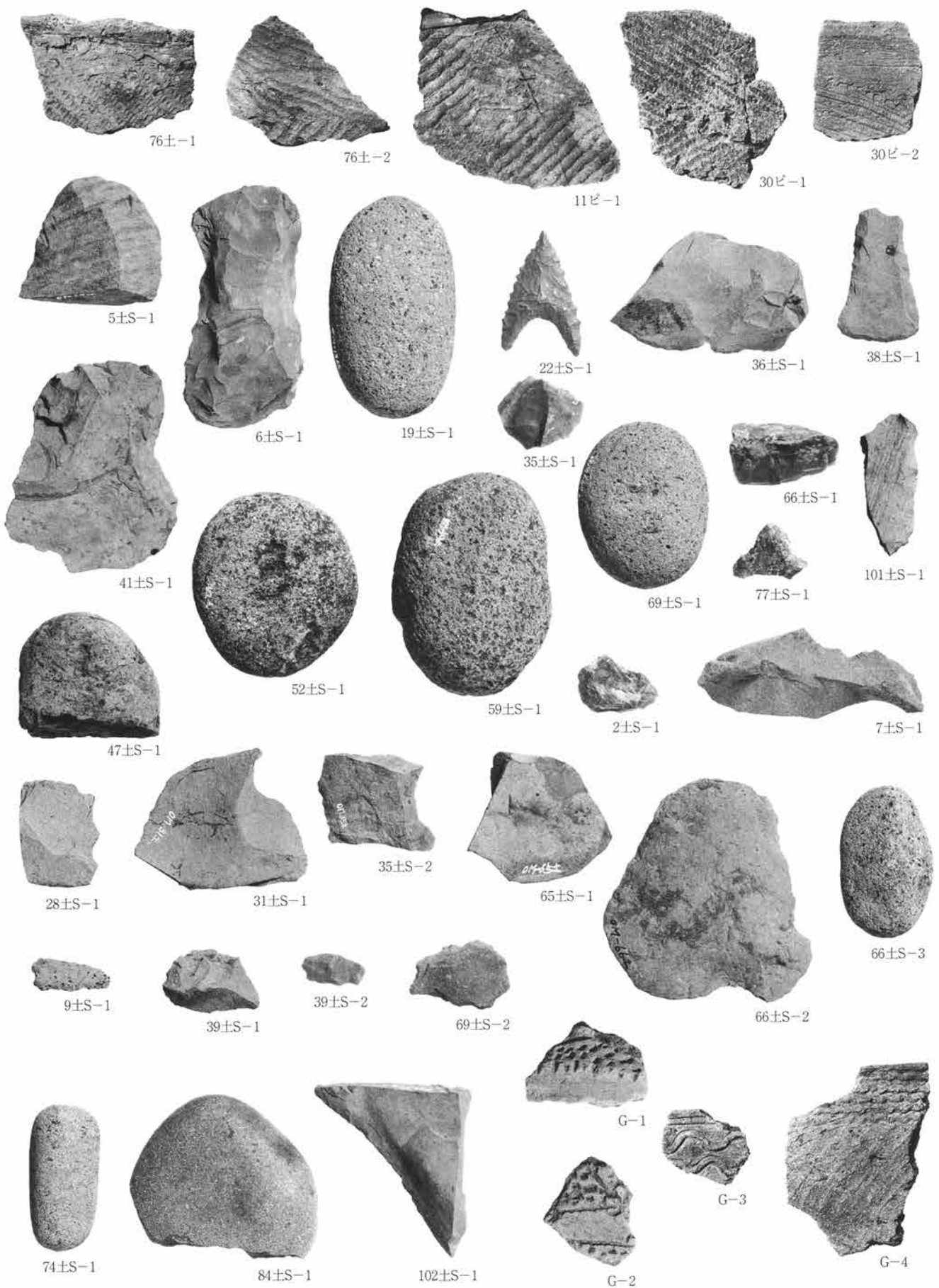


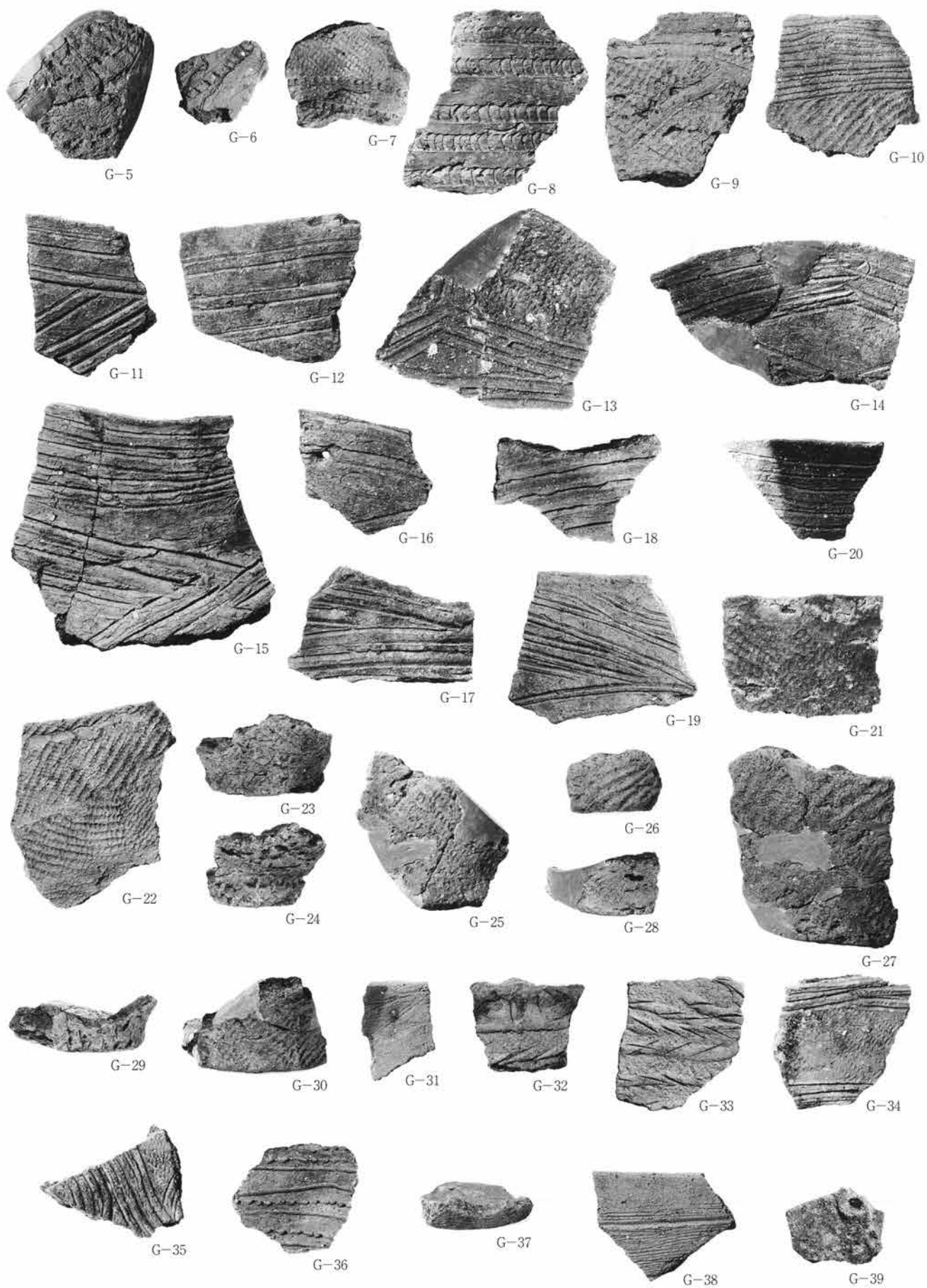
7住-3C

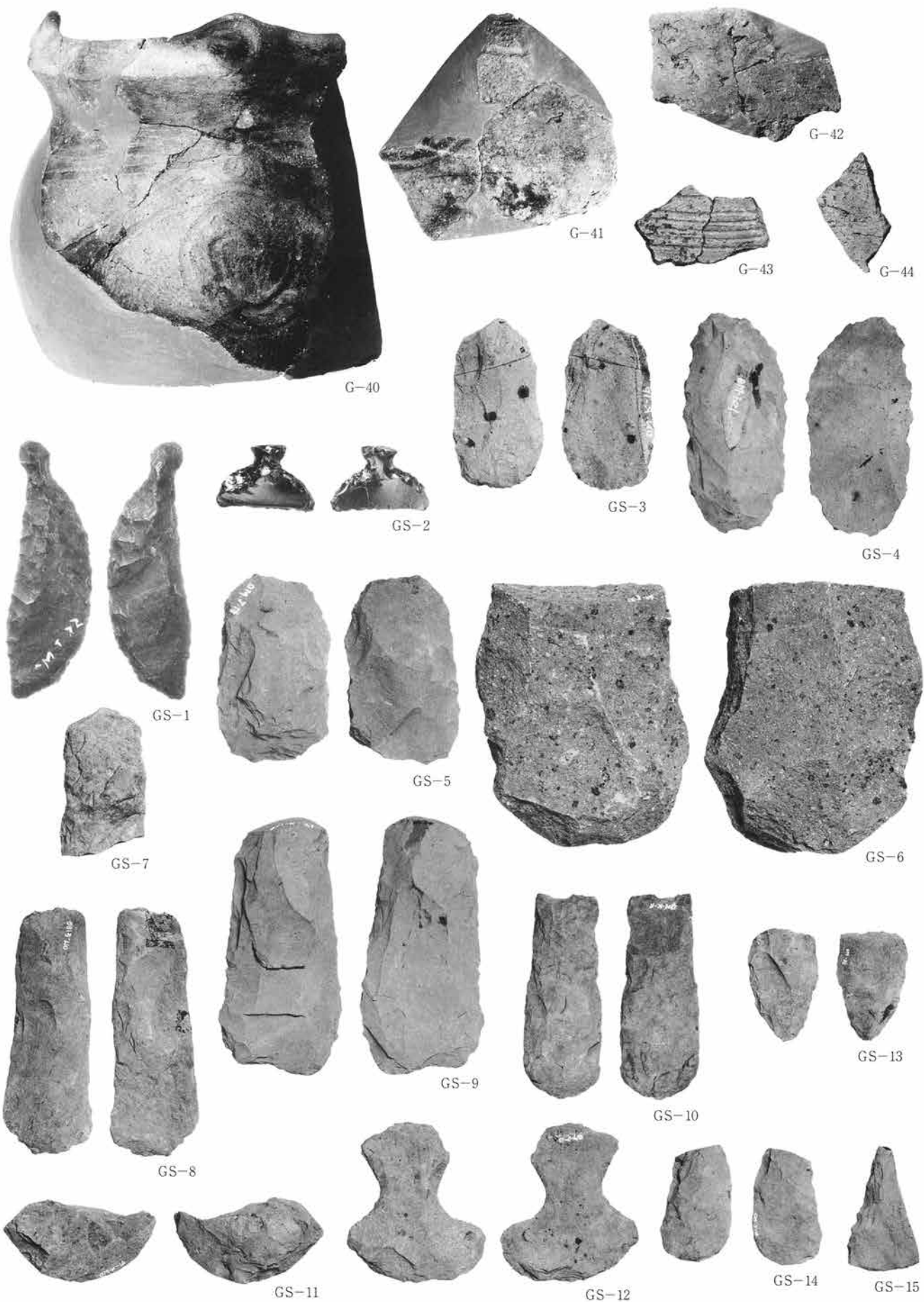


7号住居、5・9・19・21・33・36・38・42・43・47・48・50・53・56号土坑の出土遺物









グリッドの出土遺物

PL-50



GS-16



GS-17



GS-18



GS-19



GS-20



GS-21



GS-22



GS-23



GS-29



GS-24



GS-25



GS-26



GS-27



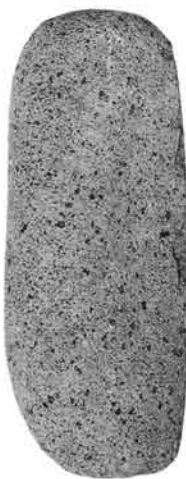
GS-28



GS-32



GS-33



GS-30



GS-31



GS-34

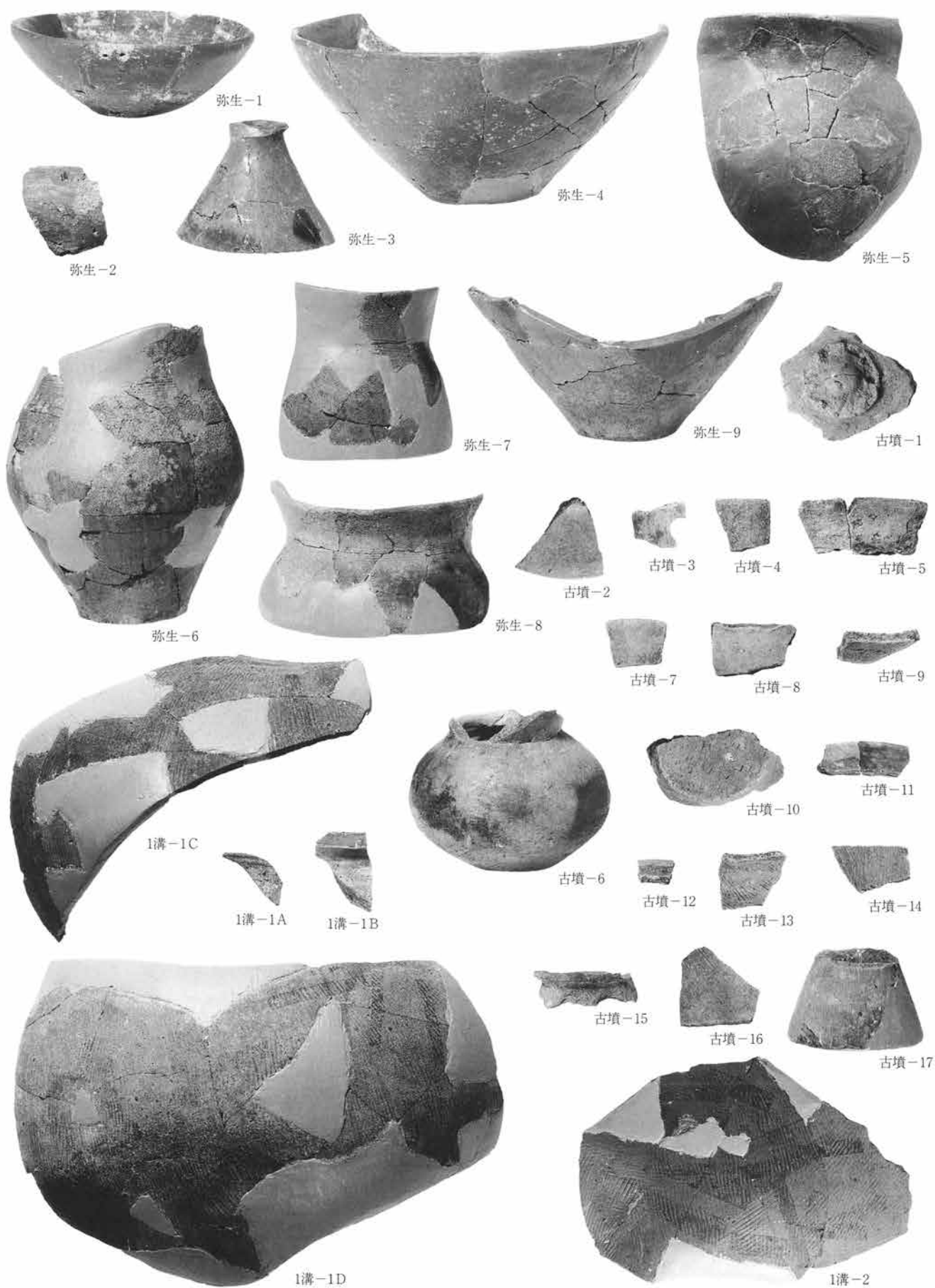


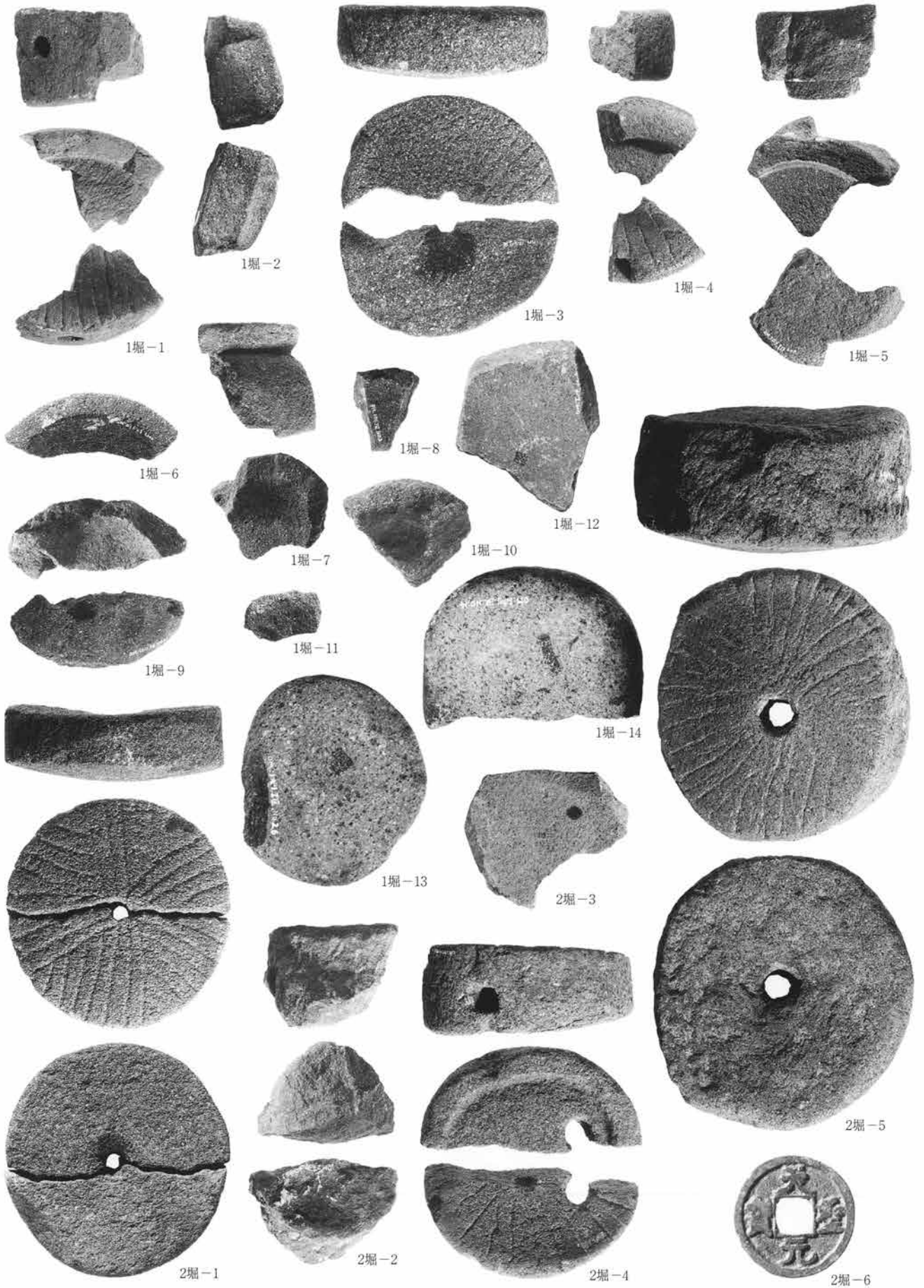
GS-35



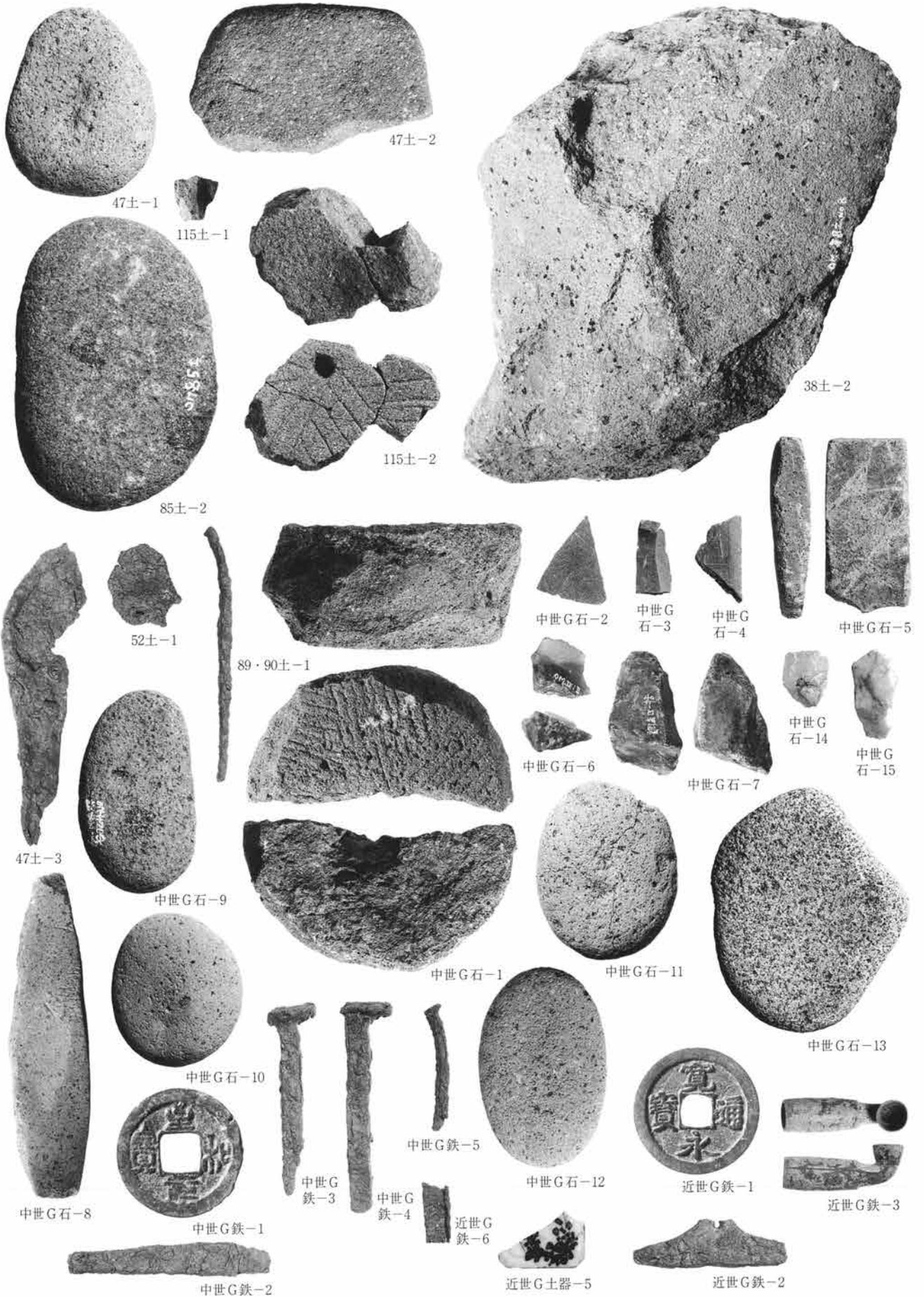
GS-36











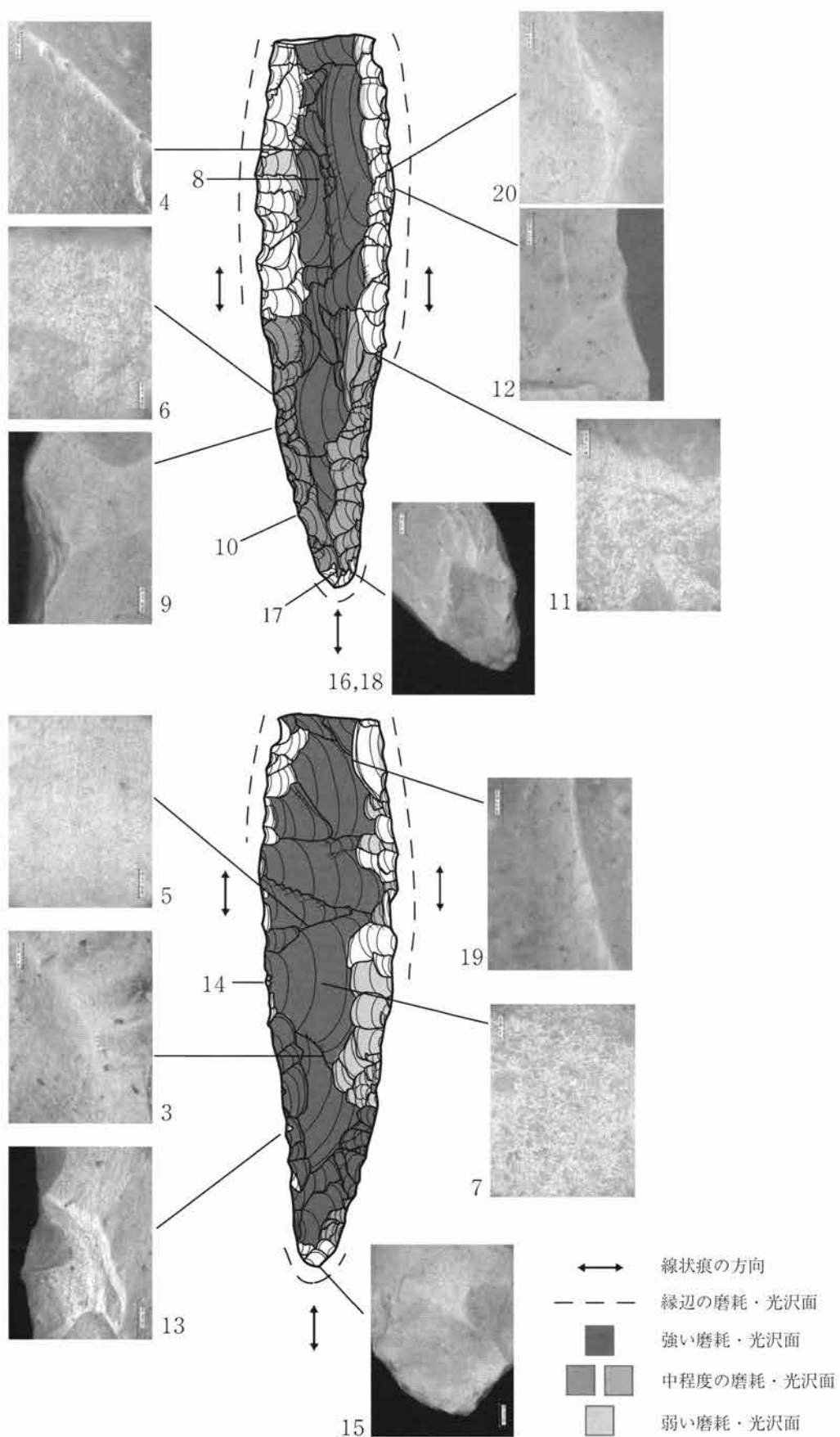
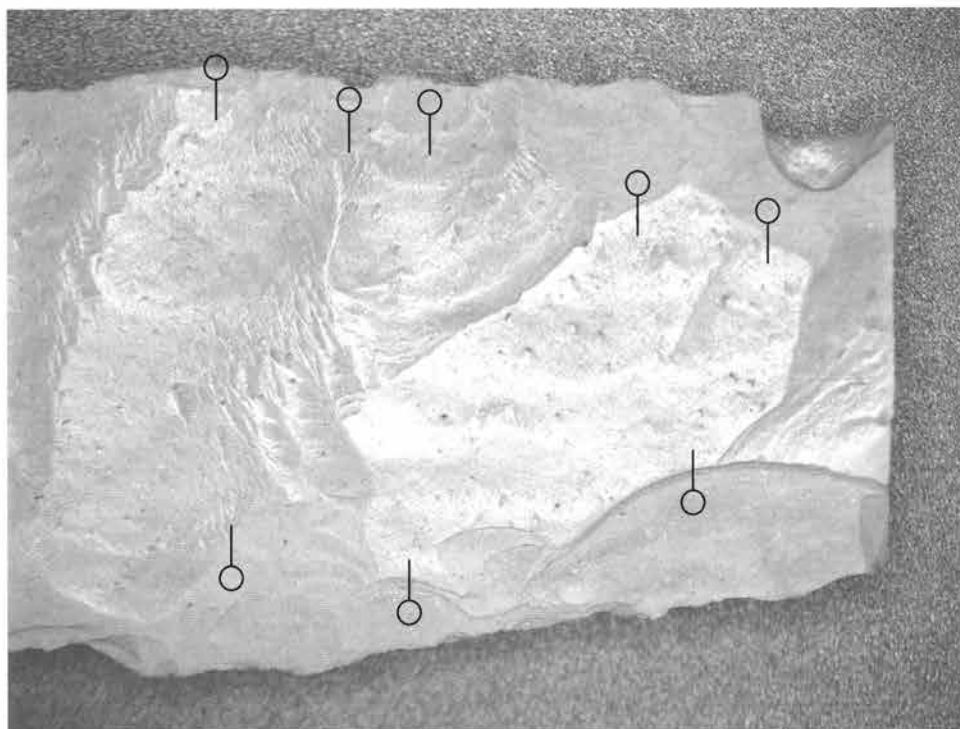
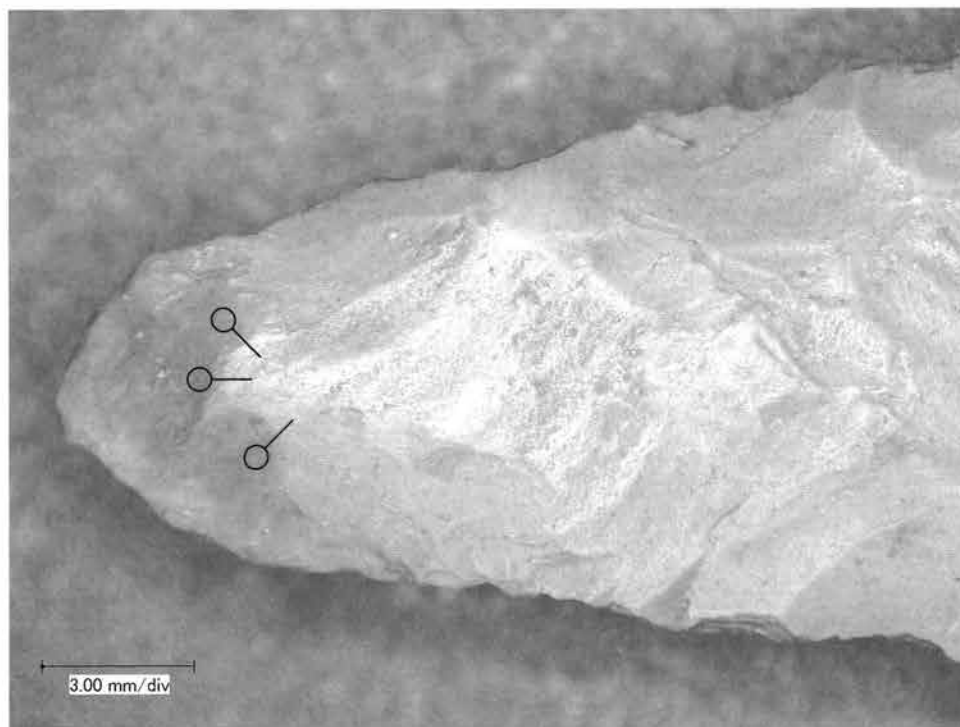


図2 顕微鏡写真の撮影箇所



1. 腹面上部の剥離面と磨耗面の関係

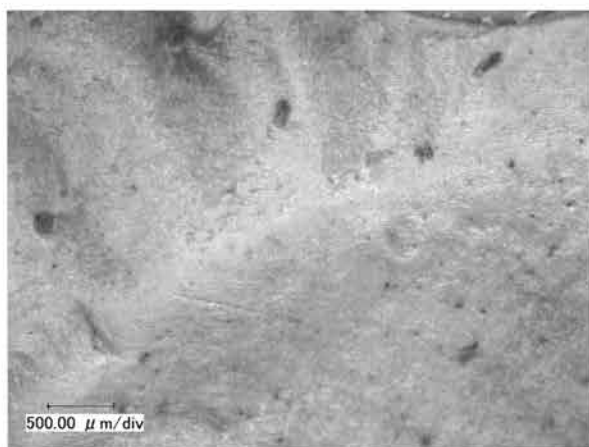
大部分の剥離面は磨耗し、光沢を帯びているが、上辺と下辺の二次加工の剥離面（○印）は光沢を帯びず、磨耗・光沢面を切っている。図1・2の磨耗・光沢面の分布図を参照。



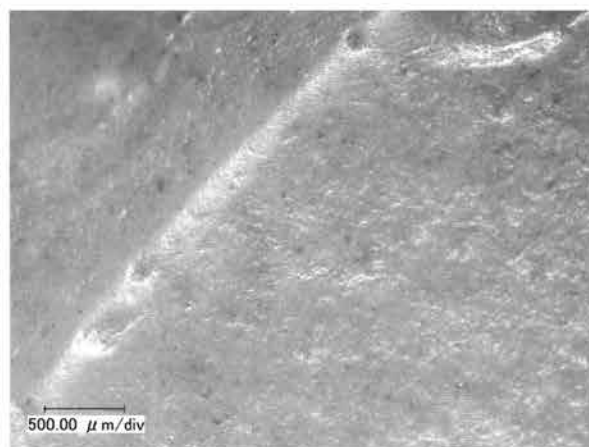
2. 腹面先端部の剥離面と磨耗面の関係

先端部のやや黒みを帯びた剥離面（○印）が、磨耗して光沢を帯びた他の剥離面を切っている。図1・2の光沢面の分布図を参照。

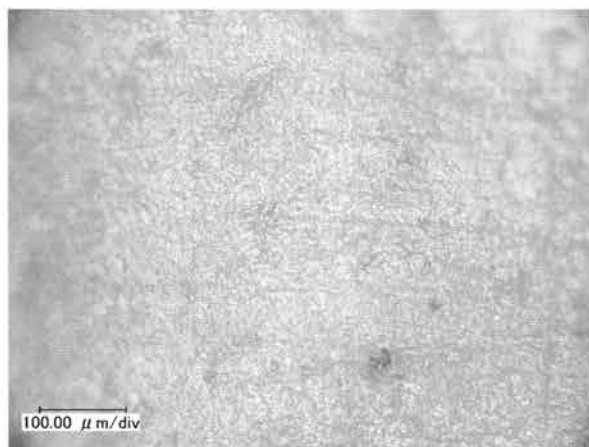
図3 磨耗面と剥離面の切り合い関係



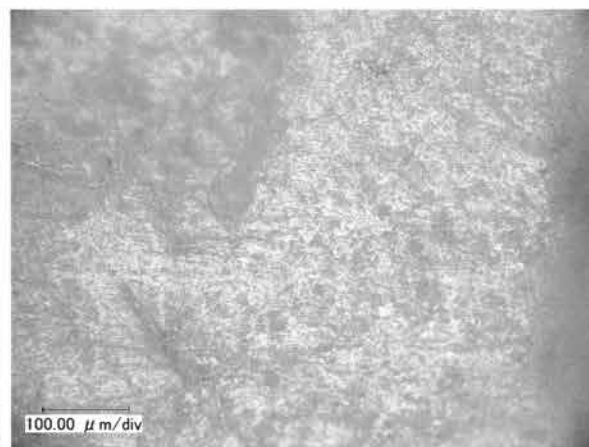
3. 腹面内部稜線上の磨耗  
 腹面平坦面を構成する二次加工間の稜線が強く磨耗して潰れている。石器長軸に平行な線状痕が見える。



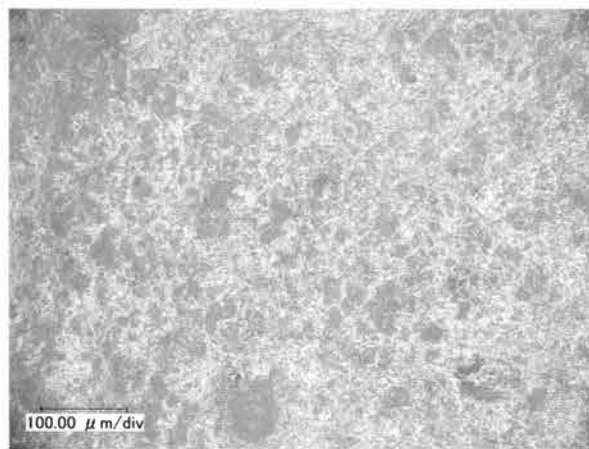
4. 背面内部稜線上の磨耗  
 背面平坦面を構成する二次加工間の稜線の磨耗。石器長軸に平行な線状痕が見える。



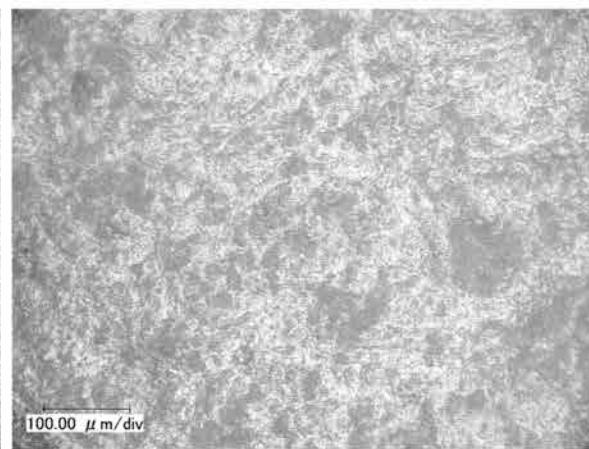
5. 腹面内部稜線上の磨耗  
 高倍率同軸落射レンズによる観察。粗い光沢面と石器長軸に平行な線状痕が見える。



6. 背面左辺下半部の稜線の磨耗  
 高倍率同軸落射レンズによる観察。粗い光沢面と石器長軸に平行な線状痕が見える。



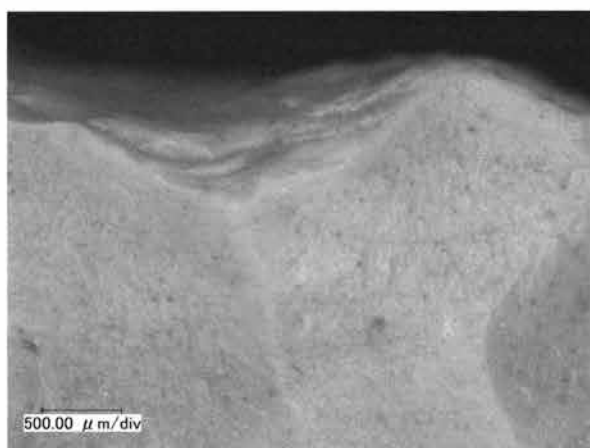
7. 腹面内部の磨耗  
 高倍率同軸落射レンズによる観察。粗い光沢面。



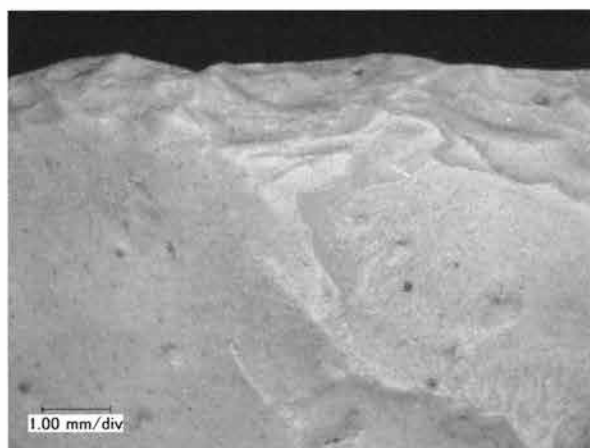
8. 背面内部の磨耗  
 高倍率同軸落射レンズによる観察。粗い光沢面の上に石器長軸に平行な線状痕がわずかに見える。

↔ 線状痕の方向

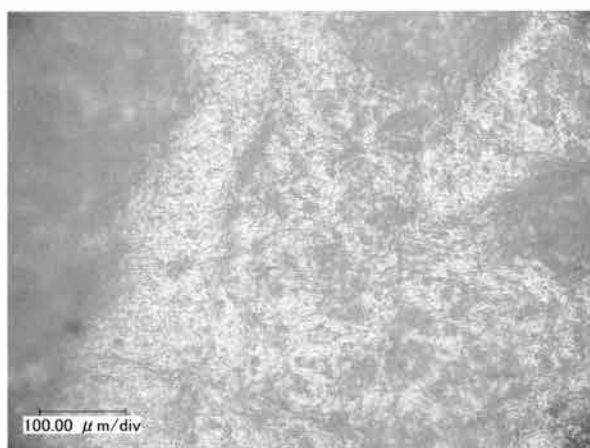
図4 磨耗・光沢面の拡大写真(1)



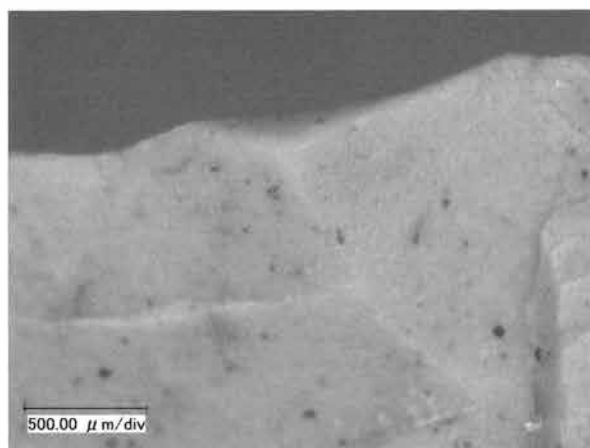
9. 背面左辺下半部  
刃端と二次加工間の稜線が磨耗している。



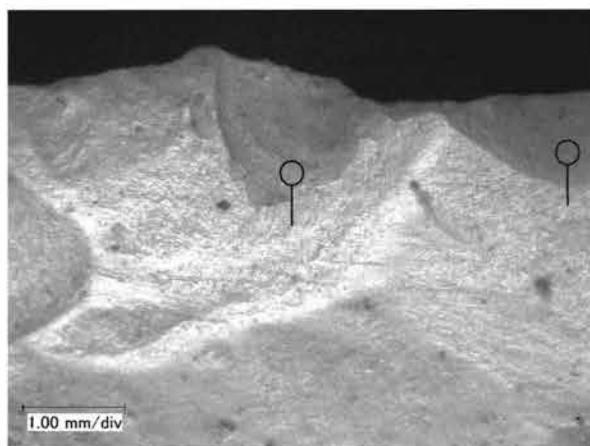
10. 背面左辺下半部  
刃端と二次加工間の稜線が磨耗している。



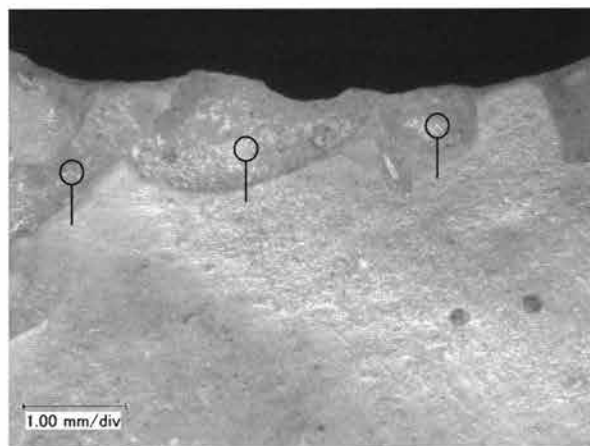
11. 背面右辺下半二次加工部  
高倍率同軸落射レンズによる観察。粗い光沢面と石器長軸に平行する線状痕が見える。二次加工間の稜線が磨耗している。



12. 背面右辺上半二次加工部  
刃端と二次加工間の稜線が磨耗している。



13. 腹面左辺下半二次加工部  
全体が強く磨耗。特に二次加工間の稜線の磨耗が顕著。石器長軸に平行する線状痕が見える。刃端の小さな剥離面（○印）には強い磨耗が見られず、相対的に新しいことを示す。

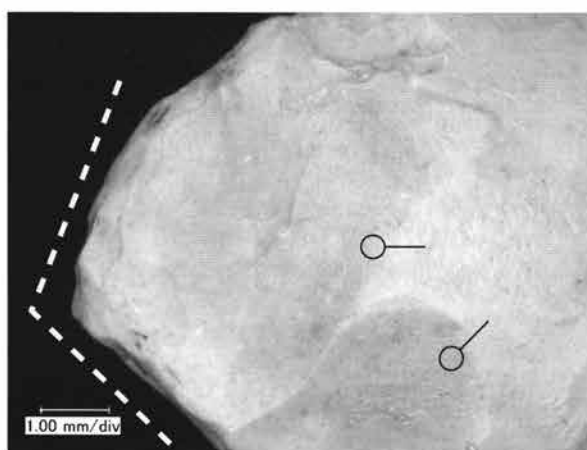


14. 腹面左辺  
全体が強く磨耗。特に二次加工間の稜線の磨耗が顕著。石器長軸に平行する線状痕が見える。刃端の小さな剥離面（○印）には強い磨耗が見られず、相対的に新しいことを示す。

↔ 線状痕の方向

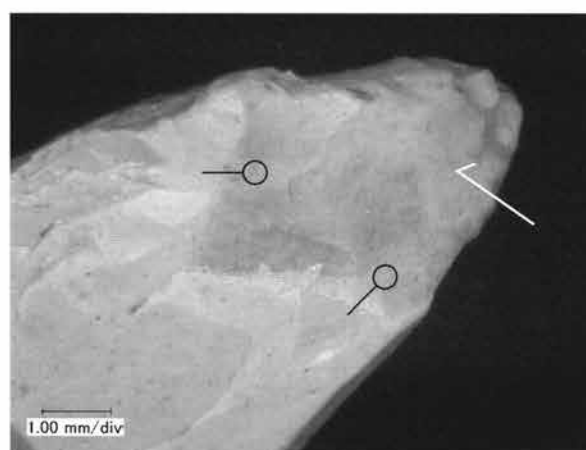
図5 磨耗・光沢面の拡大写真（2）





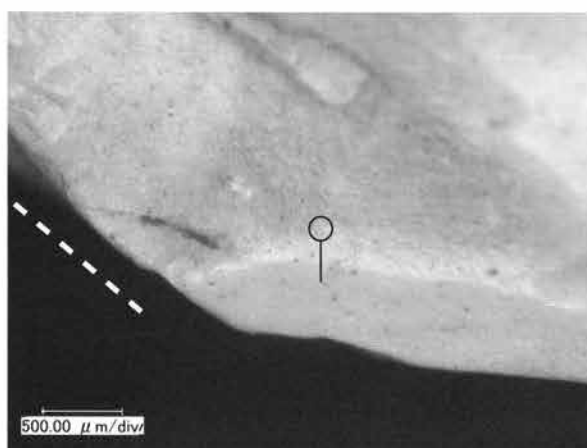
15. 先端部腹面

先端部の再加工の剥離面（やや黒味を帯びた○印の剥離面）により、右側の磨耗面が切られる。しかし最先端（左端）はまた磨耗している（破線部）。



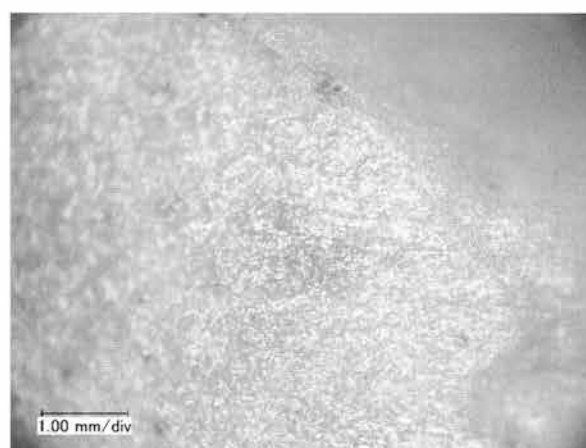
16. 先端部背面左辺側

先端部再加工の剥離面（やや黒味を帯びた剥離面）により、磨耗面が切られるが、最先端（右端矢印の付近）にはまた磨耗が形成されている。



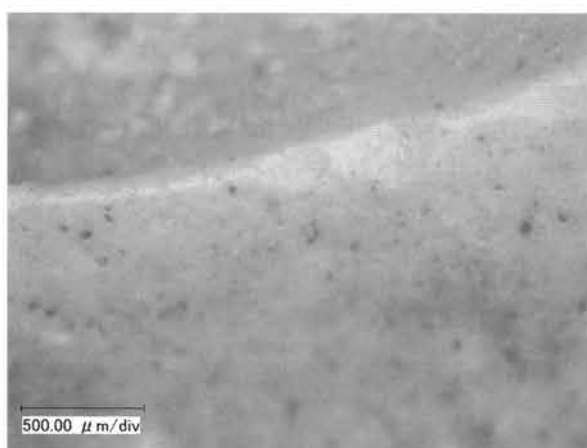
17. 先端部背面中央部稜線

先端部の再加工の剥離面（○印）により、背面の磨耗面（下側）が切られる。剥離面の縁（破線部）には、また磨耗が形成されている。左側が石器先端。



18. 先端部背面

高倍率同軸落射レンズによる観察。弱い光沢面と石器長軸に平行な（画面に水平な）線状痕が見える。右側が石器先端。



19. 腹面平坦部と右辺二次加工の境界

二次加工の剥離（上側）と腹面の平坦面（下側）の境の稜線が磨耗している。



20. 背面平坦部と右辺二次加工の境界

二次加工の剥離（上側）と背面の平坦面（下側）の境の稜線が磨耗している。

↔ 線状痕の方向

図6 磨耗・光沢面の拡大写真（3）



(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第341集

奥田道下遺跡（稲城）

(主)渋川吾妻線単独特別道路改良  
事業埋蔵文化財発掘調査報告

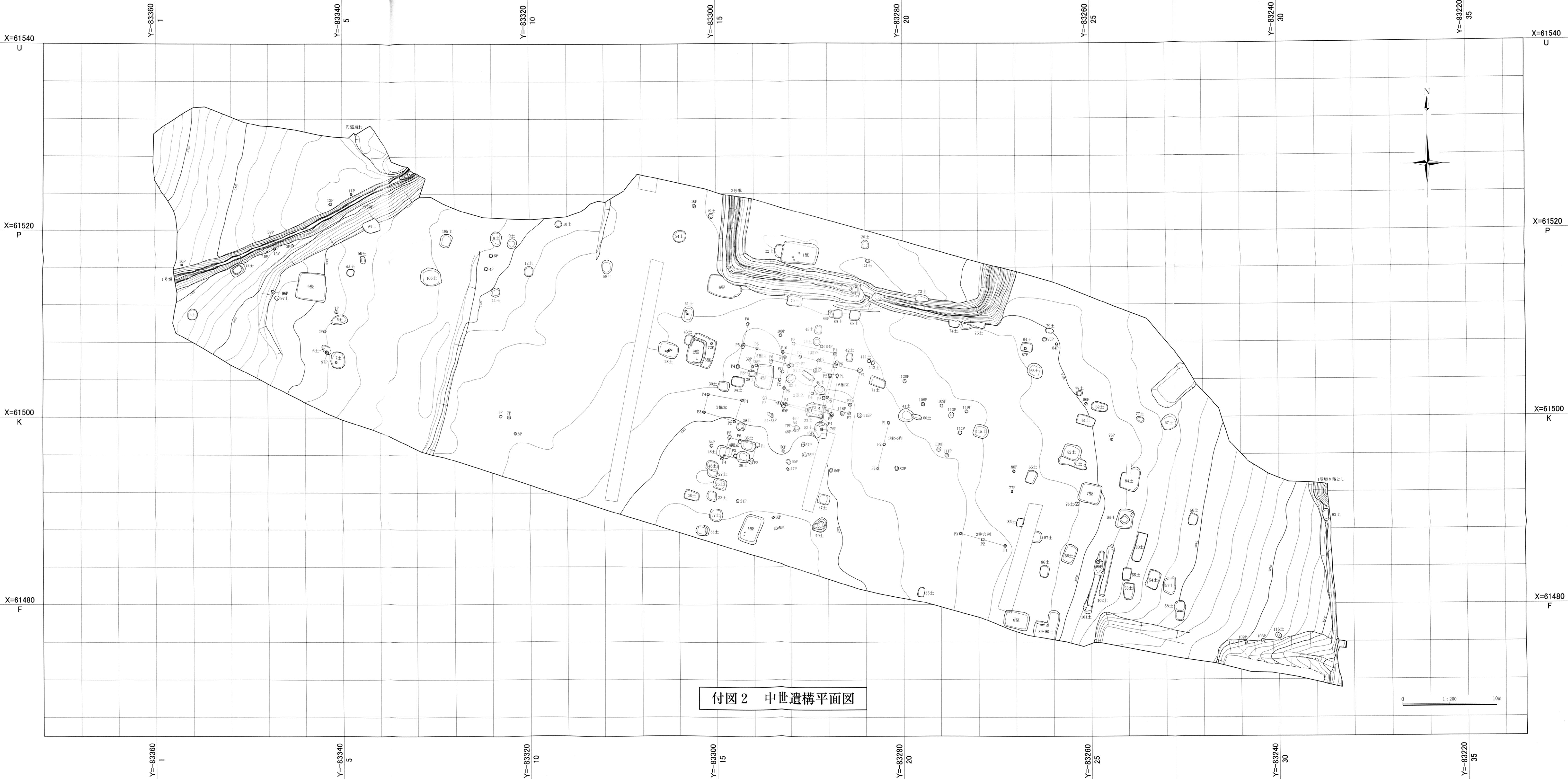
平成16年12月24日 印刷  
平成16年12月27日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／株式会社 開文社印刷所



付図1 縄文時代遺構平面図



付図2 中世遺構平面図